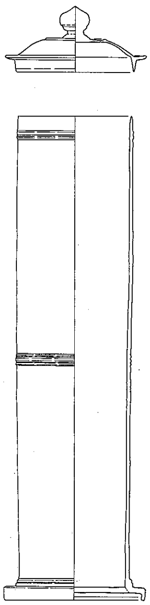
太宰府市の文化財第54集

原遺跡 I

－第8・11次調査－



２００１

太宰府市教育委員会

太宰府市の文化財第54集

原遺跡 I

－第8・11次調査－

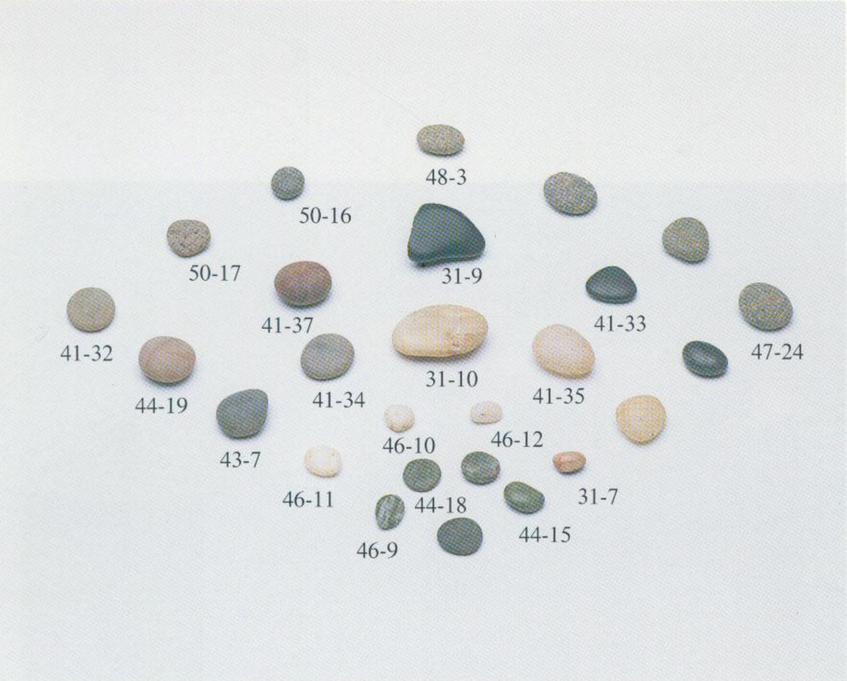
２００１

太宰府市教育委員会

原遺跡全景（南南西より撮影）

11SB100検出状況（南東から撮影）4125-5

11SB050石垣部近景（南東から撮影）4125-2



原遺跡第 8 次調査出土平玉石

原遺跡第 8 次調査出土砥石


原遺跡第 8 次調査8SK430出土ガラス片

原遺跡出土経筒・経巻・外容器（太宰府市指定文化財）

序

本書は、平成３～４年度に発掘調査を行いました原遺跡第８次調査、および平成５年度に発掘調査を行いました原遺跡第11次調査の埋蔵文化財発掘調査報告書です。

原遺跡は、古代から近世まで続いたとされる寺院、原八坊の跡に位置しており、中世を中心とした遺跡が広がっています。

今回報告いたします調査地は、原八坊の伝中堂跡および伝本堂跡の北東に位置する地点で、古代末期の石垣や礎石建物のほか、多量の中世の遺物など、当時の生活に関する貴重な資料を得ることができました。

本書が学術研究はもとより文化財への理解と認識を深める一助となり、広く活用され、文化財愛護の精神が高揚することを心より願います。

最後になりましたが、文化財に対して御理解いただきました、関係各位ならびに諸機関の方々に心からお礼申しあげます。

太宰府市教育委員会
教育長　　關　敏治

例言

1．本書は太宰府市に所在する原遺跡の発掘調査報告書で、大字太宰府字原（三条１丁目）1550でおこなった第８次調査、および三条１丁目1551-1でおこなった第11次調査を掲載している。いずれも太宰府市教育委員会が行った。

2．第８次調査は城戸康利が、第11次調査は井上信正及び狭川真一（現、（財）元興寺文化財研究所）が行った。なお調査の経緯・原因・期間等は各調査の報告部分に記載している。

3．本書に掲載した調査は、平成３～５年度に実施しており、調査組織は第II章にまとめた。なお整理作業は調査終了後随時行なってきたが、主として平成12年度に実施した。

4．測量は、各調査担当者のほか、河田聡（現、豊浦町教育委員会）、藤尾薫（現、筑紫野市教育委員会）が行った。

5．遺構の実測は各調査担当者が行ったほか、塩地潤一（現、大分市教育委員会）、河田、藤尾、柴田剛（現、筑後市教育委員会）、永田佳子、成清えりか、立野真崇、藤村賢訓、四柳嘉之、妹尾活明、天野耕一郎が行った。

6．遺構写真撮影は主に各調査担当者が行い、空中写真は(有)空中写真企画（代表檀睦夫）が行った。遺物写真撮影はフォトハウスおか（代表岡紀久夫）が行った。なお本書中の遺構写真キャプションの末尾に記す６桁の番号は、本市教育委員会で保管するProPhotoCD検索用の番号である。

7．遺物実測は、城戸、阿部浩子、森部順子、酒井三保子、境一美、島純子が行った。

8．浄書は各調査担当者のほか、阿部、森部、酒井、境、島が行った。

9．石碑の拓本は、山村信榮、時津裕子、井上が行った。

10．遺構実測図および遺構配置図は全て国土調査法第II座標系を基準としている。したがって図中に記載される方位は特に注記のないかぎり座標北（G.N.）を指している。

11．本書に掲載される遺構番号は、以下の要領で理解される。なお遺跡名を略することもある。

原　11　SB　100

遺跡名　調査次数　遺構種別　遺構番号

12．本書に使用した分類は、基本的に以下のものによっている。

土器　『大宰府条坊跡　II』　太宰府市教育委員会　1983

陶磁器　『大宰府条坊跡　XV』　太宰府市教育委員会　2000

瓦　石松好雄・高橋章「大宰府出土の瓦について（二）」『九州歴史資料館研究論集４』1978

なお、本報告地点から出土した多量の遺物は、上記の分類に従って分類記号化し、また可能な土器は計測し、遺物計測・観察表および出土遺物一覧表に掲げている。本文中に図示した遺物は出土遺物総量の一部であることをご理解願いたい。また陶磁器の分類作業は、山本麻里子、島が行った。

13．出土した金属製品の保存処理は、山中幸子、下川可容子が担当した。

14．出土ガラスの材質分析は奈良国立文化財研究所の肥塚隆保氏に依頼した。その結果は『宝満山遺跡群III』（太宰府市の文化財第55集　2001年）に一括して掲載している。また焼土壙の残存脂肪酸分析は（株）ズコーシャに委託した。

15．出土遺物および図面、写真等の記録は太宰府市教育委員会が保管している。

16．付属のCD-ROMには、遺構写真および各表を収納した。なおCD-ROM中の写真を他に使用・転載する際は、本市教育委員会にお問い合わせ下さい。

17．本報告を作成するにあたっては、奈良国立文化財研究所の肥塚隆保氏、森弘子氏、（財）元興寺文化財研究所の狭川真一氏、佐藤亜聖氏にご指導、ご協力をいただいた。

18．第８次調査の執筆を城戸が行い、その他の執筆および編集を井上が行った。

目次

大宰府土器型式と国産陶器・貿易陶磁器編年

↑出現. 増加. 減少　　　　2000.2補訂

紀年銘	AD.	大宰府土器型式		磁器区分	国産陶器型式（型式の上限）灰釉	緑釉	標識磁器	準標識磁器
⑥		V			猿投O-10 井ヶ谷IG-78	長門？・畿内	白磁I類 越州窯系青磁I,II類 長沙窯系青磁・黄釉 褐彩・褐釉	唐三彩・二彩 絞胎
	800	VI	A	(A古)	黒笹K-14	長門・洛北・(洛西)・(黒笹K-14)		
	825		B		篠岡S-4 黒笹K-90	洛西 黒笹K-90		
	850	VII		A				青磁褐彩・褐釉 初期イスラム陶器
	900	VIII		(A新)				
①	925 950	IX			虎渓山1 (折戸O-53)	近江		
	1000	X		B	折戸O-53		越州窯系青磁III類 白磁XI類	
	1050	XI			東山H-72 (丸石２)			
②	1100	XII	A	C	丸石２ 百代寺 東山H-105 篠岡S-1		白磁椀II,III,IV,V1～3,VI,XII,XIII類 皿II,IV,V,VI,VII類	初期龍泉窯系・同安窯系青磁0類 耀州窯系青磁 初期高麗青磁I,II,III類 青白磁
			B					
		XIII						白磁鉢III類、椀XIV類
	1150	XIV		D			龍泉窯系青磁椀I-1～4,6, 皿I類 同安窯系青磁椀I～IV,皿I類	白磁椀VIII,V-4,皿III類増加
		XV						白磁椀VII,皿VIII-1類
	1200	XVI		E			龍泉窯系青磁椀II-a.b類	白磁皿VIII-2類
③	1230	XVII					龍泉窯系青磁III類 白磁IX類	
	1250	XVIII		F				龍泉窯系青磁椀II-c類 白磁X類 黒釉陶器
⑨								
④	1300	XIX						
⑤	1330						龍泉窯系青磁IV類	
	1350	XX		G				白磁B,C類 安南鉄絵
⑦	1450							
⑧	1500							

紀年銘資料
①AD.927 延長5年,大宰府74次SD205A 溝
②AD.1091 寛治5年,平安京左京4条1坊SE8 井戸
③AD.1224 貞応3年,大宰府33次SD605 溝
④AD.1304 嘉元2年,大宰府109.111次SD3200溝
⑤AD.1330 元徳2年,大宰府45次SX1200池
⑥AD.784 延暦3年,長岡京102次SD10201溝
⑦AD1459・1465,長禄3・寛正5年,福岡市井相田CII・SG16池
⑧AD.1501 文亀元年,大宰府70次SD1805溝
⑨AD.1265 文永2年,博多62次713土壙

文献
①九州歴史資料館「大宰府史跡昭和56年度発掘調査概報」1982
②田辺昭三・吉川義彦「平安京跡発掘調査報告左京四条一坊」1975 平安京調査会
③九州歴史資料館「大宰府史跡昭和49年度発掘調査概報」1975
④九州歴史資料館「大宰府史跡昭和63年度発掘調査概報」1989
⑤九州歴史資料館「大宰府史跡昭和52年度発掘調査概報」1978
⑥長岡京市埋蔵文化財センター「長岡京市埋蔵文化財調査報告書第1集」1988
⑦福岡市教育委員会「井相田C遺跡II」「福岡市埋蔵文化財調査報告書179」1988
⑧九州歴史資料館「大宰府史跡昭和56年度発掘調査概報」1982
⑨福岡市教育委員会「博多48」「福岡市埋蔵文化財調査報告書397」1995

I. 調査地の位置と歴史

【地理的環境】

福岡平野の南東部に位置する太宰府市は、北から東にかけては三郡山系、西から南にかけては背振山系と、両山系に囲まれた狭い平野を中心に所在する。この両山系から流れる小河川は市西部で合流し、御笠川として福岡平野に北流する。また平野の南東側は筑紫平野に接している。

原遺跡は、福岡県太宰府市連歌屋から三条に所在する遺跡である。遺跡は太宰府市北部の大城山（四王寺山）の南東麓に広がっており、一帯は原山寺院跡（原山無量寺跡・原八坊跡）として伝えられている。なお、本報告地点は標高80～90m付近に位置する。

【太宰府市の歴史概略】

太宰府市一帯が歴史の表舞台に登場するのは、西暦663年の白村江の敗戦を契機としている。日本はこの敗戦を機に、西日本各地で唐・新羅連合軍に対する防衛網を整備した。福岡平野の最深部である当市付近では、664年に三郡山系と背振山系の最狭地をふさぐように水城がつくられ、翌665年には北の大城山に大野城、南の基山に椽城が築かれた。これらの城はその後、律令制下においても利用されることになる。

７世紀後半から８世紀にかけて、大宰府の成立を機に、現在の大宰府政庁跡一帯に官衙諸施設が整備される。そして政庁南面には、計画区割りを行ったとみられる街区が出現し（いわゆる大宰府条坊）、その後の街並みの原型がつくられる。

【大宰府の寺院】

古代より寺院も各所につくられる。律令大宰府成立期頃には観世音寺・般若寺・塔原廃寺（筑紫野市）などがつくられており、その後、筑前国分寺・筑前国分尼寺をはじめ、大城山には四王院、また太宰府平野南には、武蔵寺（筑紫野市）や杉塚廃寺（筑紫野市）等が造られている。

古代後期から中世にいたっては、旧来の寺の他、子院群を含めて多数造られる。治承3（1179）年に成立した『梁塵秘抄』には筑紫の霊験所として、「大山・四王寺・清水寺、武蔵・清滝、豊前企救の御堂な、竈門の本山彦の山」と詠われており、大宰府に有名寺院が集中していたことがわかる。なお中世に一山をなした寺院は、観世音寺、武蔵寺、安楽寺（現太宰府天満宮）・大山寺（有智山寺、宝満山西麓）、崇福寺（大城山南東麓）、および原山寺院があり、その多数が大城山南麓から宝満山西麓に集中しているのが注目される。

【四王院について】

さて、原遺跡の所在した大城山には、四王院が置かれていた。原山はこの四王院の別院といわれる。

『扶桑略記』によると、四王院は宝亀５（774）年につくられている。

この寺院は、宝亀５（774）年に日本の対新羅対策の一環として新羅による宗教的呪咀を取り払うために置かれたもので（『類聚三代格』）、平安前期には、事あるごとに西海道内の寺院とともに祈祷を行っている。

ここには、のちの天台宗延暦寺座主の円珍が、入唐の際に２年ほど滞在したことも知られる（『園城寺文書』『天台宗延暦寺座主円珍伝』他）。

この寺院について、古代の文献史料は康和４（1102）年までの記録があるが、その後の活動については不明である。ただ、近世史料に、天正14（1586）年、大城山の岩屋城に居した大友氏の家臣高橋紹運が島津軍との岩屋城合戦で敗れた際、四王院も焼失したとされる。このころまで法忍坊・増長坊・成泉坊の三坊が残っていたという。

【原山寺院について】

ａ．原山寺院の由来

原山寺院の由来について、その名称は原山無量寺とされ（貝原益軒『筑前国続風土記』）、その創建については、弘仁９（818）年最澄開基説（原山記念碑、明治38年）、天安２（858）年円珍の弟子による開基説（『四王寺縁起』（『史跡名勝天然記念物報告書』第２号　福岡県1926所収））などがあり、いずれも９世紀に創建された天台宗寺院とされる。

また、大宰府に左遷された菅原道真は延喜３（903）年に没するが、この時原山無量寺が葬儀に関わったことが、原山の伝承に必ず登場するのが特徴である。

ただ、これらの記事についてはいずれも近世以降の文献史料が元になっており、創建時期や寺院名について記す古代・中世の文献史料がないことから、未だ確証が得られていないのが実情である。

ｂ．中世の「原山」

中世においては、文献史料に「原山」の記事が散見される。

『仁和寺日次記』には、建保4（1216）年に「鎮西原山」とあり、文永元（1264）年の『一遍上人年譜略』では、時宗の一遍上人が16才から25才までの間、原山の聖達上人が住した原山弘西寺で修行していたことを伝える。正中元（1324）年の東大寺文書には「筑前有智山・原山」とあり、『雷山文書』には元弘3（1333）年に後醍醐天皇の子、尊良親王が「大宰府原山之際」に臨幸したことを記す。また『梅松論』には、都から敗走した足利尊氏が、延元元（1336）年３月３日午後に「原山の一坊」に入ったことを記す。

このほかにも史料が散見され、中世における原山寺院の存在を窺うことはできるが、その実態についてはほとんど不明である。

ｃ．経塚発見・発掘調査

古代から中世の状況は、文献以外に経塚や周辺の発掘調査成果からも窺える。

四王寺山麓は経筒の出土例が多いことで知られ、原遺跡一帯でも数例知られている。

明治39年には5基の経塚が発見された。ここから5本の経筒および湖州六花鏡などが出土し、経筒の一つには仁平2(1152)年の墨書がある(いずれも東京国立博物館所蔵)。このほかにも昭和57年に工事中に発見された銅鋳製経筒や、また今回の報告地点の北西に位置する水瓶山において、近年まで雨乞祈祷に使用されてきた滑石製経筒外容器(弘長3(1263)年6月銘あり)などがある(『太宰府市史』考古資料編)。

表1　原遺跡調査地点・調査年数(太宰府市分のみ掲載)

調査次数	所在地	調査年度	報告書
第1次調査	大字太宰府字原1597-1、1551-4、1551-5	昭和55年度	
第1次調査補	大字太宰府字原1597-1外	平成2年度	
第2次調査	大字太宰府字原1551-4、1551-5	昭和55年度	第4集
第3次調査	大字太宰府字原1561-1	昭和61年度	
第4次調査	大字太宰府字原1562-1	昭和61年度	
第5次調査	大字太宰府字原1597-1	昭和62年度	
第6次調査	大字太宰府字原1553-10	昭和63年度	
第7次調査	大字太宰府字原1553-2	平成元年度	
第8次調査	三条1丁目1550	平成3年度	本報告
第9次調査	三条1丁目1559-1	平成4年度	
第10次調査	三条1丁目1553-6	平成4年度	
第11次調査	三条1丁目1552-1	平成5年度	本報告
第12-1次調査	三条1丁目1563-1外	平成5年度	
第12-2次調査	三条1丁目1569-1、1563-3	平成7年度	
第13次調査	三条1丁目1560-2、1561-12	平成8年度	
第14次調査	連歌屋3丁目1741-10、1741-11、1741-12	平成9年度	
第15次調査	三条1丁目1517-3、1517-7	平成10年度	
第16次調査	三条1丁目1520-8	平成11年度	

付近の発掘調査は、福岡県教育委員会が昭和44年に浦の城跡の調査をおこなっているほか(『浦城跡』福岡県教育委員会　1970)、昭和55年より太宰府市教育委員会が「原遺跡」として本堂および中堂比定地周辺の調査を行っている(表1)。

発掘調査では、古くは9〜10世紀の墓が検出されており、付近に墳墓群があったことが推定されているが、当時寺院が存在した痕跡は得られていない。現在のところ、建造物では第11次調査(本報告)で検出された平安時代後期の礎石建物や石垣が最古のものである。

最も盛んに活動しているのは12〜13世紀代で、整地を各所で行っている他、建物・溝・井戸・炉などが検出されている。出土する遺物もこの当時のものが圧倒的に多い。

検出された遺構群は14世紀後半には衰退・廃絶を考えられる状況にある(『太宰府市史』考古資料編　平成4年)。

d．原山の下山

発掘調査では、この後の推移については不明で、近世期に畑等として土地利用されたことが窺える程度である。

14世紀以降の状況について、森弘子氏は、中世後期の文献に安楽寺天満宮と原山が一体となって記載される事例が多いことや、連歌師飯尾宗祇の紀行文『筑紫道記』に、文明12(1480)年、宗祇一行が太宰府天満宮に参詣した際の宿所の一つが花台坊であったこと等を引き、中世後期には「原八坊が山を下りていたと考えられる」と述べている。(森弘子「原八坊

と水瓶山雨乞祈祷」『太宰府顕彰会二十周年記念論集』（財）太宰府顕彰会　平成9年5月25日）

e．原山寺院の廃絶

再び、近世以降の文献資料をみると、岩屋城合戦による堂宇の焼失が原因で、原山は四王院とともに廃絶したという伝承を残す。この戦で安楽寺天満宮や横嶽崇福寺も灰燼に帰している。

江戸期にはいり、安楽寺天満宮は小早川隆景により本殿が再建され、その後筑前を領した黒田家の庇護のもとに復興を遂げていく。

その際原山の僧等は、菅原道真の葬儀に関わった縁により安楽寺天満宮に組み込まれた。黒田家から安楽寺天満宮に2000石の禄が与えられるが、原八坊もこのうち121石の禄が支給されたようである（「伊藤尾四郎「太宰府神社の神仏分離」『新編明治維新神仏分離史料第十巻』名著出版　昭和59年2月10日）。

明治初年の廃仏毀釈により、安楽寺天満宮は太宰府神社となった。この際仏徒である原八坊は解散し、その法灯が消えることになる。

その後旧原八坊は、明治38年に集まり、原八坊の歴史を後世に伝えるため寺地に碑文を残したことが、原山本堂跡地の南西脇の原山記念碑に記されている。

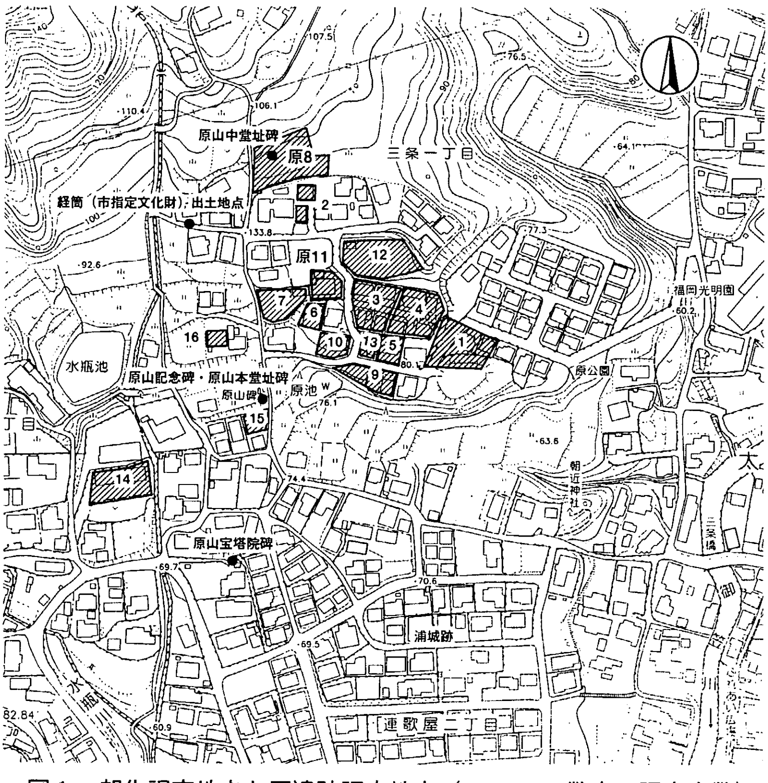


図１　報告調査地点と原遺跡調査地点（1/5,000、数字は調査次数）

図２　太宰府市とその周辺の遺跡（1/30,000）

1.大野城跡	10.水城跡	19.原口遺跡	28.剣塚遺跡
2.岩屋城跡	11.大宰府政庁跡	20.篠振遺跡	29.唐人塚遺跡
3.陣ノ尾遺跡	12.観世音寺	21.前田遺跡	30.峯遺跡
4.筑前国分寺跡	13.遠賀団印出土地	22.宮ノ本遺跡	31.桶田山遺跡
5.辻遺跡	14.大宰府条坊跡（破線内）	23.雑川遺跡	32.太宰府天満宮（安楽寺跡）
6.国分松本遺跡	15.君畑遺跡	24.フケ遺跡	33.浦城跡
7.筑前国分尼寺跡	16.般若寺跡	25.尾崎遺跡	34.原遺跡
8.国分千足町遺跡	17.市ノ上遺跡	26.脇道遺跡	**35.原遺跡第８・11次調査**
9.御笠団印出土地	18.神ノ前窯跡	27.殿城戸遺跡	

II. 調査組織

各調査を実施した平成３～５年度の調査組織を記載している。また整理報告についても、調査終了後に随時進めてきたが、報告書作成など主たる整理事業を進めた、平成12年度の組織を記載している。

調査年度

平成3（1991）年度

総括	教育長	長野治己
庶務	教育部長	中川シゲ子
	文化課長	佐藤恭宏
	埋蔵文化財係長	富田　譲
	文化振興係長	大田重信
	主任主事	岡部大治
		川谷　豊
調査	主任技師	山本信夫
		狭川真一
		城戸康利
		緒方俊輔
	技　　師	山村信榮
		中島恒次郎
		塩地潤一
	技師（嘱託）	田中克子（3年10月1日～）

平成4（1992）年度

総括	教育長	長野治己
庶務	教育部長	中川シゲ子
	文化課長	佐藤恭宏
	埋蔵文化財係長	高田克二
	文化振興係長	大田重信
	主任主事	岡部大治
		川谷　豊

調査	主任技師	山本信夫
		狭川真一
		城戸康利
		緒方俊輔
		山村信榮（4年7月1日～）
	技　　師	山村信榮（～4年6月30日）
		中島恒次郎
		塩地潤一
	技師（嘱託）	田中克子

平成5（1993）年度

総括	教育長	長野治己
庶務	教育部長	中川シゲ子
	文化課長	佐藤恭宏
	埋蔵文化財係長	高田克二
	文化振興係長	大田重信
	主任主事	岡部大治
		川谷　豊
調査	技術主査	山本信夫（5年10月1日～）
	主任技師	山本信夫（～5年9月30日）
		狭川真一
		城戸康利
		緒方俊輔
		山村信榮
		中島恒次郎
	技　　師	塩地潤一
	技師（嘱託）	田中克子
		重松麻里子（5年6月1日～）
		井上信正（5年7月1日～）

整理報告年度

平成12（2000）年度

総括	教育長	長野治己（～12月24日）
		關　敏治（12月25日～）
庶務	教育部長	白石純一
	文化財課長	津田秀司（～3月31日）
		木村和美（4月1日～）
	文化財保護係長	和田敏信
	文化財調査係長	山本信夫（～10月23日）
		神原　稔（11月1日～）
	主任主事	藤井泰人
		野寄美希
	嘱　　託	鈴木弘江
調査	技術主査	城戸康利
	主任技師	山村信榮
		中島恒次郎
		井上信正
		高橋　学
		宮崎亮一
	技師（嘱託）	下川可容子
		森田レイ子
		佐藤道文

III. 調査の概要

（1）第8次調査

1．調査に至る経緯

調査地は、太宰府市大字太宰府字原（三条1丁目）1550で、対象面積は1517㎡である。現況は荒れた畑地で笹竹が生い茂っていた。昭和63（1988）年8月に当該地へのアパート建築計画に際し埋蔵文化財について照会が行われたのを始めとする。その後、売買、宅地分譲など計画は二転三転し、平成2（1990）年に（株）盛立不動産の照会で地権者飯沼時男氏と協議を開始し、木造個人住宅建築の事前に発掘調査を行うことで合意した。

現地での調査は平成3（1991）年11月11日から平成4（1992）年5月31日まで実施し、城戸康利が担当した。調査面積は1200㎡である。整理作業は平成12（2000）年度を中心におこなった。

調査地は中央部に広い平坦面を中心に、東に比高差約2mの下に小さな平坦面、また北西には東西に長い石垣を持つ狭長な平坦面2面で構成されている。南は隣地との間に3mほどの段差があり、北側隣地は約2m高くなっている。

調査は排土置き場の確保から中央部は二分して反転を行った。また中央部南側で石列を検出したため調査区の南への拡張を行った。したがって調査区の呼称は東の小さな平坦面から、東端区、東区、拡張区、西区、下段石垣、上段石垣とした。

2．層位など（Fig.8-5～8、Pl.13～17）

調査地は、標高約100mの丘陵南斜面に位置し、基盤層は花崗岩の風化土である。したがって地山も花崗岩風化土もしくはその二次堆積層である。調査前の現況は、南は隣地との間に平坦面を確保するために、斜面を切り土、盛土を行っているため山側（北側）では削平、谷側（南側）では人為的堆積が観察された。このような造成行為は近代まで断続的に行われており、調査では山側では削平による遺構の消失と、複数時期の遺構が同一面で検出されることとなった。一方、谷側では南西方向に複雑な整地が遺存していた。以下で整地と遺構面の関係を整理する。

東端区

表土は薄く腐植土層を除去すると茶色土の包含層があり、その下に遺構面となる赤茶色砂質土を検出した。この層は遺物を包含していた。さらにその下には炭化物を含む暗褐色土、無遺物の明茶色粘質土が堆積していた。地山は風化しかかった花崗岩礫を含む花崗岩風化土である。

中央の平坦部は東区南東と西区南で整地層を確認した。東区北寄りでも数枚の整地（茶色粘質土、灰色砂質土、淡茶色土など）を検出したが南側の整地との関係は不明である。削平により南側と連続していたものが分断されたと考えている。

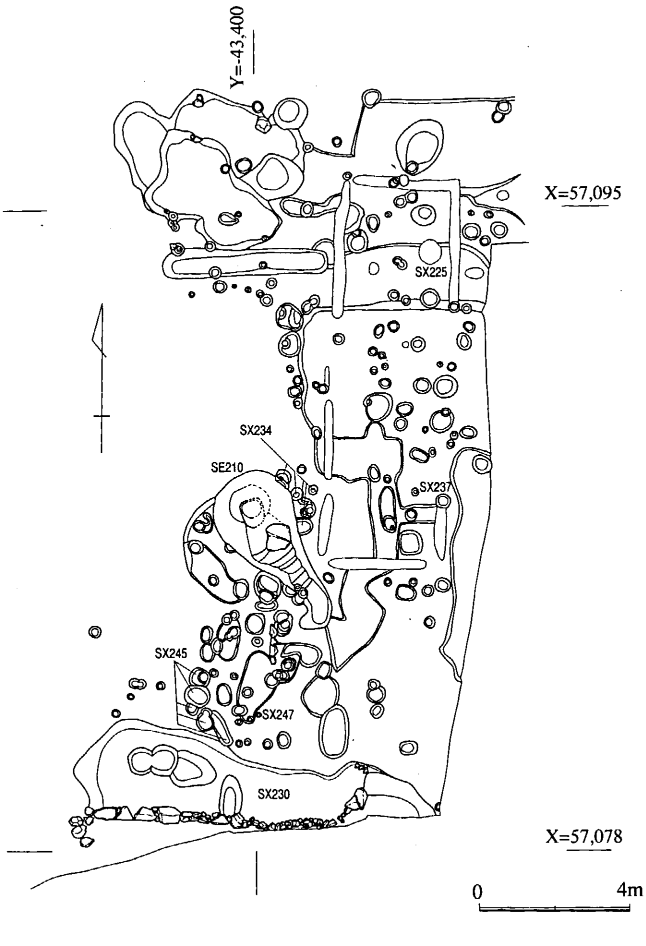


Fig.8-2　第二遺構面遺構全体図（1/200）

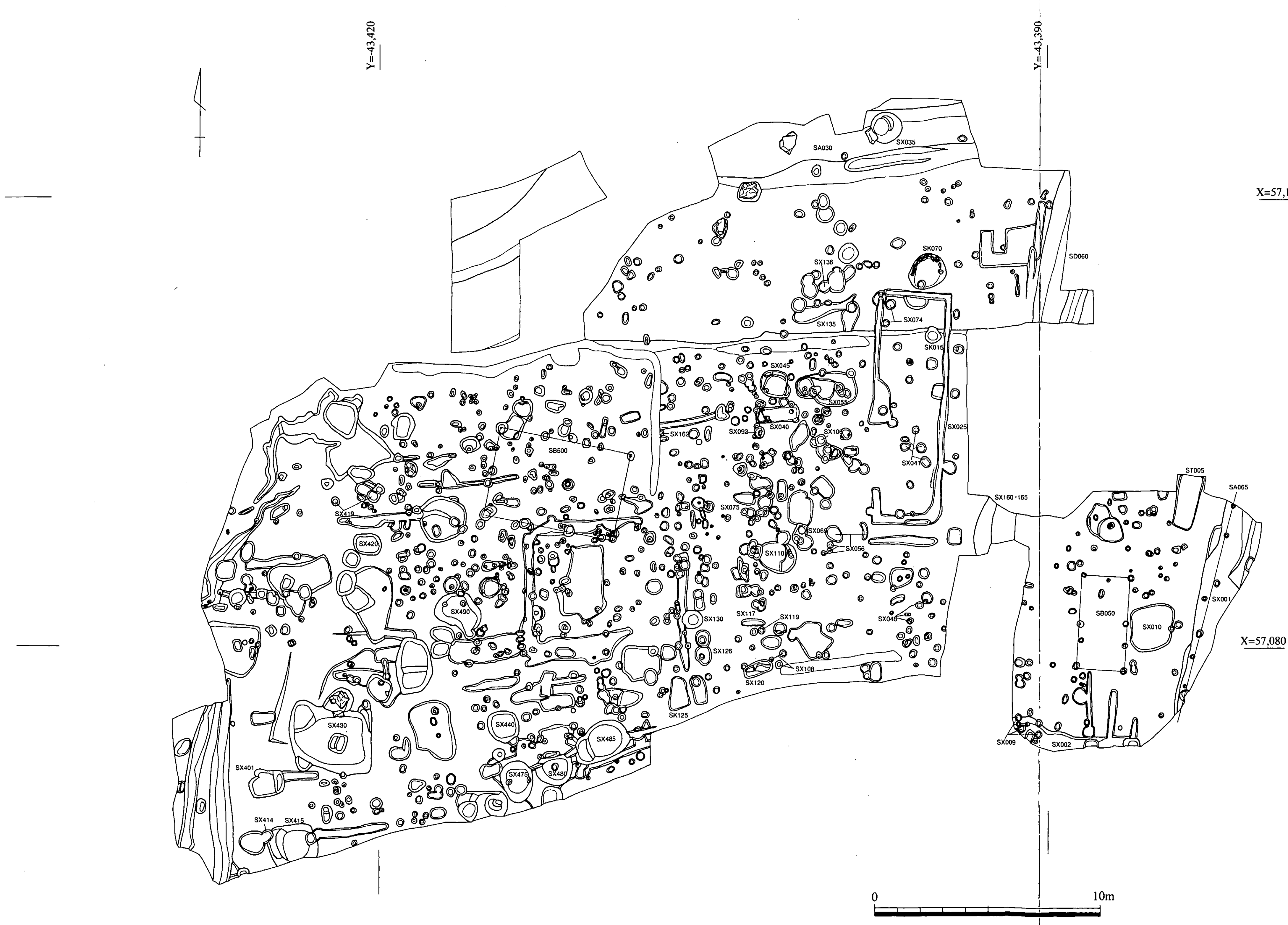


Fig.8-1　第一遺構面遺構全体図（1/200）

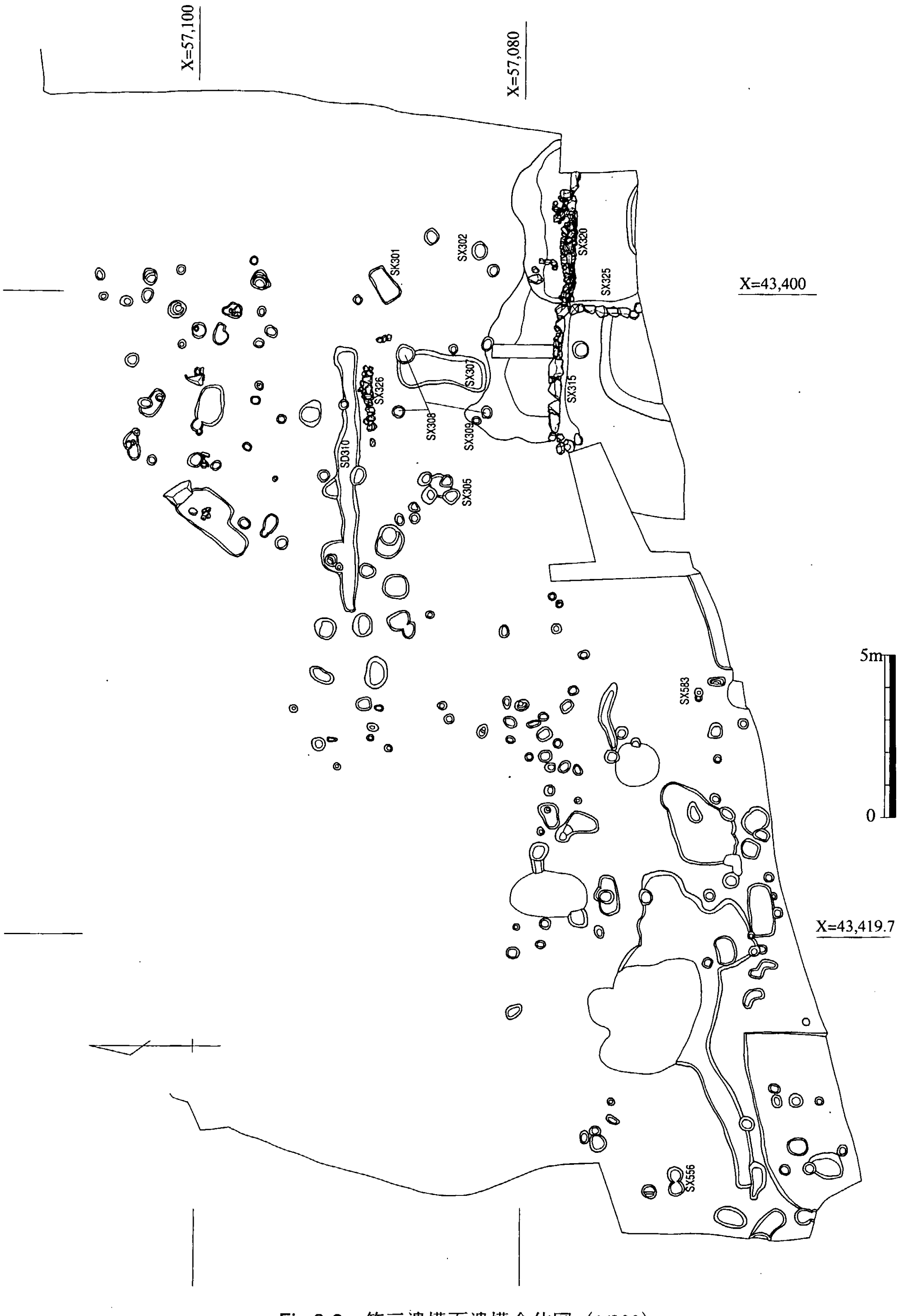


Fig.8-3　第三遺構面遺構全体図（1/200）

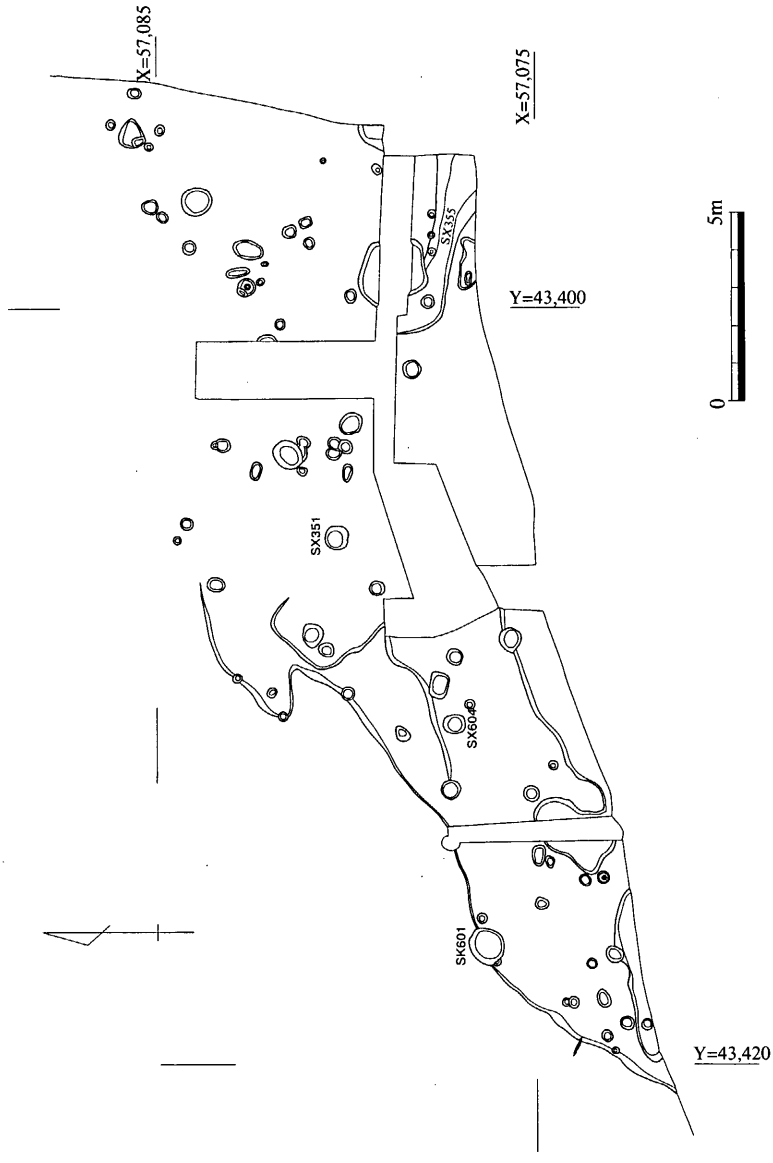


Fig.8-4　第四遺構面遺構全体図（1/200）

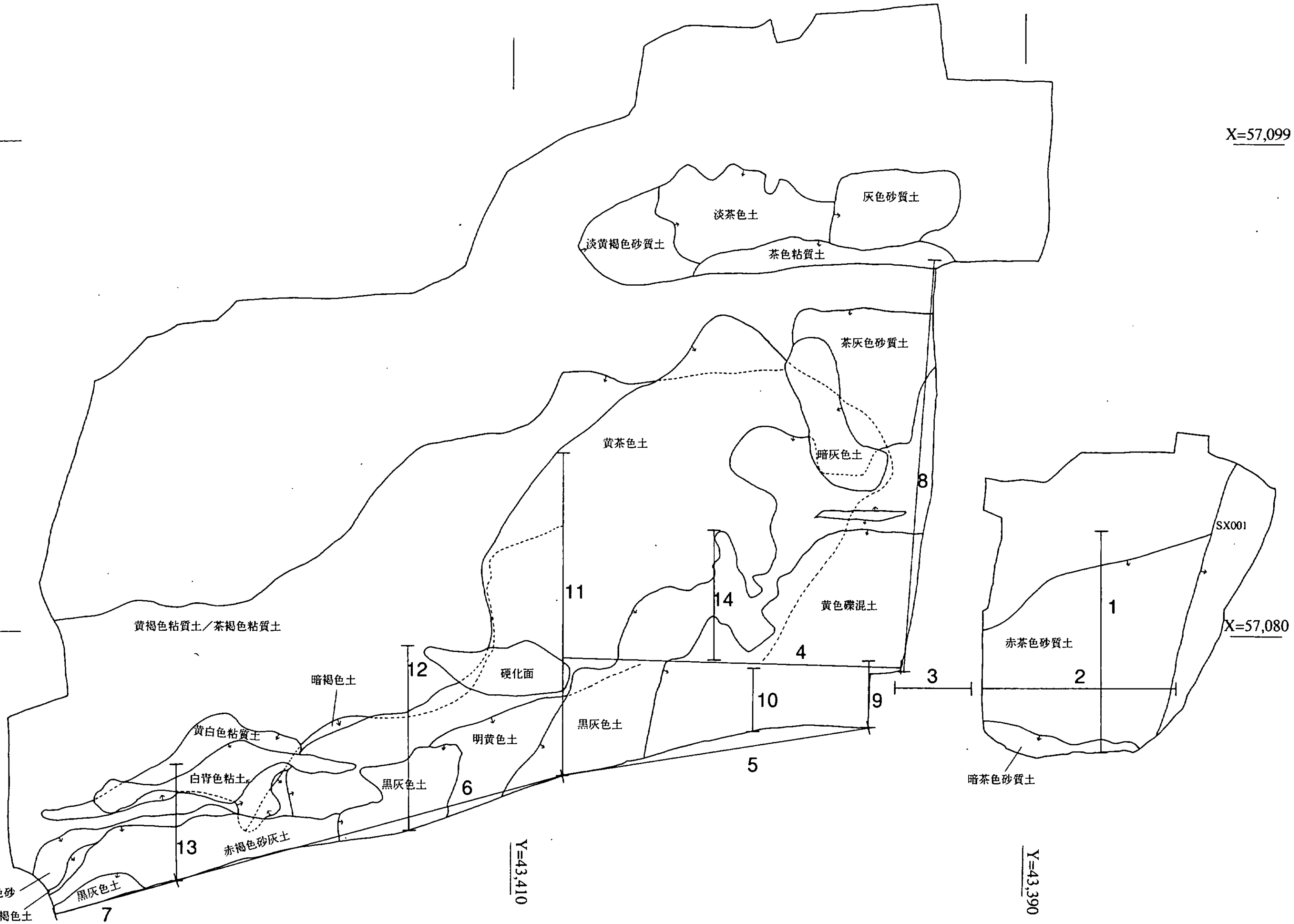


Fig.8-5　土層堆積模式図および土層図位置図（1/250）

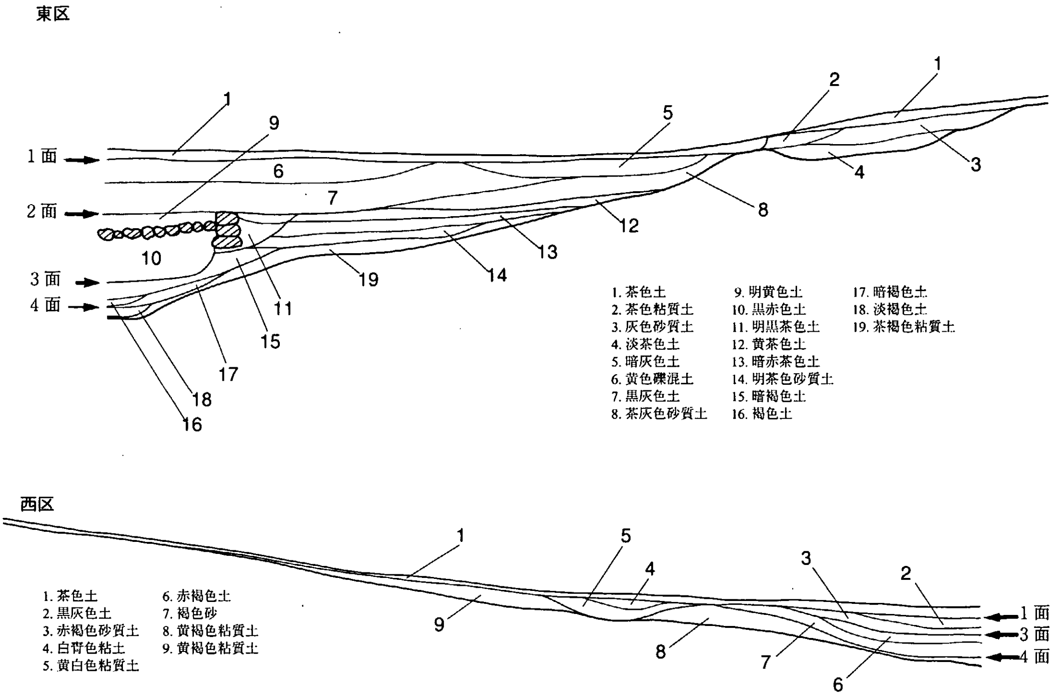


Fig.8-6　調査区土層模式図

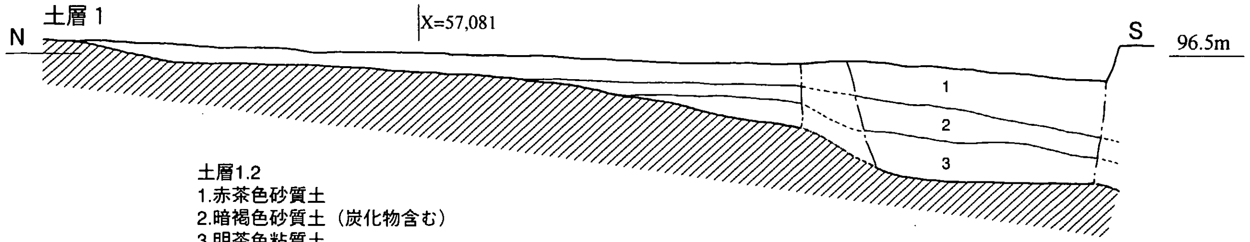
東区および拡張区

南東は第一遺構面は花崗岩礫を含む黄色土（黄色礫混土）が敷いてあった。この土砂は基盤層の土質と同じもので、短期間で山側を削平しのばした造成作業と考えられる。厚さは厚いところで40cmほどで、遺物は陶磁器や土師器を出土したが、量は少ない。この直下には黒灰色土が堆積している。遺物を多く含み、汚れた印象の土層である。厚さは約30cmで黄色礫混土より広い範囲に遺存していた。黒灰色土の上面から切り込む遺構は検出できず、黄色礫混土とセットで客土されたと考えられる。

第二遺構面は黒灰色土の下で検出した明黄色土に切り込んでいる。明黄色土の厚さは厚いところで60cmである。また調査区南壁の土層観察から西から東へ向けて客土を行っていることが確認できた。明黄色土の由来も地山の花崗岩風化土と考えられる。範囲は中央平坦面南東部に偏っている。したがって第二遺構面はこの部分に限られる。明黄色土の下では石列SA315・320を確認したため、南へ調査区の拡張を行った。これらの石列は擁壁の役割を果たしていたため、石列の外側には廃棄物（焼土塊など）や土砂が埋め立てられていた。

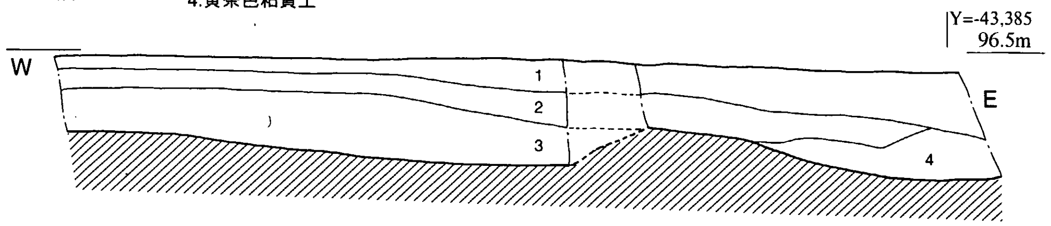
第三遺構面は明黄色土を除去すると検出された。赤っぽい茶色土を中心に遺構は切り込んでおり、焼けて硬化した部分も見受けられる。範囲は南側を中心に西区まで広がっている。石列

土層 1



土層1.2
1.赤茶色砂質土
2.暗褐色砂質土（炭化物含む）
3.明茶色粘質土
4.黄茶色粘質土

土層 2

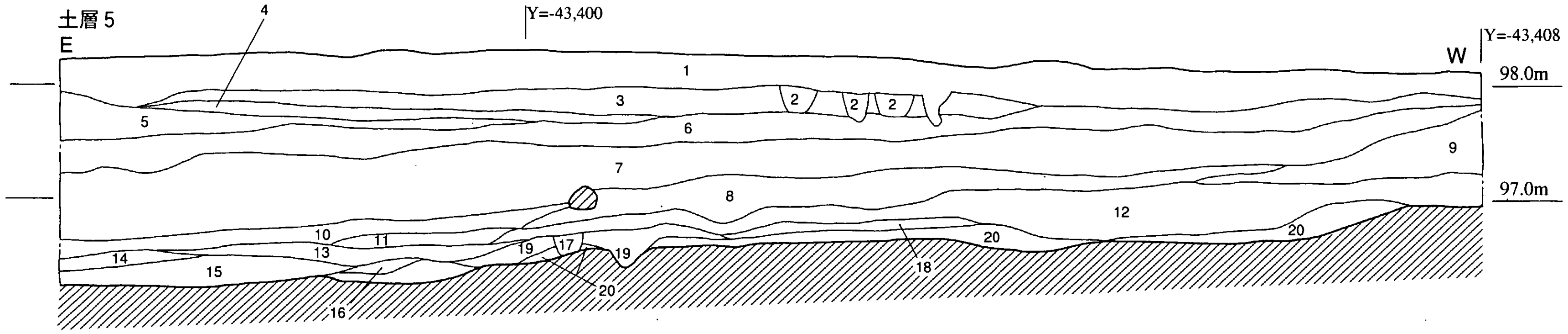


土層5
1.表土および茶色土
2.ピット
3.黄色礫混土
4.黄色礫混土（3より暗い）
5.黄色礫混土（3に近い）
6.黒灰色土
7.明黄色土（西から東へ埋めている）
8.黒赤色土（炭化物、焼土多く入る）
9.暗黄色土
10.黒茶色土
11.暗褐色土（炭化物入る）
12.暗褐色土（11より砂っぽい）
13.褐色土（炭化物入る）
14.淡褐色土
15.淡褐色土（14より明るい）
16.淡褐色土（15より明るい）
17.ピット
18.明褐色土
19.淡茶色土（砂っぽい）
20.茶褐色粘質土

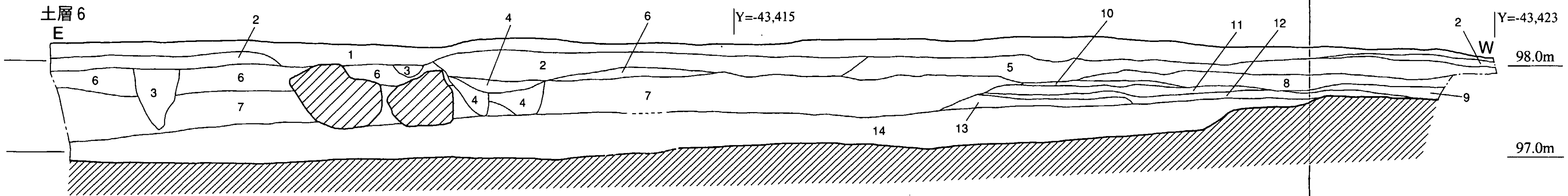
土層6
1.表土および茶色土
2.黒灰色土
3.ピット
4.遺構群
5.赤褐色砂質土
6.明黄色土
7.暗黄色土
8.赤褐色土
9.褐色砂
10.黒橙色土（炭化物含む）
11.暗橙色土（粘質あり）
12.明橙色土（礫含む）
13.暗橙色土（11に似る）
14.暗褐色土（炭化物入る）

土層7
1.表土および茶色土
2.ピット
3.黒灰色土
4.灰褐色土（溝の埋め土）
5.黄灰褐色土（遺構）
6.赤褐色砂質土
7.赤褐色土
8.褐色砂
9.黄橙色土（地山）

土層 5



土層 6



土層 7

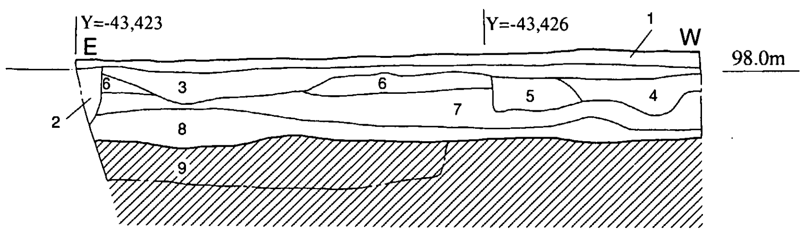


Fig.8-7　調査区土層図 1 （1/60）

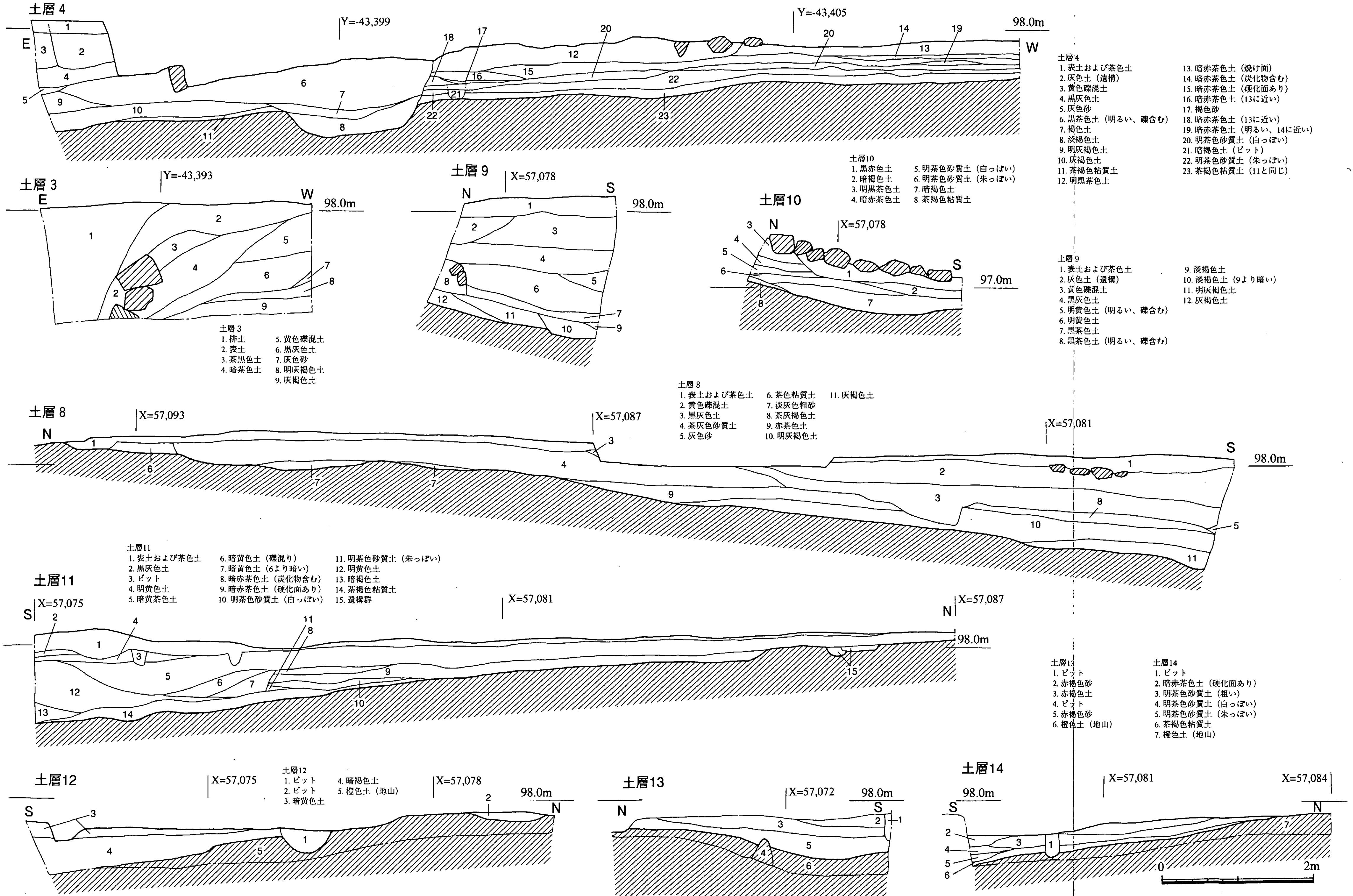


Fig.8-8　調査区土層模式図２（1/60）

もこの段階で順次築造されたと考えられる。

赤っぽい茶色土や灰褐色の土などを除去していくと、土質も粘質から砂質の土壌へと変化していく。第四遺構面はこれらの堆積を除去後、基盤層または基盤層の土壌化した面で検出した。もっとも古い遺構面にあたる。三面から四面の幅は約40cmある。地形的には南東部分が一番低くなっており、当該地が丘陵斜面のゆるい尾根の出っ張りであったと考えられる。

東区で設定したトレンチ1・2について説明を加える。トレンチ1は拡張区を設定する際にB・C9区で先行して設定した試掘坑である。トレンチ2は石列8SX315の検出に伴い下層の状況を把握するために第三遺構面上に設定した。8ライン上から東1mの範囲を8SX315からEラインまで先行して掘削した。

西区

表土（耕作土）を除去すると茶色土の包含層がありその下に第一遺構面がある。東区と同様の構造をしている。東区で検出した黄色礫混土は遺存せず、基盤層と黄褐色粘質土、東区で検出した黒灰色土さらに、西側に特徴的な赤褐色の砂質土を検出した。これらに遺構は切り込んでいた。

東区の第二遺構面に相当する面は確認できなかったが、最終的な土層の確認を行うと明黄色土は南壁に12ライン上くらいまでのびており検出時点でとばしてしまっていた。

第三遺構面は暗黄色土・赤褐色土上面で検出した。東から連続する暗赤茶色土は西区でも検出された。暗黄色土は厚いところでは60cmあるが、東区に向かって薄くなってしまい消滅している。

第四遺構面は地山直上であり、東区と同様の状況を呈する。西区は東区にくらべ山側に属するので第一遺構面で地山の露出部分が多かった。

下段石垣・上段石垣

調査地北西部に隣地に張り付くように築造されていた。積み石の状況から近世以降に耕地として開発されたものと判断し、12ライン上に3m幅のトレンチを設定し旧地形を確認する作業を行った。その結果、石垣の築造に伴う裏込め土の下には花崗岩風化土の基盤層が広がっていることを確認した。また遺物から石垣が近代以降の所産であることも確認した。

3．遺構

（1）柵列・土塁

8SA030（Fig.8-9、Pl.7）

東区北側端で隣地の法面に接して検出した。一部は北側隣地に拡がる。長さ約4m、基底部幅約3m、高さ約1.2mを測る斜面へのもたれ掛かり式の土塁で

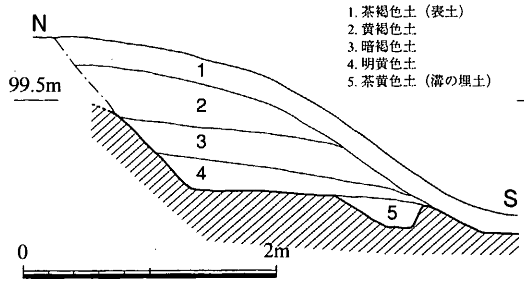


Fig.8-9　8SA030土層断面図（1/60）

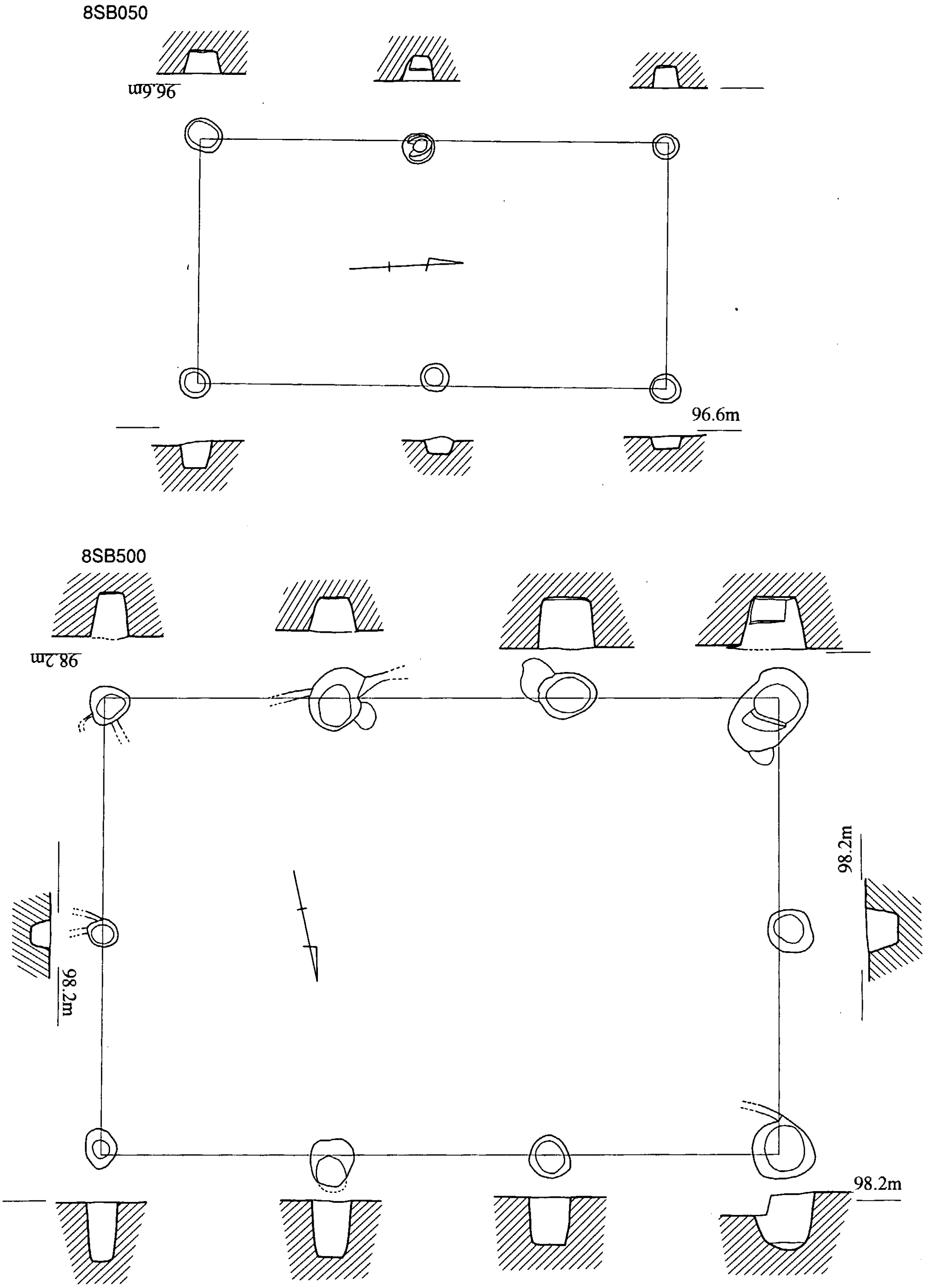


Fig.8-10　8SB050、8SB500実測図（1/60）

ある。上層から順に茶褐色土（現表土)、黄褐色土、暗褐色土、明黄色土の堆積で地山は花崗岩風化土で自然礫が露出している。盛土を行うに当たって、旧表土は除去され平坦にする整形が行われている。盛土下からは8SX035を検出した。土塁内の南側には土塁に平行する明褐色土埋土の溝が確認された。南側の整地との関係は不明である。北側隣地の造成の一部の可能性がある。遺物から中世には形成されたと考えられる。

8SA065（Fig.8-1）

東端区東端にある8SX001の底面で検出した南北の柵列である。およそ2.5mの間隔で柱穴が連続し、ルーズな直線を描く。8SX001に平行しており、8SX001に先行する境界の表示物と考える。柱穴は径約0.2m内外、深さは0.2m程が遺存している。軸の振れはN-15°2′-Eである。

（2）掘立柱建物

ピット群は各遺構面で多数検出したが、建物を構成する柱穴は２棟分しか確認できなかった。さらに多くの建物があった可能性がある。また、礎石建ちの建物は検出しなかった。

8SB050（Fig.8-10）

東端区で検出した２×１間の建物である。第一遺構面で検出した。東端区のほぼ中央に位置した南北棟である。柱間は桁行が2.05m、梁行2.2mである。柱穴は径約0.25m、深さ約0.2ｍである。振れはN-4°50′-Eである。

8SB500（Fig.8-10）

西区北寄りで検出した３×２間の東西棟の建物である。第一遺構面で検出したが、地山上で検出したためどの整地層に対応するかは不明である。柱間はすべて2mである。柱穴は径0.4～0.5mを測るが、南西隅は長径0.8mの２段掘りである。深さはどれも0.5mほど遺存している。振れはN-11°36′-Eである。

（3）溝

8SD060（Fig.8-11）

東区北東で検出した南北溝である。現況隣地との境界にあたる。長さ約7m分を検出した。幅約2.1m、深さ約0.4mを測る。埋土は上層が人頭大以下の花崗岩礫を多く含んだ灰茶色土で、下層が暗灰茶色土である。第一遺構面での検出である。東隣地側は地山ではなく暗茶色土に掘り込まれている。完掘後、直下で幅0.8m、深さ0.2mの黒茶色埋土の溝を長さ３m分検出した。振れはN-13°22′-Eである。南に延長すると東区と東端区を分けた段落ちに重なる。8SX160・165に連続する可能性が高い。

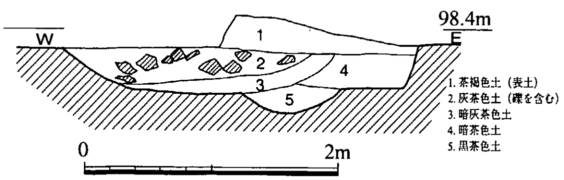


Fig.8-11　8SD060土層断面図（1/60）

8SD310（Fig.8-3）

東区から西区にかけて検出した東西溝である。第３遺構面で検出した。長さ8.2m、幅0.5m、深さ0.1mを測る。振れはほぼ東西である。埋土は暗茶褐色の単一層である。南に隣接して8SX326が平行してある。これら遺構の南側は整地土が硬化しており、溝と石列で空間を区別していることが考えられる。溝の中には柱穴は確認できなかったが、8SX025例を見ると壁の基礎部分の掘り方の可能性もある。

8SD401（Fig.8-1）

西区西端で検出した南北の溝である。幅1m、深さ0.15mで、長さ9m分を第一遺構面で検出した。埋土は暗茶色の単一層で北側は浅くなって消えている。振れはN-1°22′-Eである。

（４）井戸

8SE210（Fig.8-12、Pl.9）

東区の第二遺構面で検出した。径2.2m、深さ2.6mの円筒形掘り込み部分と長さ2.9m、幅1m、深さ1.2mの階段部分からなる。階段は５段あり、１段が0.15～0.3mの高さである。最下段には一辺約0.7m、厚さ0.25mの略方形の花崗岩が平たく据えられていた。埋土は検出面から2mは1m四方の岩から人頭大くらいまでの大小の花崗岩礫で充填されその隙間に灰色粘質土が詰まっていた。円形部分には井戸枠は

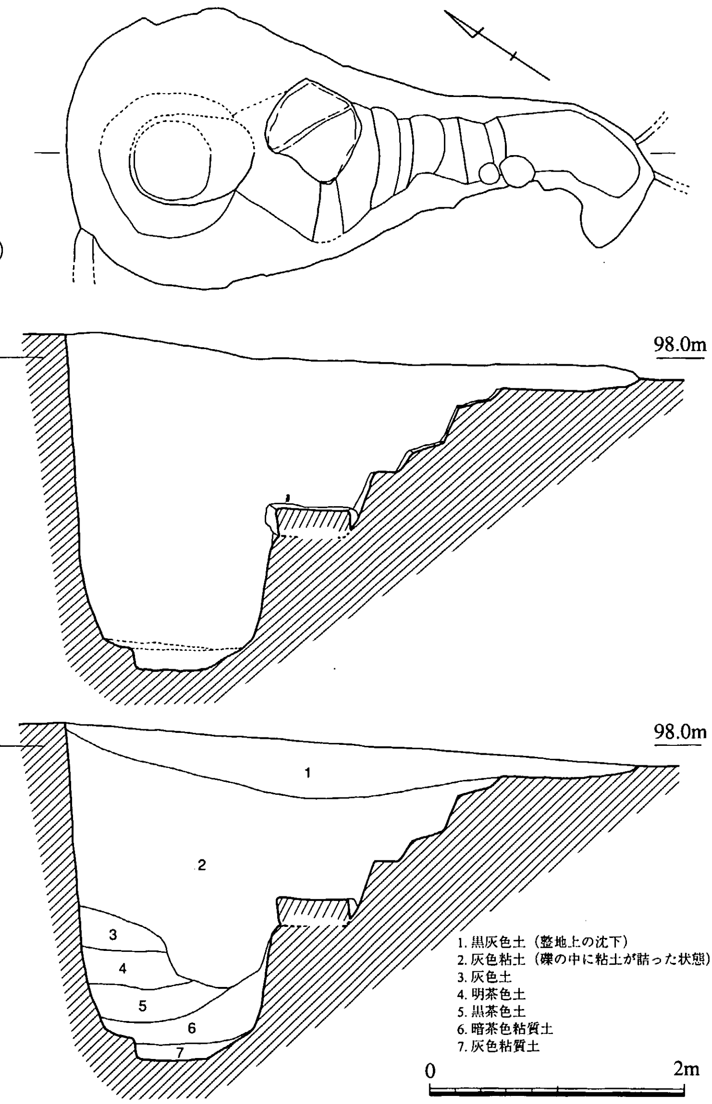


Fig.8-12　8SE210実測図（1/60）

検出されず、底近くで径1m程になる段が付いていた。壁には湧水によるくれた跡などはなく、現状でも湧水は無いことから、導水施設を伴う溜め井であったと考える。井戸と判定するには疑問が残るところであるが、降り口を持つ井戸と考え、多くの礫は階段と地表面の施設に使用されていたものと考えるが、穴蔵のような施設の可能性もある。

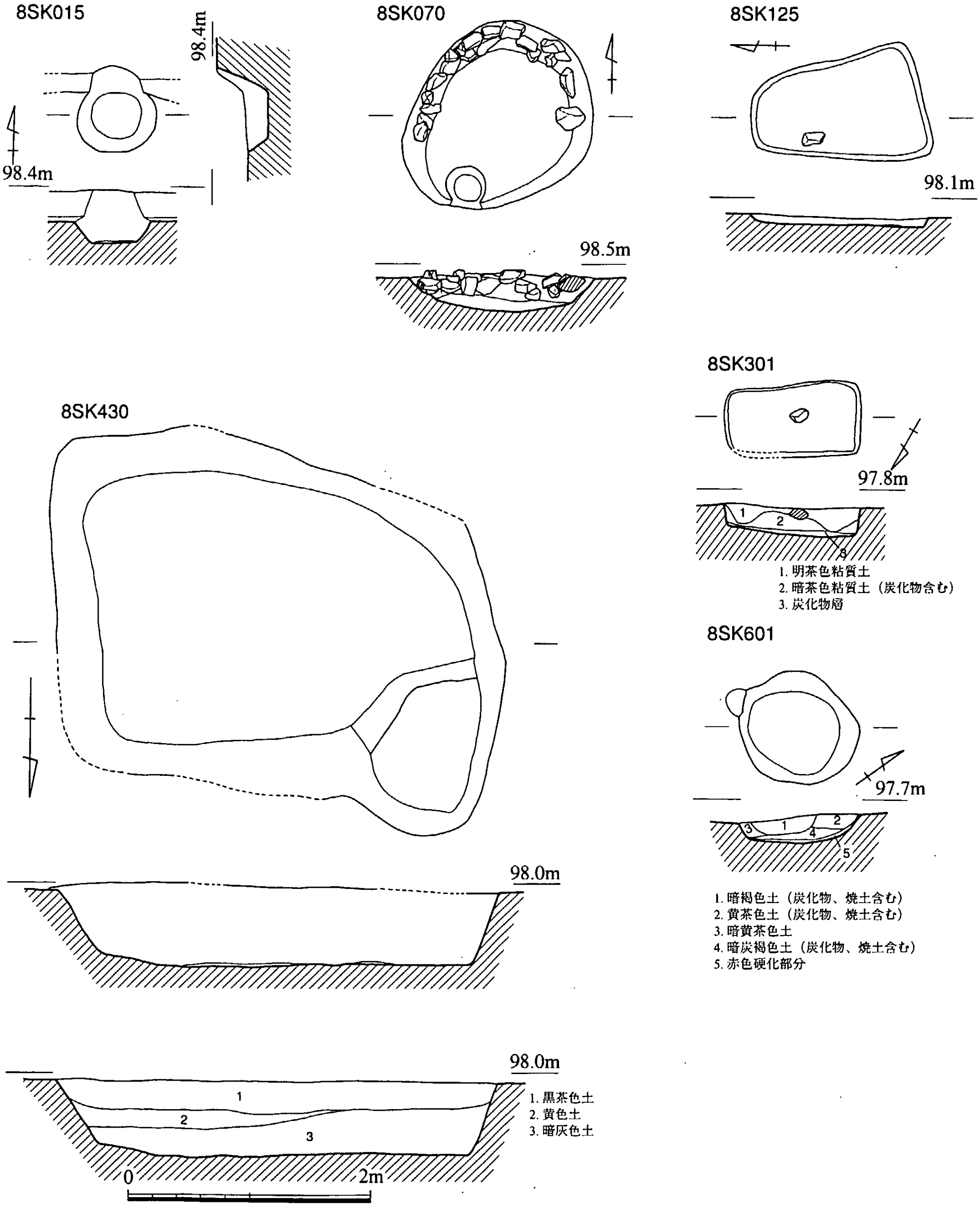


Fig.8-13　土坑実測図（1/60）

（5）土坑

8SK015（Fig.8-13）

東区北寄りで検出した円形の土坑である。径0.7m、深さ0.45mを測る。第一遺構面で検出した。中から白磁椀２点、同安窯系青磁椀１点、青白磁椀１点が出土した。遺構の場所が畑の小さな段と水路にまたがっていたため、青白磁椀と同安窯系青磁椀は耕作時に毀されて破片は周辺に散らばっていた。そのことから推測すると椀類は正位置で下から白磁・白磁・青磁・青白磁の順に積み重ねられていた可能性が高い。この土坑の性格は判然としない。

8SK070（Fig.8-13、Pl.8）

調査区北寄りで検出した略円形の土坑である。径1.4～1.7m、深さ0.35mを測る。第一遺構面で検出した。北壁面に一辺0.2mほどの花崗岩礫が貼り付いていた。全面に意図的に貼り付けていたと考えられる。礫は焼けておらず、また埋土から炭化物が多量に検出されていないことから炉的な性格ではない。用途は不明である。

8SK125（Fig.8-13）

東区南側で検出した略長方形の土坑である。長辺1.5m、短辺1～0.7m、深さ0.1m弱を測る。遺存状態は悪いが、土師器が纏まって出土した。第一遺構面で検出した。

8SK301（Fig.8-13、Pl.10）

東区中央で検出した長方形の焼土坑である。長辺1.15m、短辺0.6m、深さ0.2mを測る。第三遺構面で検出した。壁は全体が青白く変色し地山は順次黄色、赤色に変色していた。変色の範囲は壁からおよそ0.1mであった。床面は全面が赤色に変色しており、長辺の東側は硬化していた。通常の焼土坑より床面までまんべんなく変色していることから、土坑全体が高温度に曝されたと考えられる。埋土は底面に5cmの厚さで炭化物層が、その上層に炭化物を含む暗茶色粘質土、最上層は焼土塊を含んだ明茶色粘質土であった。焼土塊は土坑の壁が落ちたものと考えられる。

8SK430（Fig.8-13、Pl.12）

西区南西よりで検出した略長方形の土坑である。長辺3.7m、短辺3m、深さ0.7mを測る。第一遺構面で検出した。北西側に段が一段作られており、検出面からの深さは0.3mである。北側壁は地山の花崗岩が突き出た状態であった。埋土からは土師器が多量に完形で出土していることから、一括廃棄のための土坑と考えられる。また、黒茶色土からはガラス片が、暗灰色土からは大ぶりの刀子が出土した。埋土は上層から黒茶色土、黄色土、暗灰色土の順である。

8SK601（Fig.8-13、Pl.13）

西区南側で検出した円形の焼土坑である。径1m、深さ0.2mを測る。第四遺構面で検出した。壁は黄色に変色し地山は赤変していた。赤変の範囲は壁から5cm程である。床面も2cmほど赤

変している。底面に0.1mほど炭化物や焼土で構成される暗炭褐色土が堆積していた。上部の埋土にも炭化物や焼土は混入していた。

（６）墳墓

明らかに墳墓と判定できたのは8ST005のみであった。同時期の原遺跡内の墳墓は点々と少数散在しているようである。

8ST005（Fig.8-14、Pl.6）

東端区北端で検出した長方形の木棺墓である。第一遺構面で検出した。北側は隣地との境界の溝で一部が撹乱されていた。長辺約2.4m、短辺1m、深さ0.15mである。棺のサイズは検出した釘から長さ1.8m、幅0.5mに復元される。北側には白磁椀２点、土師器小皿14点を納めている。骨などは検出できなかった。

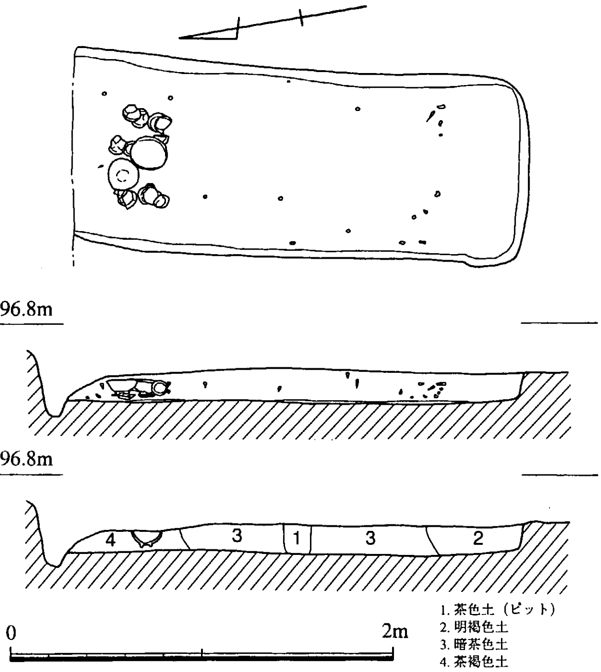


Fig.8-14　8ST005実測図（1/40）

（７）その他の遺構

8SX001（Fig.8-15）

東端区東端で検出した落ちである。第一遺構面で長さ10m分、幅1.5m分を検出した。二段掘りになっており、深さは一段目までが0.6m、検出面から二段目までが1mを測る。振れはN-19°48′-Eである。東側は隣地になり、溝になるのか段落ちになるのか不明である。埋土は上層が花崗岩礫を含む暗褐色土で、下層が暗茶褐色土である。礫群は西側で多く出土した。一段目までの法面には柵列8SA065が落ちと平行に位置する。切り合いから柵列より溝の埋土が新しいが、機能としては複合して境界を示していたことも考えられる。

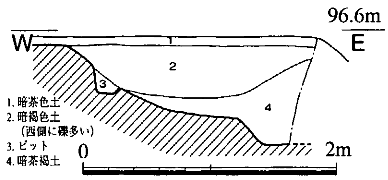


Fig.8-15　8SX001土層断面図（1/60）

8SX002（Fig.8-1）

第一遺構面の東端区南端で検出した不整形の落ちである。整地または包含層と捉えられる。長さ6m、幅1mほどである。暗茶色砂質土をしている。

8SX009（Fig.8-1）

東端区で検出したピット群である。8SX002の下層で検出した。

8SX010（Fig.8-1）

東端区第一遺構面で検出した略方形の土坑状遺構である。長辺2m、短辺1.8m、深さ0.1mである。

8SX025（Fig.8-16、Pl.6）

東区第一遺構面で検出した長方形周溝状の遺構である。南北に長く西側長辺が2.8mにわたって欠落している。規模は長辺10.5m、短辺3.3mを測る。溝幅は0.3～0.4m、深さ0.3mである。埋土は上層が淡褐色砂質土、下層が明褐色土で、上層に多くの花崗岩礫を含んでいる。北西隅には溝内にピットが検出された。壁立ち建物の基礎の可能性が考えられる。

8SX035（Fig.8-17）

東区北端で検出した略円形の遺構である。8SA030を除去して検出した。径1.3m、深さ0.6mを測る。東側が二段掘りになり、西側は地山の礫が露出している。

8SX040（Fig.8-17、Pl.7）

東区で検出した長方形の遺構である。長辺1.9m、短辺0.65m、深さ0.2mを測る。西側に扁平な花崗岩が出土した。床面から水平に並べて置いていたようである。埋土は炭化物層がほとんどを占めるが、壁面および礫群に焼けた痕跡は発見できなかった。第一遺構面での検出である。

8SX041（Fig.8-1）

東区第一遺構面で検出したピット群である。8SX025に囲まれた中に位置する。

8SX045（Fig.8-17）

東区第一遺構面で検出した略方形の遺構で

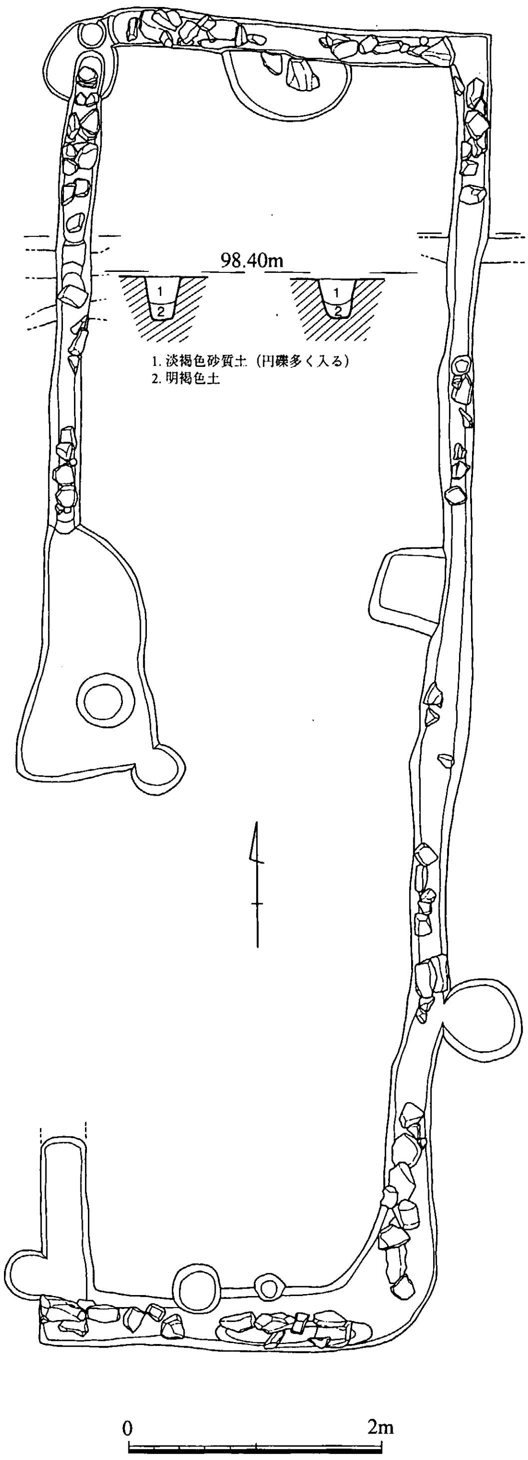


Fig.8-16　8SX025実測図（1/60）

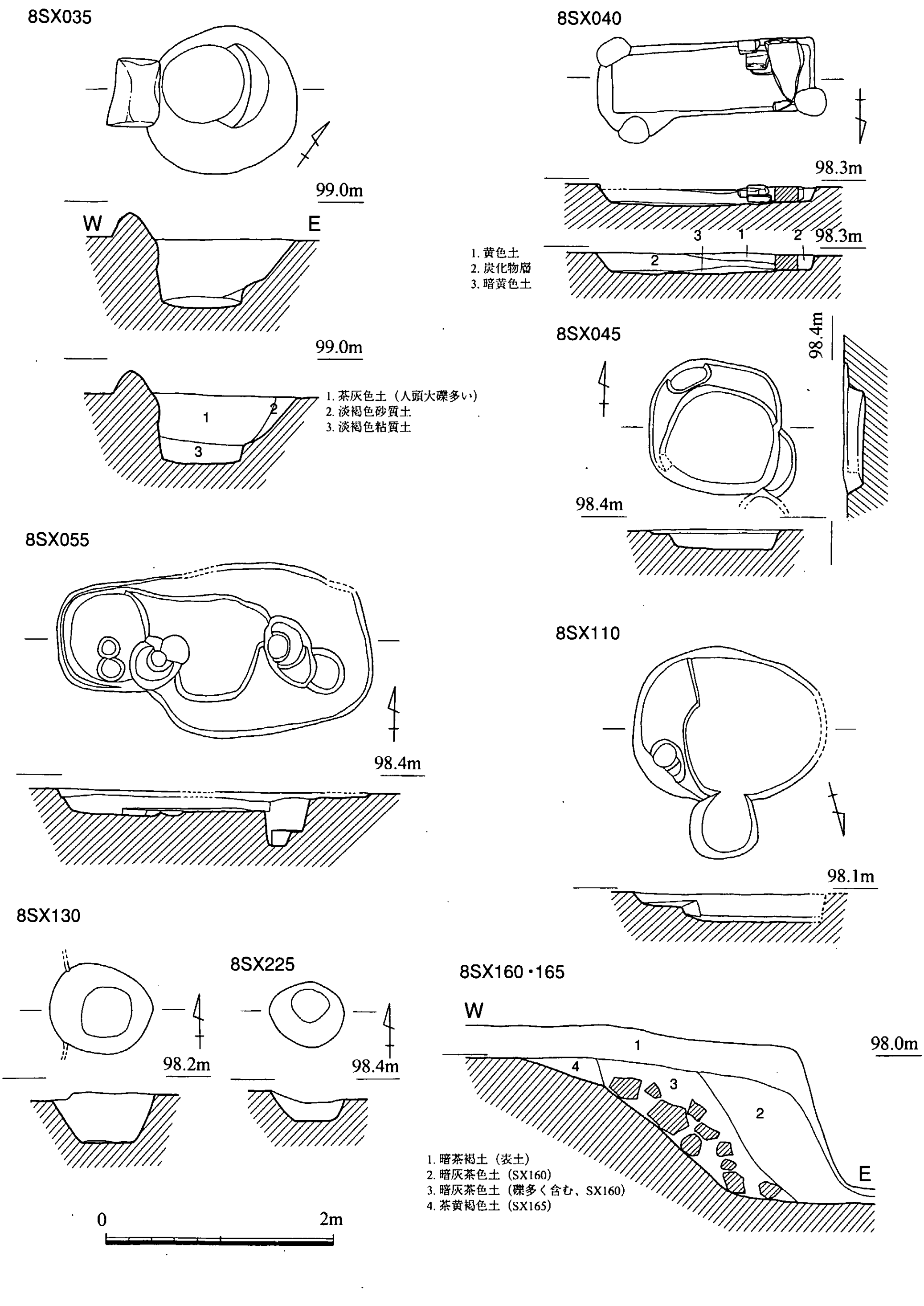


Fig.8-17　その他の遺構実測図１（1/60）

ある。8SX040の直ぐ北に位置する。一辺1.2m、深さ0.2mを測る。一部二段掘りになっている。埋土は炭化物が多く含まれていた。

8SX048（Fig.8-1）

東区第一遺構面黄色礫混土で検出したピット群である。鉄塊を検出した。

8SX055（Fig.8-17）

東区第一遺構面で検出した長円形の遺構である。長辺2.8m、短辺1.5・0.9m、深さ0.2mを測る。8SX045の東隣に位置する。埋土は炭化物を多く含む。8SX040・045と類似の埋土であり、３遺構がセットなのか、同様の用途に使用されたと考えられる。新しいピットの切り込みで複雑な断面を呈しているが、この遺構に属するものは西側の大きな落ち込みと、その東にある不整形の段と判断される。

8SX069（Fig.8-1）

東区第一遺構面で検出した楕円形の土坑群である。長辺0.7～0.9m、短辺0.6m、深さ0.2mを測る。切り合いがあり南側の遺構が新しい。

8SX074（Fig.8-1）

東区第一遺構面北側で検出したピット群である。8SX025の内側で茶色粘土から灰色砂質土上に位置する。

8SX075（Fig.8-1、Pl.8）

東区中央で検出したピットである。径0.3m、深さ0.3mを測る。瓦器の小椀が２点正位置で重ねて埋納されていた。第一遺構面検出。

8SX092（Fig.8-1）

東区第一遺構面で検出したピットである。径0.5m、深さ0.5mを測る。二段掘りである。焼土塊を出土した。

8SX106（Fig.8-1）

東区第一遺構面で検出したピットである。径0.5m、深さ0.5mを測る。

8SX108（Fig.8-1）

東区南寄りの第一遺構面で検出したピット群である。黄色礫混土に掘り込む。

8SX110（Fig.8-17）

東区中央の第一遺構面で検出した長円形の遺構である。長軸約1.8m、短軸1.4m、深さ0.25mを測る。東側は二段掘りである。

8SX117（Fig.8-1）

東区南寄りの第一遺構面で検出した長円形の遺構である。長軸約1.1m、短軸0.3m、深さ0.1mを測る。

8SX119（Fig.8-1）

東区南寄りの一遺構面で検出したピットである。径0.3m、深さ0.3mを測る。

8SX120（Fig.8-1）

東区南寄りの第一遺構面で検出した長方形の遺構である。長辺1.4m、短辺0.6m、深さ0.3mである。第三遺構面で使用されていた石列8SX315を掘り当てている。掘りすぎている。

8SX126（Fig.8-1）

東区南寄りの第一遺構面で検出した略円形の遺構である。径0.7m、深さ0.2mを測る。二段掘りになっている。

8SX130（Fig.8-17、Pl.9）

東区南寄りの第一遺構面で検出した長円形の遺構である。長軸約0.9m、短軸0.8m、深さ0.4mを測る。西側に礫が集中して出土した。礫の間からは土師質の火鉢の底様のものが出土した。

8SX136（Fig.8-1）

東区北側の第一遺構面で検出したピットである。径0.5m、深さ0.2mを測る。

8SX160・165（Fig.8-17）

東区と東端区の境で検出した落ちである。160が新しく、165が古い。同一遺構と考えられる。現状の地形に反映されており、比高差1～1.3mである。方向からすると北側で検出した南北溝8SD060に連続するものと考えられる。ただ、溝が落ちに変化していると考えられる部分は調査できていない。

8SX162（Fig.8-1）

東区東側の第一遺構面で検出したピットである。径0.2m、深さ0.2mを測る。

8SX225（Fig.8-17）

東区北側で検出したピットである。径0.6m、深さ0.25mを測る。第二遺構面検出。

8SX230（Fig.8-18）

東区南側で検出した不整形の落ちである。長さ10m、幅2m深さ、0.25mを測る。8SX315・320の裏込め土である。埋土は黒茶色土の単一層であった。しかし、後の土層と石列の観察により本遺構はおよそ中央で二分され東側が新しい石列8SX320築造に関わるものであることがわかった。本遺構上には別の遺構が乗っており、第二遺構面で検出したが、石列の築造は第三遺構面に属すると考えられるので本遺構の所属時期も第三遺構面と考えられる。

8SX234（Fig.8-2）

東区第二遺構面で検出した。8SE210の東に位置するピット群である。

8SX237（Fig.8-2）

東区東端で検出したピットである。径0.4m、深さ0.2mを測る。第二遺構面検出。

8SX245（Fig.8-2）

東区西側で検出したピット群である。第二遺構面で検出した。

8SX247（Fig.8-2）

東区第二遺構面で検出したピットである。径0.1m、深さ0.1mである。

8SX302（Fig.8-3）

東区南側で検出した遺構である。第三遺構面での検出である。径0.5m、深さ0.3mを測る。

8SX305（Fig.8-3）

東区東側で検出したピット群である。第三遺構面の硬化面に掘り込んでいる。炭化物を多く含む埋土である。

8SX307（Fig.8-3）

東区南側で検出した薄い炭層である。第三遺構面で検出し、硬化面の東に位置する。南北に不整な長方形をしている。南北3m、東西1mほどである。

8SX308（Fig.8-3）

8SX305と8SX307の間に展開するピット群である。炭化物を多く含んだ埋土を持つ。第三遺構面検出。

8SX309（Fig.8-3）

8SX305と8SX307の間に展開するピットである。炭化物を多く含んだ埋土を持つ。305～309は埋土の特徴から一連のものの可能性がある。第三遺構面検出。

8SX315・320・325（Fig.8-18、Pl.10～12）

第三遺構面で使用されていた石列である。315・320・325は微妙な時期差をもって築造され、しかもお互いに関連しているので纏めて報告する。

315は長さ4.5m、幅0.4～0.5m、高さ0.3～0.5mで1段もしくは2段積みである。石材は花崗岩で、0.5m立方ほどのものを最大として使用している。面を南に合わせている。石積みの下部にも裏込め土と同様の土が入っている。振れの方向はN-85°43′-Wである。東端は320・325に接続している。

320は長さ4m、幅0.5m、高さ0.5～0.7mを測る。0.5～0.1m程の花崗岩を5段程度積んでいる。最下部には大きな石を使用する。面は南に合わせている。315同様、裏込め土が石積み下部に入る。振れはN-86°52′-Wである。

325は315・320と直角に交わる。長さ2.3mを測り調査区外南にのびているが、調査区の境から約1m南で法面にぶつかるのでその間で終結している。幅は0.3m、高さ0.3mである。振れはN-3°26′-Wである。石列裏の埋土と石の下の埋土は同じであった。面は東に合わせてあった。適当な大きさの花崗岩を適当に面を合わせて並べているという印象を受けた。

これらは315の東、320の西、325の北で3列がレベルをあわせて、ほぼ90°の角度で接している。築造の順は315と320は切り合い関係から315の後320である。315と325は土層関係から325が新しい。320と325は土層と面の向きから325が新しい。

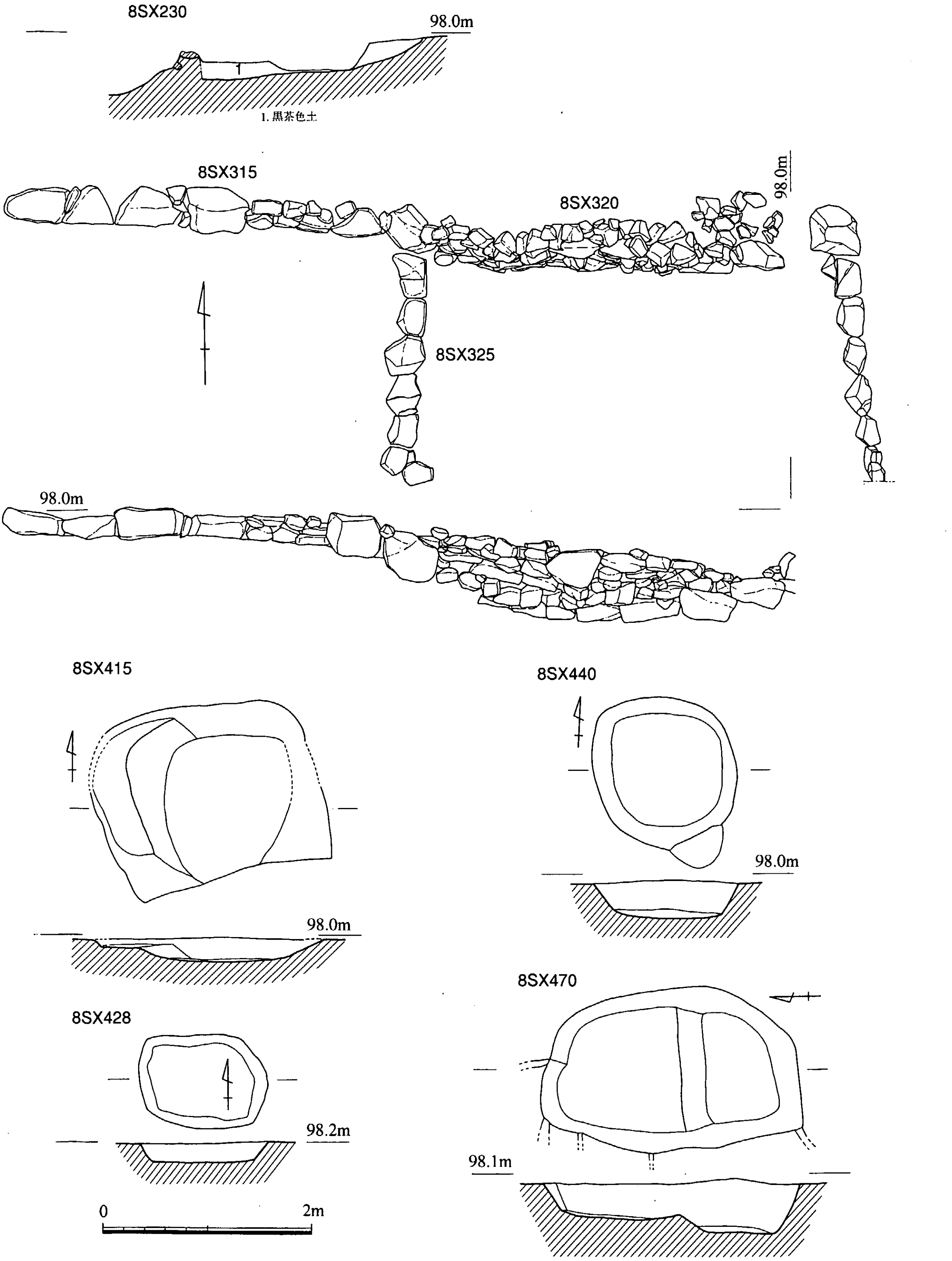


Fig.8-18　その他の遺構実測図２（1/60）

8SX326（Fig.8-3）

東区第三遺構面で検出した小石列である。8SD310と平行し約2m分検出した。花崗岩礫で構成され最大0.3m程度の大きさである。積むというより並んでいる感じで検出した。南東には南北に並んだ石が３個あり、8SD310と共に8SX305・307・309などを囲んでいる可能性がある。

8SX351（Fig.8-4）

東区第四遺構面で検出したピットである。径0.3mを測る。明茶色砂質土に切り込んでいる。

8SX355（Fig.8-4）

東区第四遺構面で検出した浅い窪みである。8SX320・325の下層に位置する。幅0.7m、深さ0.1mで、長さ3.5m分を確認した。埋土は褐色土で遺物は出土しなかった。東から西へ向かい、8SX325の下で北へ折れ8SX320を越えたところで消えている。南東から入る通路の可能性を考えている。

8SX412（Fig.8-1）

西区南側の第一遺構面で検出した不整形の遺構である。東西約10m、南北約2.5mの範囲に広がる。白青色から白赤色の粘質土で構成される。部分的な整地の一部と考えられる。

8SX414（Fig.8-1）

西区西端の第一遺構面で検出した遺構である。略円形で、径0.5m、深さ0.15mを測る。切り合い関係は古い方から8SX415→8SX414→S-413の順である。

8SX415（Fig.8-18）

西区西端の第一遺構面で検出した略方形の遺構である。一辺約2.1m、深さ0.25mを測る。南側は調査区外にのびる。一部二段掘りになっている。埋土は暗茶褐色土の単一層である。

8SX419（Fig.8-1）

西区北側の第一遺構面で検出したピット群である。径0.6～0.4m、深さ0.4～0.3mを測る。

8SX428（Fig.8-18）

西区中央の第一遺構面で検出した略長方形の遺構である。長辺1.2m、短辺0.9m、深さ0.2mを測る。底面には地山に含まれる自然礫が多く露出している。

8SX440（Fig.8-18）

西区南東側の第一遺構面で検出した略方形の遺構である。一辺1.3m、深さ0.4mを測る。

8SX470（Fig.8-18）

西区中央の第一遺構面で検出した略長方形の遺構である。長辺2.5m、短辺1.5m、深さ0.4mを測る。南北に二段掘りになっている。

8SX475（Fig.8-19、Pl.12）

西区南側の第一遺構面で検出した楕円形の遺構である。長軸1.9m、短軸1.4m、深さ0.3mを測る。短軸底面近くの両側に小ピットが付随する。

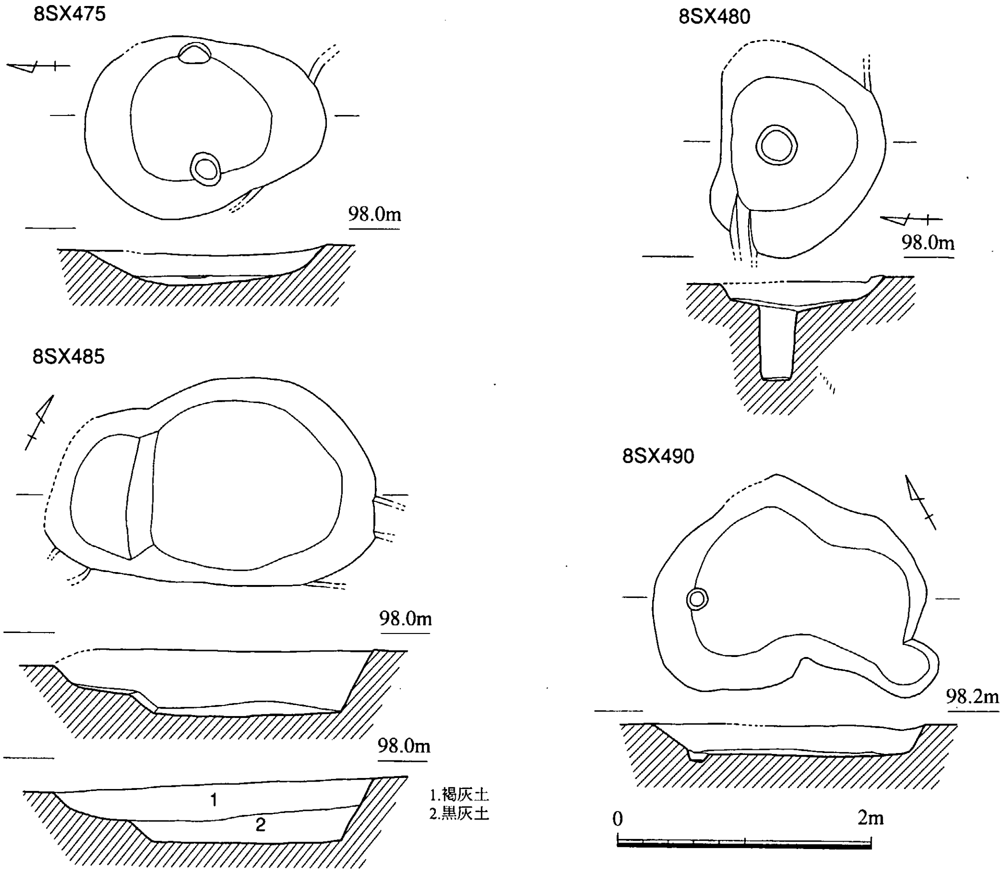


Fig.8-19　その他の遺構実測図３（1/60）

8SX480（Fig.8-19）

西区南側の第一遺構面で検出した略円形の遺構である。径1.7m、深さ0.2mを測る。中央に小穴があり、径0.25m、底面から0.6mの深さがある。

8SX485（Fig.8-19）

西区南側の第一遺構面で検出した略長方形の遺構である。長辺2.6m、短辺1.7m、深さ0.5mを測る。東西に二段掘りになっている。埋土は一段目までが褐灰色土、下層が黒灰色土である。8SX475・8SX480・8SX485は検出時に似通った土に覆われていたため大きく括ってS-450として遺物を取り上げている。

8SX490（Fig.8-19）

西区中央の第一遺構面で検出した不整形の遺構である。長軸2.2m、短軸1.5m、深さ0.2mを測る。

8SX492（Fig.8-1）

西区北東側の第一遺構面で検出したピット群である。

8SX556（Fig.8-3）

西区西側の第三遺構面で検出したピット群である。

8SX583（Fig.8-3）

西区東側の第三遺構面で検出したピット群である。

8SX604（Fig.8-4）

西区東側の第四遺構面で検出したピットである。径0.5m、深さ0.4mを測る。

（8）石垣

上段石垣

調査区北西にある石垣のうち上段に築造されたものと石垣の上の平坦面である。東西27m、南北（幅）3mの平坦面を持つ。石垣の高さは1mで平坦面の標高は100mである。花崗岩のおもに円礫を使用し乱層積みをしている。北に高くなる斜面を削平しその南側に同じく地山を削って石垣を構築している。

下段石垣（Pl.13・14）

調査区北西にある石垣のうち下段に築造されたものとその平坦面である。東西25m、南北3mの平坦面を持つ。石垣の高さは1.2mで平坦面の標高は98.6mを測る。上段石垣と同様の積み方をしている。上段石垣築造の際に出た土砂で石垣の裏を充填しており、1m四方の花崗岩なども入っている。石垣には「原山中堂址」銘の碑が組み込まれている。

4．遺物

遺物の記載は出土遺物一覧と計測表にてその性状が判別可能と判断されるものは図化から省いて記号化している。遺物の全体像は表とあわせてご理解ねがいたい。

（1）土塁出土遺物

8SA030出土遺物（Fig.8-20）

土師器

小皿ａ（1・6・8）　口径8.8～9.2cm、器高1.0～1.2cm、底径6.0～7.1cmを測る。底部は８はヘラ切り、他は糸切りをする。黄褐色を呈する。１は暗褐色土、６は茶褐色土、８は黄褐色土からの出土である。

坏ａ（2・9）　口径15.5・14.5cm、器高3.3・2.9cm、底径8.0・9.4cmを測る。底部は糸切りをする。淡黄褐色を呈する。２は暗褐色土、９は黄褐色土出土である。

須恵質土器

10は甕の胴部である。横方向のハケ目が入る。黄褐色土出土である。

陶器

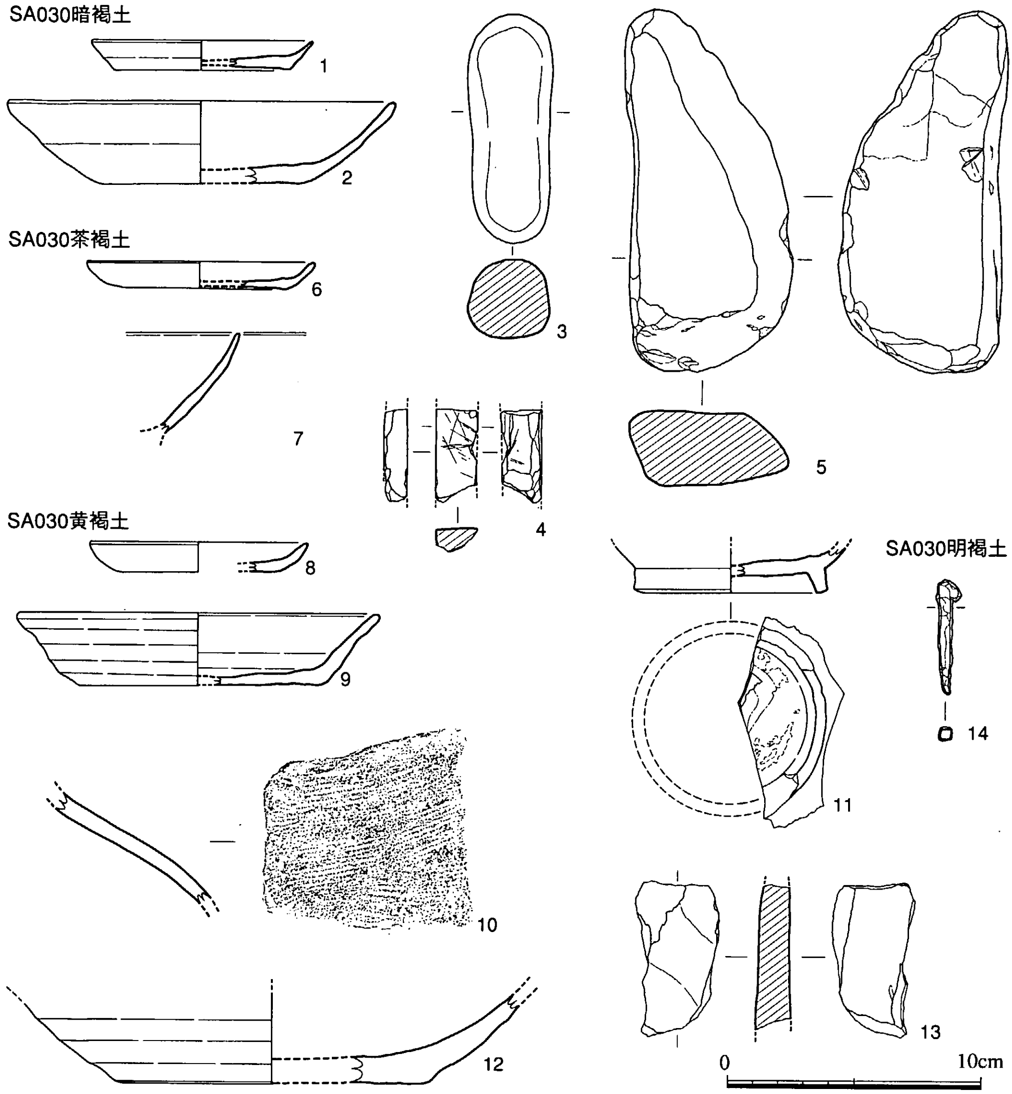


Fig.8-20　8SA030出土遺物実測図（1/3）

12は鉢の底部である。底径12.6cmに復元される。外面はヨコナデ、内面はよく使用されて平滑になっている。胎土に2mmほどの白色粒子を多く含む。明橙色を呈する。黄褐色土出土。

磁器

7は青磁の小椀である。白灰色の胎土にくすんだオリーブ色の釉を施している。化粧土はない。茶褐色土出土。11は越州窯系青磁壺の底部である。外底部に目跡がある。高台畳付けは施釉していたものが磨滅している。

石製品（巻頭図版）

3は敲打具と考えられる。両先端には敲打痕が残る。長さ9.2cm、厚さ3.4×3.1cm、重さ

156.5gを測る。長辺の平坦面は少し減っていて、擦り石にも使用した可能性がある。明灰色をして全体に凹凸がある。火成岩と考えられる。4は砥石もしくは硯の破片である。燕脂色を呈し、よく磨かれている。泥岩と考えられる。5は長辺の凹面を利用して砥石にしている。長さ14.4cm、幅6.8cm、厚さ3.0cm、重さ378gを測る。白灰色を呈する。細かい脈が走っており、堆積岩が変成作用を受けたものと考えられる。13は砥石片である。暗赤色を呈する砂岩である。広い平坦面が使用されカーブをもった平滑面を形成する。3～5は暗褐色土、13は黄褐色土出土である。

金属製品

14は鉄釘である。長さ4.55cmである。

(2) 掘立柱建物出土遺物

8SB500出土遺物（Fig.8-21）

土師器

小皿a（1～3・5）　口径7.2～8.2cm、器高1.1～1.2cm、底径5.5～6.0cmを測る。底部は糸切りで1を除いて板状圧痕がある。淡黄橙色から淡茶色を呈し、白色粒子と雲母を含む。1～3は柱穴c、5はf出土。

陶器

椀（4）　口径12.6cmの天目椀である。胎土は淡黄茶色で釉は光沢のある黒色である。柱穴e出土。

石製品

平玉石（6）　扁平な小さな玉石を平玉石と呼称する。法量は1.5×1.3×0.45cmで重量が1.2gである。灰緑色から黒灰色を呈する。用途不明である。双六の駒や碁石などの可能性が考えられる。柱穴f出土。

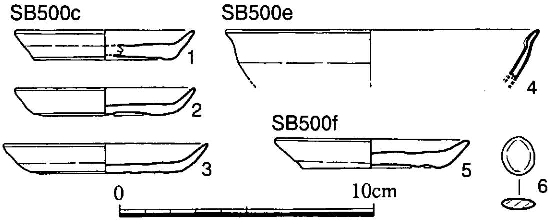


Fig.8-21　8SB500出土遺物実測図（1/3）

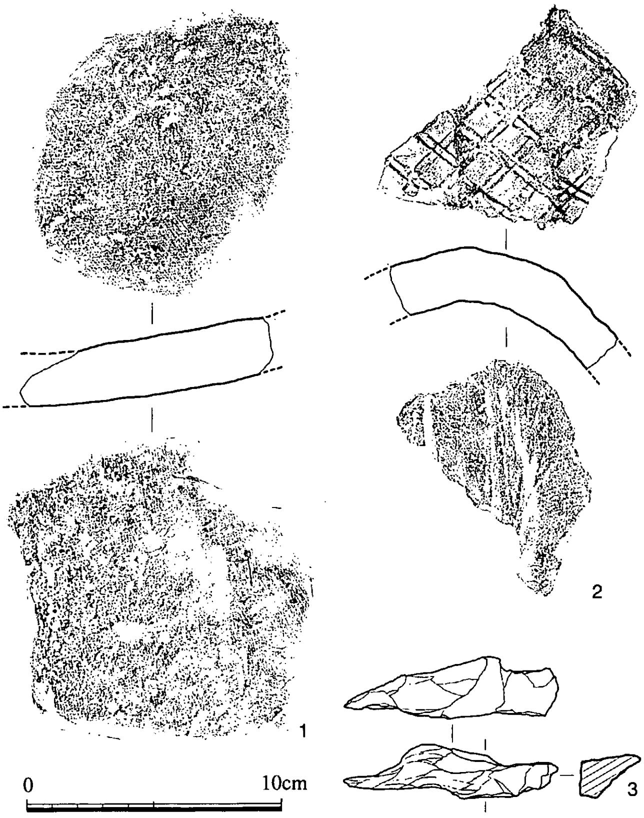


Fig.8-22　8SD060出土遺物実測図（1/3）

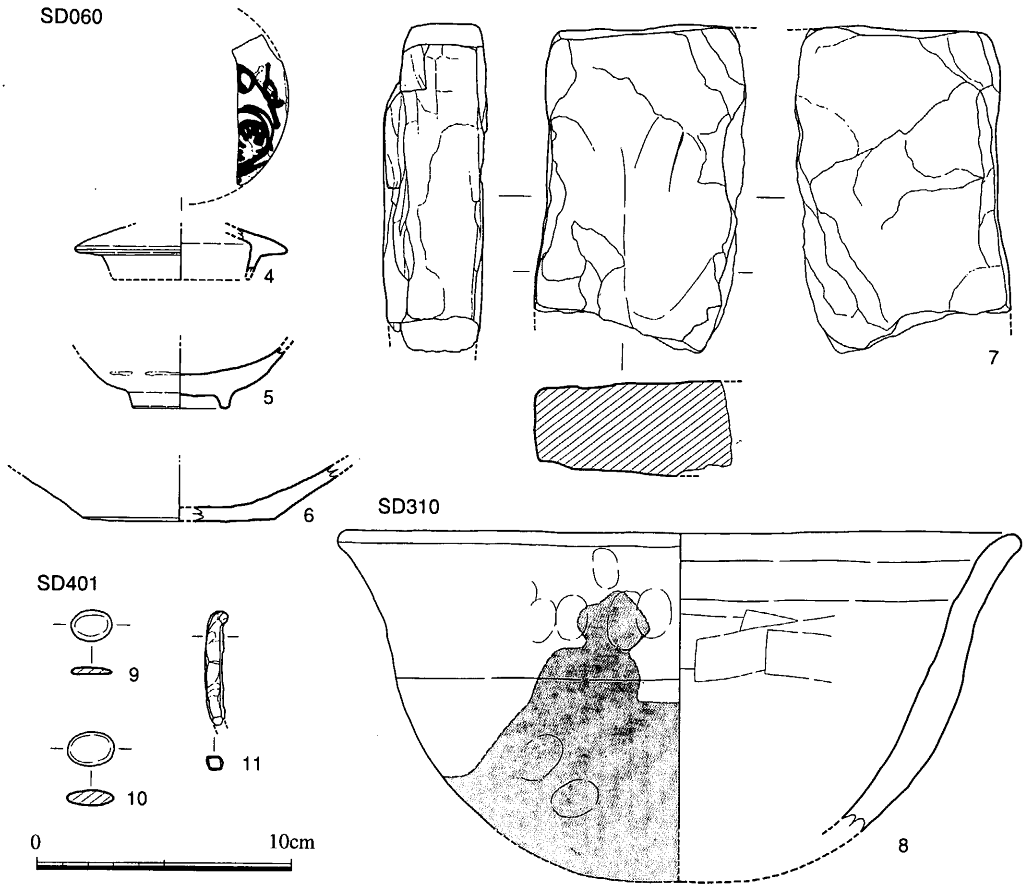


Fig.8-23　8SD060・310・401出土遺物実測図（1/3）

（3）溝出土遺物

8SD060出土遺物（Fig.8-22・8-23、巻頭図版）

輸入陶磁器や列島内での搬入品など多様な遺物が出土しているが、破片となるものが多い。

瓦

1は平瓦で凸面縄目、凹面に布目が残る。淡黄褐色で軟質である。2は丸瓦で凸面に二重斜格子の叩き痕、内面に布目が残る。

陶器

4は蓋の破片である。外面に施釉する。乳白色釉の上に透明釉をかけ、さらに黒茶色のいっちん掛けを行っている。胎土は精良で灰色から淡橙色を呈する。5は黒褐釉の椀の底部片である。釉は厚く部分的に錆び色を呈する。胎土は茶黒色で砂っぽい。6は鉢の底部と考えられる。内面に茶色、淡褐色釉を掛けている。胎土は淡橙色を呈し砂っぽい。いずれも近世以降のものと考えられる。

石製品

３は砥石片と考えられる。法量は8.5×2.5×2.2cmを測る。一部のみに平坦面が残る。暗紫色をしている。溶結凝灰岩と考えられる。７は粒子の細かい砂岩製の砥石である。法量は13.2×8.5×4.7cmで、重量685gである。平面と小口面を使用している。淡褐色を呈する。

8SD310出土遺物（Fig.8-23）

遺物量は少ない。陶磁器は出土していない。古代の須恵器が入っていたりする。

土師器

８は鉢である。口径27.2cmを測る。外面には指圧痕があり、内面はヘラ削りとナデで調整されている。外面には煤が付着しており火に掛けたと考えられる。胎土は灰茶色を呈し、６mm程度の砂粒を含む。

8SD401出土遺物（Fig.8-23）

輸入陶磁器の出土がある。土師器の底部は糸切りばかりである。

石製品

平玉石（９・10）　法量は９が1.7×1.2×0.3cm、重量1.1g、10が1.8×1.4×0.6cm、重量2.7gである。素材は砂岩と火成岩と考えられ、黒灰色を呈する。

金属製品

11は鉄釘である。法量は4.55×0.7×0.55cmを測る。先端部を欠損する。

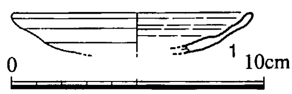


Fig.8-24　8SE210出土遺物実測図（1/3）

（４）井戸出土遺物

8SE210出土遺物（Fig.8-24）

上層では底部を糸切りした土師器のみを、下層では輸入陶磁器と土師器を出土した。遺構の規模の割には出土遺物は少ない。

土師器

小皿ａ（１）　口径9.6cm、器高1.6cm、底径7.0cmを測る。底部はヘラ切りを行う。胎土は白茶色を呈し、白色砂粒と雲母片を含む。

（５）土坑出土遺物

8SK015出土遺物（Fig.8-25、Pl.18）

輸入陶磁器の他に糸切り底の土師器坏ａ・小皿ａが出土した。

白磁

椀（１・２）　口径18.3・18.2cm、器高6.5・6.6cm、高台径6.0・6.1cmを測る。どちらもVII-ｃ類である。白堆線と輪花を持つ。１は外底に「卍」の墨書がある。２にも墨痕があるが判読できない。

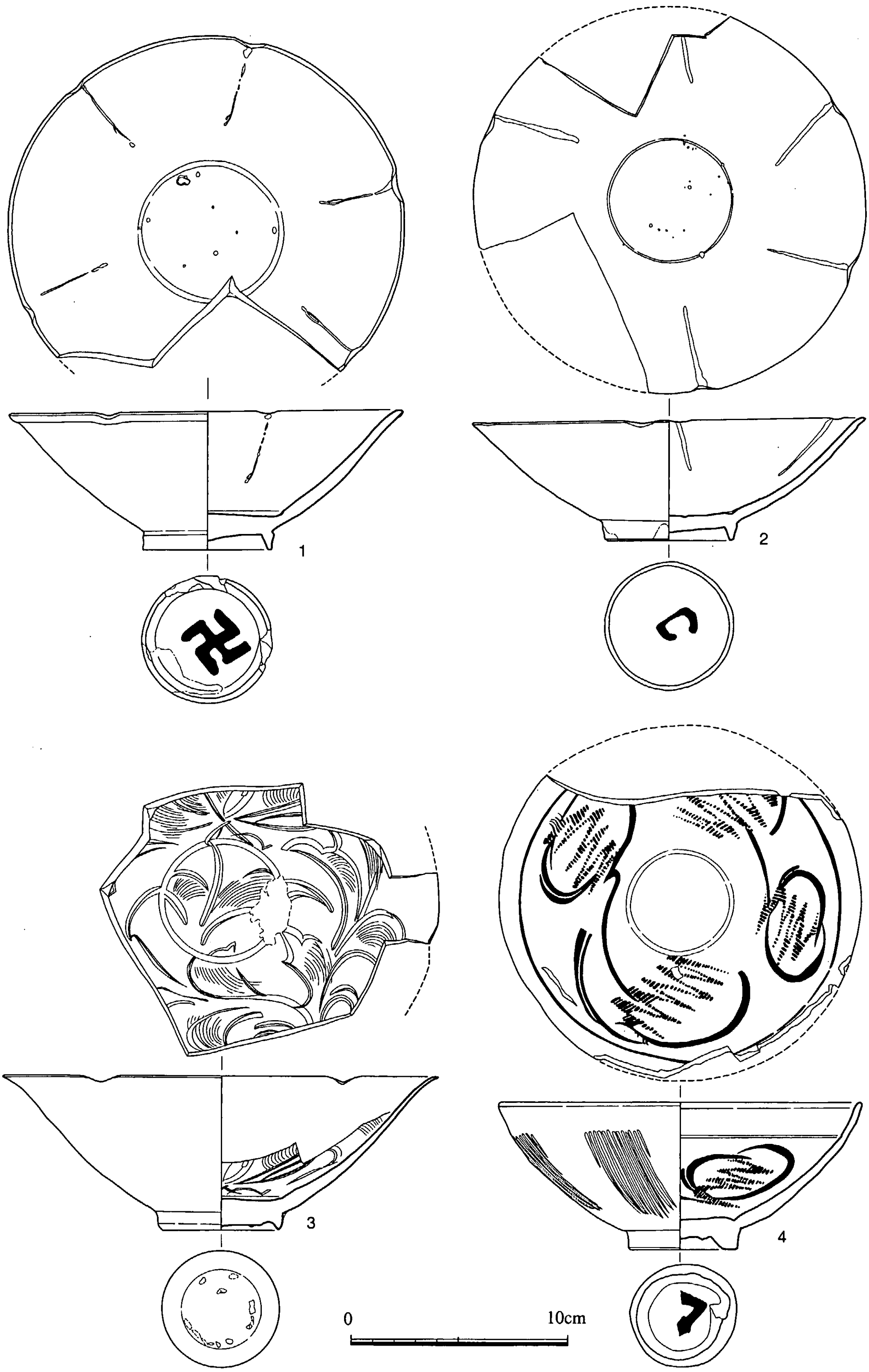


Fig.8-25　8SK015出土遺物実測図（1/3）

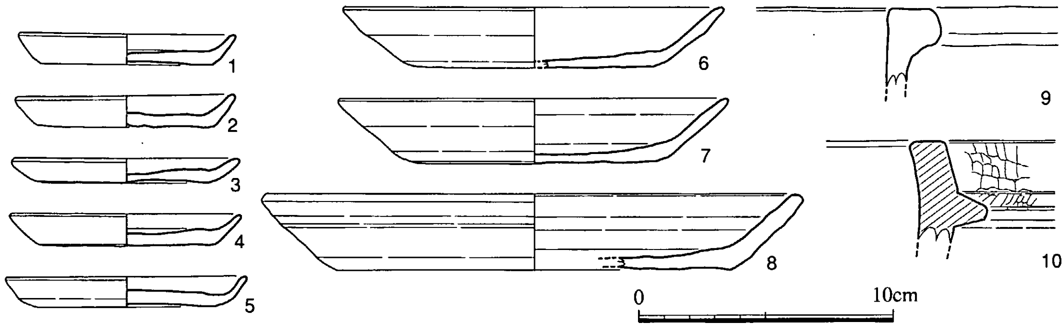


Fig.8-26　8SK125出土遺物実測図（1/3）

青白磁

椀（3）　口径20.2cm、器高7.3cm、高台径5.8cmを測る。高台内側を除き施釉されている。内面には片切りの文様を施す。口縁部には輪花がある。外底部には円形の焼き台の痕跡が残る。

同安窯系青磁

椀（4）　口径16.8cm、器高6.9cm、高台径5.1cmを測る。I-1-b類である。底部外面に墨痕があり片仮名の「マ」に見える。

8SK125出土遺物（Fig.8-26）

土師器の他白磁椀・皿、同安窯系青磁椀・皿片が出土している。

土師器

小皿a（1～5）　口径8.7～9.6cm、器高1.0～1.3cm、底径6.9～7.2cmを測る。底部はすべて糸切りである。灰茶色を呈し砂粒と雲母片を含んでいる。

坏a（6・7）　口径15.2・15.6cm、器高2.4・2.6cm、底径9.5・10.0cmを測る。底部はどちらも糸切り。灰茶色を呈し砂粒と雲母片を含んでいる。

皿a（8）　口径21.6cm、器高3.0cm、底径15.8cmを測る。底部切り離しは磨耗して不明である。灰茶色を呈し砂粒と雲母片を含んでいる。

鍋（9）　口縁片である。平坦部は指圧痕が残る。灰褐色を呈し5mm程度の砂粒と雲母片を含む。

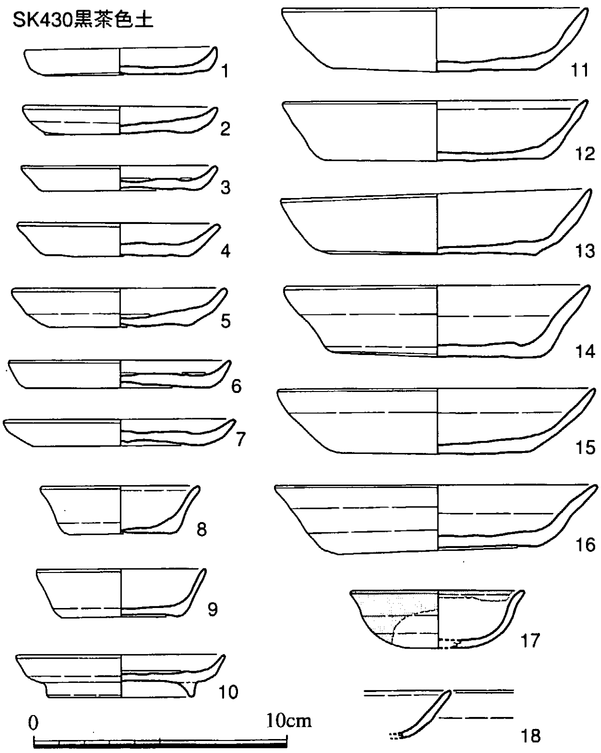


Fig.8-27　8SK430出土遺物実測図1（1/3）

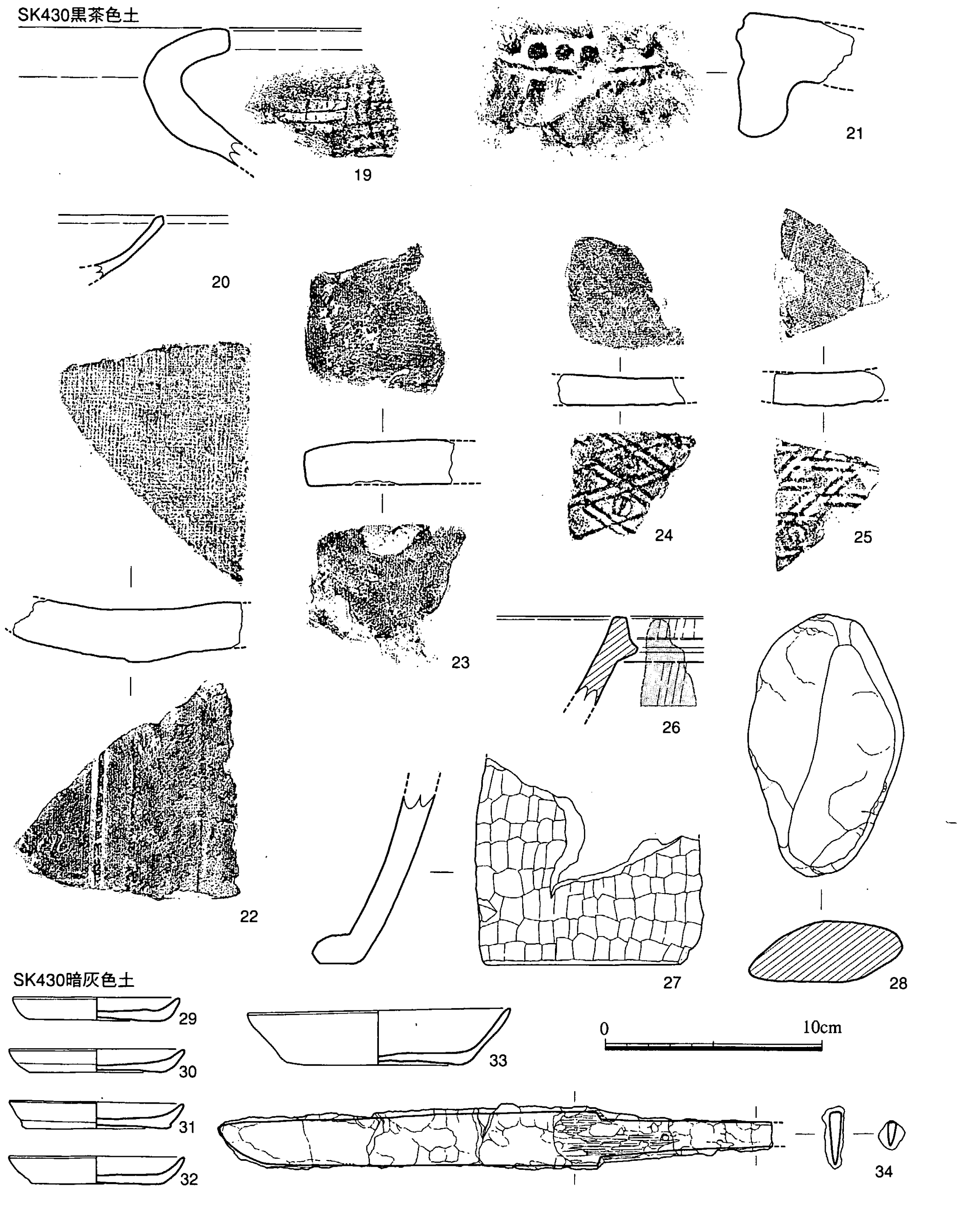


Fig.8-28　8SK430出土遺物実測図２（1/3）

石製品

鍋（10）　滑石製鍋の口縁部の破片である。口縁に平行する顎が巡る。色調は灰黒色で外面には炭化物が付着する。

8SK430黒茶色土出土遺物（Fig.8-27、Pl.21）

土師器

小皿ａ（１～７）　口径7.7～9.2cm、器高1.0～1.3cm、底径5.7～7.35cmを測る。底部は糸切りである。

小皿ｂ（８・９）　口径6.4・6.8cm、器高1.9cm、底径4.6・4.8cmを測る。底部は糸切り。胎土は淡茶色を呈する。

小皿ｃ（10）　口径8.4cm、器高1.7cm、高台径6.0cmを測る。淡茶色を呈する。

坏ａ（11～16）　口径12.1～12.8cm、器高2.3～2.6cm、底径7.8～8.6cmを測る。底部は糸切りである。胎土は淡黄褐色を呈するものが多い。

瓦器

17・18は小椀ａまたは小坏ａである。口径7.0cm、器高2.3cmを測る。磨耗している。

須恵質土器

19は甕の口縁部である。外面に格子叩きがみえる。全体に二次的に焼け表面が剥離し、明褐色から淡黄灰色を呈する。

SK430黄色土

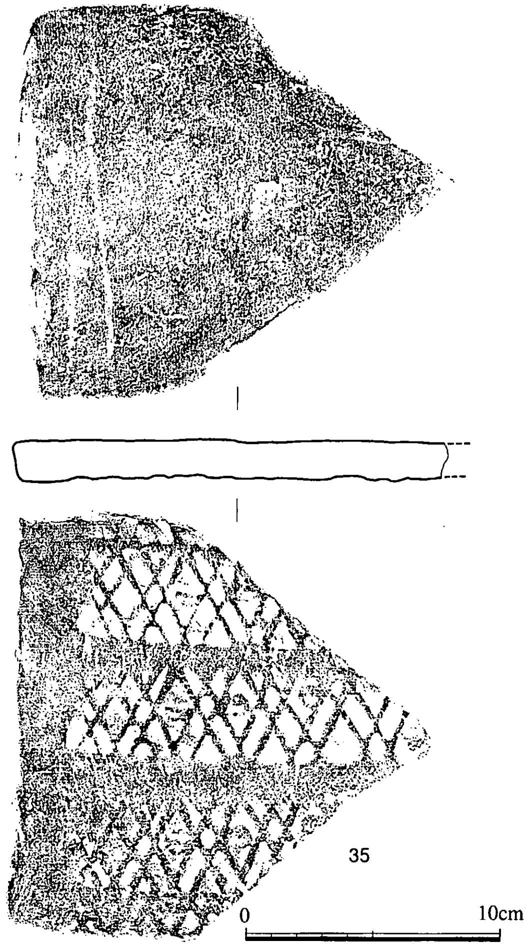


Fig.8-29　8SK430出土遺物実測図３（1/3）

陶器

20は皿の口縁部である。光沢のない褐色釉がかかる。胎土は暗赤茶色を呈する。

瓦

軒平瓦（21）　瓦当面は欠損し珠文が一部残る。凹面には布目が残る。

平瓦（22～25）　22は凸面に「安」字がみえ、二重の枠が見えることから「安楽寺」銘の叩きであることがわかる。端面は５mm程の切れ込みを入れて折っている。23は凹凸面はナデ、端面はケズリ調整を行う。24・25は凸面に二重斜格子の叩き痕が残る。

石製品

鍋（26・27）　滑石製の鍋の破片である。26は口縁、27は体部である。27は体部二辺と底部

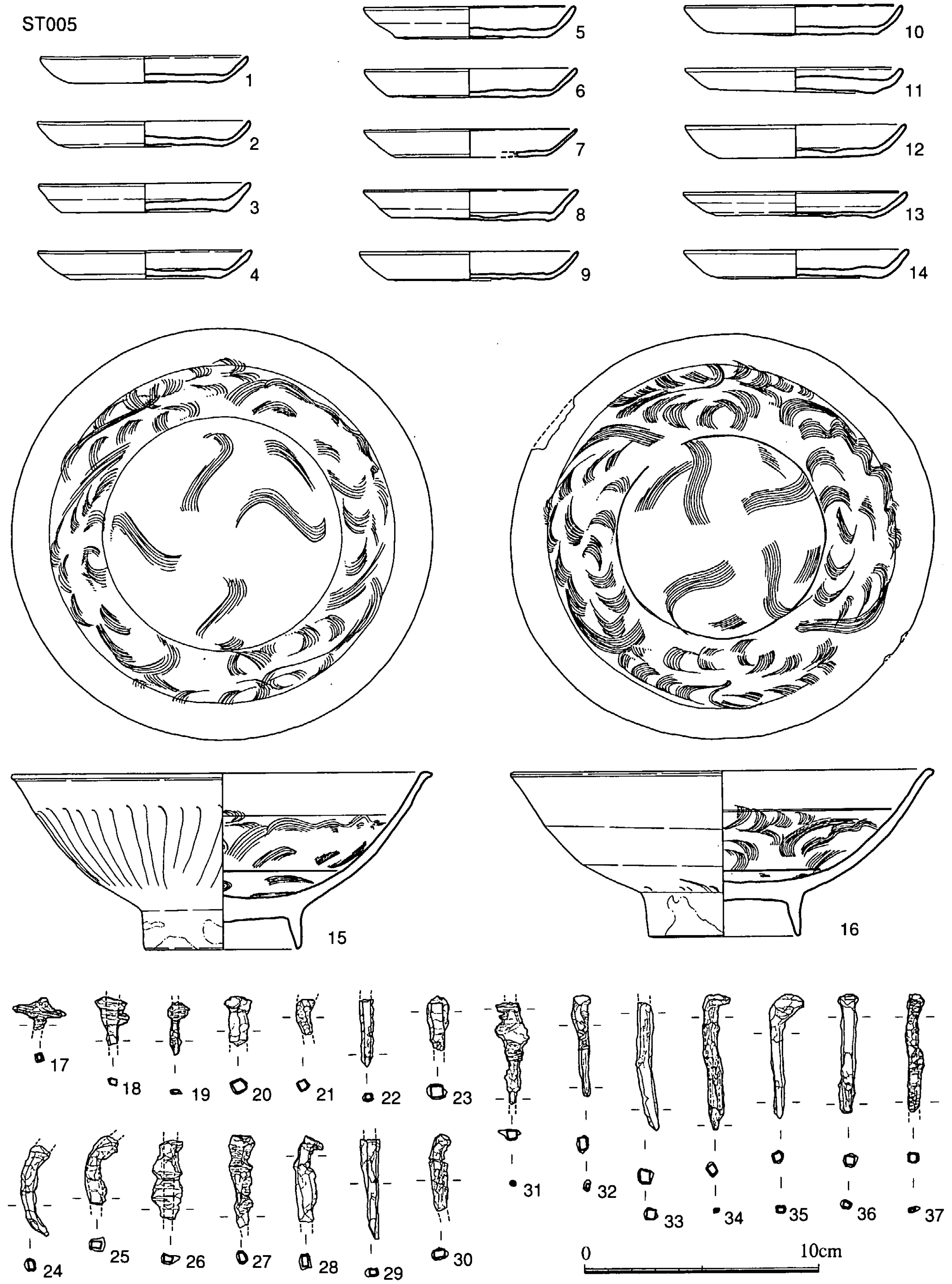


Fig.8-30　8ST005出土遺物実測図（1/3）

の切断面に二次加工の痕がある。

28は両端に敲打痕を持つ石である。花崗岩で法量は12.2×7.2×2.9cmである。

ガラス製品（巻頭図版３）

写真は用途不明のガラス製品である。不透明な水色をしている。長さ2.5cm、幅1.5cm、厚さ0.2cmを測り、わずかに湾曲する。分析の結果、カリ石灰ガラスと判明した。

8SK430暗灰色土出土遺物（Fig.8-28、Pl.21）

土師器

小皿ａ（29～32）　口径7.7～8.1cm、器高1.1～1.3cm、底径6.1～7.0cmを測る。底部はすべて糸切り。砂粒を含み淡橙黄色をしている。

坏ａ（33）　口径12.4cm、器高2.6cm、底径8.1cmを測る。底部は糸切り。橙黄色を呈する。成形の際に変形している。

金属製品

小刀（34）　鍛造鉄製の小刀である。長さ25.9cm以上、幅2.5cm、厚み0.6cmを測る。関の部分には木質の痕跡が見えるが、連続しており鞘とは考えられない。

8SK430黄色土出土遺物（Fig.8-29、Pl.21）

瓦　35は二重斜格子の叩き痕を持つ平瓦である。

（６）墓出土遺物

8ST005出土遺物（Fig.8-30、Pl.18・19）

土師器小皿ａ14点、白磁椀２点が供献品と考えられる。釘は木棺を留めていたと考えられる。

土師器

小皿ａ（１～14）　口径9.1～9.7cm、器高1.05～1.45cm、底径6.65～7.35cmを測る。底部はすべて糸切りを行う。すべて砂粒を多く含み淡乳橙色をしている。

白磁

椀（15・16）　口径18.2・18.1cm、器高7.7・7.25cm、高台径6.8・6.7cmを測る。15が内面に櫛目を外面にヘラで花文を施すV-４-ｃ類、16が内面に櫛目を施すV-４-ｂ類である。

金属製品

釘（17～37）　すべて木棺に使用されたと考えられる。最長5.9cmである。木質の痕跡が残るものもある。

（７）その他の遺構出土遺物

8SX001出土遺物（Fig.8-31）

磁器

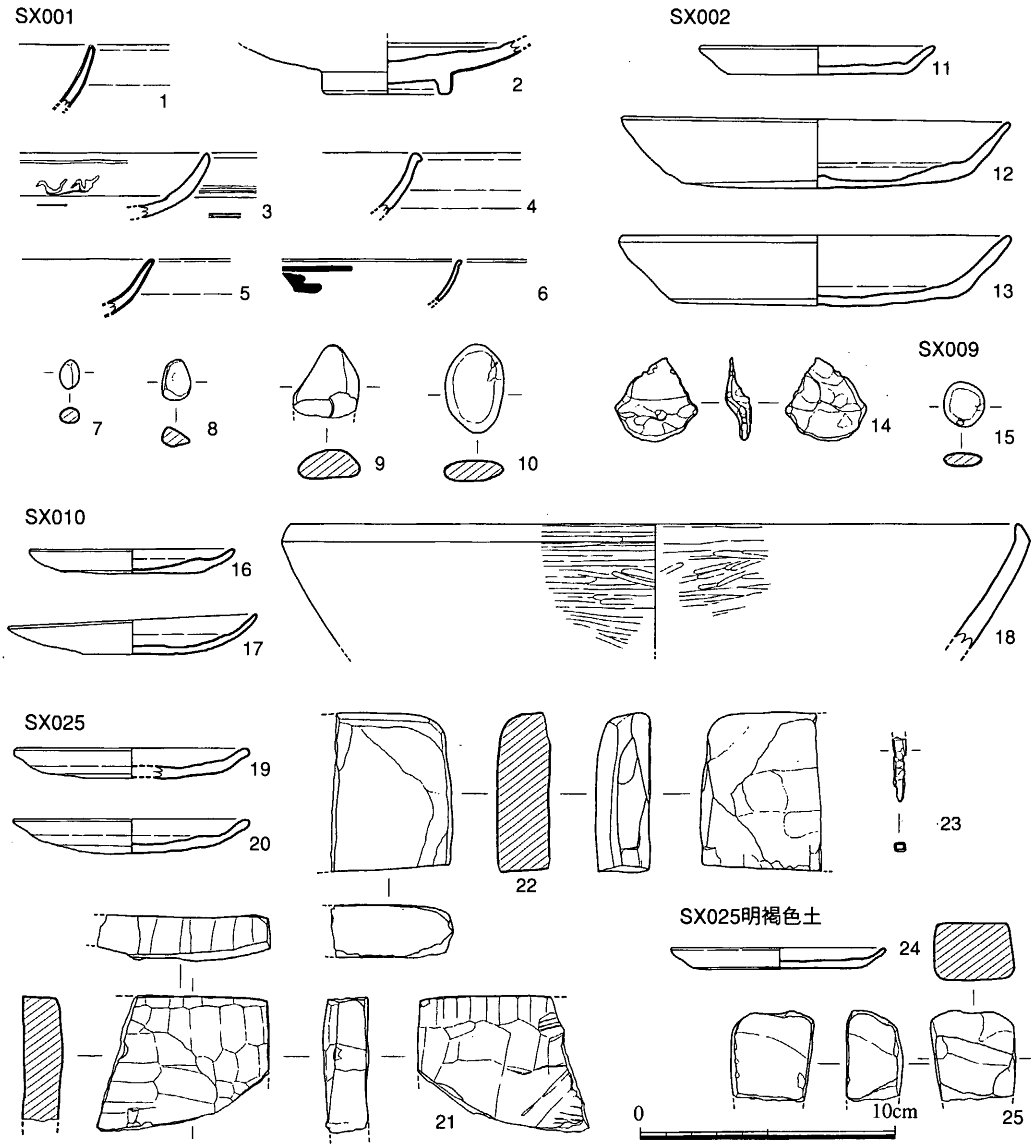


Fig.8-31　8SX001・002・009・010・025出土遺物実測図（1/3）

白磁

椀（1・2）　1は青白色の不透明釉が掛かる。胎土は淡い灰色できめ細かい。2は森田B類の底部で、高台径5.2cmである。内底にスタンプがある。少し青味を帯びた白色の不透明釉が掛かる。高台以下は露胎である。

高麗青磁

皿（3・4）　3は象嵌が施される。外面は白土で圏線を内面は白土と黒土で水鳥を象嵌する。黄緑色の釉が掛かり、貫入が入る。4は青灰色の不透明釉が掛かる。

龍泉窯系青磁

皿（1）　I類と考えられる。黄緑色の半透明釉がかかる。

染付

坏（6）　内面に呉須で圏線と文様を描く。外面は露胎である。

石製品（巻頭図版）

平玉石（7～10）　7は白色で平面楕円形を呈する。8は淡灰色でいびつな形状をしている。9は黒色で表面はなめらかである。10は白色で扁平な石である。石英製と考えられる。9・10は玉石としたほうが良いかもしれない。

8SX002出土遺物（Fig.8-31）

土師器

小皿a（11）　口径9.4cm、器高1.15m、底径7.1cmである。底部は糸切りである。

坏a（12・13）　口径15.4・15.6cm、器高2.75・2.8cm、底径11.2・11.3cmを測る。底部は糸切り。胎土は砂粒と雲母を含み淡茶色を呈する。

金属製品

不明銅製品（14）　凹凸のある板状の銅製品である。法量は3.3×3.3×0.4cm以上である。

8SX009出土遺物（Fig.8-31）

石製品

平玉石（15）　白色の扁平な円形の石である。石材は石英と考えられる。

8SX010出土遺物（Fig.8-31）

土師器

小皿a（16・17）　口径8.2・9.9cm、器高1.0・1.4cm、底径5.7・7.6cmを測る。底部切り離しは16が不明、17はヘラ切りである。

黒色土器

鉢（18）　口径29.8cmを測る。調整は内外ともミガキcを施す。胎土はきめ細かく精良。B類。

8SX025出土遺物（Fig.8-31、Pl.19、巻頭図版）

8SX025と8SX025下層はそれぞれ土層図の淡褐色砂質土、明褐色土に対応する。

土師器

小皿a（19・20）　口径9.4cm、器高1.2・1.4cm、底径6.6・6.0cmである。底部はヘラ切りである。

石製品

21は滑石製鍋を二次加工したものである。顎の部分と切断面を鑿で削っている。用途は不明。22は砥石片である。平面と小口の一部を使用している。淡灰褐色の堆積岩である。

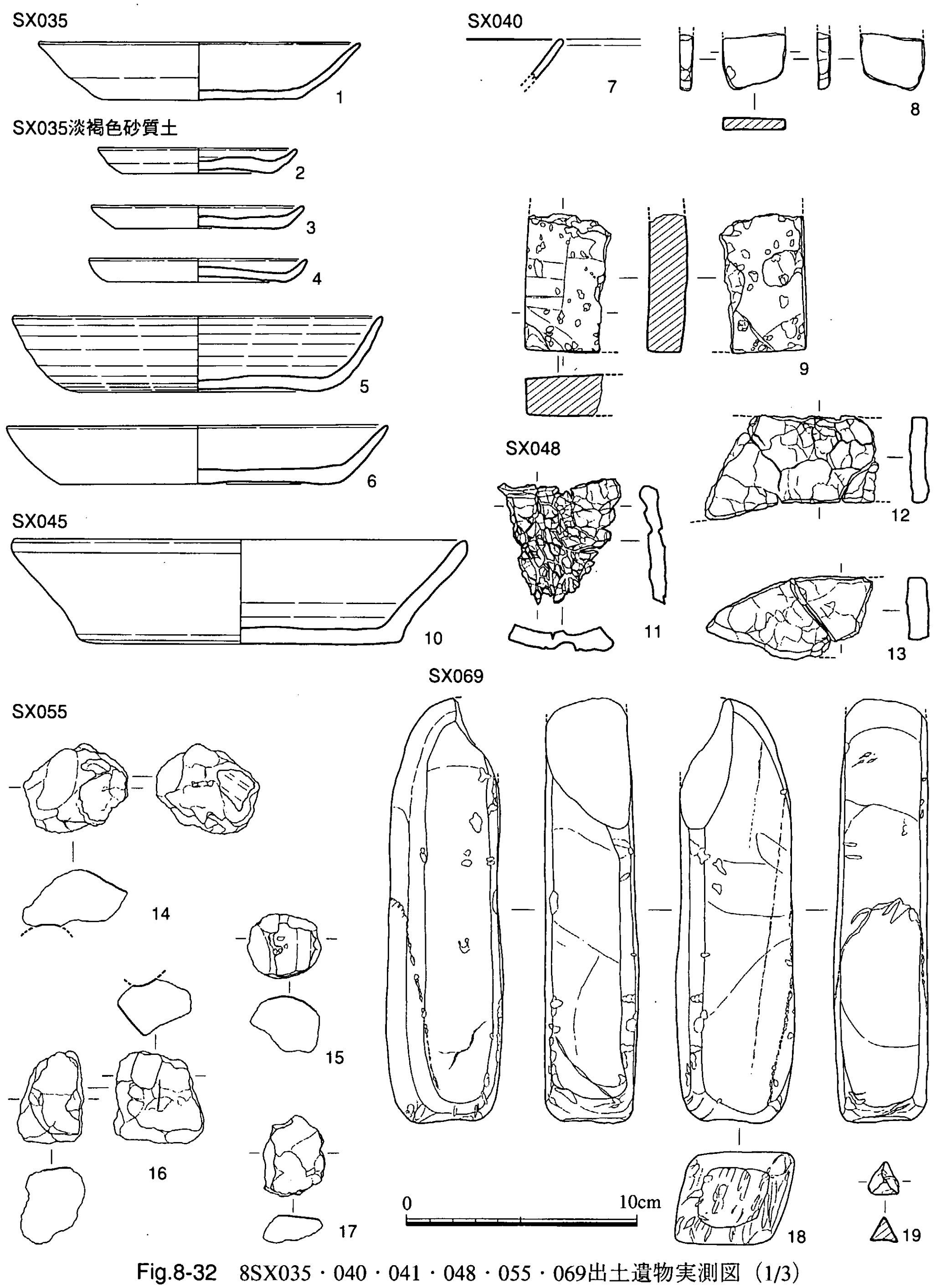


Fig.8-32　8SX035・040・041・048・055・069出土遺物実測図（1/3）

金属製品

釘（23）　鉄製の釘である。長さ2.55cm以上である。

8SX025下層出土遺物（Fig.8-31、巻頭図版）

土師器

小皿ａ（24）　口径8.4cm、器高0.8cm、底径6.8cmを測る。底部切り離しは糸切りである。

石製品

25は砥石である。４面を使用している。淡灰白色の砂岩である。半分が焼けて変色している。

8SX035出土遺物（Fig.8-32）

土師器

坏ａ（１）　口径14.0cm、器高2.6cm、底径8.4cmを測る。底部は糸切り。胎土に５mmの石粒を含む。

8SX035淡褐色土出土遺物（Fig.8-32）

土師器

小皿ａ（２～４）　口径8.8～9.6cm、器高1.0～1.1cm、底径6.4～7.7cmを測る。底部は糸切り。

坏ａ（５・６）　口径16.1・16.6cm、器高3.3・2.6cm、底径10.5・11.9cmを測る。底部は糸切り。

8SX040出土遺物（Fig.8-32）

須恵器

７は坏か椀の口縁片である。淡灰青色を呈し外面には重ね焼きの痕が残る。

石製品

８は淡灰黒色を呈する砥石である。３面を使用している。泥岩と考えられる。

8SX041出土遺物（Fig.8-32、Pl.19）

石製品

９は滑石製の鍋を転用したものである。２辺が欠けているが、方形ないし長方形になると思われる。生きた面は丁寧に削られている。

8SX045出土遺物（Fig.8-32）

土師器

10は盤もしくは鉢である。口径19.86cm、器高4.5cm、底径13.8cmを測る。調整は磨耗が激しく不明である。胎土は小石を含み、淡黄褐色を呈する。

8SX048出土遺物（Fig.8-32）

金属製品

11から13は鉄製板状の塊である。３点とも同一個体の可能性がある。用途は不明である。

8SX055出土遺物（Fig.8-32）

14～17は焼土塊である。部分的に生きた面がある。竹材の痕跡と考えられる。茶褐色を呈し藁と思われるスサの痕跡がある。

8SX069出土遺物（Fig.8-32）

18は方形柱状をした変成岩の砥石と考えられる。２面が使用されている。銀灰色を呈する。19はチャートの小片である。赤茶色を呈する。

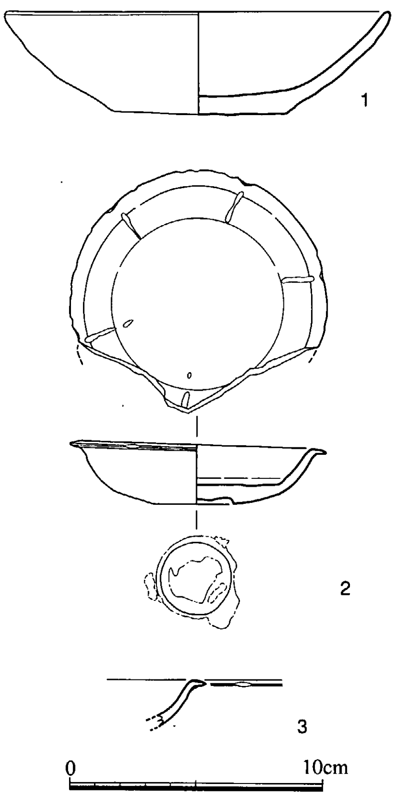


Fig.8-33　8SX074出土遺物実測図（1/3）

8SX074出土遺物（Fig.8-33、Pl.19）

土師器

１は坏である。口径15.4cm、器高4.1cm、底径6.9cmを測る。小さい底部に湾曲しながら開く体部を持つ。底部は糸切り。体部はヨコナデ、内面は磨耗して調整不明である。坏ｂの範疇に入る可能性がある。

高麗青磁

皿（２・３）　同一個体の可能性がある。口径10.3cmを測る。体部内面には白堆線、口縁端部には輪花を施す。灰緑色の半透明釉が全面に掛かる。

8SX075出土遺物（Fig.8-34、Pl.19）

瓦器

小椀ｃ（１・２）　口径7.9・8.1cm、器高2.8・2.7cm、高台径4.8・5.45cmを測る。体部内外面はミガキｃを施す。白茶色から暗灰色を呈する。重なった状態で出土した。

8SX092出土遺物（Fig.8-34）

３は焼土塊である。平坦な面がある。割れ面にはスサの痕が残る。明茶色から暗灰褐色を呈する。

8SX108出土遺物（Fig.8-34）

５は陶器の行平と考えられる。内面に受けを持つ。口縁付近に茶色の釉が掛かる。口径10.2cmである。

8SX110出土遺物（Fig.8-34）

瓦器

６は瓦器の底部片である。底部はヘラ切りで高台の痕跡は見あたらない。内面はミガキｃを施す。椀もしくは坏になると考えられる。

石製品

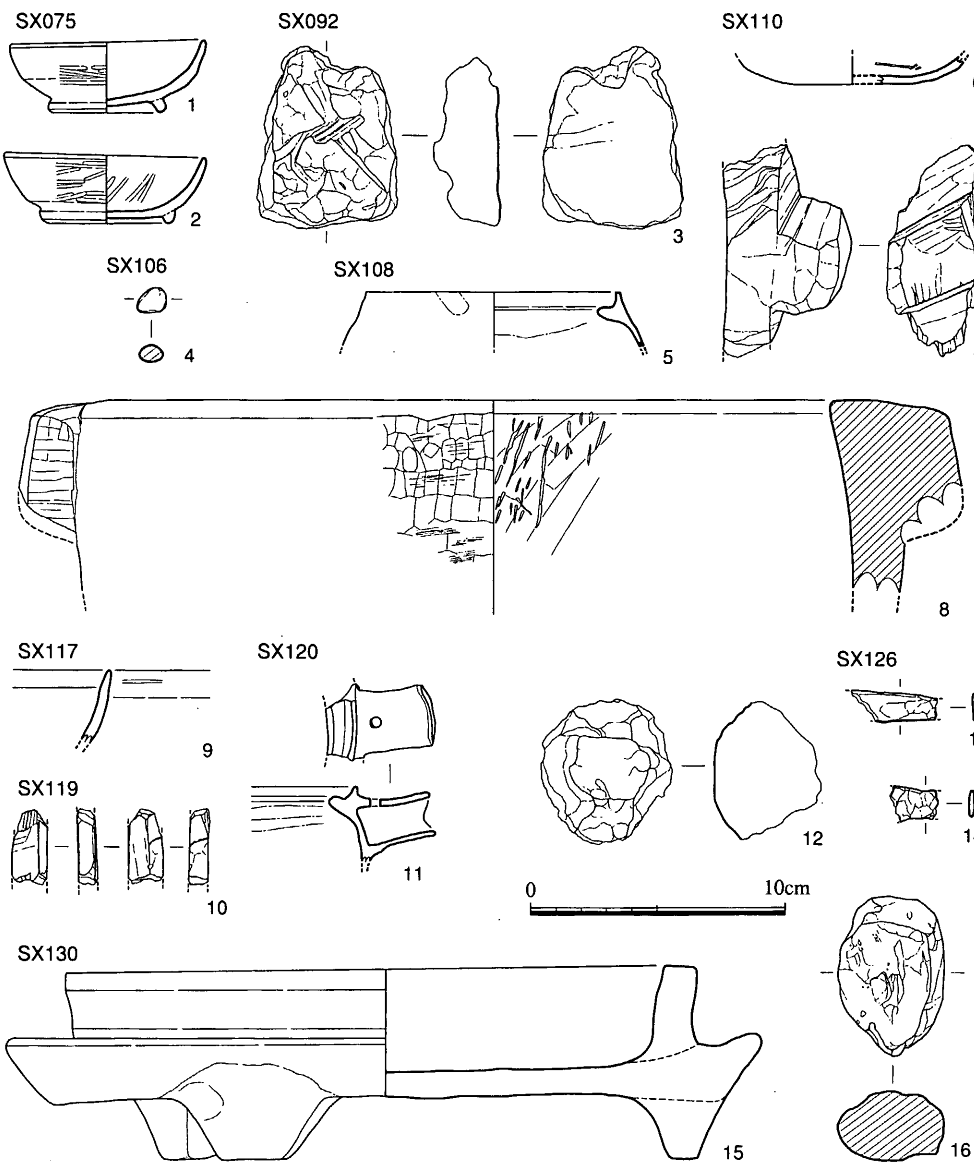


Fig.8-34　8SX075・092・106・108・110・117・119・120・126・130出土遺物実測図（1/3）

7・8は滑石製鍋の破片であるが、再加工品の素材と考えられる。8は顎をきれいに削り取っている。

8SX117出土遺物（Fig.8-34）

陶器

9は天目椀である。胎土は黒色で釉は茶褐色の不透明釉である。

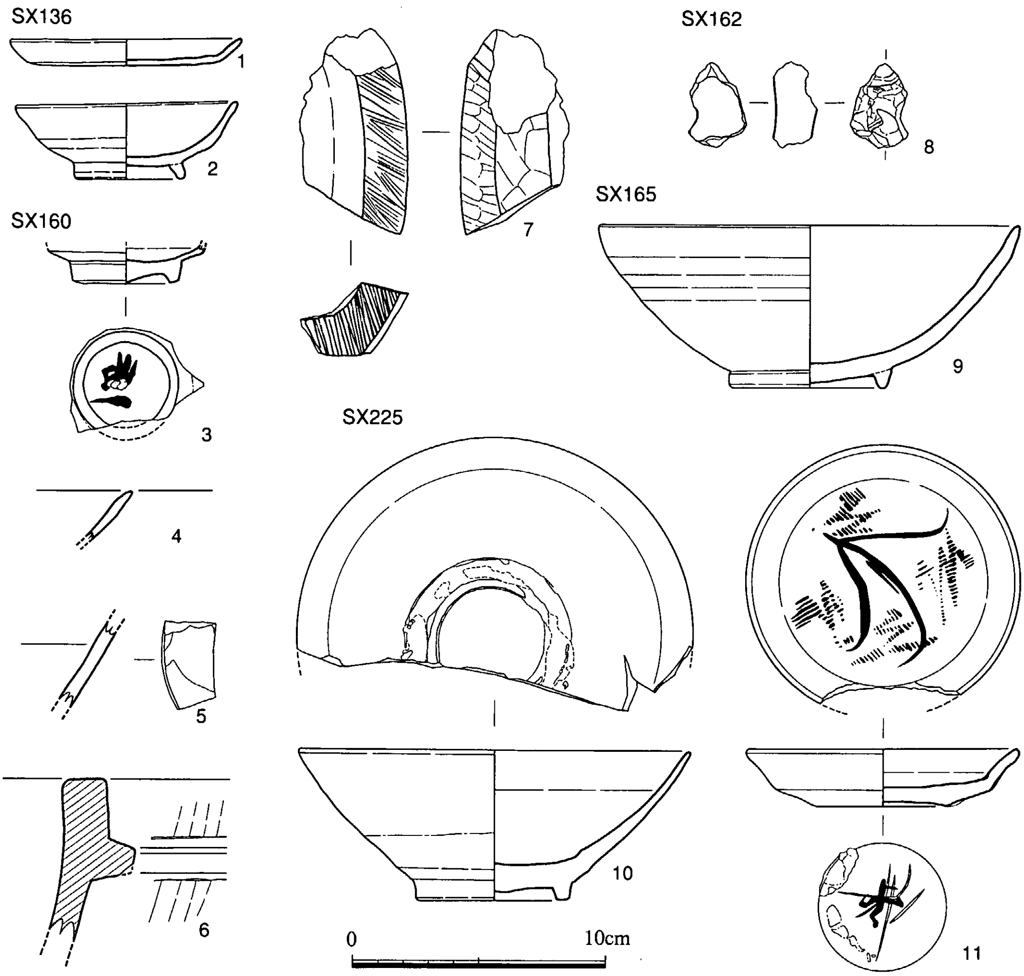


Fig.8-35　8SX136・160・162・165・225出土遺物実測図（1/3）

8SX119出土遺物（Fig.8-34、巻頭図版）

石製品

10は黒灰色をした砥石である。平面、側面、小口面を使用している。かなり小さいが手持ちで使用したと考えられる。法量3.0×1.4×0.8cmである。

8SX120出土遺物（Fig.8-34、Pl.19）

陶器

11は行平の取手部分である。8SX108のものと同一個体である可能性がある。取手には棒を突っ込む穴と棒を留めるための釘を打つ穴があいている。

焼土塊

12は灰茶色から橙茶色を呈する。活きた面が凸型に連続している。

8SX126出土遺物（Fig.8-34）

金属製品

13・14とも鉄製で刀子の破片と考えている。

8SX130出土遺物（Fig.8-34、Pl.19）

土師器

15は組み合わせ火鉢の底部分もしくは炉である。3つの脚を持ち、外面に大きな受けを巡らす。立ち上がりは3cm程で受けに円筒形の筒が乗ると考えられる。内面は立ち上がり上部が黒く焦げている。受け部径30.1cm、器高7.6cm、底径26.5cmを測る。

石製品

16は軽石である。全体に丸くなっている。淡茶黄色を呈する。

8SX136出土遺物（Fig.8-35）

土師器

小皿ａ（１）　口径9.3cm、器高1.05cm、底径7.7cmを測る。底部は糸切り。胎土は粗く橙茶色を呈する。

小椀ｃ（２）　口径8.9cm、器高3.0cm、高台径4.5cmを測る。胎土は砂粒、雲母片を含む。

8SX160出土遺物（Fig.8-35）

磁器

３は青白磁の香炉と考えられる。高台径4.3cm。外底部に墨痕がある。４は白磁の皿と考えられる。淡黄白色の釉が掛かる。５は高麗青磁の壺である。外面には白土による象嵌がある。内外に緑灰色の釉がかかる。

石製品

６・７は滑石製の鍋の破片である。内面は平滑になっている。７は断面に切断の鋸痕が残っている。

8SX162出土遺物（Fig.8-35）

８は焼土塊である。平坦面を一面残す。裏面にはスサの痕跡が残る。

8SX165出土遺物（Fig.8-35）

瓦器

椀ｃ（９）　口径16.7cm、器高6.45cm、高台径6.4cmを測る。磨耗により調整不明。

8SX225出土遺物（Fig.8-35）

磁器

10は白磁椀である。VIII-２類である。口径15.7cm、器高6.0cm、高台径6.2cmを測る。内底面の釉を剥いだ部分には重ね焼きの目跡と製品高台部分が溶着している。11は同安窯系青磁の皿である。I-2-ｂ類である。外底部に目土が溶着している。またヘラの痕跡と墨痕が残る。

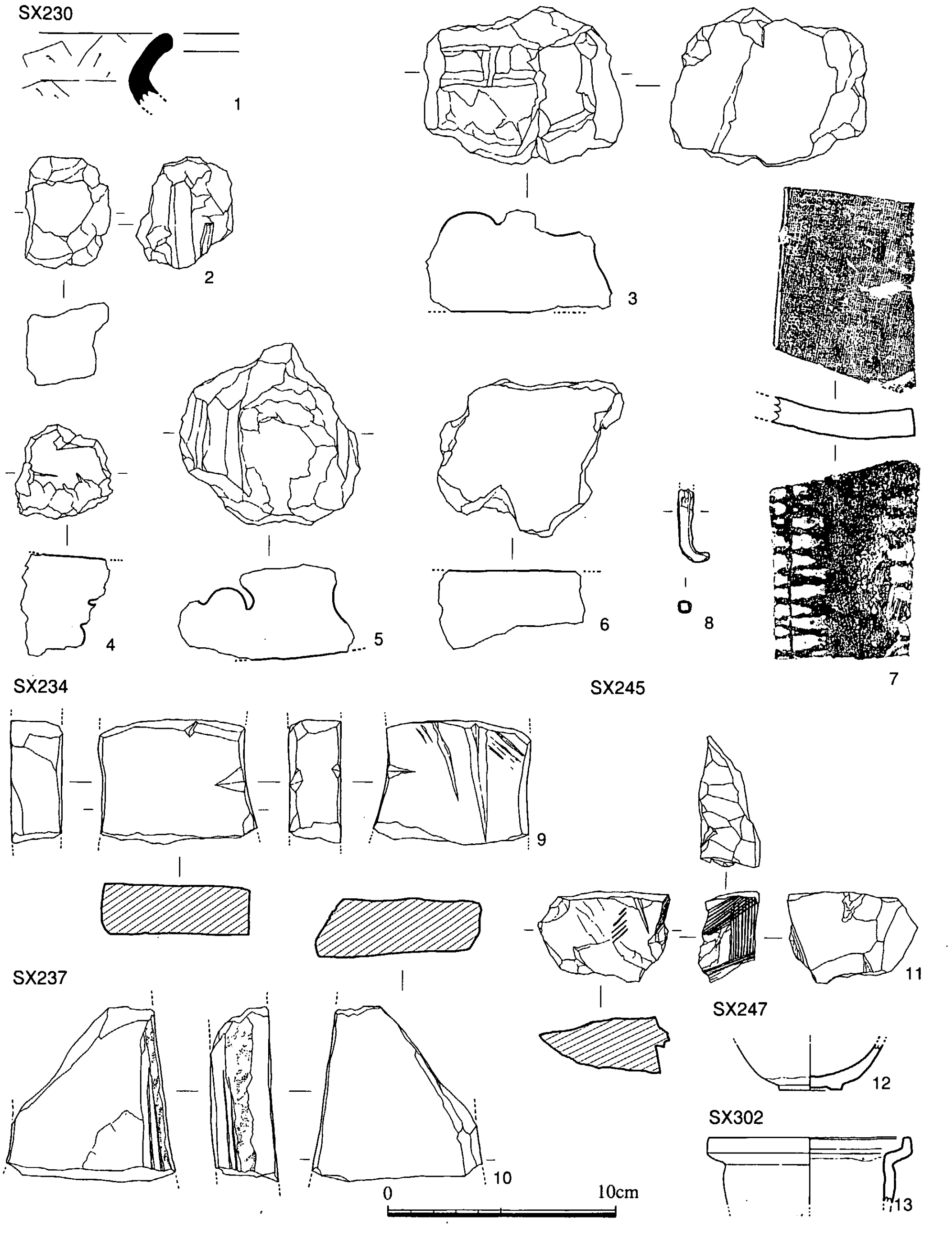


Fig.8-36　8SX230・234・237・245・247・302出土遺物実測図（1/3）

8SX230出土遺物（Fig.8-36）

須恵質土器

１は壺の口縁である。胎土に１mmの白色粒子を含む。

焼土塊

２～６は平坦面や竹材の跡を持つ焼土塊である。

瓦

７は凸面に格子叩き痕のある平瓦である。端面は削って仕上げる。

金属製品

８は先端が曲がった釘である。

8SX234出土遺物（Fig.8-36、巻頭図版）

石製品

９は砂岩製の砥石である。平面と両側面の３面を使用している。法量は5.4×7.0×2.25cmである。

8SX237出土遺物（Fig.8-36、巻頭図版）

石製品

10は砂岩製の砥石である。平面と側面を使用している。法量は7.75×7.5×2.6cmである。

8SX245出土遺物（Fig.8-36、Pl.20）

石製品

11は滑石製の鍋に加工を加えたものである。切断面に鋸痕が残る。加工品の残滓とも考えられる。

8SX247出土遺物（Fig.8-36）

磁器

12は白磁の小椀である。高台径2.8cmである。高台付近は露胎である。胎土には微細な黒色粒を含む。乳白茶色の釉が掛かる。

8SX302出土遺物（Fig.8-36）

陶器

13は水注の口縁である。黄茶褐色の釉が掛かる。胎土は灰色で粗く砂粒を多く含む。

8SX305出土遺物（Fig.8-37、Pl.20）

焼土塊

１は厚さ2.7cmで両面に平坦面を持つ。表面にはスサの痕が残る。茶褐色を呈する。

石製品

２は軽石である。径1.2cm程の穿孔の一部が残存している。法量は9.5×5.95×4.0cmである。

8SX307出土遺物（Fig.8-37）

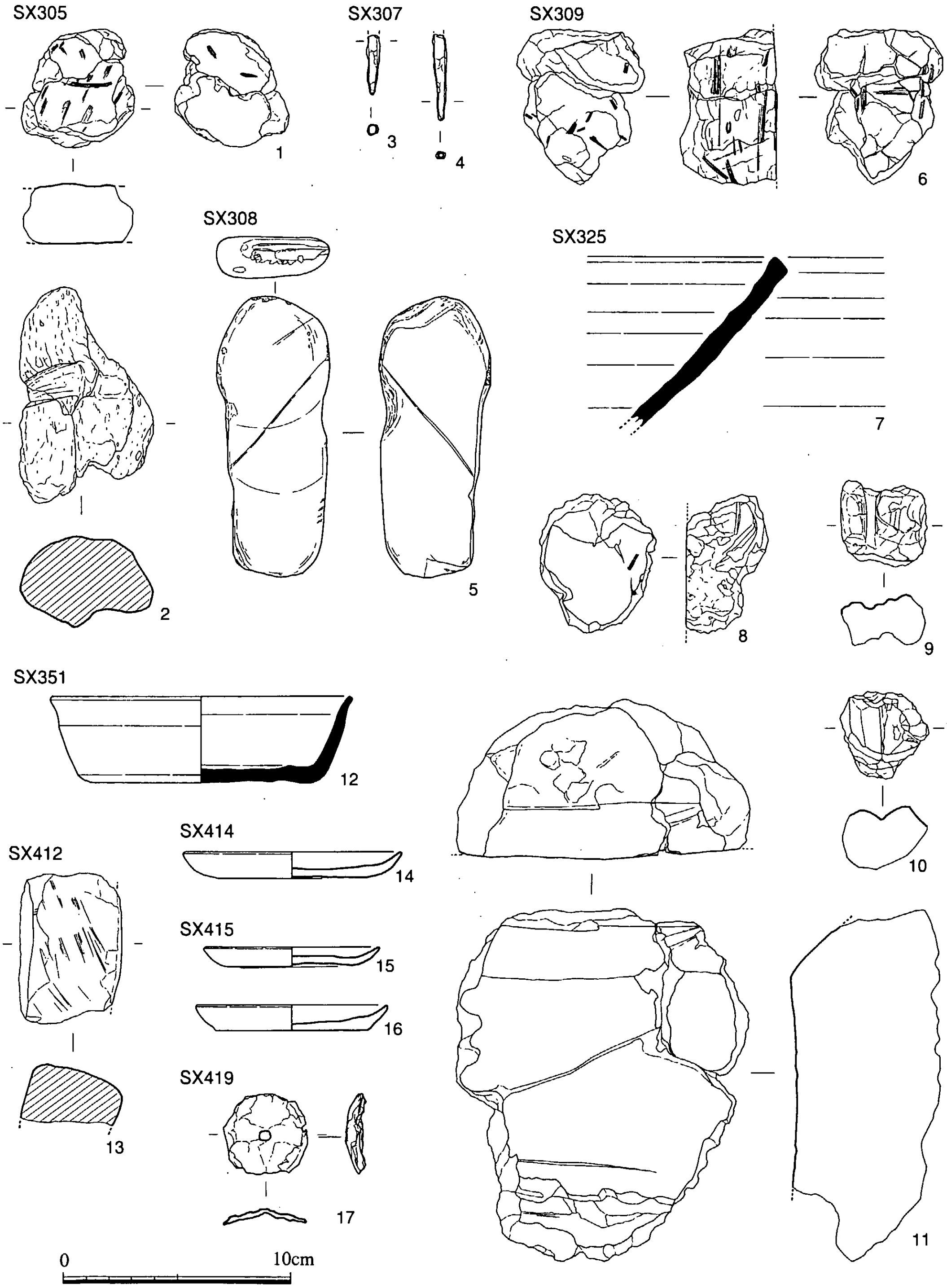


Fig.8-37　8SX305・307・308・309・325・351・412・414・415・419出土遺物実測図（1/3）

金属製品

3・4は鉄製釘の先端部である。3が2.65cm、4が3.8cm残存する。

8SX308出土遺物（Fig.8-37）

石製品

5は扁平な灰白色の石である。変成岩と考えられる。先端に敲打痕、側面にくびれ様の加工痕がある。法量は12.4×5.0×1.8cmである。

8SX309出土遺物（Fig.8-37、Pl.20）

焼土塊

6は一面に平坦面を持つ。裏面にはスサの痕跡が残る。

8SX325出土遺物（Fig.8-37、Pl.20）

石列の乗っている土層からの出土物である。土層図の黒赤色土に対応する。

須恵質土器

7は鉢の口縁である。焼成不良で灰白色を呈する。調整はヨコナデである。

焼土塊

8は一面が平坦に仕上げてある。9は竹材の痕が残る。11は少し湾曲した平面とそれに鈍角に交わる平坦面がある。

8SX351出土遺物（Fig.8-37）

須恵器

坏a（12）　口径13.3cm、器高3.9cm、底径9.8cmを測る。底部はヘラ切りで体部にはヨコナデを施す。胎土は堅緻で暗灰色から暗赤褐色を示す。肥後産の須恵器と考えられる。

8SX412出土遺物（Fig.8-37）

石製品

13は泥岩製の砥石片である。3面が使用されている。淡灰褐色を呈する。

8SX414出土遺物（Fig.8-37）

土師器

小皿a（14）　口径9.6cm、器高1.2cm、底径6.5cmを測る。底部は糸切り。褐灰色を呈す。

8SX415出土遺物（Fig.8-37）

土師器

小皿a（15・16）　口径7.8・8.4cm、器高0.9・1.1cm、底径5.6・6.8cmを測る。底部は糸切り。

8SX419出土遺物（Fig.8-37）

金属製品

17は紡錘車の円盤部分と考えられる。鉄製である。径約3.5cm、厚さ0.35cm、軸の径0.5cmを測る。

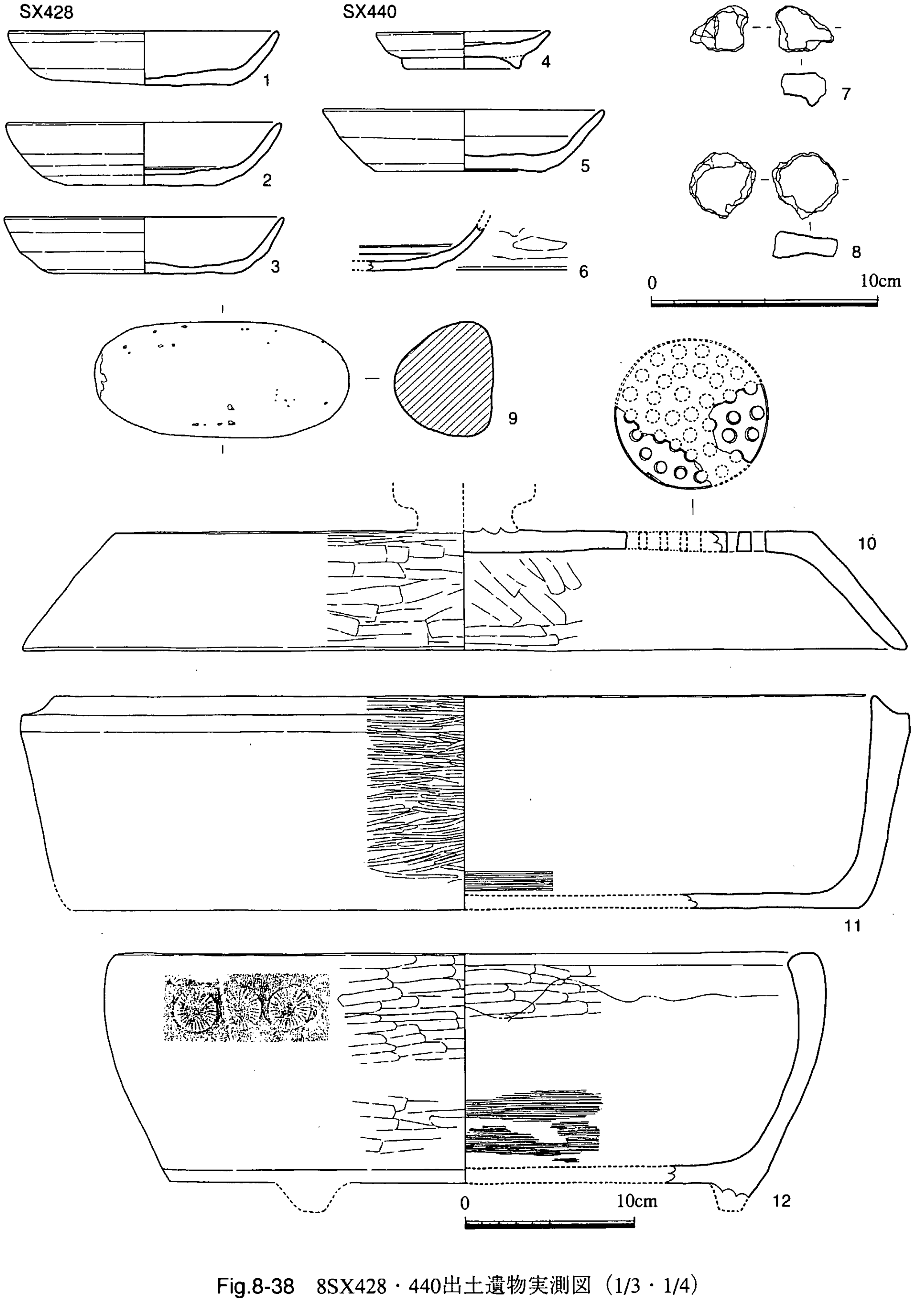


Fig.8-38　8SX428・440出土遺物実測図（1/3・1/4）

8SX428出土遺物（Fig.8-38）

土師器

坏ａ（１～３）　口径12.2～12.6cm、器高2.4～2.8cm、底径6.8～8.6cmを測る。底部は糸切り。

8SX440出土遺物（Fig.8-38、Pl.20）

土師器

小皿ｃ（４）　口径7.7cm、器高1.7cm、底径5.3cmを測る。底部は糸切り。

坏ａ（５）　口径12.6cm、器高2.7cm、底径7.4cmを測る。底部は糸切り。

瓦質土器

10・11は大型方形の香炉で蓋と身のセットと考えられる。10は蓋で内外面にミガキを施す。口縁の一辺52.2cm、上面までの高さ7.2cm、上面の一辺41.0cmを測る。口縁部は擦れている。天井部には径9.0cmの圏線に囲まれた蓮実状の穴があいている。３ないし４個が復元できる。また天井部には不整形の切り込みが残っている。花弁の文様などに切り抜いていると考えられる。内面は体部中位から天井部が熱で変色している。11は身である。口縁部の一辺52.2cm、体部の高さ13.55cm、底部の一辺46.4cmを測る。口縁部が肥厚して受け部を形成する。体部は直立し底部とは直角に近い角度で接続する。内外面とも丁寧なミガキを施す。内面底部近くには刷毛目が残る。二次的に熱を受けた痕跡は見あたらない。底部外面には脚が附属するものと考えられる。淡褐橙色をしている。

12は体部外面に菊花文のスタンプを持つ火鉢である。口径42.0cmを測る。外面から体部内面中位までは丁寧なミガキを施し、以下は刷毛目とナデで調整する。菊花文は３個で１セットである。脚は欠損している。

陶器

盤（６）　I類である。外面は施釉していない。内面は濃い緑黄色の釉が掛かり一部銀化している。

焼土塊

７・８とも竹材の痕跡を持つ小破片である。

石製品

すり石（９）　断面略三角形をした淡灰褐色の石である。火成岩と考えられる。法量は11.3×5.2×4.4cmで398gである。

8SX470出土遺物（Fig.8-39）

土師器

小皿ａ（１）　口径8.6cm、器高1.0cm、底径7.7cmを測る。底部は糸切り。

坏ａ（２・３）　口径14.3・14.9cm、器高2.7cm、底径10.6・10.2cmを測る。底部は糸切り。

8SX475出土遺物（Fig.8-39、Pl.21）

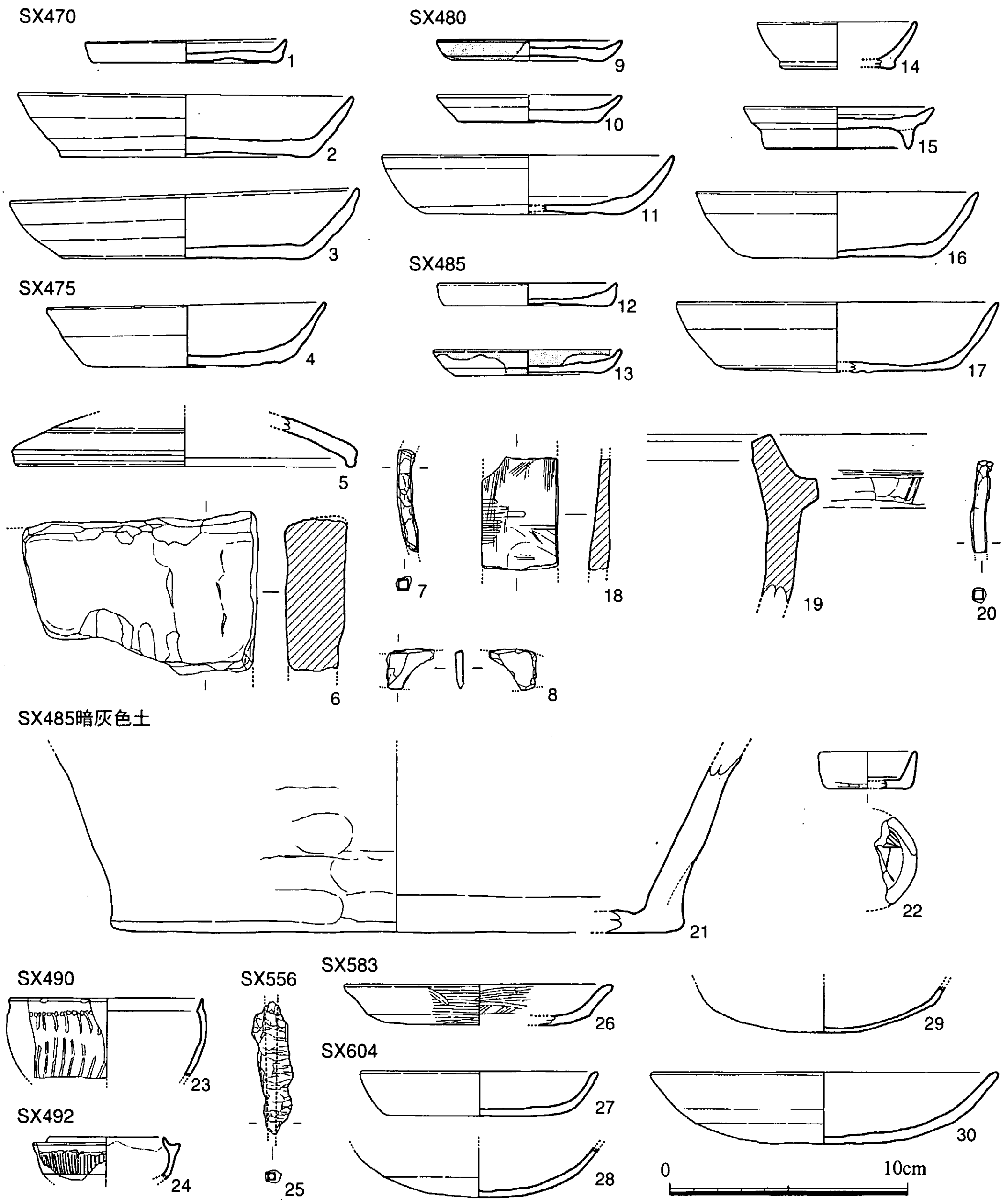


Fig.8-39　8SX470・475・480・485・490・492・556・583・604出土遺物実測図（1/3）

土師器

坏ａ（４）　口径12.0cm、器高2.6cm、底径8.4cmを測る。底部は糸切り。

磁器

５は青磁の蓋である。口径14.8cmを測る。肉厚の口縁から屈曲してそのまま体部に接続する。

釉は変質しておりくすんだオリーブ色がかすかに見える。

瓦類

塼（6）　扁平方形または長方形の塼の破片である。粗いナデで仕上げている。粘土の継ぎ目が確認できる。厚さ2.4cmを測る。淡黒灰色を呈する。

金属製品

7は鉄釘と考えられる。残存長4.4cmである。8は扁平な鉄片である。厚さ0.3cmである。刀子の中子部分の可能性がある。

8SX480出土遺物（Fig.8-39）

土師器

小皿a（9・10）　口径7.9cm、器高0.9・1.2cm、底径7.2・6.1cmを測る。底部は糸切り。

坏a（11）　口径12.5cm、器高2.5cm、底径9.55cmを測る。底部は糸切り。底部近くに捻り痕あり。

8SX485出土遺物（Fig.8-39、巻頭図版）

土師器

小皿a（12・13）　口径7.6・7.9cm、器高1.0・1.1cm、底径7.0・6.2cmを測る。底部は糸切り。13は内外にタール状のものが付着する。

小皿b（14）　口径6.7cm、器高2.0cm、底径4.8cmを測る。底部は切り離しは不明。

小皿c（15）　口径8.0cm、器高1.8cm、高台径6.3cmを測る。底部は糸切り。

坏a（16・17）　口径12.1・13.8cm、器高2.8・3.0cm、底径7.3・9.6cmを測る。底部は糸切り。

石製品

18は砥石である。ベージュ色の泥岩と考えられる。平面の裏表を使用している。厚さは0.9cmで使い込まれている。研ぎ面には微妙な凹凸がある。19は滑石製の鍋である。二次的加工を行っているが用途は不明である。

金属製品

20は鉄製の釘である。元の方が長さ3.9cm残存する。

8SX485暗灰色土出土遺物（Fig.8-39）

土師器

甕（21）　底部の破片である。底径24.4cmを測る。粘土の接合痕が観察され、あらいナデで調整している。

石製品

22は滑石製の小型容器である。全体を鑿で削りだしている。口径4.2cm、器高1.6cm、底径3.6cmである。

8SX490出土遺物（Fig.8-39、Pl.21）

茶色土

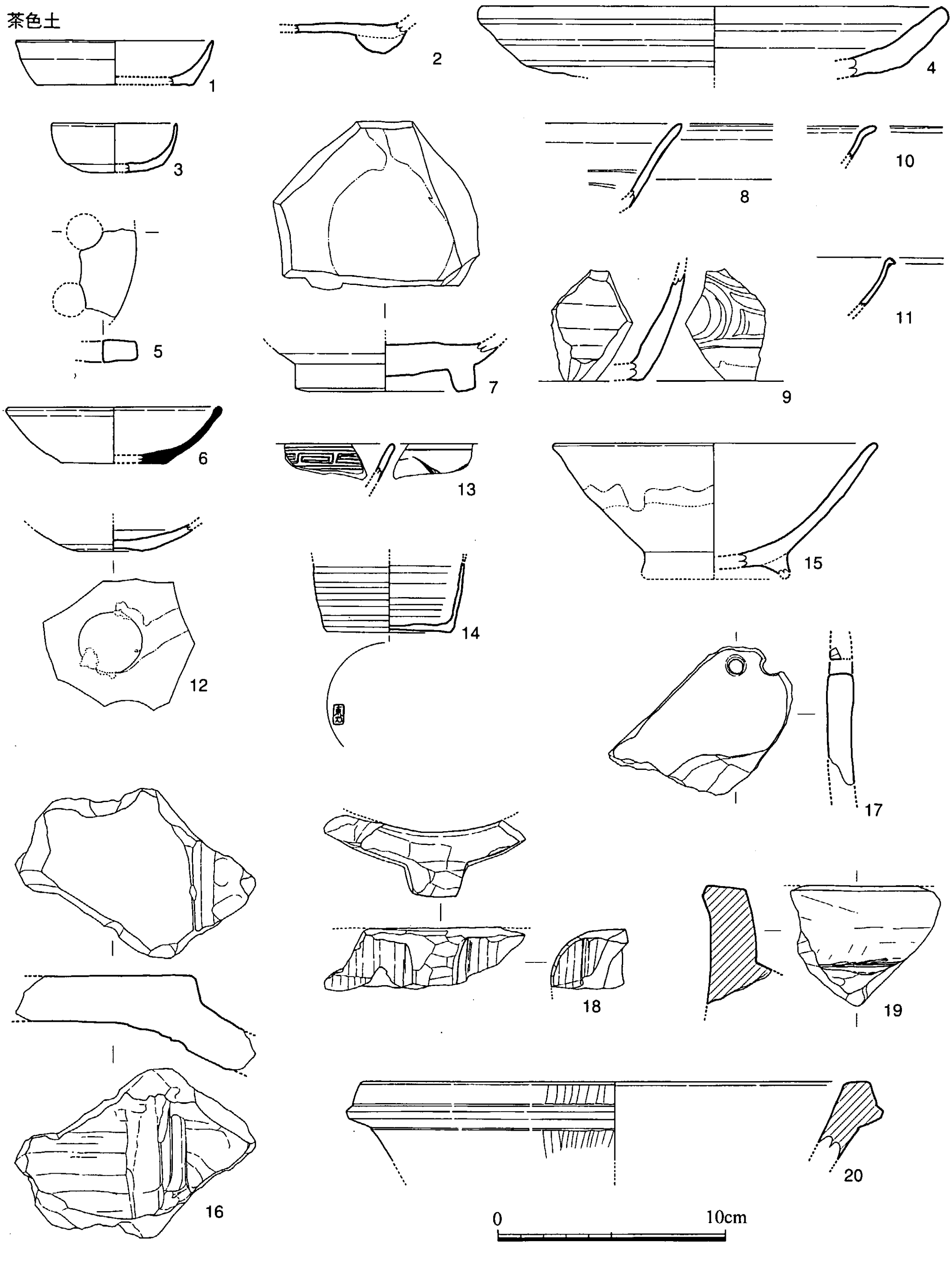


Fig.8-40　各層出土遺物実測図１（1/3）

磁器

23は青白磁の小壺と考えられる。口径8.3cmを測る。口縁端部は施釉後に釉を削り取っている。外面は口縁下に小さな連珠文と縦方向の細かな分割線がはいる。全体がスタンプの可能性もある。釉は淡い緑色である。

8SX492出土遺物（Fig.8-39）

磁器

24は合子の身である。釉は暗緑色をしている。青白磁か。

8SX556出土遺物（Fig.8-39）

金属製品

25は鉄製の釘である。元と先端を欠損する。

8SX583出土遺物（Fig.8-39）

瓦器

小皿ａ（26）　口径11.4cm、器高1.7cm、底径9.5cmを測る。内外面ともミガキｃを施す。外底部にもミガキはおよび底部切り離しは不明。

8SX604出土遺物（Fig.8-39）

土師器

小皿ａ（27）　口径10.2cm、器高1.9cm、底径8.0cmを測る。底部はヘラ切り。坏ａの範疇で捉えても良いかもしれない。X期くらいの所産と考えている。

丸底坏ａ（28～30）　30の口縁が14.8cmである。内面にミガキｂが残る。

（８）各層出土遺物

茶色土出土遺物（Fig.8-40・41、Pl.21～23、巻頭図版）

第一面遺構面検出時の埋土である。東端区・東区・西区で検出した。

土師器

１は小皿である。口径8.8cm、器高2.0cm、底径7.0cmを測る。底部は糸切り。口径復元が大きいかもしれない。小皿ｂになる可能性がある。２は脚付の皿または坏と考えられる。団子を押しつけたような脚である。底部は糸切りである。３は小椀と考えられる。口径5.6cm、器高2.2cmを測る。４は皿ａである。口径21.0cmである。底部は糸切りである。５は七輪の通気孔に似ているが胎土が細かく現代のものとは相異がある。

須恵質土器

坏（６）　口径9.6cm、器高2.5cm、底径4.6cmを測る。底部は糸切り。体部はヨコナデの丁寧な調整を行う。灰青色を呈する。

磁器

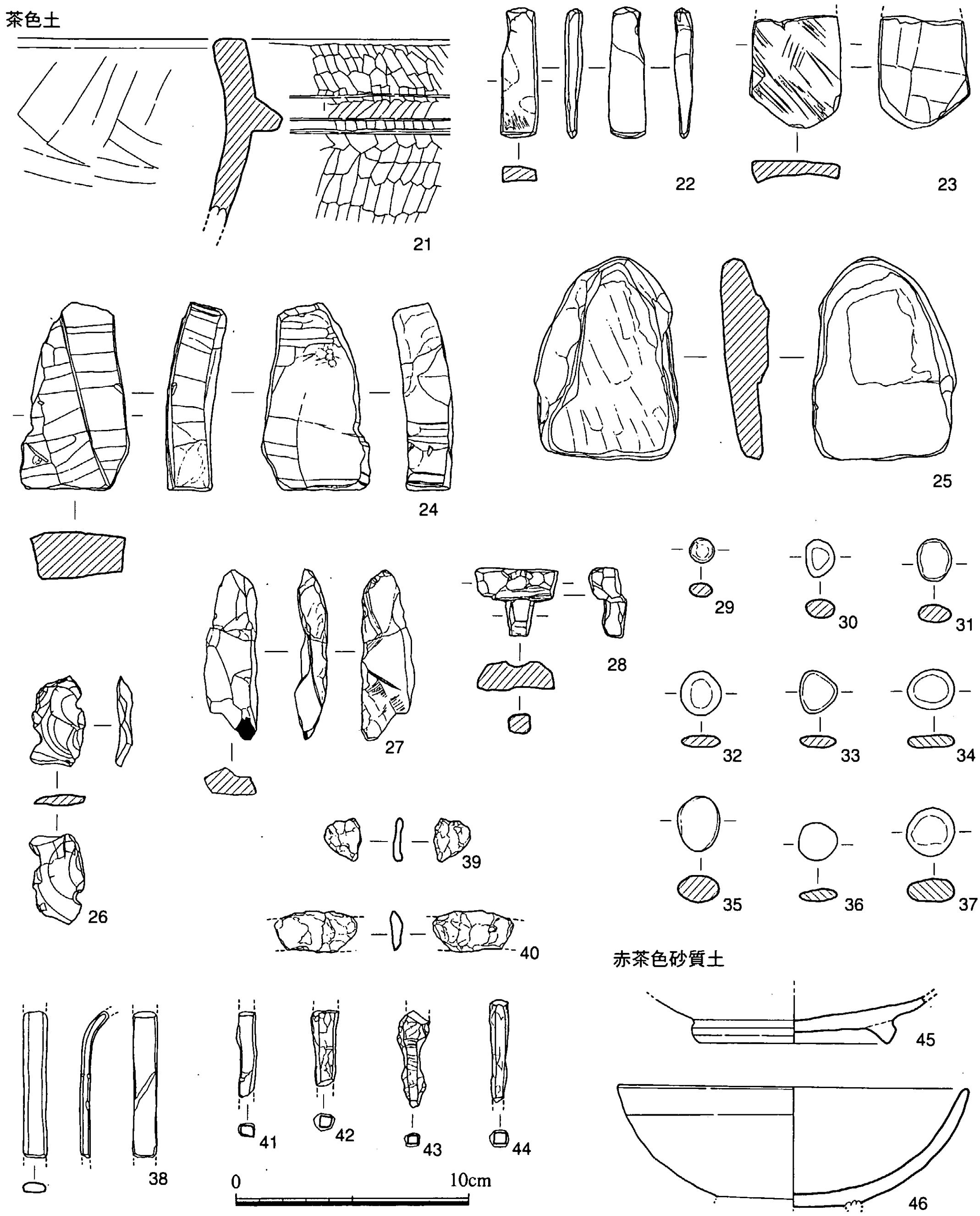


Fig.8-41　各層出土遺物実測図２（1/3）

白磁（７・８）　７は高台径8.0cmを測る鉢と考えられる。内定は輪状に釉を掻き取る。釉は淡緑黄色を呈する。８は椀と考えられる胎土はきめ細かく淡灰色を呈する。釉は暗緑灰色で光沢がある。内面にヘラ描き様の沈線がはいる。

青白磁（９）　瓶の底部付近と考えられる。外面にはヘラ描きの文様が入る。

青磁（10～12）　10・11は口縁片である。10は施釉薄く緑灰色、11も緑灰色を呈する。12は皿の底部と考えられる。平底で目跡が残る。緑灰色の釉で内面から外面底部付近まで施釉する。11と同一個体の可能性が高い。

染付け（13）　椀の口縁部と考えられる。

陶器

14は茶瓶様の形態をしている。器壁は薄く細かいヨコナデで調整される。外底部には「東光」のスタンプがある。施釉はなく茶褐色を呈する。15は山茶碗である。口径14.4cm、器高5.9+cm、底径6.6cmを測る。体部外面まで釉が掛かるが、見込みは磨耗している。

瓦

16は丸瓦の顎の部分である。表面は燻されており暗灰黒色を呈する。

土製品

17は板状の部分に0.6cmの焼成前穿孔を行う。全体が二次的な熱を受け淡茶色を呈する。

石製品

鍋（18～21・23・24）　すべて滑石製である。ほとんどが二次加工をされている。18は小型の縦の突起が付くものである。19～21は口縁に周回する顎を持つ。23は内面から削り薄く仕上げ、板状にしている。24は顎部分を完全に除去し錘様の形態に加工している。重量は約140gである。

砥石（22・27）　22は暗灰色で泥岩と思われる。法量は5.6×4.7×0.8cmの小型品である。全面を使用している。27は褐灰色をした泥岩製である。使用面は一面しか残存していない。

不明製品（28）　滑石製の製品である。T字状をし中央が抉れている。横棒部分の裏面は欠損している。

平玉石（29～37）　径は1.0～2.4cm、厚みは0.5～1.1cmを測る。色調は29から順に明灰色、茶白色（石英）、白茶色、明灰色、黒色、灰白色、茶白色（石英）、灰褐色、赤褐色をしている。

その他の石製品

25は緑色片岩の扁平な円礫である。中世の石組み墓に敷き詰めてあることが多い。四王寺山には産しないことから搬入されたことがわかる。26はチャート製の剥片である。横長に連続的に剥離している。

金属製品

38は青銅製の扁平な棒状製品である。面取りがあり丁寧な作りをしている。幅1.0cm、厚さ0.4cm、残存長6.3cmを測る。39・40は板状の鉄製品である。用途は不明。41～44は鉄製の釘である。断面すべて方形である。

赤茶色砂質土出土遺物（Fig.8-41）

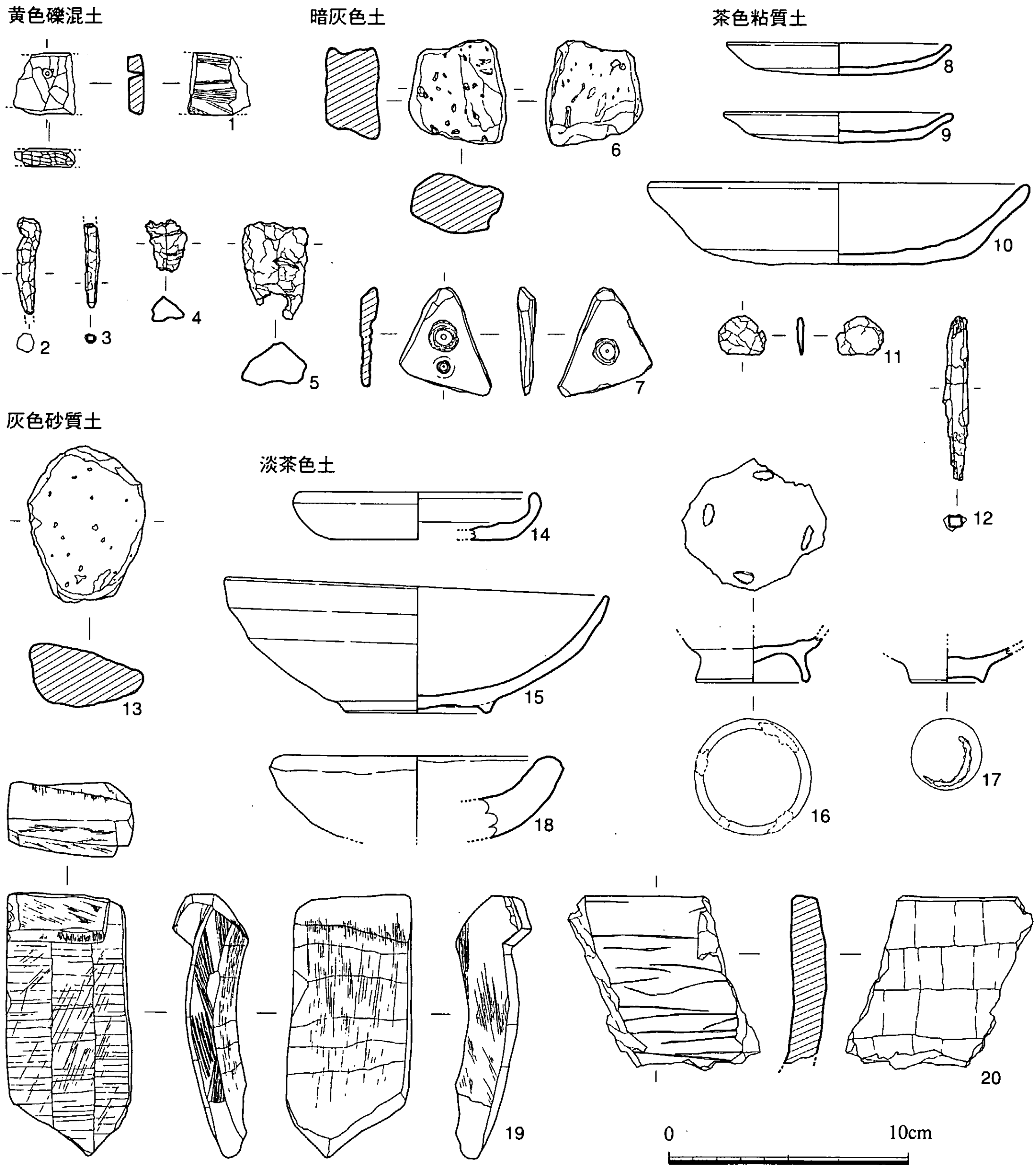


Fig.8-42　各層出土遺物実測図３（1/3）

東端区の第一遺構面を構成する。東端区はこの土層の下は地山になる。

45は土師器の椀または坏の底部である。高台径8.8mを測る。底部は糸切りである。

46は瓦器椀である。高台部分が欠損している。口径15.3cmを測る。

暗灰色土出土遺物（Fig.8-42、巻頭図版）

第一遺構面を構成する土層である。東区の北側に分布する。分布範囲は狭い。

石製品

6は軽石である。法量は4.4×4.1×2.4cmである。白茶色をしている。明瞭な加工痕は見あたらない。7は暗灰色の泥岩である。平面三角形の板状に加工され片面に2ヶ所、もう片面に1ヶ所に鼠歯錐でつけたような痕跡が残る。加工台にしていた可能性が考えられる。

黄色礫混土出土遺物（Fig.8-42）

第一遺構面を構成する土層である。東区の南側に分布する。地山を削って持ってきた土砂と考えられ遺物の出土は少ない。

石製品

1は滑石製品である。鍋を転用したと考えられる。現状方形の板状を呈する。厚さ0.7cm、平面には径0.3cmの穿孔痕がある。裏面には切断の際の鋸痕が残る。二辺を欠損している。

金属製品

釘（2・3）　鉄製の釘である。それぞれ先端と元を欠損する。

4・5は用途不明の鉄塊である。法量は4が2.1×1.7×1.1cm、5が4.1×2.8×1.8cmを測る。素材となる可能性もある。

茶色粘質土出土遺物（Fig.8-42）

第一遺構面を構成する。東区北側に分布する。

土師器

小皿a（8・9）　口径9.6・9.7cm、器高1.4・1.3cm、底径8.0・6.9cmを測る。底部はヘラ切り。

坏a（10）　口径16.2cm、器高3.4cm、底径11.6cmを測る。底部はヘラ切り。底部は少し押し出されていると思われるが、磨耗が激しく調整が不明。丸底坏としたほうが良いかもしれない。

金属製品

11は板状の円盤の鉄製品である。12は鉄製の釘である。

灰色砂質土出土遺物（Fig.8-42）

第一遺構面を構成する。東区北側に分布する。茶色粘質土と接している。

石製品

13は軽石である。明瞭な加工痕は見あたらない。褐黄色を呈する。法量は6.6×4.8×2.5cmである。

淡茶色土出土遺物（Fig.8-42、P1.22）

第一遺構面を構成する。東区北側に分布する。茶色粘質土・灰色砂質土の下に潜る。

土師器

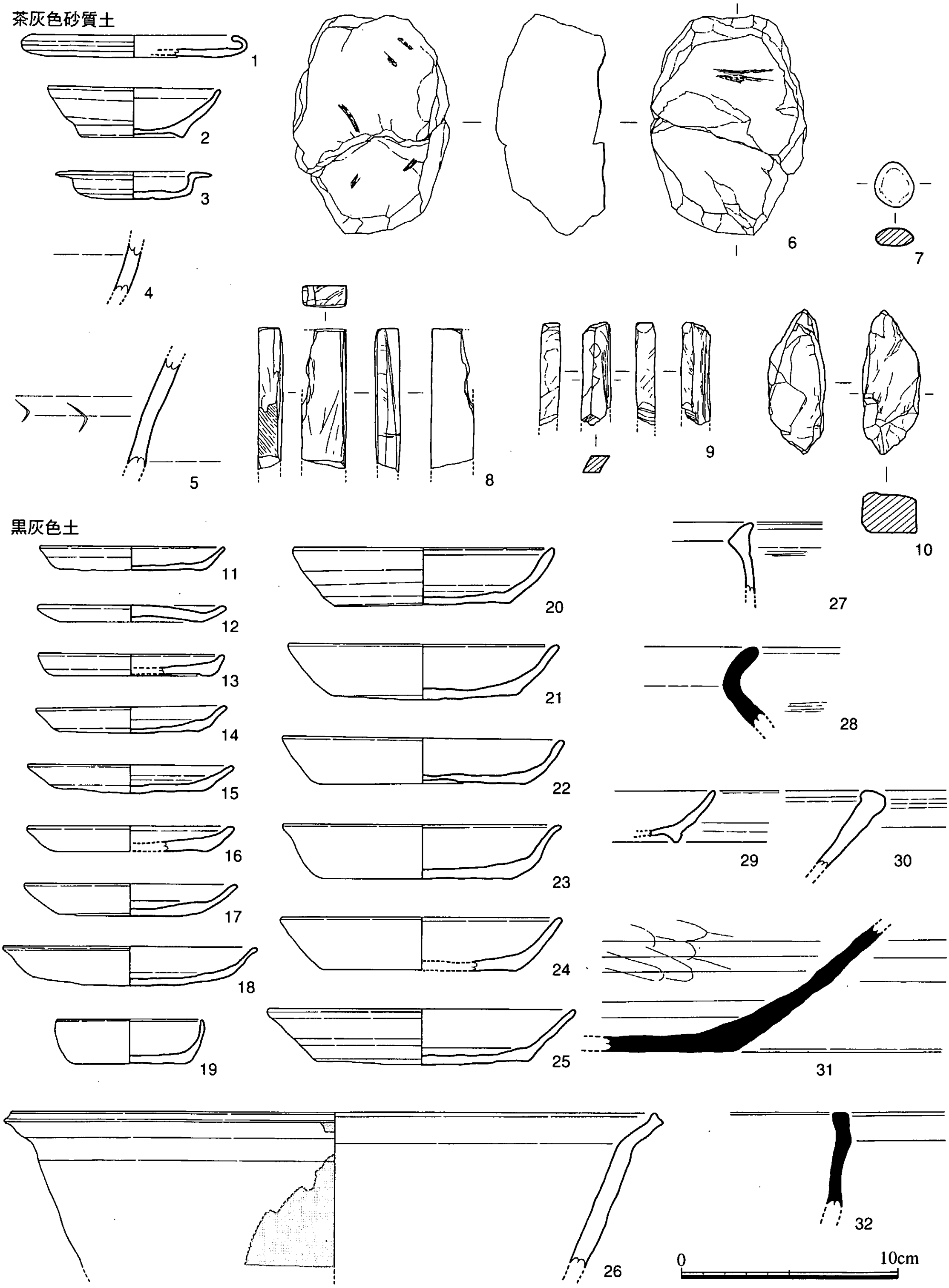


Fig.8-43　各層出土遺物実測図４（1/3）

皿（14）　口径10.5cm、器高2.0cm、底径7.4cmを測る。器壁は厚く、口縁は内湾している。

瓦器

椀ｃ（15）　口径16.1cm、器高5.3cm、高台径6.2cmを測る。歪みがある。指頭圧痕とナデ調整が目立つ。

磁器

青白磁

小椀（17）　底部片である。外底には焼き台の痕が残る。高台径3.0cmである。

高麗青磁

椀（16）　底部片である。全面に施釉される。内底と高台に４ヶ所の目跡が残る。釉は光沢のある灰緑色を呈する。II類に該当するかもしれない。

土製品

取瓶（18）　口径12.4cm、器高3.4+cmを測る。内面は胎土が変質しまた鉱滓が付着し黒色を呈する。外面は黒色から淡茶色へと漸移する。片口が付いていた可能性が高い。

石製品

鍋（19・20）　どちらも滑石製である。19は鍋を切断し口縁を顎の所まで削っている。切断面には鋸痕が残る。二次加工後の用途は不明。20は鍋の破片である。明瞭な加工痕は見あたらない。

茶灰色砂質土出土遺物（Fig.8-43、Pl.22、巻頭図版）

第一遺構面を構成する土層である。東区東側に分布し、大半は黄色礫混土・黒灰色土の下になっている。

土師器

皿ａ（１）　口径10.6cm、器高1.0cm、底径10.3cmを測る。底部はヘラ切りと思われる。口縁部は極端に内湾している。茶白色を呈する。搬入品と考えられる。

瓦器

小椀ｃ（２）　口径8.0cm、器高2.3cm、底径5.2cmを測る。底部はヘラ切りと思われる。調整はナデを施す。

陶器

蓋（３）　口縁は水平で体部が窪んだ形態をとる。口径7.4cm、器高1.3cm、底径5.2cmを測る。上部にのみ施釉する。体部に１ヶ所、径0.3cmの穿孔がある。空気抜きの穴と思われる。釉は緑茶色を呈する。

４・５は器形不明の陶器の破片である。４は外面には小さな格子叩き痕、内面はナデによる調整を行う。胎土は暗灰色である。５は内外ナデによる調整を行う。内面にはヘラ状工具の痕跡も見える。胎土は灰色でよく焼けている。

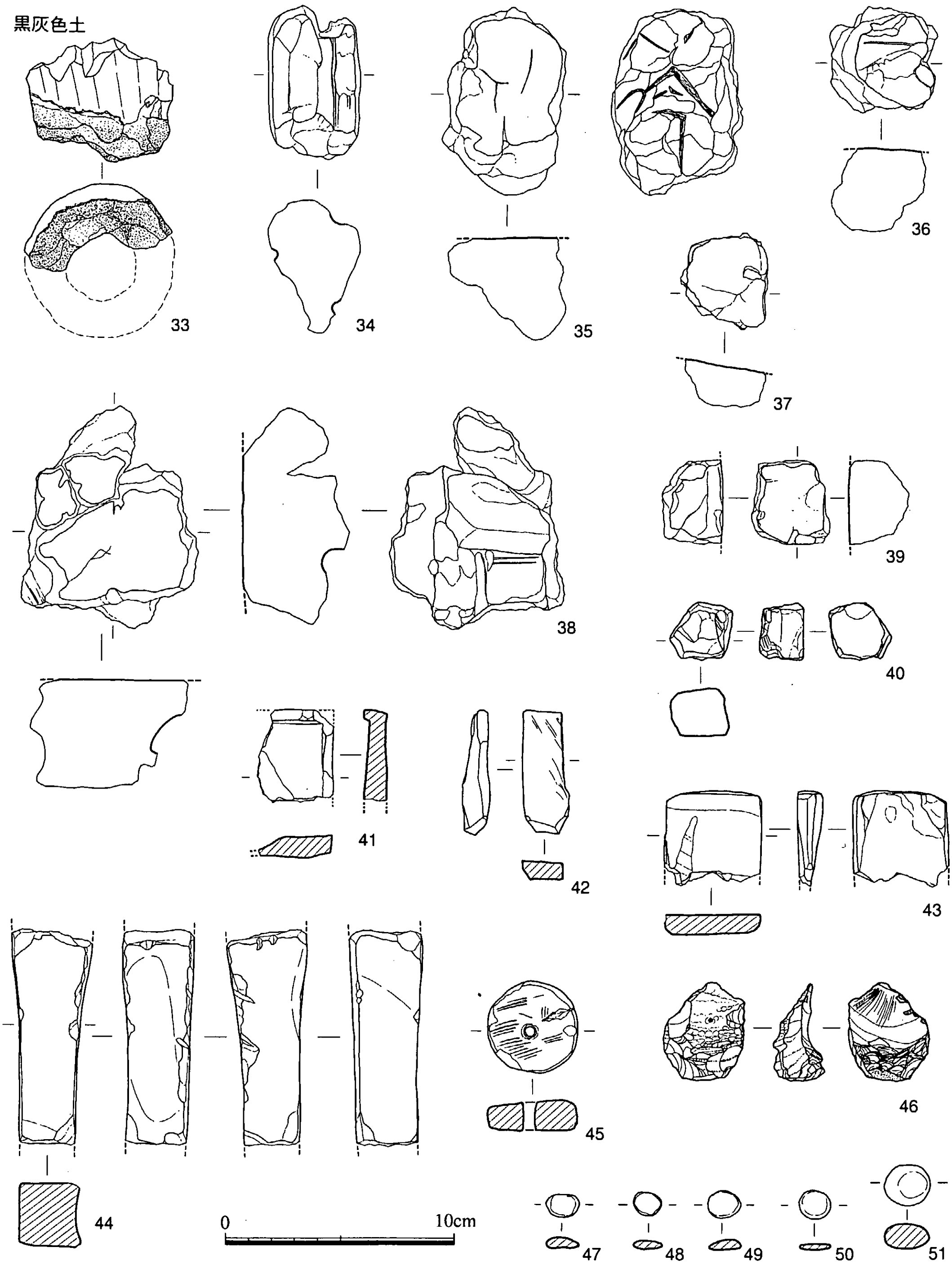


Fig.8-44　各層出土遺物実測図５（1/3）

焼土塊

6は凸面に一部生きた部分があると考えられる。明茶色を呈し焼けた痕跡が残る。

石製品

平玉石（7）　黒灰色の石である。全面平滑になっている。法量は2.1×1.8×0.8cmである。堆積岩と考えられる。

砥石（8・9）　8は茶白色の砂岩で直方体を呈する。平面、小口面のそれぞれ一面を使用している。両側面は切断されている。法量6.5×2.1×1.1cmを測る。9は灰黒色の頁岩で断面平行四辺形を呈する。おもに平面を二面使用する。岩石の剥離方向に沿って割れたものと考えられる。

10は断面方形を呈する火成岩と考えられる。全面が焼けている。用途不明。

黒灰色土出土遺物（Fig.8-43～45、Pl.22・23、巻頭図版）

第一遺構面を構成する土層であるが、第二遺構面直上の土層でもある。黄色礫混土の下層にあたり、生活過程で排出された土砂を埋め立てたようで炭化物や多くの遺物を包含している。黄色礫混土とセットで盛土をされたと考えている。

土師器

小皿a（11～18）　口径8.6～11.8cm、器高0.8～1.8cm、底径6.4～9.1cmを測る。底部はヘラ切りと糸切りが混在する。18は坏に分類できるかもしれない。

19は小皿または小坏である。口径7.0cm、器高2.0cm、底径5.2cmを測る。調整は磨耗して観察できない。

坏a（20～25）　口径12.2～14.4cm、器高2.1～2.7cm、底径8.1～10.3cmを測る。底部はヘラ切りである。

鉢（26・27）　26は口径30.7cmに復元される。全体をナデで仕上げている。胎土は精良で暗灰褐色をしている。外面には炭化物の付着がみられる。27は口縁部である。

須恵質土器

甕（28）　口縁部の破片である。淡灰色を呈する。

鉢（31・32）　31の底部は糸切り。内底部は平滑になっている。体部はヨコナデを施す。32は口縁部の破片である。全体にヨコナデを施す。灰白色を呈する。

瓦器

小椀c（29）　小破片である。淡黒灰色を呈する。

瓦質土器

30は鉢と考えられる。

土製品

羽口（33）　先端の破片である。炉側は融解している。胎土全体も灰白色から橙色に変色し

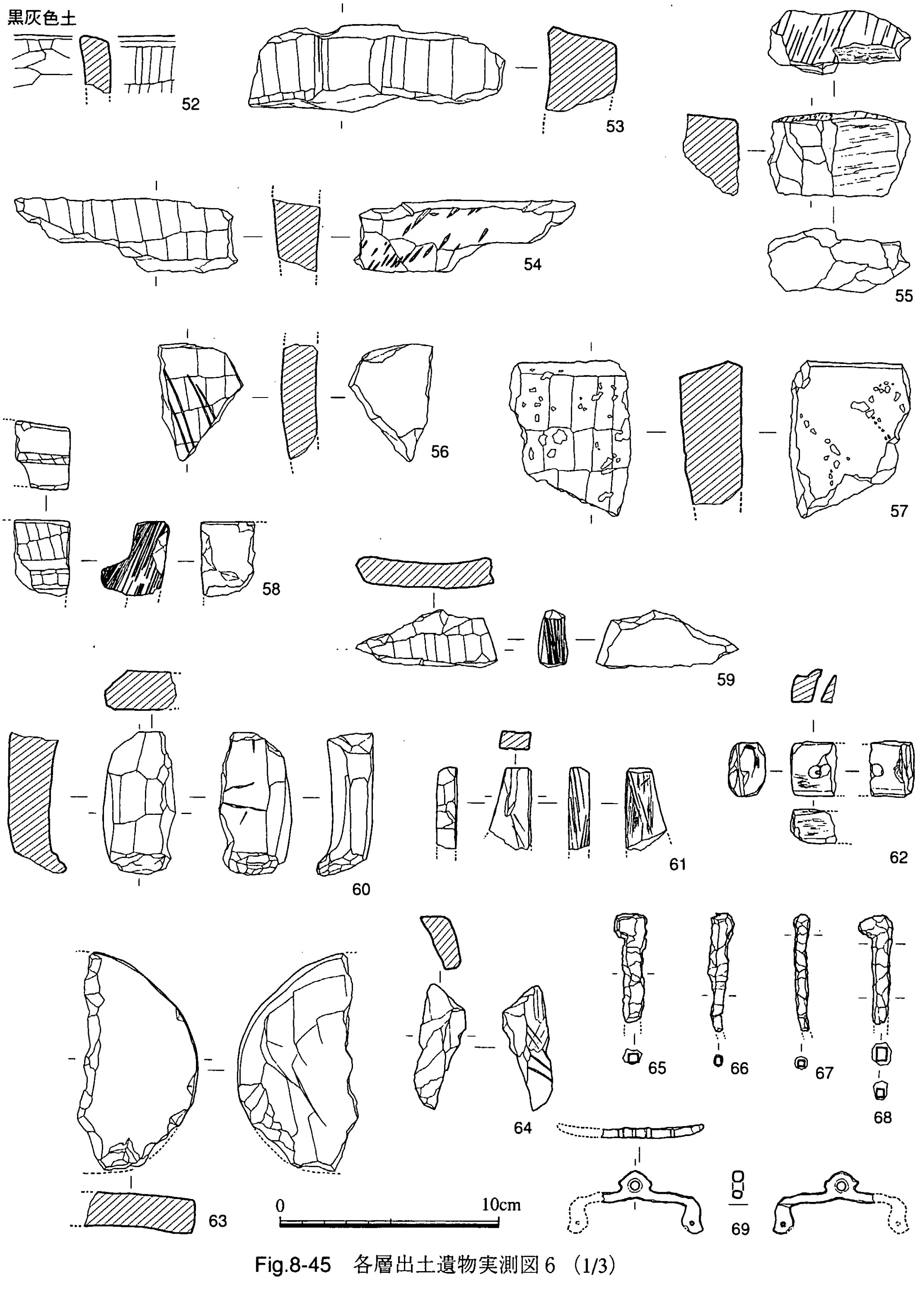


Fig.8-45　各層出土遺物実測図 6 （1/3）

ている。

焼土塊

34～40は平坦面もしくは竹材のあとを持つ焼土塊である。どれもスサの痕跡を残す。

石製品

硯（41）　方形硯の角部分である。本来の中央部は大きく擦れて抉れている。裏面は剥離して割れている。暗緑灰色の堆積岩である。

砥石（42～44）　42は灰黒色の頁岩製で平面と側面を使用する。43は暗灰色の粘板岩製で平面を使用する。44は灰赤茶色の砂岩で方柱状を呈する。小口面以外は使用している。一面は窪んで擦れている。

紡錘車（45）　灰褐色の滑石製である。径4.0cm、厚さ1.4cmの円盤に径0.5cmの円孔をあける。

平玉石（47～51）　径1.0～2.0cm、厚さ0.2～1.1cm程である。緑灰色～灰褐色を呈する。

鍋（52～61）　滑石製鍋の破片である。いずれも切断痕や削り痕があり二次的利用を図ったときのものと考える。

その他の製品（62・63）　どちらも滑石製である。鍋からの転用品の可能性が高い。62は棒状製品の一部と考えられる。縦横に直行する穴があけられている。径0.5cm程である。63は厚さ1.5cm、径10cm程に復元できる円盤状の製品である。

残核（46）　漆黒で亜角礫の黒曜石である。表皮が残る。剥離は上下二方向から行われている。

金属製品

釘（65～68）　鉄製の釘である。先端を欠損する。

釣り手金具（69）　青銅製の金具である。金属製容器の釣り手を本体に留めるために使用された。片口鍋の注口に付くと考えられる。

明黄色土出土遺物（Fig.8-46、巻頭図版）

第二遺構面を構成する。黒灰色土の下層にあたり、調査区南東部に分布する。

土師器

小皿ａ（１・２）　口径10.0・10.4cm、器高1.3・1.1cm、底径7.8・7.6cmを測る。底部は１が糸切り、２がヘラ切りである。

鉢（３）　口径28.6cm、器高6.7cm、底径18.6cmを測る。全体をナデで調整している。

甕（４）　底部片である。底径17.9cmに復元できる。底部円盤に体部の粘土を貼り付けた痕跡が残る。

瓦器

小椀ｃ（５）　口径8.2cm、器高2.8cm、高台径4.9cmを測る。

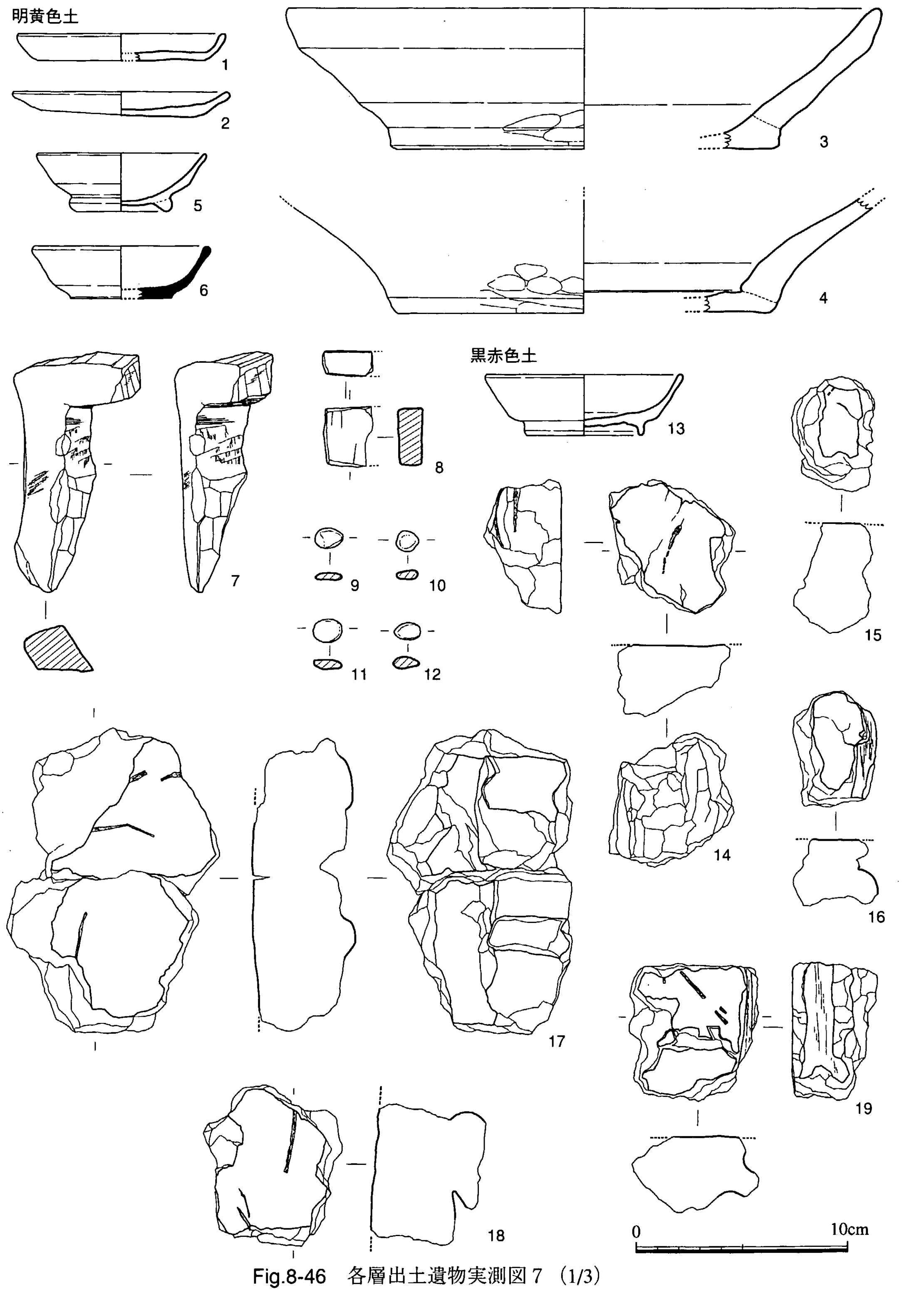


Fig.8-46　各層出土遺物実測図７（1/3）

黒赤色土

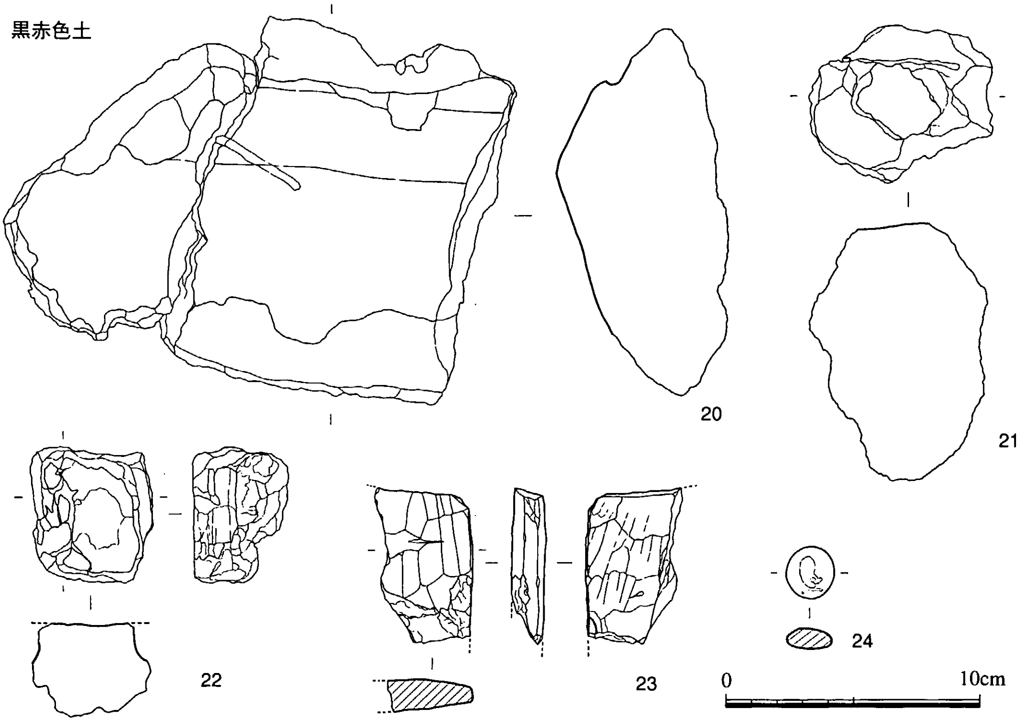


Fig.8-47　各層出土遺物実測図８（1/3）

須恵質土器

小椀ａ（６）　口径8.5cm、器高2.5cm、底径4.9cmを測る。底部は糸切り。内底は使用により平滑になっている。

石製品

鍋（７）　滑石製鍋を縦にスライスしている。二次加工を施している。

砥石（８）　方形棒状の砥石であったと考えられる。両端を欠損している。４面を使用している。淡褐黄色の砂岩である。

平玉石（９～12）　径1.3～0.8cm、厚さ0.4～0.6cmである。９は灰緑色、他は乳白灰色で石英である。

黒赤色土出土遺物（Fig.8-46・47、Pl.22・23、巻頭図版）

第三遺構面を構成している。調査区南東に分布し、8SX325に堰止められている。生活廃棄物の処分場所と考えられる。焼土塊が多量に出土した。

瓦器

小坏ｃ（13）　口径9.4cm、器高2.9cm、底径5.8cmを測る。底部はヘラ切り。

焼土塊

14～22で平坦面と竹材が観察できるものを掲げている。20は平坦面が角度を持って連続して

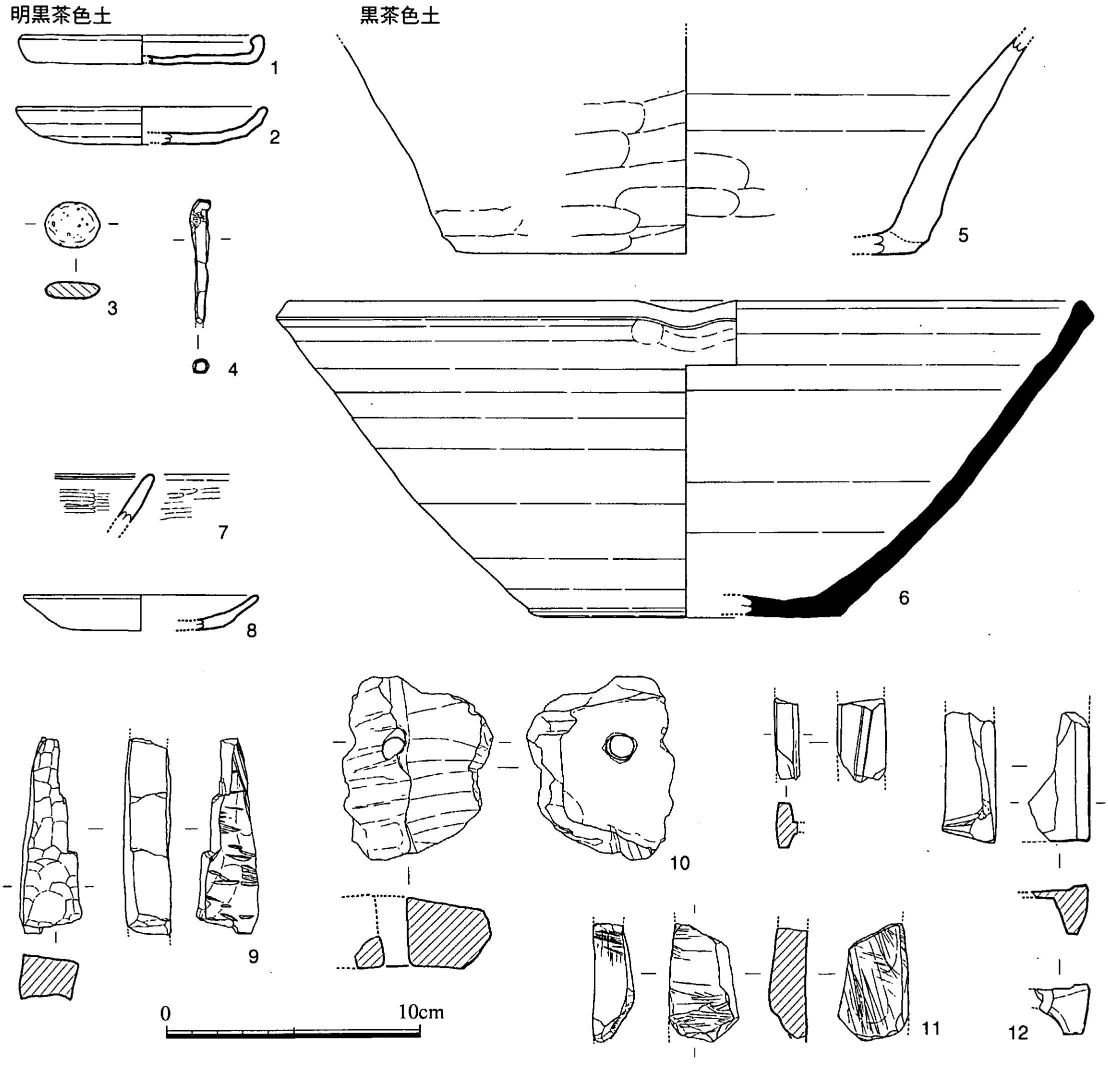


Fig.8-48　各層出土遺物実測図９（1/3）

いる。

石製品（23）　白っぽい滑石製の破片である。扁平な方形の角部分であると考えられる。鑿で削って成形している。用途は不明。

石製品

平玉石（24）　暗灰色で法量は2.0×2.0×0.8cmである。

明黒茶色土出土遺物（Fig.8-48、巻頭図版）

第三～第四遺構面のあいだの埋土である。8SX315・320の石列が乗っている。8SX230と同じ性格の土層である。

土師器

小皿ａ（１）　口径9.8m、器高1.2cm、底径8.4cmを測る。底部切り離しは不明。口縁端部が内側に折れ曲がる。搬入品と思われる。

瓦器

小皿ａ（２）　口径10.1cm、器高1.5cm、底径8.3cmを測る。底部切り離しは磨耗により不明。

石製品

平玉石（３）　灰黒色の火成岩である。法量は2.2×1.8×0.7cmである。

金属製品

釘（４）　鉄製である。ほぼ完形で長さ4.9cmを測る。

黒茶色土出土遺物（Fig.8-48、Pl.22）

第三～第四遺構面のあいだの埋土である。8SX320・325に囲まれた部分に堆積し、生活廃棄物の捨て場だったと考えられる。

土師器

鉢（５）　底径18.3cmを測る。胎土は粗く、指頭圧痕が底部付近に残る。

黒色土器

椀（７）　Ｂ類の口縁片である。

瓦器

小皿ａ（８）　口径9.3cm、器高1.4cm、底径6.5cmを測る。底部はヘラ切り。

須恵質土器

鉢（６）　片口を持つ鉢である。口径32.6m、器高12.5cm、底径12.7cmを測る。底部ヘラ切り。

陶器

硯（12）　長方形硯の陸のコーナー部分と海に向かって傾斜する部分の側縁である。外面にのみ茶褐色の釉を掛ける。胎土は褐色かかった灰色で堅緻である。コーナー部分は脚がつき角は面取りを行っている。

石製品

滑石製品（９・10）　９は鍋の破片である。二次加工は明瞭でない。10は厚さ３cm弱の板状のものに径約１cmの穴をあける。錘などの一部と考えられる。

砥石（11）　淡褐黄色の砂岩製である。両平面と側面を使用している。使用面には細長い研ぎ跡が目立つ。

黄茶色土出土遺物（Fig.8-49、巻頭図版）

第三遺構面検出時の土色名である。調査区南半で検出した。

土師器

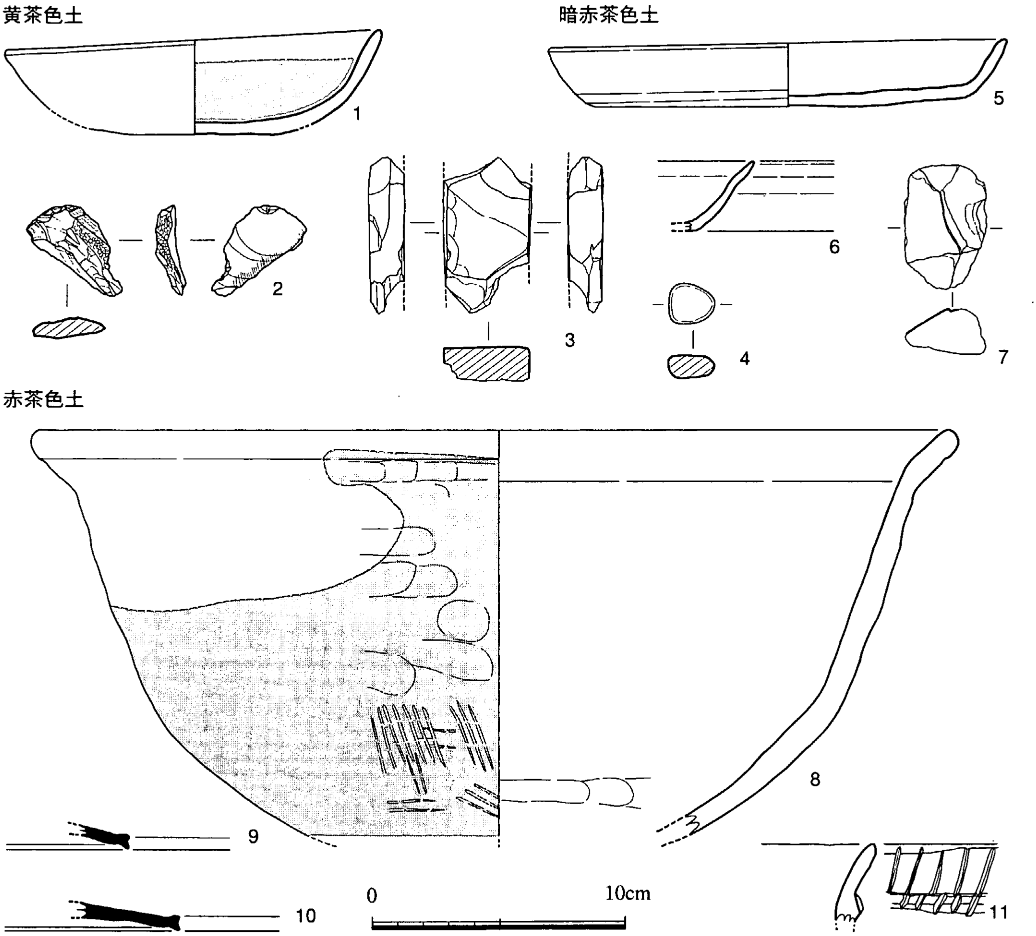


Fig.8-49　各層出土遺物実測図10（1/3）

丸底坏ａ（１）　口径15.0cm、器高3.8cmを測る。底部はヘラ切り。

石製品

砥石（３）　断面長方形の板状の砥石である。淡褐色で頁岩と考えられる。３面を使用している。

平玉石（４）　白色の石英製である。法量は1.9×1.7×1.0cmである。

剥片（５）　素材は黒色で光沢のある黒曜石である。亜角礫の表皮が残る。素材を調整する際に発生した剥片と考えられる。

暗赤茶色土出土遺物（Fig.8-49）

第三遺構面を構成する土層である。調査区南東で8SX315・320の石列の北側に分布する。

須恵器

皿ａ（５）　口径18.2m、器高2.5cm、底径14.7cmを測る。底部ヘラ切り。淡灰褐色を呈する。

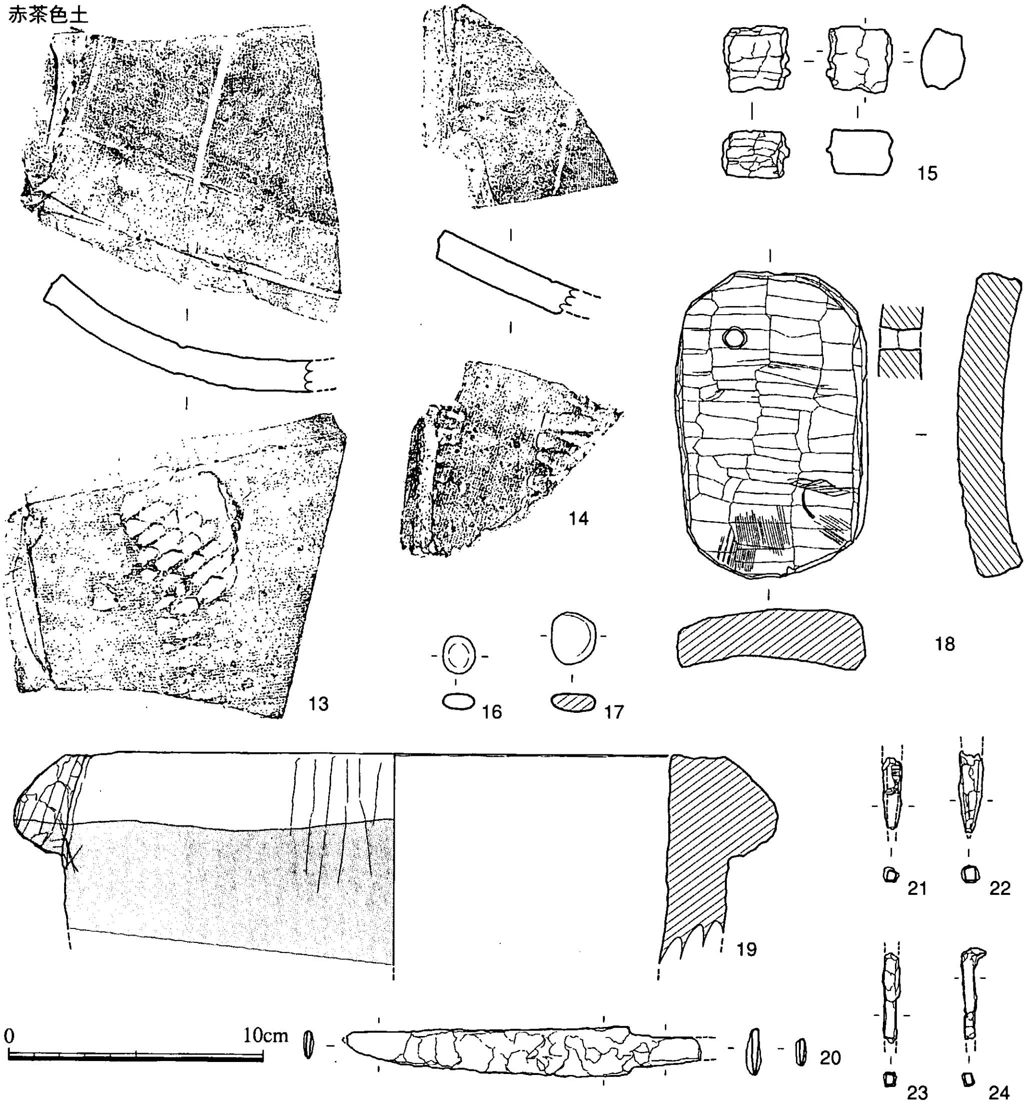


Fig.8-50　各層出土遺物実測図11（1/3）

坏ａ（６）　小片である。表面が燕脂色を呈する。肥後産と考えられる。

焼土塊

７は一部平坦面が残る破片である。

赤茶色土出土遺物（Fig.8-49・50、Pl.23、巻頭図版）

第三遺構面を構成する土層である。調査区南東で8SX315・320の石列の北側に分布する暗赤茶色土の下層である。元々は暗赤茶色土と同一のものと考えられる。

土師器

鉢（８）　口径36.8m、器高16.1+cmを測る。胎土は粗く５mm程の石粒を含む。外面は叩き

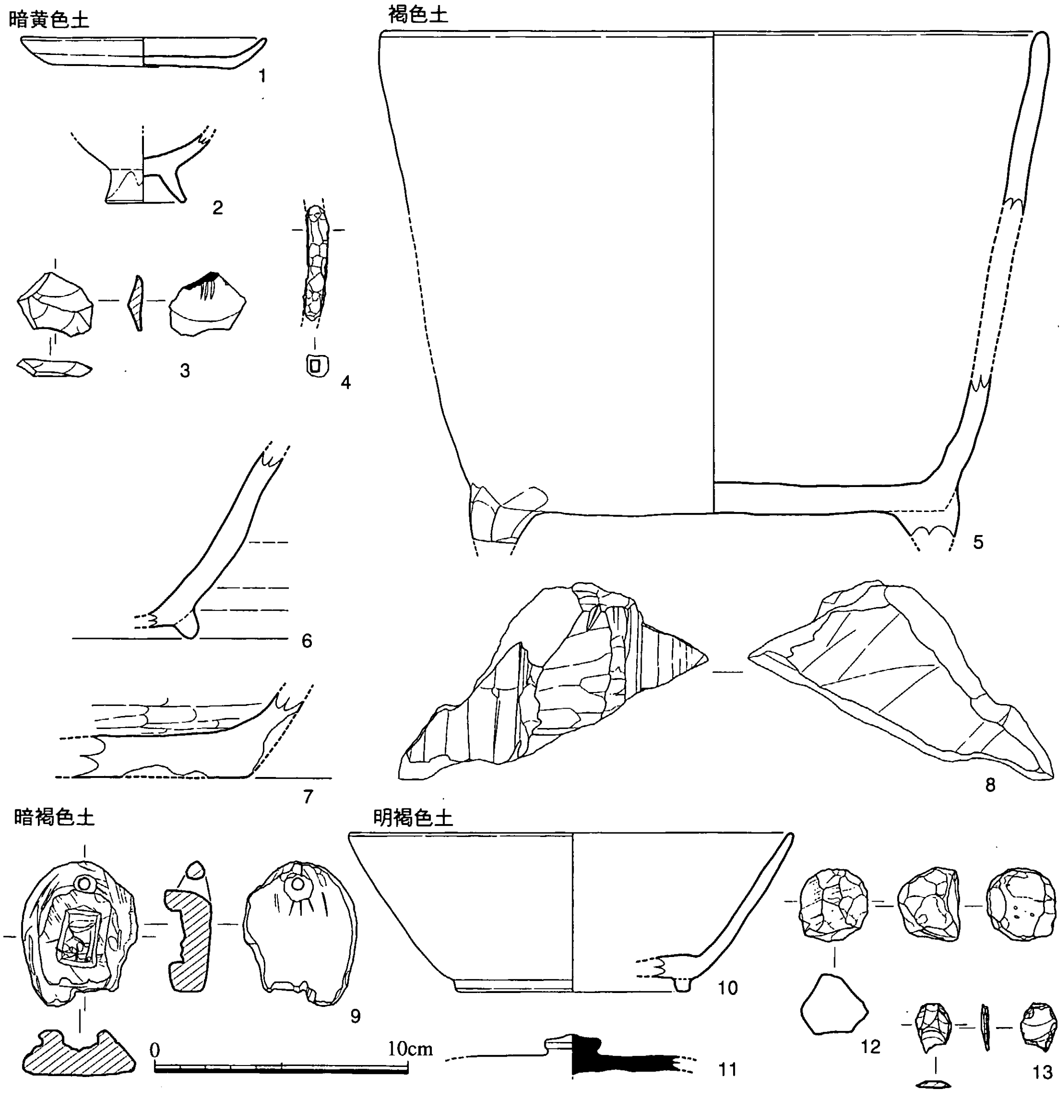


Fig.8-51　各層出土遺物実測図12（1/3）

痕をなで消している。内面は当て具の凹凸の上からナデを施す。外面には炭化物が付着している。

須恵器

蓋３（９・10）　小片である。焼成良好で灰白色をしている。

その他の土器

11は鉢の口縁部である。胎土は粗く、砂粒・雲母を多く含み、明茶色を呈する。外面には突帯が巡り、ヘラで刻み目を入れる。口縁部にも文様を入れる。縄文時代の遺物と考えられる。

瓦類

平瓦（13・14）　凸面に大きな斜格子の叩き痕を持つ。焼成良好で須恵質に焼ける。端面の処理は13が削りを、14は分割したままの状態である。凹面は布目痕が残る。

焼土塊

15は円柱状をなす。竹の凹面に挟まれていたと考えられる。スサ痕が残る。

石製品

平玉石（16・17）　径2.0～1.3cm、厚さ0.6・0.7cmを測る。灰黒色をしている。

鍋（18・19）　18は鍋の二次加工品である。鍋の体部を小判型に削り偏って円孔をあけている。円孔周辺だけ新たに整形している。法量12.2×7.7×2.0cmを測る。19は鍋の破片である。口径30.6cmに復元される。縦の突起が付く。

金属製品

刀子（20）　鍛造鉄製である。中子が途中で欠損する。

釘（21～24）　鉄製の釘である。先端か元を欠損する。

暗黄色土出土遺物（Fig.8-51、Pl.22）

第三遺構面を形成する土層である。調査区南東部に分布する。

土師器

小皿ａ（１）　口径9.8m、器高1.1cm、底径7.1cmを測る。底部は糸切り。

磁器

白磁（２）　坏の底部と考えられる。　小さく高い高台が付く。高台径3.3cmを測る。黄味を帯びた灰白色の釉が内底から体部外面にかけて掛かる。内底には目跡が残る。

石製品

３は剥片である。打面は新しい傷で欠失している。

金属製品

４は鉄製の釘と考えられる。先端と元を欠損している。

褐色土出土遺物（Fig.8-51）

第三遺構面から第四遺構面の間で検出した。拡張区の東寄りに堆積する。

土師器

鉢（６）　底部の破片である。厚い器壁に突起のような高台が付く。胎土は軟質で淡黄褐色を呈する。

火鉢（５）　深いタイプの火鉢と考えられる。口径26.7cm、底径19.6cmである。口縁内面3.5cmほど下が黒灰色に変色している。脚は１ヶ所しか残っておらず、図では両側に一本づつ描いた。類例から３

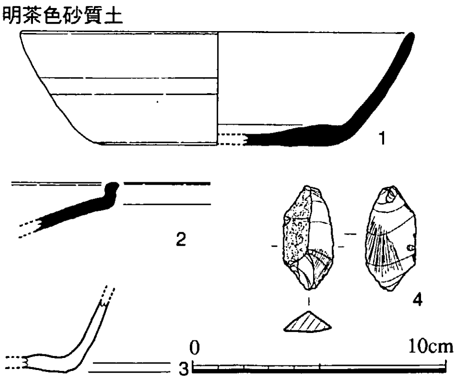


Fig.8-52　各層出土遺物実測図13（1/3）

本の可能性が高い。器高ももう少し浅い可能性がある。

石製品

鍋（7・8）　滑石製の鍋の破片である。7は底部、8は口縁部である。

暗褐色土出土遺物

(Fig.8-51)

第三から第四遺構面の間に堆積している。暗黄色土の下に広がり、西区南から拡張区に分布している。

石製品

9は滑石製の製品である。平面楕円形で中央に2×1cmほどの方形の窪みを作る。楕円の端部に円孔をあける。径は0.5cmである。用途は不明である。

明褐色土出土遺物

(Fig.8-51)

第三から第四遺構面の間に堆積している。拡張区の東側に分布する。

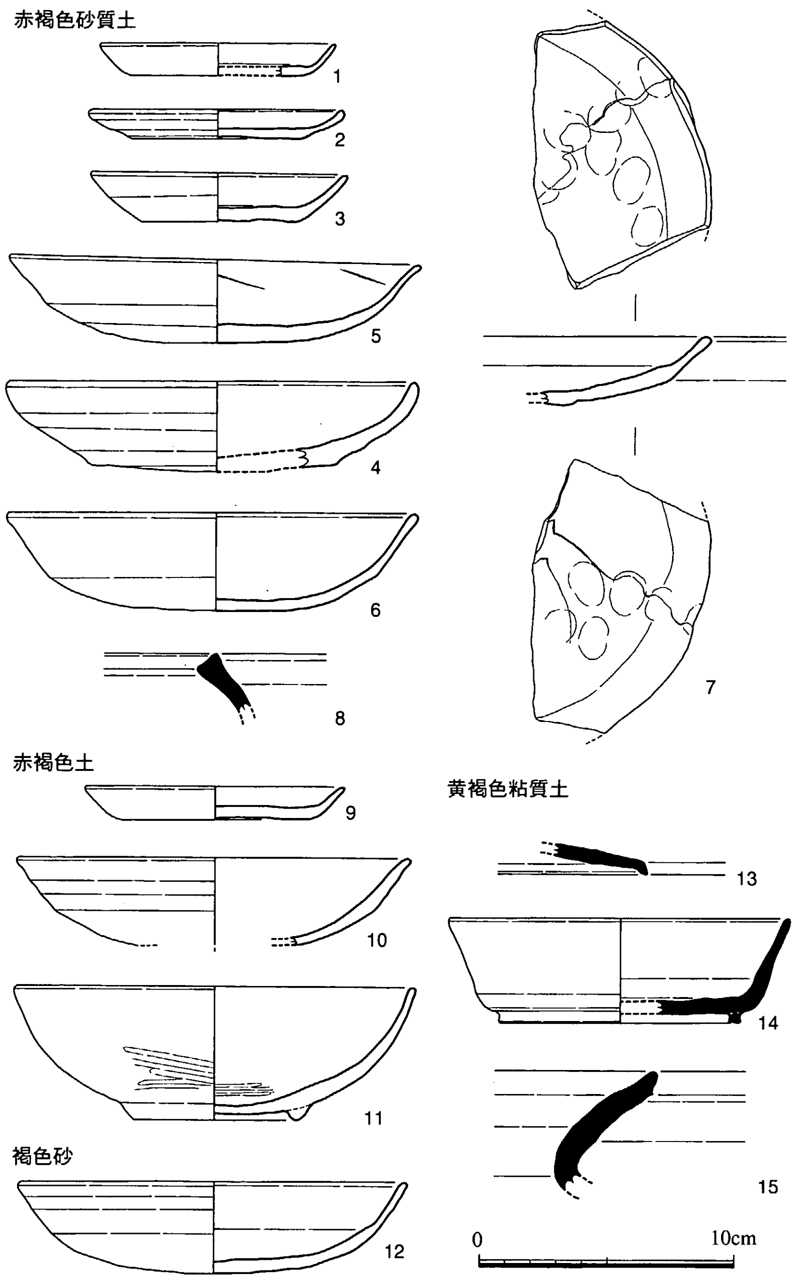


Fig.8-53　各層出土遺物実測図14（1/3）

土師器

坏c（10）　口径17.6cm、器高6.3cm、高台径9.4cmである。磨耗しており調整は不明。胎土

はきめ細かく明茶色をしている。

須恵器

蓋ｃ（11）　回転ヘラ削りされた天井部に扁平な宝珠つまみが付く。

瓦類

瓦玉（12）　瓦表面はほんの一部しか残っていない。瓦を割ることによって整形している。

石製品

13は薄い剥片を使用し全周に細かい加工を施して円形に仕上げる。黒色で光沢のある黒曜石を使用する。

明茶色砂質土出土遺物（Fig.8-52）

第三から第四遺構面の間に堆積する。東区で8SX315の北側に分布する。第四遺構面の直上にあたる。

須恵器

坏ａ（１・３）　１は口径18.5cm、器高4.5cm、底径9.8cmを測る。底部はヘラ切り後回転ヘラ削りを施す。３は底部を丁寧な回転ヘラ削りをしている。胎土は堅緻で茶灰色を呈す。表面は燕脂色をしている。肥後産と考えられる。

高坏（２）　坏部の口縁部である。暗青灰色を呈する。

石製品

４は黒曜石の剥片である。打面を上下させ剥いでいる。表皮が残っている。

赤褐色砂質土出土遺物（Fig.8-53、Pl.23）

第一遺構面を構成する。西区西側に分布するが、当該範囲は小規模で個別的な堆積状況をしている。なかでも３・５・７は集中して遺物が出土した地点にあたり、S-541として取り上げている。

土師器

小皿ａ（１・２）　口径9.4・10.2cm、器高1.3・1.1cm、底径7.1・6.7cmを測る。底部は１が糸切り、２は不明。

小皿（３）　口径10.3cm、器高2.0cm、底径6.3cmを測る。底部は糸切り。小皿ａにしては長い体部と小さい底径を持つので分けている。

坏ａ（４）　口径16.4cm、器高3.6cm、底径9.8cmを測る。厚い器壁と内湾する体部を持つ。底部切り離しは不明。淡茶色を呈する。

丸底坏ａ（５～７）　口径15.5・16.4cm、器高3.3・3.9cmを測る。底部はヘラ切り。体部内面にミガキｂが施される。７は成形後裂けたものを張り合わせて焼成している。

須恵器

鉢（８）　内湾する口縁部の破片である。鉄鉢形に復元される。

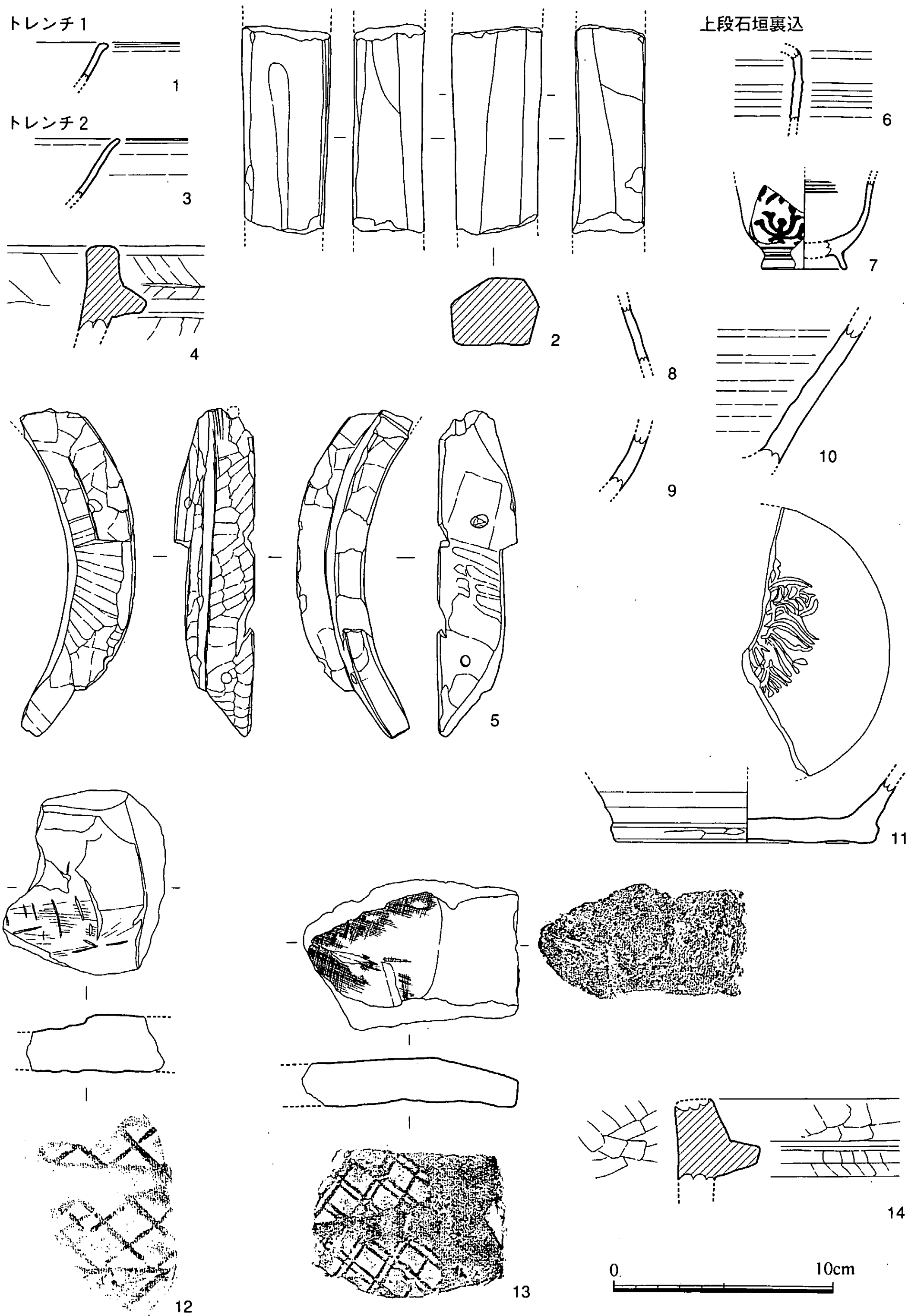


Fig.8-54　トレンチ及び上段石垣出土遺物実測図（1/3）

赤褐色土出土遺物（Fig.8-53）

第三から第四遺構面の間に堆積している。西区西側に分布している。

土師器

小皿ａ（９）　口径10.4cm、器高1.3cm、底径7.3cmを測る。底部は糸切り。

丸底坏（10）　口径15.8cmを測る。体部外面に指頭圧痕がある。高台の有無は不明。

瓦器

椀ｃ（11）　口径16.1cm、器高5.3cm、底径6.5cmを測る。体部内外から外底部までミガキｃを施す。

褐色砂出土遺物（Fig.8-53）

第三から第四遺構面の間に堆積している。西区西側に分布している。赤褐色土の下層である。

土師器

丸底坏ａ（12）　口径15.4cm、器高3.7cmを測る。底部はヘラ切り。

黄褐色粘質土出土遺物（Fig.8-53、Pl.23）

第四遺構面を形成する。地山直上の堆積である。とぎれながらも西区から東区へ広く分布する。

須恵器

蓋３（13）　白灰色をした蓋の破片である。口縁部には重ね焼きの痕が残る。

坏ｃ（14）　口径13.6cm、器高4.2cm、底径9.6cmを測る。底部処理はヘラ切りのままである。

甕（15）　口縁部の破片である。焼成良好で明灰色を呈する。

トレンチ１・２出土遺物（Fig.8-54、巻頭図版）

１・２はトレンチ１出土。他はトレンチ２出土である。

磁器

１は椀または坏の口縁部である。胎土は淡灰褐色を呈し、淡緑灰色の釉が掛かる。３は高麗青磁椀のIII類と考えられる。

石製品

２は六角柱状の砥石である。全面を使用している。一面に長辺に沿ったへこみがある。茶灰色で砂岩と考えられる。

４・６は滑石製鍋とその二次加工品である。６は口縁近くを顎に沿って削り、複雑に切断している。円孔も二ヶ所に空けられている。用途は不明である。

上段石垣内出土遺物（Fig.8-54）

磁器

６は広東系白磁の水注と考えられる。淡黄白色の胎土に淡黄白色の釉が掛かる。７は染付の椀である。高台径4.0cmを測る。

下段石垣裏込

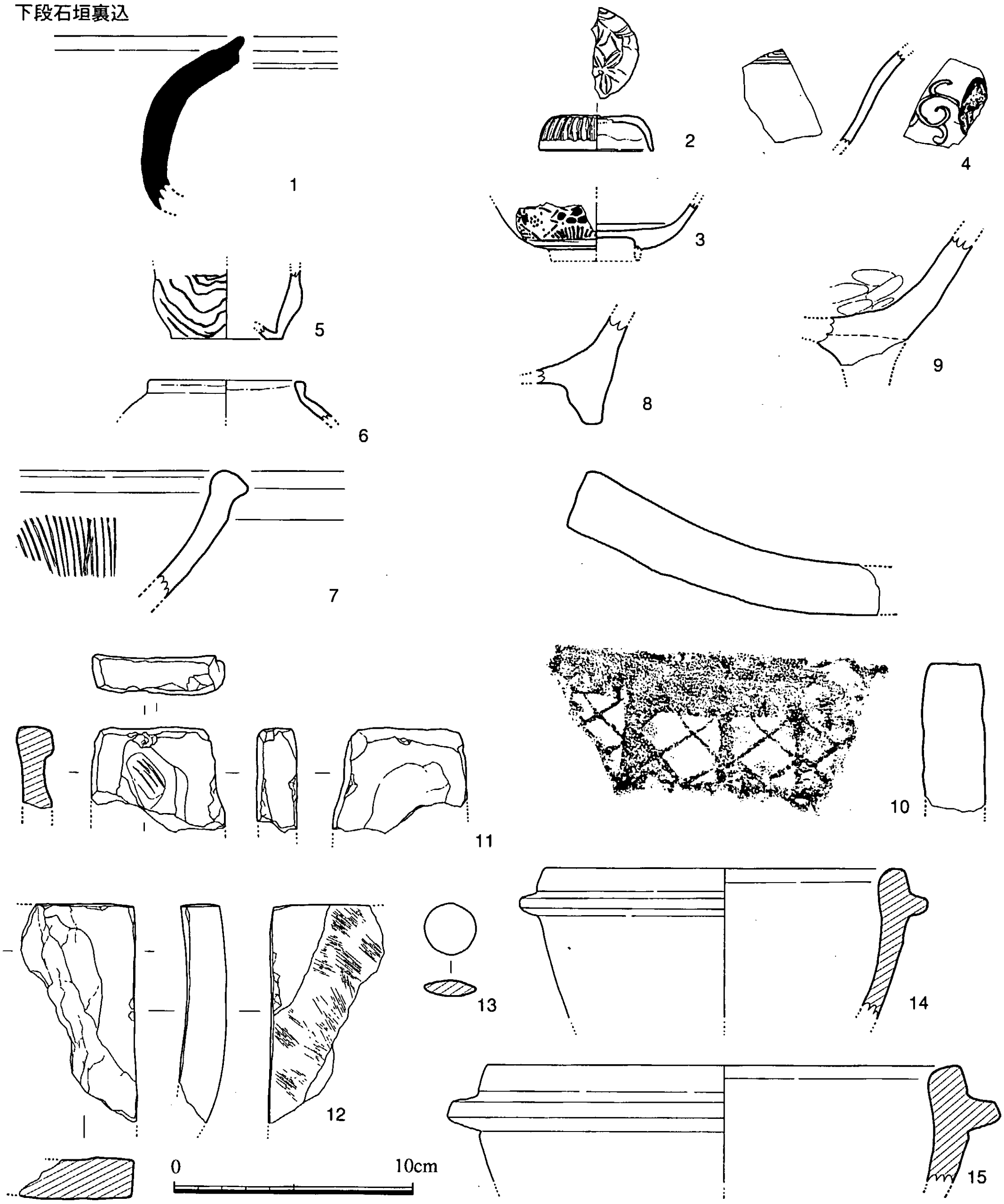


Fig.8-55　下段石垣出土遺物実測図（1/3）

陶器

８は甕の体部である。淡黄褐色の胎土に薄い透明釉がかかる。９は盤の底部である。内底に草花文と思われるスタンプがある。内面に飴色の釉がかかる。中国南部産と考えられる。

瓦類

10は平瓦で大きな格子の叩き痕がつく。11は二重斜格子の叩き痕をもつ平瓦である。

石製品

11は滑石製鍋の口縁付近の破片である。

下段石垣内出土遺物（Fig.8-55）

須恵器

１は甕の口縁である。淡青灰色を呈する。

磁器

２は青白磁合子の蓋である。口径4.8cm、器高1.5cmを測る。３・４は染付である。３は椀、４は鉢と考えられる。５は上げ底の小壺と考えられる。底径4.8cmである。金泥で上絵付けをしている。胎土は淡乳白色、釉は透明な淡緑白色である。

陶器

６は黒釉の小壺と考えられる。口縁部は露胎になっている。口径6.8cmを測る。７はすり鉢の口縁である。

瓦質土器

８・９とも火鉢の底部と考えられる。９は脚が欠損している。

瓦類

10は平瓦片である。端面はヘラ削りしている。

石製品

11・12は滑石製の長方形板状のものである。11は1.7cmの厚みを持ち、中央におおきな窪みを作っている。用途は不明である。12は板状にしただけでそれ以上の加工は見あたらない。どちらも全体のカーブの具合から鍋からの転用品と思われる。

13は碁石の黒石である。径2.2cm、厚さ0.6cmをはかる。断面楕円形を呈する。

14・15は滑石製鍋の破片である。口径15.2・20.2cmと小型である。

調査区内出土遺物（Fig.8-56）

１・２ともに安山岩製の石匙である。１は縦長の剥片を素材に周縁から丁寧に成形している。長さ6.5cm、幅3.9cm、厚み0.5cmを測る。S-155出土。２は素材剥片に粗く加工を施し刃と抉りを付けている。両端部は欠損している。幅3.6cm、厚み0.7cmを測る。S-523出土。

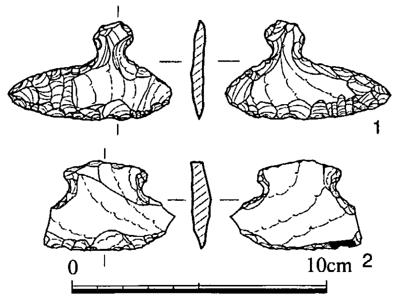


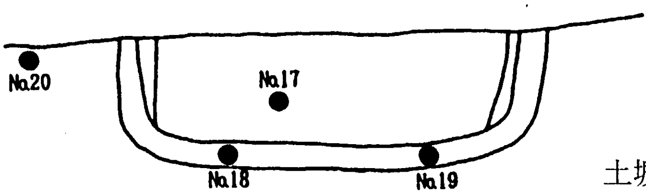
Fig.8-56　調査区内出土遺物実測図（1/3）

5．残存脂肪分析

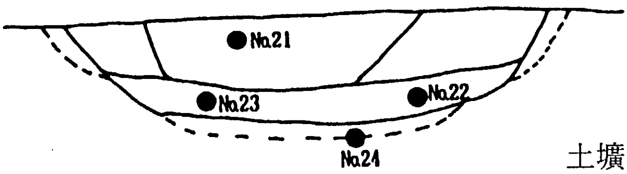
帯広畜産大学生物資源化学科　　中野益男
(株) ズコーシャ総合科学研究所　中野寛子，明瀬雅子
長田正定

動植物を構成している主要な生体成分にタンパク質、核酸、糖質（炭水化物）および脂質（脂肪・油脂）がある。これらの生体成分は環境の変化に対して不安定で、圧力、水分などの物理的作用を受けて崩壊してゆくだけでなく、土の中に住んでいる微生物による生物的作用によっても分解してゆく。これまで生体成分を構成している有機質が完全な状態で遺存するのは、地下水位の高い低地遺跡、泥炭遺跡、貝塚などごく限られた場所にすぎないと考えられてきた。最近、ドイツ新石器時代後期にバター脂肪が存在していたこと[(1)]、古代遺跡から出土した約2千年前のトウモロコシ種子[(2)]、約5千年前のヘーゼルナッツ種子[(3)]に残存する脂肪の脂肪酸は安定した状態に保持されていることがわかった。このように脂肪は微量ながら比較的安定した状態で千年・万年という長い年月を経過しても変化しないで遺存することが判明した[(4)]。

脂質は有機溶媒に溶けて、水に溶けない成分を指している。脂質はさらに構造的な違いによって誘導脂質、単純脂質および複合脂質に大別される。これらの脂質を構成している主要なクラス（種）が脂肪酸であり、その種類、含量ともに脂質中では最も多い。その脂肪酸には炭素の鎖がまっすぐに延びた飽和型と鎖の途中に二重結合をもつ不飽和型がある。動物は炭素数の多い飽和型の脂肪酸、植物は不飽和型の脂肪酸を多く持つというように、動植物の種ごとに固有の脂肪酸を持っている。ステロールについても、動物性のものはコレステロール、植物性のものはシトステロール、微生物はエルゴステロールというように動植物に固有の特徴がある。従って、出土遺物の脂質の種類およびそれらを構成している脂肪酸組成と現生動植物のそれと



土壙 S -301



土壙 S -601

Fig.8-57　試料採取地点

を比較することによって、目に見える形では遺存しない原始古代の動植物を判定することが可能である。

このような出土遺物・遺構に残存する脂肪を分析する方法を「残存脂肪分析法」という。この「残存脂肪分析法」を用いて条坊跡遺跡および原遺跡から出土した遺構の性格を解明しようとした。

1．土壌試料

原遺跡は中世のものと考えられているが、それ以上の細かい推定年代は不明である。原遺跡では第８次調査区で検出された土壙内外から土壌試料を採取した。各土壙内外の試料採取地点をFig.8-57に示す。No.17～No.20は土壙8SK301、No.21～No.24は土壙8SK601から採取した。

2．残存脂肪の抽出

原遺跡の土壌試料119～280gに３倍量のクロロホルム-メタノール（２：１）混液を加え、超音波浴槽中で30分間処理し残存脂肪を抽出した。処理液を濾過後、残渣に再度クロロホルムーメタノール混液を加え再び30分間超音波処理をする。この操作をさらに２回繰り返して残存脂肪を抽出した。得られた全抽出溶媒に１％塩化バリウムを全抽出溶媒の４分の１容量加え、クロロホルム層と水層に分配し、下層のクロロホルム層を濃縮して残存脂肪を分離した。

残存脂肪の抽出量をTab.8-1に示す。抽出率は0.0008～0.0091％、平均0.0037％であった。この値は全国各地の遺跡から出土した土壌、石器、土器等の試料の平均抽出率0.0010～0.0100％と同程度であった。

Tab.8-1　土壌中に残存する脂肪の抽出量

試料No.	採取地点	湿重量（g）	全脂質（mg）	抽出率（%）
17	S-301①	118.6	10.8	0.0091
18	S-301②	197.3	7.5	0.0038
19	S-301③	210.7	4.0	0.0019
20	S-301④	171.9	11.2	0.0065
21	S-601①	238.6	5.8	0.0024
22	S-601②	279.8	5.5	0.0020
23	S-601③	191.5	5.1	0.0027
24	S-601④	265.4	2.0	0.0008

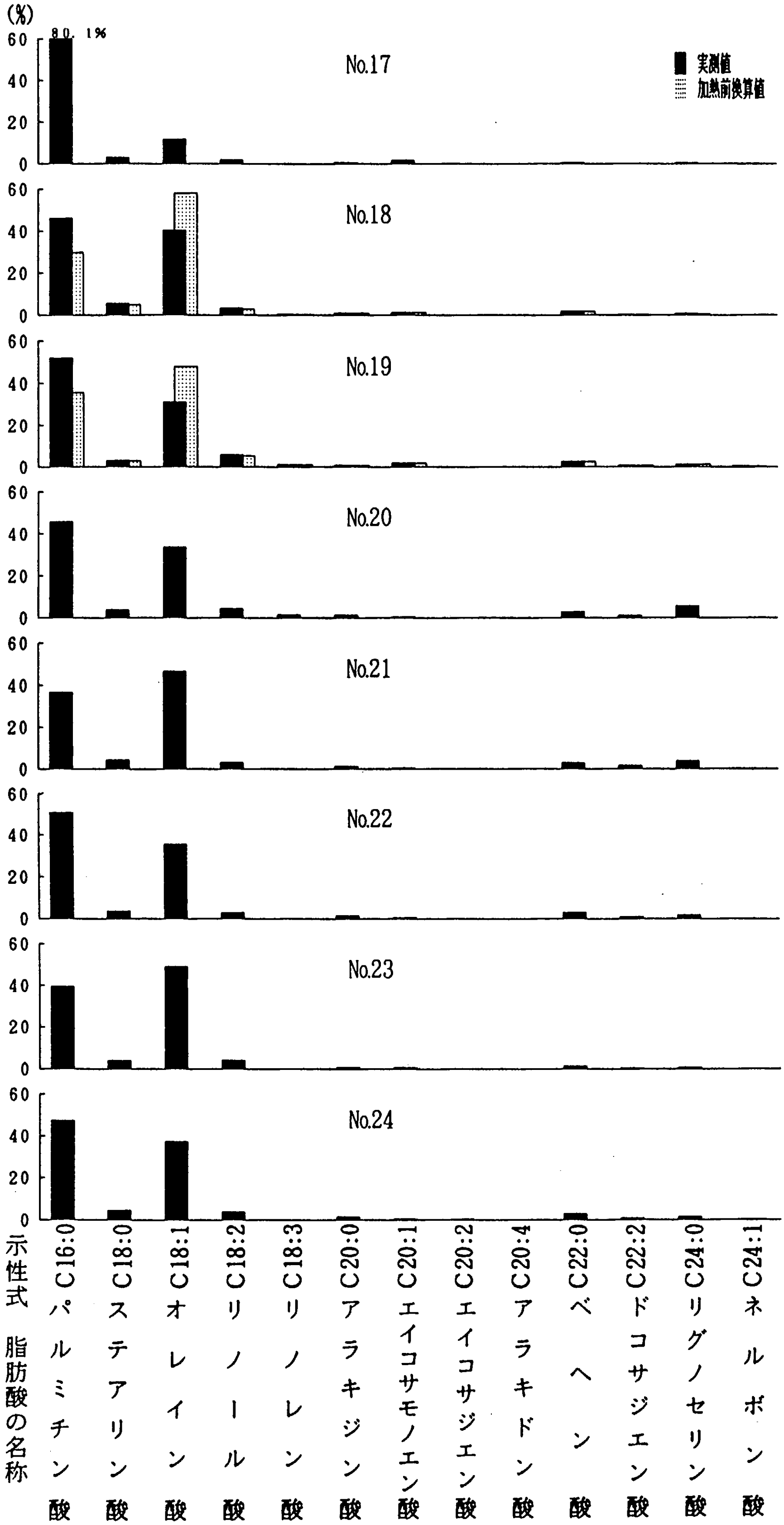


Fig.8-58　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成

Tab.8-2　土壌試料に分布するコレステロールとシトステロールの割合

試料No.	コレステロール（%）	シトステロール（%）	コレステロール/シトステロール
17	4.53	13.19	0.34
18	4.17	15.51	0.27
19	2.51	22.72	0.11
20	2.90	18.12	0.16
21	3.35	15.84	0.21
22	5.94	24.99	0.24
23	3.31	23.01	0.14
24	6.62	30.63	0.22

残存脂肪をケイ酸薄層クロマトグラフィーで分析した結果、脂肪は単純脂質から構成されいた。このうち遊離脂肪酸が最も多く、次いでグリセロールと脂肪酸の結合したトリアシルグリセロール（トリグリセリド）、ステロールエステル、ステロールの順に多く、微量の長鎖炭化水素も存在していた。

3．残存脂肪の脂肪酸組成

分離した残存脂肪に５％メタノール性塩酸を加え125℃封管中で２時間分解しメタノール分解によって生成した脂肪酸メチルエステルをクロロホルムで分離し、さらにジアゾメタンで遊離脂肪酸を完全にメチル化してからヘキサンーエチルエーテルー酢酸（80：30：1）またはヘキサンーエーテル（85：15）を展開溶媒とするケイ酸薄層クロマトグラフィーで精製後ガスクロマトグラフィーで分析した[5]。

残存脂肪の脂肪酸組成をFig.8-58に示す。残存脂肪から12種類の脂肪酸を検出した。このうちパルミチン酸（C16：0）、ステアリン酸（C18：0）、オレイン酸（C18：1）、リノール酸(C18：2)、アラキジン酸（C20：0）、エイコサモノエン酸（C20：1）、ベヘン酸（C22：0）、リグノセリン酸（C24：0）、ネルボン酸（C24：1）の9種類の脂肪酸をガスクロマトグラフィー一質量分析により同定した。

各試料中の脂肪酸組成について見てみた。試料の一部は焼土であるため脂肪酸は加熱変変性を受けていると考えられる。脂肪酸は加熱300℃以上では大きく変性する。特にパルミチン酸とオレイン酸は加熱変性後に著しい変化があり、オレイン酸はパルミチン酸へと移行する。そこで標準試料を用いて求めた熱変性の係数で割って、実測値ではない試料の加熱前の脂肪酸組

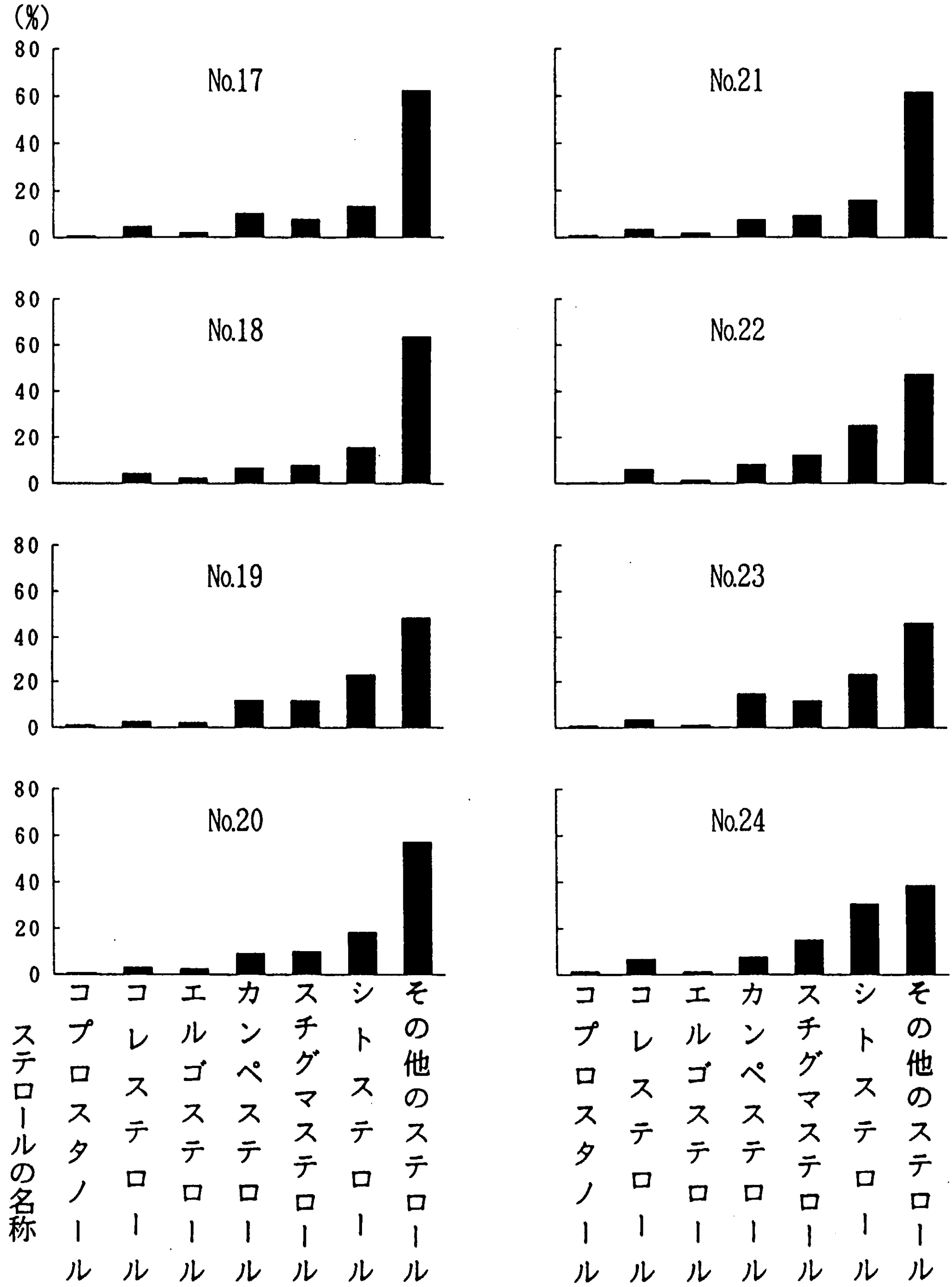


Fig.8-59　試料中に残存する脂肪のステロール組成

成も算出した。以下の比較検討は加熱変性後の値、すなわち実測値で行った。

一般に考古遺物にはパルミチン酸が多く含まれている。これは長い年月の間にオレイン酸、リノール酸といった不飽和脂肪酸の一部が分解しパルミチン酸が生成するためで、主として植物遺体の土壌化に伴う腐植物から来ていると推定される。またオレイン酸の分布割合の高いものとしては、動物性脂肪と植物性脂肪の両方が考えられ、植物性脂肪では特に根、茎、種子に多く分布するが、動物脂肪の方が分布割合は高い。リノール酸は主として植物種子・葉に多く分布する。

一方、高等動物、特に高等動物の臓器、脳、神経組織、血液、胎盤に特徴的にみられる炭素数20以上のアラキジン酸、ベヘン酸、リグノセリン酸などの高級脂肪酸はそれら３つの合計含有率が約2～10％であった。通常の遺跡出土土壌中での高級脂肪酸含有率はアラキジン酸、ベヘン酸、リグノセリン酸3つの合計で4～10％ぐらいである。

炭素数18までの中級脂肪酸の脂肪酸組成を見てみると、試料No.21とNo.23を除くすべての試料中で主要な脂肪酸はパルミチン酸で約46～80％分布していた。次いでオレイン酸、ステアリン酸の順に多く分布していた。試料No.21とNo.23では主要な脂肪酸がオレイン酸で、次いでパルミチン酸、ステアリン酸の順に多く分布していた。また、炭素数20以のアラキジン酸、ベヘン酸、リグノセリン酸の合計含有率は約１～10％であった。

以上、原遺跡の試料中では主要な脂肪酸が一部の試料を除きパルミチン酸で、高級脂肪酸は少なめであった。

４．残存脂肪のコレステロール組成

残存脂肪のステロールをヘキサン－エチルエーテル-酢酸（80：30：1）を展開溶媒とするケイ酷薄層クロマトグラフィーで分離・精製後、ピリジン-無水酢酸（1：1）を窒素気流下で反応させてアセテート誘導体にしてからガスクロマトグラフィーにより分析した。残存脂肪の主なステロール組成をFig.8-59に示す。残存脂肪から20種類前後のステロールを検出した。このうちコプロスタノール、コレステロール、エルゴステロール、カンペステロール、スチグマステロール、シトステロールなど８種類のステロールをガスクロマトグラフィー質量分析により同定した。

コプロスタノールの分布により試料中での哺乳動物の存在を確認することができる他に、コプロスタノールが10％以上含まれていると、試料中に残存している脂肪の動物種や性別、遺体の配置状況などが特定できる場合がある(6)。また、1％程度のコプロスタノールは通常の遺跡出土土壌中にも含まれている場合がある。今回の分析ではコプロスタノール含有量が少ないため、コプロスタノールの分布割合から直接ヒトを判定することはできなかった。

一般に動物遺体の存在を示唆するコレステロールとシトステロールの分布比の指標値は土壌

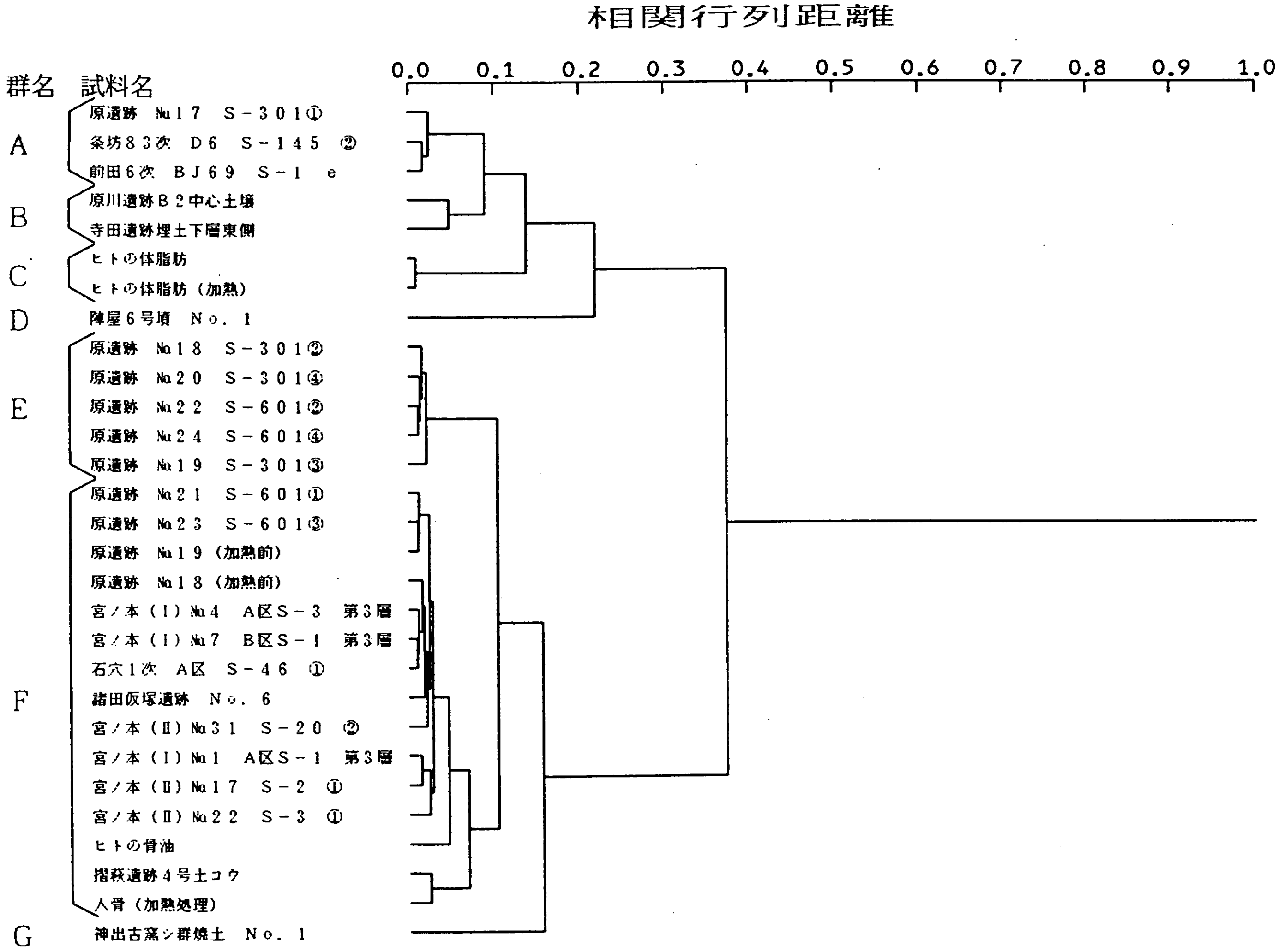


Fig.8-60 試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図

で0.6以上[7]、土器・石器・石製品で0.8～23.5をとる[8・9]。土壌試料のコレステロールとシトステロールの分布比をTab.8-2に示す。

原遺跡の試料中のステロール組成を見てみると、動物由来のコレステロールは約3～7%分布していた。植物由来のシトステロールは約13～25%，堅果植物由来のカンペステロールは約7～12%、スチグマステロールは約8～15%分布していた。微生物由来のエルゴステロールは約1～2%、哺乳動物の場および糞便由来のコプロスタノールは試料No.18で検出されず、他のすべての試料中で約0.3～1%分布していた。また、コレステロールとシトステロールの分布比はすべての試料中で0.6以下であった。

以上、原遺跡の試料中では堅果植物由来のカンペステロールとスチグマステロールが若干多めであった、他のすべてのステロール類が通常の遺跡出土土壌並みか少なめに含まれていた。コレステロールとシトステロールの分布比はすべての試料中で0.6以下で、試料中に動物遺体または動物由来の脂肪が残存していないことを示唆していた。

5. 脂肪酸組成の数理解析

残存脂肪の脂肪酸組成をパターン化し、重回帰分析により各試料間の相関係数を求め、この相関係数を基礎にしてクラスター分析を行って各試料間の類似度を調べた。同時に同じ太宰府市内の遺跡で出土土壙を土壙墓と判定した大宰府条坊跡、前田遺跡および出土土壙を再葬墓と判定した石穴遺跡[10]、宮ノ本遺跡第5次調査区（宮ノ本遺跡（I））[11]、宮ノ本遺跡第7次調査区（宮ノ本遺跡（II））[12]、同じ福岡県内の遺跡で出土土壙を再葬墓と判定した諸田仮塚遺跡[13]、出土土壙を土壙墓と判定した兵庫県寺田遺跡[14]、出土土器を幼児埋葬用甕棺と判定した静岡県原川遺跡[15]、出土した埴輪棺にヒト遺体が埋葬されていたと判定した東京都陣屋6号墳[16]、ヒトの体脂肪、出土土壙を再葬墓と判定した宮城県摺萩遺跡[17]、出土した焼土面およびその周辺で動物遺体を焼いたと判定した兵庫県神出古窯址群[18]、ヒトの骨油試料に残存する脂肪酸の類似度とも比較した。原遺跡の各試料問の脂肪酸組成の類似度をパターン間距離にした樹状構造図をFig.8-60に示す。

原遺跡は、土壙S-301の試料No.17が大宰府条坊跡第83次調査区と前田遺跡の試料と共にA群を形成した。A群は他の対照試料のうちヒト遺体を直接埋葬したことに関わる遺跡の試料が形成するB～D群と相関行列距離0.25以内で類似していた。原遺跡の土壙S-301の試料No.17を除くすべての試料と土壙S-601の試料No.22、No.24は相関行列距離0.05以内でE群を形成し、非常によく類似していた。土壙S-601の試料No.21、No.23は他のヒトの骨のみを埋葬したことに関わる遺跡の試料と共に相関行列距離0.1以内でF群を形成した。E～G群は相関行列距離0.15以内で互いに類似していた。

以上、原遺跡の試料はヒトの骨のみを埋葬したことに関わる遺跡の試料と類似していた。この結果は先の脂肪酸分析、コレステロール分析の結果と一致している。また、一部の試料は焼

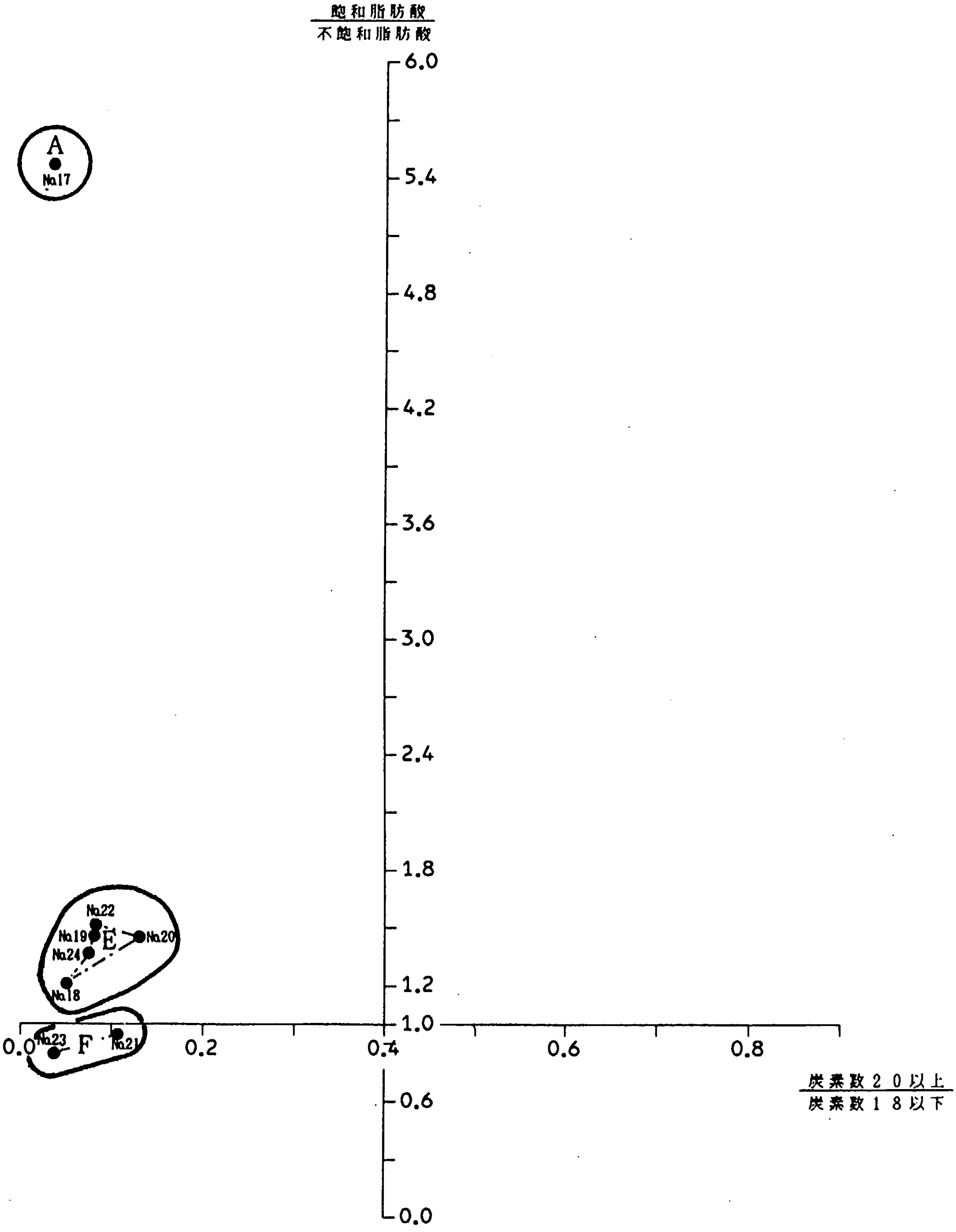


Fig.8-61　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特異性相関

土試料であったが、これらの試料は神出古窯址群の焼土試料と特に類似しているということはなかった。

6. 脂肪酸組成による種特異性相関

残存脂肪の脂肪酸組成から種を特定するために、中級脂肪酸（炭素数16のパルミチン酸から炭素数18のステアリン酸、オレイン酸、リノール酸まで）と高級脂肪酸（炭素数20のアラキジン酸以上）との比をX軸に、飽和脂肪酸と不飽和脂肪酸との比をY軸にとり種特異性相関を求めた。この比例配分により第1象限の原点から離れた位置に高等動物の血液、脳、神経組織、臓器等に由来する脂肪、第1象限から第2象限の原点から離れた位置にヒト胎盤、第2象限の原点から離れた位置に高等動物の体脂肪、骨油に由来する脂肪がそれぞれ分布する。第2象から第3象限にかけての原点付近に植物と微生物、原点から離れた位置に植物腐植、第3象から第4象限に移る原点から離れた位置に海産動物が分布する。

土壌試料の残存脂肪から求めた相関状況をFig8-61に示す。原遺跡の試料は試料No.17が第2象限内の原点から遠く離れた位置に単独で分布し、A群を形成した。試料No.18～No.20、No.22、No.24は第2象限内のX軸に近い位置に分布し、E群を形成した。試料No.21、No.23は第3象限内のX軸に近い位置に分布し、F群を形成した。これらE、F群の分布位置は試料中に残存している脂肪が高等動物の体脂肪や骨油に由来することを示唆している。F群の分布位置は若干植物腐植土にも由来することを示唆している。

以上、原遺跡のすべての試料中に残存する脂肪は、高等動物の体脂肪や骨油に残存する脂肪と類似し、土壙S-601の土壙外試料N0.21、土壙底面試料N0.23に残存する脂肪は植物腐植土中に残存する脂肪とも若干類似していることがわかった。

7. 総括

原遺跡から出土した遺構の性格を判定するために、遺構内外の土壌試料の残存脂肪分析を行った。残存する脂肪酸分析の結果、原遺跡では主要な脂肪酸はパルミチン酸で高級肪酸は少なかった。

残存する脂肪酸組成の分布に基づく数理解析の結果クラスター分析からは、原遺跡の試料はヒトの骨のみを埋葬したことに関わる遺跡の試料と類似していることがわかった。種特異性相関からは、原遺跡の試料は、試料中の脂肪が高等動物の体脂肪や骨油に由来することがわかった。

残存するステロール分析の結果、原遺跡の試料中にはコレステロールがあまり含まれてはおらず、コレステロールとシトステロールの分布比もすべて値が小さく、試料中に動物遺体が存在しないことを示唆していた。

以上の成績から、原遺跡の土壙S-301と土壙S-601にはヒトの骨のみが埋葬された可能性が強いことがわかった。土壙内の焼土は火葬施設と推定された遺跡試料の焼土とは一致しないことから、原遺跡の土壙が火葬施設であると判定することはできなかった。

参考文献

(1) R. C. A. Rottlander and H. Schlichtherle:「Food identificatiol of samples from archaeological sites」,『Archaeo. Physika.』, 10巻, 1979, pp260.

(2) D. A. Priestley, W. C. Galinat and A. C. Leopold:「Preservation of polyunsaturated fatty acid in ancient Anasazi maize seed」,『Nature』, 292巻, 1981, pp146.

(3) R. C. A. Rottlander and H. Schlichtherle:「Analyse fruhgeschichtlicher Gefassinhalte」,『Natur wissenschaften』, 10巻, 1983, pp33.

(4) 中野益男：「残存脂肪分析の現状」,『歴史公論』, 第10巻 (6), 1984, pp124.

(5) M.Nakano and W. Fischer:「The Glycolipids of Lactobacillus casei DSM120021」,『Hoppe-Seyler's Z. Physiol. Chellm.』, 358巻, 1977, pp1439.

(6) 中野益男：「残存脂肪酸による古代復元」,『講演収録集一新しい研究法は考古学になにをもたらしたか』, 第3回「大学と科学」公開シンポジウム組織委員会編, 1989, pp114.

(7) 中野益男, 伊賀 啓, 根岸 孝, 安本教博, 畑 宏明, 矢吹俊男, 佐原 真, 田中 琢：「古代遺跡に残存する脂質の分析」,『脂質生化学研究』, 第26巻, 1984, pp40.

(8) 中野益男：「真脇遺跡出土土器に残存する動物油脂」,『真脇遺跡一農村基盤総合設備事業能都東地区真脇工区に係わる発掘調査報告書』, 能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団, 1986, pp401.

(9) 中野益男, 根岸 孝, 長田正宏, 福島道広, 中野寛子：「ヘロカルウス遺跡の石器製品に残存する脂肪の分析」,『ヘロカルウス遺跡』, 北海道文化財研究所調査報告書, 第3集, 1987, pp191.

(10) 中野寛子, 明瀬雅子, 長田正宏, 中野益男：「前田遺跡抽出資料残存脂肪分析」,『未発表』, 福岡県太宰府市教育委員会.

(11) 中野寛子, 明瀬雅子, 長田正宏, 中野益男：「宮ノ本遺跡抽出試料残存脂肪分析 (I)」,『未発表』, 福岡県太宰府市教育委員会.

(12) 中野寛子, 明瀬雅子, 長田正宏, 中野益男：「宮ノ本遺跡抽出試料残存脂肪分析 (II)」,『未発表』, 福岡県太宰府市教育委員会.

(13) 中野寛子, 明瀬雅子, 長田正宏, 中野益男：「諸田仮塚遺跡の土坑に残存する脂肪の分析」,『未発表』, 福岡県教育庁.

(14) 中野益男, 中野寛子, 福島道広, 長田正宏：「寺田遺跡土壙墓伏遺構に残存する脂肪の分析」,『未発表』, 兵庫県芦屋市教育委員会.

(15) 中野益男, 幅口 剛, 福島道広, 中野寛子, 長田正宏：「原川遺跡の土器棺に残存する脂肪の分析」,『原川遺跡I一昭和62年度袋井バイパス (掛川地区) 埋蔵文化財発掘調査報告書』, 第17集, (財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所, 1988, pp79.

(16) 中野寛子, 福島道広, 長田正宏, 中野益男：「陣屋6号墳周溝内の埴輪棺に残存する脂肪の分析」,『未発表』, 東京都世田谷区教育委員会.

(17) 中野益男, 福島道広, 中野寛子, 長田正宏：「摺萩遺跡の遺構に残存する脂肪の分析」,『未発表』, 宮城県教育委員会.

(18) 中野益男, 中野寛子, 福島道広, 長田正宏：「神出古窯址群遺構の焼土に残存する脂肪の分析」,『未発表』, 兵庫県多可郡妙見山麓遺跡調査会.

6．小結

a．遺跡の年代について

調査地での人の活動の跡は縄文時代から近代までに亘る。縄文時代は遺物のみの出土である。

次に須恵器を中心とした奈良時代の遺物である。地山直上の黄褐色粘質土に包含されることが多いようであるが、少量である。またこの頃より肥後産の須恵器など搬入土器が確認されている。その後間を置いてXII・XIII（大宰府分類）期の遺物から少しずつ増加し、XIV・XV期で急に増加する。14世紀代には活動を停止したと考えられる。その後、近世後半から再び活動が始まり近代にかけて造作を行い耕地化した。以下遺構面毎の変遷を簡単にまとめる。

第四遺構面を構成する土層にはC期（陶磁器分類）、またはXII・XIII期の遺物を含む。

第三～第四遺構面間の堆積土はXIV・XV期のものが中心となる。

第三遺構面もXIV・XV期のものを出土する。

第三～第二遺構面にかけても遺物の変化はあまりない。

第二～第一遺構面までの間はXVII・XVIII期の遺物に変化する。特に黒灰色土で顕著である。

第一遺構面はXVIII期を中心とし、8SX001・SD060・SX160・SX165が14世紀代以降に埋没している。8ST005は第一遺構面検出であるが遺物をみるとXIV・XV期の所産と考えられる。これは削平のためで、同様の現象が特に第一遺構面の黒灰色土より北でおこっていると考えられる。

b．遺跡内の土地利用について

全体は切り土、盛土で造成を繰り返していると考えられる。その中で8SX315・320・325・355の形成過程に少し触れる。8SX315・320・325はいずれも盛土の土止めのために築造されたと考えられ、古い方から315→320→325の順になる。面の向きは南・南・東となっている。8SX315は第三遺構面に掘り方を掘り込んで築造している。次に8SX320で8SX355を埋めて一気に石列を並べている。これは何らかの理由で東へ平地を拡張しなければならなくなったためと考えられる。8SX325は南に平地をのばしている。こちらは炭化物・焼土塊を多く含む盛土で火災の片づけや火熱を使用する作業により排出された可能性を窺わせる。最後に第二遺構面を形成するまでに石列は埋没したと考えられる。

第三遺構面で検出した8SD310と8SX321の南側で8SX305～309が分布する範囲は床面が熱で硬化している。8SD310と8SX321が境界を示し、その南側で火熱を使用する作業が行われていたと思われる。似た状況は西区南西部の赤褐色土上でも見られた。羽口や取瓶、不明鉄製品ならびに鉄塊の出土、炭化物・焼土塊の堆積層から金属の生産活動を行っていたと考えられる。もしくは硬化面は護摩焚きをイメージできるかもしれない。

原遺跡では13世紀代までに形成された旧地形が、8SX001や8SX160・165と8SD060また8SD401に見られるように、現状でも、敷地境になっていたりしてよく残っている可能性がある。

今後、昭和前期の地図などで確認していく作業も必要である。

c．焼土坑の性格について

8SK301と8SXK601は規模や立地からまず遺体の焼き場の可能性を考慮し、土壌で脂肪酸抽出分析を行ったが、遺体そのものを焼いた確証は得られず、分析所見として骨を埋納していた可能性が指摘された。遺構を改めて観察すると、どちらも床面まで熱で硬化し、壁面は赤色ではなく白っぽくなっていることから、高温の火と酸欠状態から土壌が還元されていると考えられる。通常焼き場遺構と認定されるものは床面は焼けておらず、壁面が赤変する状態がほとんどであり、今回の２遺構は分析結果、遺構の状況から焼き場遺構とは考えられない。

d．出土遺物の特徴について

今回出土の焼土塊は平面のつくりや柱との接触面、木舞と考えられる竹材の痕跡から壁土が焼けたものと考えられる。拡張区で多量に出土した炭と焼土塊は壁が焼けることを考えると火災の可能性が大きいと思える。一方で生産関連の遺物の出土から、その関係の遺物とも考えられる。

滑石片は出土量が多い印象を受けた。鍋の破片と二次加工品がほとんどであった。詳細な分析を経てないが、調査地で鍋を消費し続けたのではなく、破片を持ち込み素材として加工や消費を行ったことが考えられる。

平玉石と呼んだものは用途不明であるが、地山から産する石ではなく搬入されたものであり人々の意志が反映されていると思う。

e．遺跡の性格について

調査地は原山無量寺跡の一部と認識されている。下段石垣の中には「原山中堂址」の碑が設置されており、さまざまな資史料からその蓋然性は高いと考える。一方、出土遺構、遺物から積極的に寺院の一部や坊跡である根拠が得られたかといえば心許ないところである。状況は上述のように古代後期から中世前期にかけて、造成を行いながら人々が生活を営んでいたということである。その出土物は寺院の存在を否定するものではない、というところである。今後の調査でより蓋然性を高める資料の蓄積と直接的根拠が示されることで調査地の性格もより鮮明になると考える。

（2）第11次調査

1．調査の経緯

調査地は太宰府市三条１丁目1551番地の1に所在する。ここは原山本堂跡の北西100mほどの地点に位置する。

平成3年7月10日に、当該地番の地権者（木本國雄氏）より、専用住宅建築に先立つ埋蔵文化財取扱いについての事前問い合わせがあった。

調査地付近は、原八坊跡（寺院跡）の中にあり、周辺調査でも埋蔵文化財が高密度で検出されていた。このため対象地も埋蔵文化財が包蔵されている可能性が高く、内容確認のため試掘を行うことで協議した。その後しばらく期間を経た後、平成4年6月10日に協議を再開し、平成4年7月21日に試掘調査を実施した。

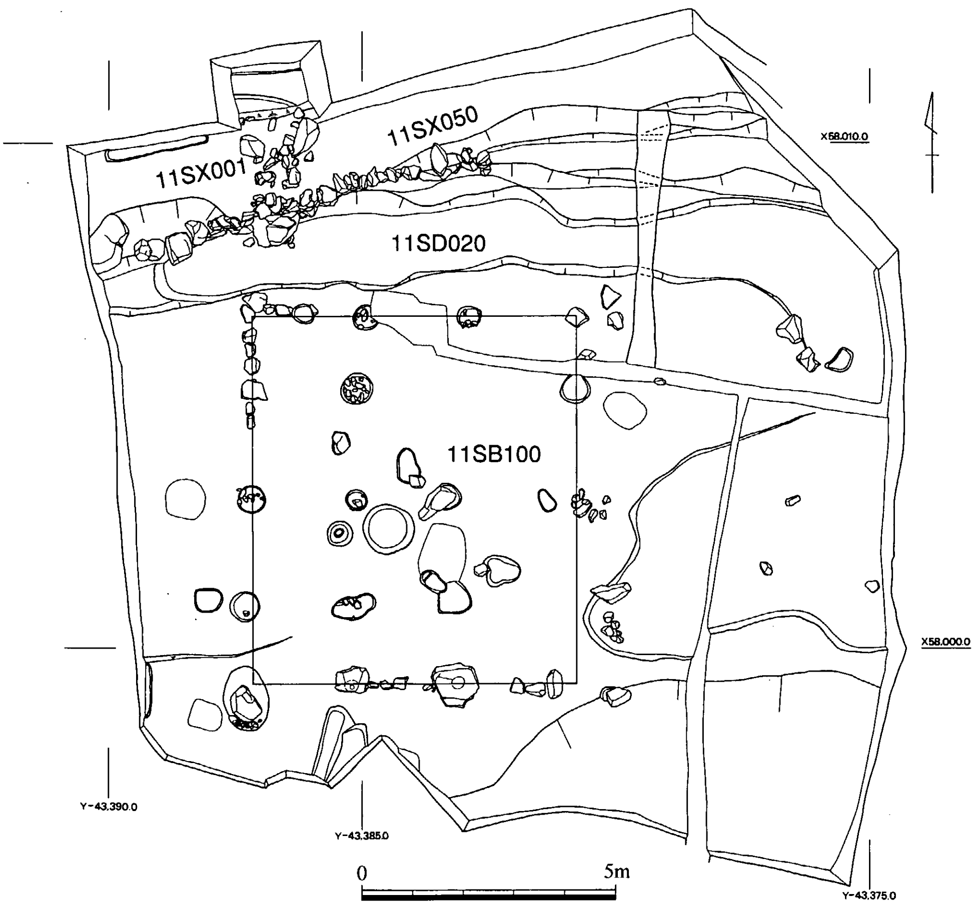


Fig.11-1　原遺跡第 11次調査遺構全体図（1/150）

この結果、石列その他の埋蔵文化財が地下に包蔵されていることがわかった。これらは坊に関連する遺構の可能性があり、遺構面も現況地表面から浅く建物建築で破壊される可能性もあることから、地権者と協議を行った結果、平成5年度に国庫補助を受けて発掘調査を実施することとなった。開発対象面積は391.81㎡、調査面積は202.25㎡を測る。

調査は平成5年5月26日から同年9月16日に行い、井上信正および狭川真一が担当した。

調査の結果、平安時代後期の礎石建物および石垣が良好な状態で検出された。これらの遺構は、周辺調査で検出されている原八坊跡に関わる遺構の時代を遡るものであり、かつ保存状態も良好であったため、「坊」を理解する上で貴重な遺跡として平成5年8月3日に報道発表を行った。

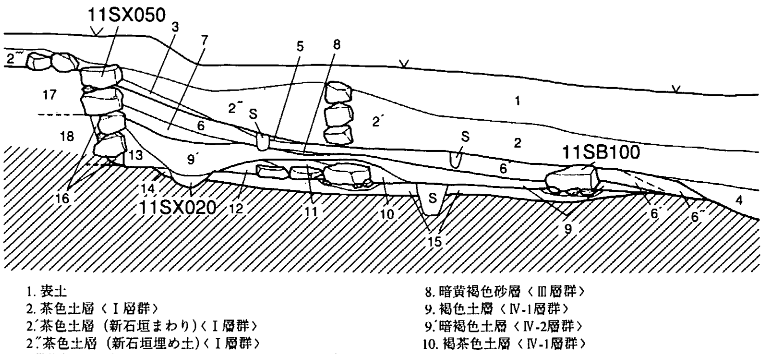
なお地権者には調査成果を踏まえて説明を行い、協議の結果、遺構を地下保存することにご同意いただき、建築の設計変更等のご協力をいただいている。

2．層位 (Fig.11-2、表11-1)

本調査区の基本的な地盤は、礫を含む堆積層である。ここは四王寺山裾で調査区一帯は比較的傾斜角度があるため、礫を含む崩落土が堆積し一帯の地盤を形成していると考える。なおこ

Tab.11-1　原遺跡第11次調査層群対応表

層位群	層位群の性格	関連土層名
Ⅰ	遺構検出時の人工層位。	茶色土層（黒茶色土層）
Ⅱ	茶色土除去時検出。近世遺構面を覆う層	淡黄褐色土層･黒灰色土層
Ⅲ	近世遺構の基盤層。XIII～XIV期の遺物多い。	茶灰色砂土層･明茶色土層（茶褐色砂層･茶灰色砂層）･暗黄褐色砂層
Ⅳ-1	11SX050（石垣）最終埋没土層群	褐色土層･褐茶色土層･黒褐色土層（暗灰茶色土層）･黄褐色粘土層
Ⅳ-2	11SB100（礎石建物）最終埋没土層群	暗褐色土層･赤茶色土層･橙褐色土層
Ⅴ	11SB100（礎石建物）の基盤層。整地層と考える。	赤褐色粘土層（暗赤色土層）
Ⅵ	11SX050（石垣）の裏込土層。	淡灰茶色粘土層･淡橙色粘土層･赤色粘土層（赤灰色粘土層）



1. 表土
2. 茶色土層〈Ⅰ層群〉
2′. 茶色土層（新石垣まわり）〈Ⅰ層群〉
2″. 茶色土層（新石垣埋め土）〈Ⅰ層群〉
2‴. 茶色土層（黒茶色土・暗茶褐色土・暗褐茶色粘）〈Ⅰ層群〉
3. 淡黄褐色土層〈Ⅱ層群〉
4. 黒灰色土層〈Ⅱ層群〉
5. 茶灰色砂土層〈Ⅲ層群〉
6. 明茶色土層〈Ⅲ層群〉
6′. 茶褐色砂層〈Ⅲ層群〉
6″. 茶灰色砂層〈Ⅲ層群〉
7. 暗黒褐色土層〈Ⅲ層群〉
8. 暗黄褐色砂層〈Ⅲ層群〉
9. 褐色土層〈Ⅳ-1層群〉
9′. 暗褐色土層〈Ⅳ-2層群〉
10. 褐茶色土層〈Ⅳ-1層群〉
11. 黒褐色土層〈Ⅳ-1層群〉
12. 黄褐色粘土層〈Ⅳ-1層群〉
13. 赤茶色土層〈Ⅳ-2層群〉
14. 橙褐色土層〈Ⅳ-2層群〉
15. 赤褐色粘土層（暗赤色土層）〈Ⅴ層群〉
16. 赤色粘土層（赤灰色粘層）〈Ⅵ層群〉
17. 淡橙色粘土層〈Ⅵ層群〉
18. 淡灰茶色粘土層〈Ⅵ層群〉

Fig.11-2　原遺跡第11次調査土層模式図

の地盤からは遺物は出土していない。

この付近では、この地盤を人為的に切り盛り整形し、テラス状の平坦面をつくる造成作業が行われている。この造成面上に遺構群が広がっている。この造成地形は、自然堆積により徐々に埋まりつつも現代まで踏襲され、今でもこの平坦面を利用して家が建っていることが見てとれる。

本調査区は、礫地盤の地山を整形して平坦面をつくり、露出した地山面の上に、赤褐色粘土～暗赤色土というやや粘りのある赤色粘土系の土を使って整地が行われ（V層群、後述）、この上に、礎石建物（11SB100）が建設され、溝（11SD020）が掘削される。また、北の山側には、背後の平坦面との高低差を保つため石垣（11SX050）をつくっているが、石垣の裏込めは整地層と同じく赤色粘土系の土を使っていることから、整地と石垣構築は同時期と考えている。

このように各層位については、主要遺構との関連で層位群として捉えられることができる。

層位群について、以下に述べる。

I層群＜茶色土層（黒茶色土層・暗褐茶色粘土層・暗茶褐色土層）＞

遺構検出時の層位である。調査区全面で検出される茶色土系の層群を主体としている。11SX050（石垣）上面の黒茶色土層・暗褐茶色粘土層・暗茶褐色土層も基本的に同一層位と考えている。

II層群＜淡黄褐色土層・黒灰色土層＞

石垣前面（南面）の平坦部に堆積している層群である。茶色土層除去時に検出した。

淡黄褐色土層は、11SX050（石垣）に近い部分に狭い範囲で堆積している。

黒灰色土層は、調査区南東部に堆積している。腐植土系のしまりのない土で、比較的新しい堆積層という印象を受ける。南東部に向かって標高が下がっているが、この部分に堆積している層で地山と直接接している部分もある。

この両層は堆積地点が離れているため、層の上下は不明である。

なおこれらII層群を除去した面に、近世の遺構が展開している。

III層群

＜茶灰色砂土層・明茶色土層（茶褐色砂層・茶灰色砂層）・暗黒褐色土層・暗黄褐色砂層＞

石垣前面（南面）の平坦部全面に堆積している層群である。I・II層群を除去後に検出される。上から茶灰色砂土層・明茶色土層（茶褐色砂層）の順に堆積しており、明茶色土層の下に暗黒褐色土層および暗黄褐色砂層が堆積している。

茶灰色砂土層は、明茶色土層の上面で部分的に確認される層位である。

明茶色土層は、石垣前面（南面）に堆積しており、茶褐色砂層は、調査区中央付近を中心に広く堆積している。両層は基本的に同一層である。いずれもIV層群を広く覆っている。なお

茶灰色砂層は、調査区南端の一部分で検出した。直接地盤と接しているが、III層群のなかに含まれるものである。不明な点が多いものの、茶褐色土層の上層もしくは同一層と推定される。

暗黒褐色土層は、石垣前面（南面）に堆積する層位である。石垣前面の埋没に関わるものである。

暗黄褐色砂層は、調査区東半の11SD020の南側付近で、明茶色土層除去後に部分的に確認される層位である。

いずれも13世紀代を下限とする遺物を含んでいる。なお、この中に近世以降の遺物をごくわずかに含むものがあるが、当層群上面に展開する近世以降の遺構からの混入と考える。

IV層群

この層群については、調査時の湧水対策として11SD020の南に東西に走行する排水溝を掘削したため、排水溝の北と南で層位名を分けて調査をおこなった。

これにより礎石建物付近のものをIV-1層群、石垣前面付近のものをIV-2層群として報告する。

なお、IV-1層群の褐色土層とIV-2層群の暗褐色土層は同一層であり、この層に覆われる11SB10（礎石建物）、11SD020（溝）および11SX050（石垣および段）は同時期に併存していたとみられる。

IV-1層群＜褐色土層・褐茶色土層・黒褐色土層（暗灰茶色土層）・黄褐色粘土層＞

11SB100（礎石建物）に伴う石列等の、埋没開始期の堆積層群である。上から褐色土層・褐茶色土層・黒褐色土層（暗灰茶色土層）・黄褐色粘土層の順に堆積している。

褐色土層は礎石建物跡の大半を直接覆う層で、建物の範囲を超えて広く堆積しており、出土遺物も比較的多い。

褐茶色土層・黒褐色土層（暗灰茶色土層）・黄褐色粘土層は、11SB100（礎石建物）の北西端の礎石・地覆石を覆っている層である。ただ、層の範囲は狭い。

なお11SB100の礎石の一部は、褐色土層検出時にはすでに露出していたが、北西隅の礎石が下層の黄褐色粘土層・黒褐色土層・褐茶色土層に覆われていることから、IV層群は建物が建っていた時に堆積したものではなく、建物廃絶後に堆積したものである。

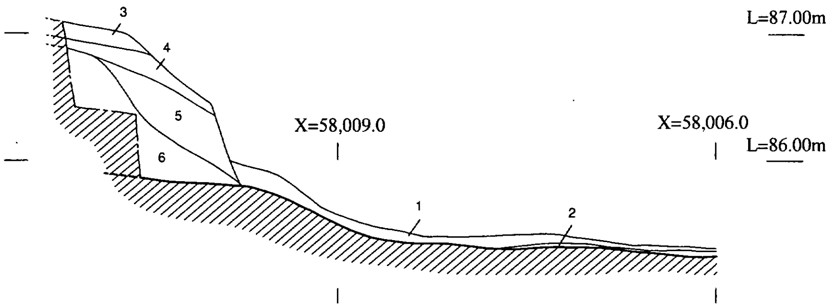
いずれも大宰府編年XIII＞XIV期を下限とする遺物を含んでいる。

IV-2層群＜暗褐色土層・赤茶色土層・橙褐色土層＞

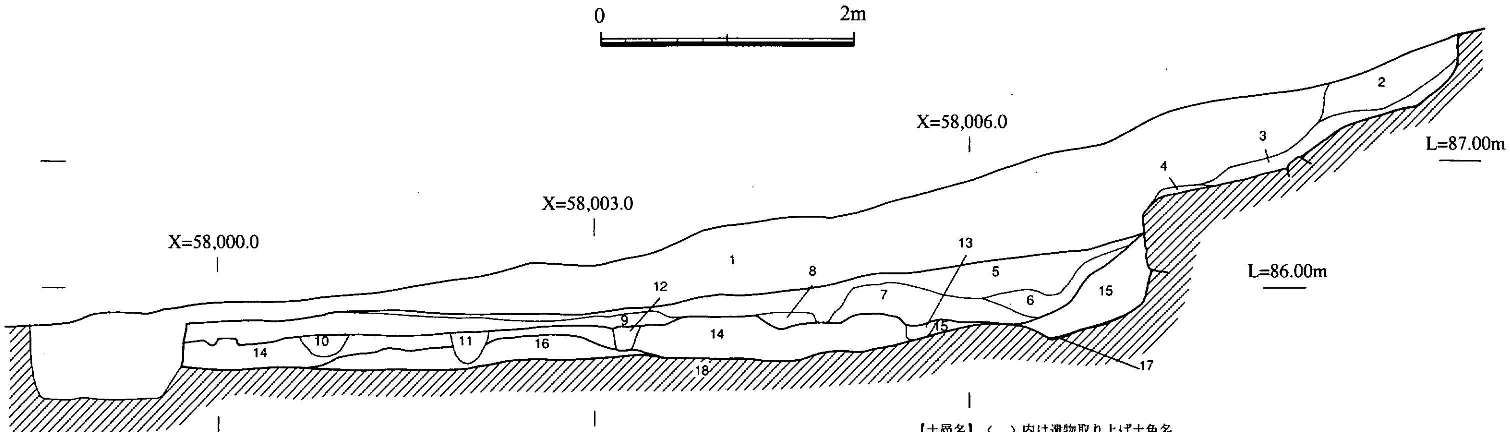
11SX050（石垣）前面から11SD020付近に堆積する石垣埋没開始期の堆積層群である。上から暗褐色土層・赤茶色土層・橙褐色土層の順に堆積している。

暗褐色土層は、石垣前面の11SD020付近に堆積している。11SD020は最終的にこの層で埋まっており、またこの層は石垣下部や礎石建物にも広がっている。これらの遺構の埋没開始時に関連する層位である。

赤茶色土層は、石垣前面の堆積であるが、前記の赤色粘土層の項で述べたように、石垣裏込



【土層名】〈　〉内は遺物取り上げ土色名
1. 暗茶色砂〈暗褐色土層・褐色土層〉
2. 淡茶赤砂土〈暗赤土層〉
3. 暗茶褐色粘土（炭化物小片あり）〈淡橙色粘土層〉
4. 暗茶灰色砂土〈淡橙色粘土層〉
5. 暗赤茶色粘土〈淡灰茶色粘土層〉
6. 暗黄茶色粘土〈淡灰茶色粘土層〉



【土層名】〈　〉内は遺物取り上げ土色名
1. 暗黒茶灰色砂〈表土〉
2. 暗茶黒色粘質土〈表土〉
3. 暗茶灰色土（粘質あり）〈表土〉
4. 黒茶色粘質土〈表土〉
5. 暗茶黒赤粘質土〈茶色土層〉
6. 黒茶灰色土（粘質あり）〈S-5〉
7. 茶黒褐色土〈茶色土層〉
8. 7層と同層〈茶色土層〉
9. 茶褐灰色土〈茶色土層〉
10. 淡茶黒灰色土〈S-17〉
11. 明茶褐灰色土〈S-17〉
12. 明茶灰色土〈S-3〉
13. 暗茶黒褐色土〈畝溝〉
14. 明黄茶灰色土〈茶褐色砂層〉
15. 淡茶黒灰色土（炭混）〈暗褐色土層〉
16. 明黄茶褐色土〈褐茶色土層〉
17. 灰色砂〈11SD020〉
18. 茶褐色砂礫地山

Fig.11-3　原遺跡第11次調査区土層図（1/60）

めの赤色粘土層（赤灰色粘土層）が石垣前面に流出したものの可能性もある。この層位について、暗褐色土層との堆積関係をみてみると、上下関係が逆転する部分があった。これも石垣裏込めの赤色粘土層が建物廃絶後もしばしば崩落しつづけた結果によるものと考えると理解できる。

橙褐色土層は、石垣前面を東西に走行する11SD020と石垣との間に部分的に検出された層位で、ある時期に11SD020の北岸を形成していたと考えられる。

いずれも大宰府編年XIII期を下限とする遺物を含んでいる。

V層群＜赤褐色粘土層（暗赤色土層）＞

これは11SB100（礎石建物）の基盤層である。

赤褐色粘土層（暗赤色土層）の下は地山の礫を多く含む地盤で、露出した礫も多い。この層は地均しのために敷かれた整地層とみられる。この層位の上に11SB100が建てられ、また11SD020も掘削されている。

この層の範囲は、11SB100付近にのみ広がっているようであり、南や東は茶灰色砂層や黒灰色土層といった上層群が地山と直接接しており、当層は確認できない。また、北は11SD020の南肩までしか確認できず、石垣との関係は明らかにできなかった。

ここからは大宰府編年XII期を下限とする遺物が出土している。ただ遺物が少なく、時期が下る可能性もないわけではないが、これを積極的に支持する材料もないため、ここではXII期を当層群の堆積時期と考える。

VI層群＜淡灰茶色粘土層・淡橙色粘土層・赤色粘土層（赤灰色粘土層）＞

11SX050（石垣）の裏込め土層群である。下から淡灰茶色粘土層・淡橙色粘土層の順に堆積しており、赤色粘土層（赤灰色粘土層）は、後述のように層序関係は明確ではない。

淡灰茶色粘土層は、石垣裏込めの基礎部分で、石垣中位以下を占め、淡橙色粘土層は、淡灰茶色粘土層の上に積まれている。この２層が石垣裏込めの基本層位とみられるが、石垣の現地保存および調査区北側の擁壁倒壊防止のため、裏込めは部分的にしか調査を行っておらず、その積み方など詳細は不明である。

なお調査区東側（F4～5地区付近）の観察では、淡灰茶色粘土層・淡橙色粘土層の境付近に、石を載せるためのテラス状の段を設けてある。この状況をみると、石垣の裏込めというより、先にこの２層で段を形成し、段の前面に石を貼るという構築順であった可能性も考えられる。

赤色粘土層（赤灰色粘土層）は、石垣下部～底部付近で、石垣の間および石積みの下面で確認される。確認範囲がせまく、この層位が裏込めと呼べるかどうか不明で、仮に裏込めと考えた場合、淡灰茶色粘土層と石垣の間にのみ存在するのか、淡灰茶色粘土層の下に堆積しているのかもわかっていない。このように検討の余地が残されているが、この層が石垣築造に関連していることは間違いないだろう。なお前述したように、石垣前面で検出した赤茶色土層とこの

層位との分層は非常に難しく、その境界が不明な部分もある。この２層が非常に類似した層位であることを考えると、赤色粘土層が石垣の隙間から自然に流出したもの、また石垣崩落・倒壊等により同時に石垣前面に崩落したものが赤茶色土層である、という推測も可能であろう。

いずれも大宰府編年XII期頃の遺物が出土している。

３．遺構

（1）溝

11SD017（Fig.11-17）

III層群の上面において、調査区を東西に走行する溝である。近世期以降の畝溝とみられる。

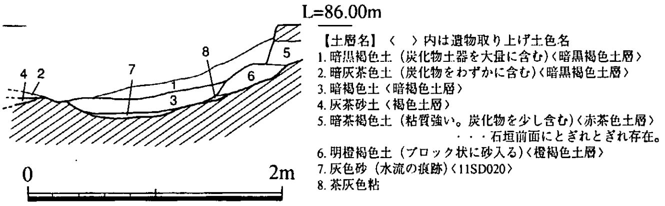


Fig.11-4　原遺跡第11次調査11SD020土層図（1/60）

11SD020（Fig.11-1・11-4　Pl.29・30）

調査区中央北側の礎石建物（11SB100）と石垣（11SX050）の間を東西に走行する溝である。幅1.1～2.0m、深さ0.1～0.3m程度を測る。

溝底は西側の方が標高が高く、調査区西端から中央東よりまでG.N.80°10′50″Eほどの振れで走行し、そこから6mほど真東に走行してから南に向きをかえ、流れ下っているようである。溝の底には砂層が堆積しており流水のあったことが窺える。

本遺構は、礎石建物建設前の整地層である赤褐色粘土層（V層群）上面から掘削している。また暗褐色土層堆積で溝が埋まっている。

溝の存続時期については、V層群堆積時期を上限とし、暗褐色土層堆積時期を下限とすると大宰府編年XII～XIII期頃に存続していたといえる。なお溝底の砂層中から大宰府編年XII期頃の遺物がわずかに出土している。

（2）建物

11SB100（Fig.11-1・11-5、Pl.31～33）

調査区中央に位置する東西３間、南北４間の礎石建物である。ほぼ正方位を向いており、東西6.3m、南北7.3mを測る。

礎石は花崗岩を使用している。原位置をとどめているものが５ヶ所（11SX062,11SX063,11SX064,11SX066,11SX069）、根石あるいは掘り方が残っているものが10ヶ所存在し、その他は破壊されている。

このうち11SX063の礎石は、東西90cm、南北90cm、高さ25cmを測る巨石で、これを筆頭と

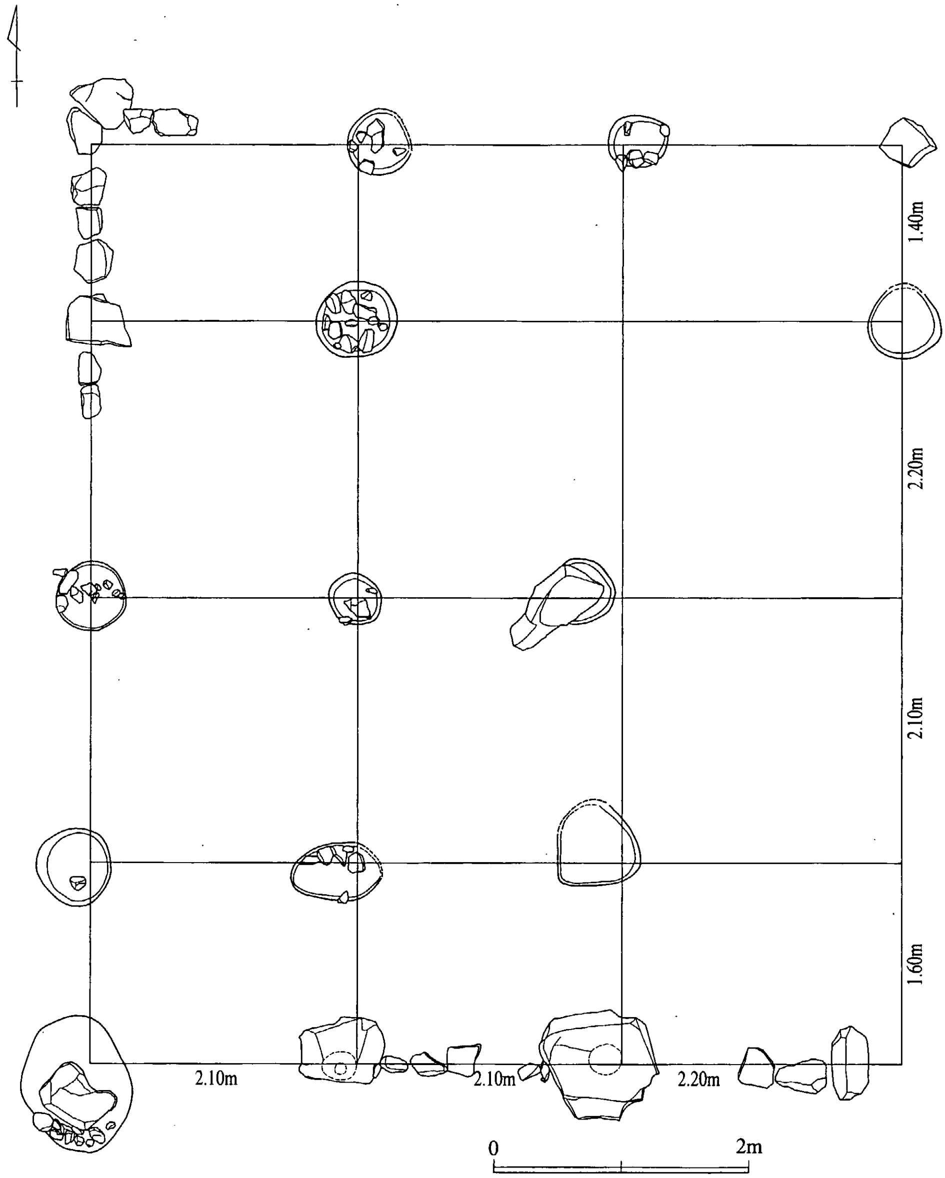


Fig.11-5　原遺跡第11次調査11SB100実測図（1/60）

して、11SX062など建物の最南列の礎石が巨石を使用している。これから推測すると、最南列西端の11SX061も巨石であり、11SX024の撹乱によりわずかに動いているものの、この位置に座していた礎石と考える。

礎石の上の平坦面には、わずかに変色した円形の痕跡が目視により観察された（11SX062,11SX063,11SX064）。いずれも直径20～25cm程度である。調査時には柱座の存在や柱痕跡の可能性

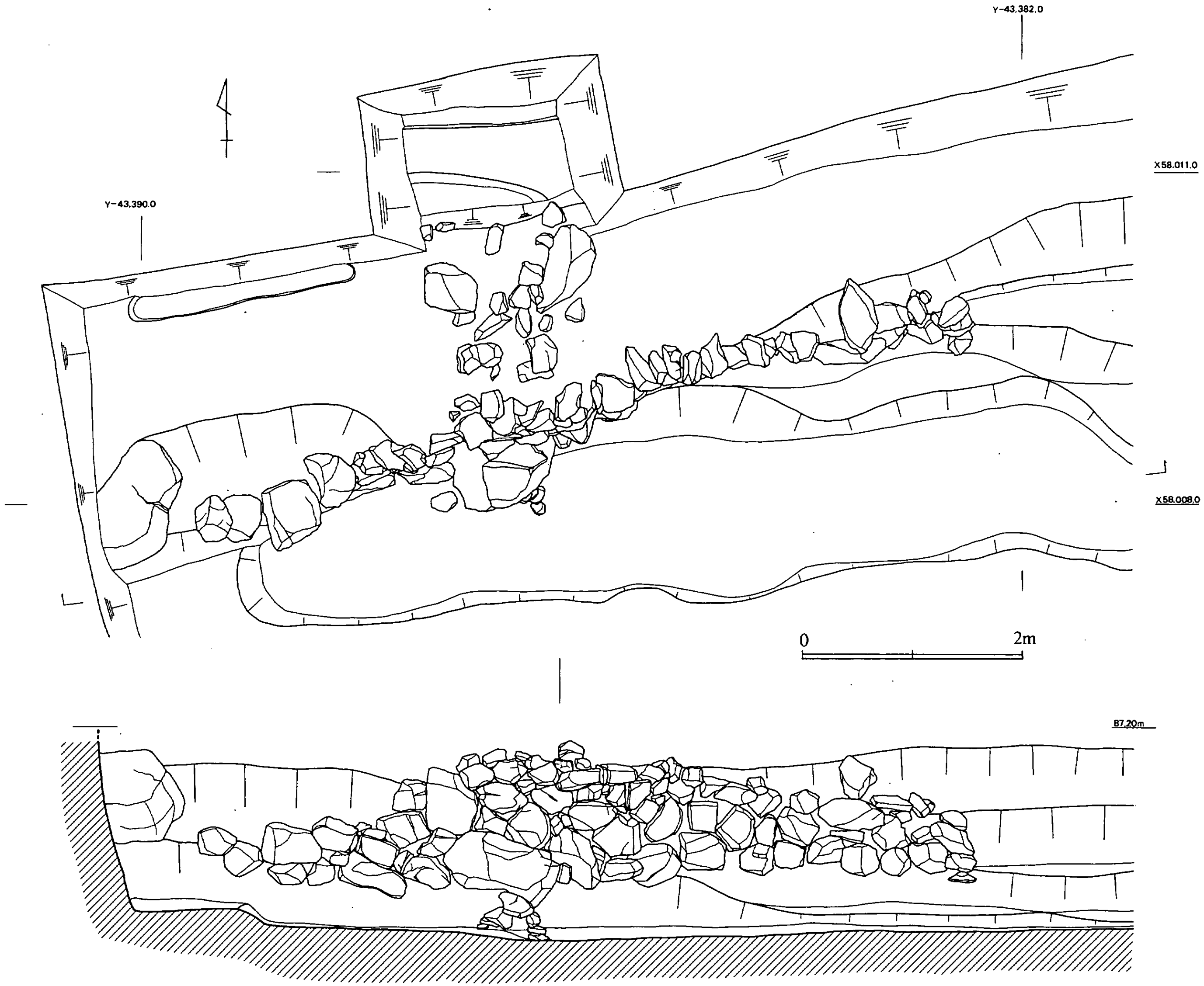


Fig.11-6　原遺跡第11次調査11SX050実測図（1/60）

も考えたが、積極的な評価は難しく、参考所見として記すにとどめる。ただし古代建築の礎石の柱座の可能性は低いとみられる。

建物の外側の礎石の間には地覆石を並べている。石材は同じく花崗岩で、長さ25～30cm、幅20cm前後のものを使用し、建物の外方向に石の平坦面を向け、面をそろえて並べている。

なお、建物は３間×４間に復原したが、11SX068のように礎石配列に当てはまる石が見つかっており、その北側にも地覆石に使用したようにみえる石が検出されている。これらの石を含めると、東側の間口が狭い４間×４間の建物に復原される可能性もある。

建物の存続時期については、Ⅴ層群堆積時期を上限とし、Ⅳ層群堆積時期を下限とすると大宰府編年XII～XIV期頃に存続していたといえる。

(3) 段および石垣

11SX050（Fig.11-1・11-6、Pl.33～36）

調査区北側に東西方向に走行する段がある。段の規模は東西約13.5m（検出分のみ）、高さ約1.7mで、上面は検出幅約2.6mほどのテラスを設けているようである。調査区西端から中央までおよそG.N.71°25′15″-Eで走行し、それより東へはほぼ東西方向に走行している。

この段の前面に貼り付くように石垣が積まれている。当調査区では、石垣は段の西半分のみ残存している。

石垣本体は東西8.1m、高さ1.4mが残存している。石垣は礎石建物（11SB100）が立地する平坦面とほぼ同レベルを底面として、4～5段ほどの石積みが確認される。

石は小口径30～40cm、奥行30～50cm程度で、南側に比較的平らな面を向け、面をそろえて積んでいる。石材は花崗岩である。

石垣を詳細に観察すると、その中央部・西側・東側で多少異なっている。

中央部については、最下部に幅1.0m、高さ0.7m程度の巨石を据えているのが特徴的である。この巨石は他の石垣列から60cm程度はみ出ており、はみ出た部分の下には７個の石を逆Ｖ字に組んで支えとしている。

この巨石の上方の石積みは、20～30cm程度のやや小さめの石を使用し、巨石を中心にＶ字形を意識した積み方をしているように見受けられる。また上方に向かうにつれ、石が小さくなる傾向が窺え、石の間隙には小礫を詰めている部分もみられる。この部分の石垣上面には暗渠とみられる石組み（11SX001）があり、これが石の積み方決定の一要因とも推測されるが、具体的にその関連は明らかではない。

西側については、石積みは40～50cm程度の石を積み、石の間隙に小礫などを詰めており、比較的安定した組み方をしている。石垣下端は前方にややせりだしているが、これは11SD020を流れる水流等の影響で石垣下部の土が流出し、石積み全体のバランスが崩れた結果とみられる。

東側については、30～40cm程度の石を使用している。石積みは底部から2～3段程度石組みし、この上は裏込め中段にテラス状の段を設けて石を載せ、さらに石積みを行っている。この部分の石積みは、同じ程度の石を積み重ねているだけで、西側～中央部のように小礫などを間隙に詰めるような所作は確認できない。このため西側～中央部に比べるとやや粗い積み方といった印象を受ける。なお、石垣上方は少しずれてせり出し、石積み全体が前傾しているような状況で検出されている。これは積み方の粗さに起因しているものもあるだろうが、石垣上方が比較的長い時期露出していたことを示すと考えられ、検出した石垣上部が直接茶色土層と接していたことから、近世・近代頃まで上部が露出していた可能性がある。

段の東半分（F4～5地区付近）には石垣は残っておらず、石垣の裏込め土が露出している。段の中位には上述のように石をおいたとみられる小さなテラス状の段が確認される。

この部分に石垣がみられないのは、埋没過程で石垣の石が倒壊・崩落したことが石垣東側残存部の状況から推察される。これは、この部分の前面（南側）埋土中で転落したとみられる石を多数検出していることからも裏づけられよう。ただ石垣の基礎部分すら石が残存しないことから、早い時期に抜き取り行為があった可能性も否定できないだろう。このことは、同時併存していた礎石建物（11SB100）が廃絶直後に石の抜き取りがあった可能性があることとも関連する。

石垣は、VI層群積土時期を上限とし、IV-2層群堆積時期を下限とすると大宰府編年XII～XIII期頃に存続していたといえる。

なお、このほかに石垣跡として、茶色土層埋土中より近世・近代以降の石組痕跡（調査時に「新石垣」としたもの）を検出している。I11SX050上部は、I層群で覆われていることから近世・近代頃に地上に露出していたようで、露出していた石を抜き取り、この石垣に転用したものもあると考える（Pl.28・29）。

（4）その他の遺構

暗渠？

11SX001（Fig.11-1・11-7、Pl.37）

11SX050の上面で石列が検出された。東西1.2m、南北2.0mの範囲に石が集中している。

本遺構の性格を確定する材料は少ないが、

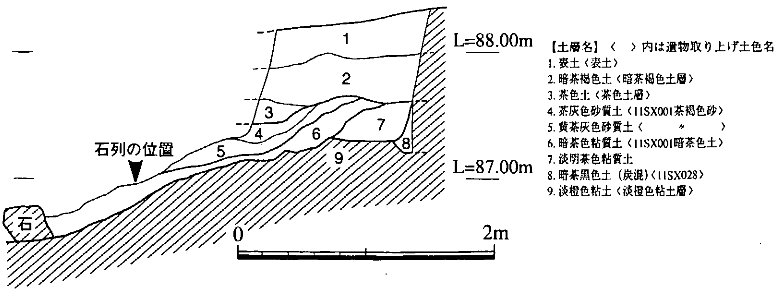


Fig.11-7　原遺跡第11次調査11SX001土層図（拡張区西壁付近）（1/60）

本遺構は接している11SX050（石垣）と一体のものとみられる。

本遺構直下は石垣の構造は、前述のようにＶ字形を意識して石積みされており、最下部には巨石が張り出して据えられている。ちょうど石垣上部の本遺構付近から水が流れ下った場合、水はＶ字積みの石を伝って最下部に据えられた巨石に流れ込み、これから11SD020に流れ落ちるようである。

仮にこのように本遺構直下の石垣の構造が、水が流れ下ることを意識していると考えると、石垣上面に暗渠等の排水施設があったと推測される。

ただ本遺構の北側（山側）で、上からの排水を流すための吸水口等を検出していないため、本遺構もしくは本遺構直下が暗渠施設本体とは考えにくく、ここでは本遺構を暗渠施設の基礎部の可能性を想定している。

なお、本遺構を暗渠関連の遺構と考えた場合、石垣上面には築地塀のような構造物があったと推測される。今回はこれを裏づける痕跡を確認できなかったが、築地塀が存在するかどうかは今後の周辺調査での視点の一つとなろう。

小穴その他

11SX007（Fig.11-17）

III層群の上面で検出された小穴である。

11SX015（Fig.11-17、Pl.38）

遺物の一括廃棄たまりである。11SX050の前面で検出され、石垣にもたれかかるようにして土師器の坏・皿等がまとまって出土した。一部には土器が重なるようにして検出されている。なおこれらは、層位的には明茶色土層に帰属する。

４．遺物

当調査区の遺物は、土師器類および白磁・青磁などの陶磁器類が主体的に、かつ多量出土している。これについては、特筆すべき遺物についてのみ図化を行い、以下本文中にその図を列記しているが、土師器の坏皿類、瓦器の椀類については別表の遺物計測表に記し、陶磁器類については、出土遺物一覧表に分類名および破片点数を記すのみとした。

溝出土遺物（Fig.11-8）

11SD020出土遺物

土師器

小皿（１～３）　１は小皿ａ、２～３は小皿ｃである。１は口径9.4cm、器高1.35cm。２の高台径は6.1cm程度に復原される。いずれも風化しており、調整は不明である。

坏ａ（４）　器高2.05cm。口径は12cm前後に復原されるか。風化しており調整不明。

須恵質土器

鉢（５）　口縁部の破片である。内外面ともヨコナデを施す。東播系。

礎石建物出土遺物（Fig.11-8）

11SX031出土遺物

土師器

小皿ａ（６）　器高1.3cm。口径は10cm以内におさまるとみられる。風化しており調整不明。

鉄製品

不明製品（７）　長さ1.9cm、幅2.0cm、厚み0.3cm程度のもので、製品の一部とみられる。図の上面が折り曲げられ、中央部が凹んでいる。引っかけ金具等に想定されるか。

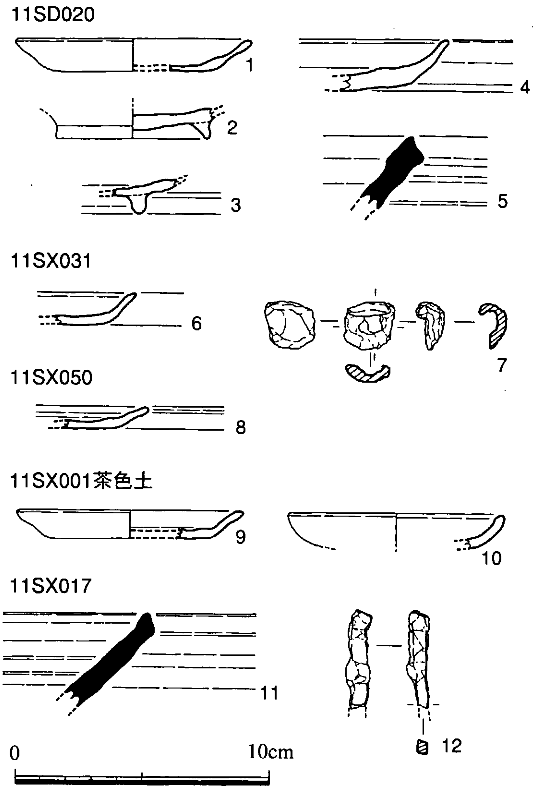


Fig.11-8　各遺構出土遺物実測図（1/3）

段および石垣出土遺物（Fig.11-8）

11SX050出土遺物

土師器

小皿ａ（８）器高0.9cm。口径は、9cm前後におさまるか。風化しており調整不明。

その他の遺構出土遺物（Fig.11-8）

11SX001出土遺物

土師器

小皿ａ（９～10）　口径8.6～9.0cm。９はヘラ切り。10は風化しており調整不明。

11SX015出土遺物（Pl.39）

土師器

小皿ａ（遺物計測表参照）　口径9.2～11.5cm、器高1.3～1.8cm。

坏ａ（遺物計測表参照）　口径15.1～15.7cm、器高2.9～3.2cm。

大坏ａ（遺物計測表参照）　口径18.3cm、器高2.9cm。

丸坏ａ（遺物計測表参照）　口径15.8cm、器高3.4cm。

11SX017出土遺物（Fig.11-8）

須恵質土器

鉢（11）　口縁部の破片である。内外面ともヨコナデを施す。東播系。

金属製品

鉄釘（12）　幅0.8～0.95cmの断面四角形の釘で、長さ3.9cm残存している。

各層位出土遺物

ここでは、各層位群毎に報告する。

表土出土遺物（Fig.11-9、Pl.42）

土師器

小皿ａ（遺物計測表参照）　口径9.3～11.2cm、器高0.9～1.9cm。

小皿ｃ（遺物計測表参照）　器高1.0～2.2cm、高台径6.2～6.5cm。

坏ａ（遺物計測表参照）　口径12.0～16.0cm、器高2.2～3.4cm。

坏ｂ（遺物計測表参照）　口径15.3cm、器高2.8cm、底径8.0cm。

石製品

石鍋（１～２）　いずれも口縁部のみ残存する。いずれも内外面とも縦方向のケズリを施す。なお１の内面はかなり磨耗している。

不明製品（３）　滑石製の製品である。二次加工品の可能性もある。

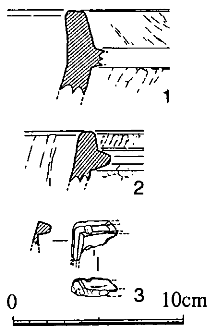


Fig.11-9　表土出土遺物実測図（1/3）

Ⅰ層群出土遺物

茶色土層出土遺物（Fig.11-10、Pl.42）

土師器

小皿ａ（遺物計測表参照）　口径7.6～12.0cm、器高0.6～1.6cm。

小皿ｂ（遺物計測表参照）　口径7.3～7.7cm、器高1.7～1.9cm。

坏ａ（遺物計測表参照）　口径11.2～17.3cm、器高2.1～3.1cm。

皿ａ（遺物計測表参照）　口径22.4～24.8cm、器高2.75～3.0cm、底径17.5～19.3cm。

丸坏ａ（遺物計測表参照）　口径12.6～17.4cm、器高2.7～4.1cm。

瓦器

椀ｃ（遺物計測表参照）　口径14.9～16.7cm、器高5.1～5.7cm、高台径6.6～6.8cm。

須恵質土器

椀×皿（１）　底径5.8cm、残存高0.8cm。底部は糸切り。

鉢（２～４）　２～４は口縁部の破片で、３は片口鉢であることが観察される。内外面ともヨ

コナデを施す。東播系。

甕（5）　破片資料であるが、口径は20cm以上に復原されるとみられる。外面はななめ方向の平行叩きを施した後に、頸部に軽くナデを施している。内面はナデる。胎土は1mm以下の白砂を含むものの、きめ細かい。焼成はあまく、瓦質となっている。外面は暗灰色、内面は淡灰色、断面は淡茶色を呈す。器形および調整から東播系の須恵器甕とみられるが、在地製品の可能性もある。

瓦質土器

鉢（6）　片口鉢で、口径27.0cm、器高7.4cm。外面は風化して不明だが、内面はハケ目を施す。白茶色を呈し、焼成はあまい。ただし内面はやや擦れており、使用されていたことがわかる。

瓦

文字瓦（8～10）　いずれも平瓦である。8は二重格子の叩き目を有す。文字は「安」の左字で九州歴史資料館分類のIV-4類に該当する。9は叩きの残りが悪いものの「楽」字が観察され、一重の罫線で画されているようである。10は格子叩きと「寺」字がみえ、二重の罫線で画され、九州歴史資料館分類のIV-2類に該当する。

土製品

羽口（7）　ふいごの羽口である。残存長13.6cm、幅7.3×7.65cm、器厚2.0～2.9cm。中心の孔は径約2.5cmを測る。二次的加熱を受けて全体的にやや還元化しており、図中上部には、金属滓が付着している。

石製品

石鍋（11）　鍔のつくもので、口径30.6cmを測る。外面の鍔下はやや煤けた印象を受ける。

不明製品（12～14）　12は滑石製。石鍋の再加工品とみられ、径1.5cm、深さ0.6cm程度の孔が穿たれ、また図の上部に二次的なケズリ痕跡がみられる。13も滑石製。直径5cm程度の容器等の製品底部の一部とみられる。外面は体部底部とも丁寧に削っており、内面体部も丸く削っている様子が窺えるが、内面底部は整形のみで未調整である。14は黒色の粘板岩系堆積岩の剥片である。厚さ3.5mm程度の薄い剥片の両面を非常に丁寧に磨いている。

暗褐茶色粘土層出土遺物（Fig.11-11、Pl.41）

土師器

小皿a（1～2）　口径8.65～9.6cm、器高1.05～1.25cm。2の切り離しはヘラ切りである。

坏a（3）　口径15.0cm、器高3.6cm。風化により調整不明。

白釉陶器

椀？（4）　口縁部のみ残存する破片である。残存高3.3cm。体部は直線的に外方向に広がる。口縁部には輪花を有し、輪花の部分の内面には白堆線を有す。素地はやや砂味を帯びたもので

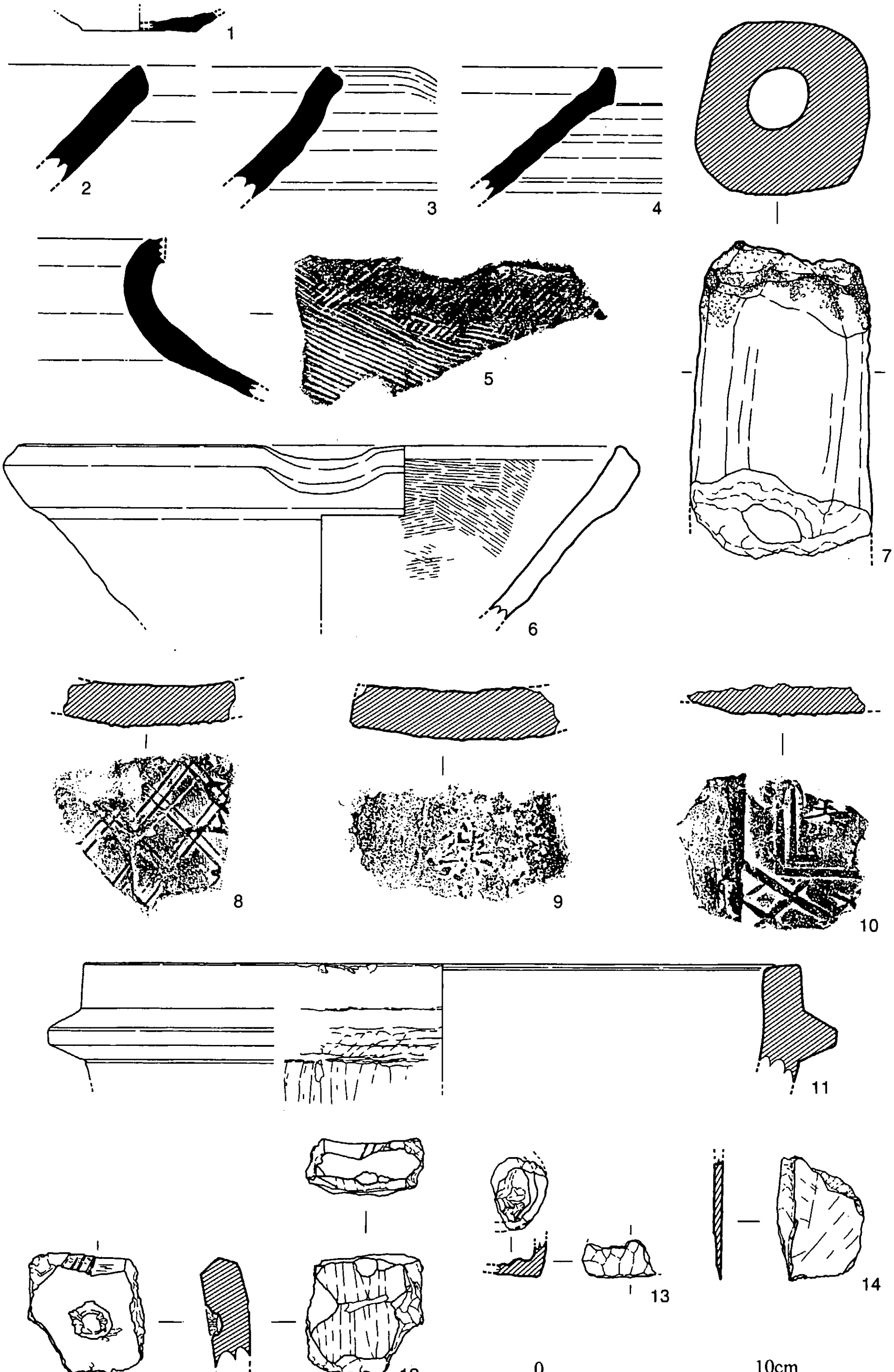


Fig.11-10　茶色土層（I層群）出土遺物実測図（1/3）

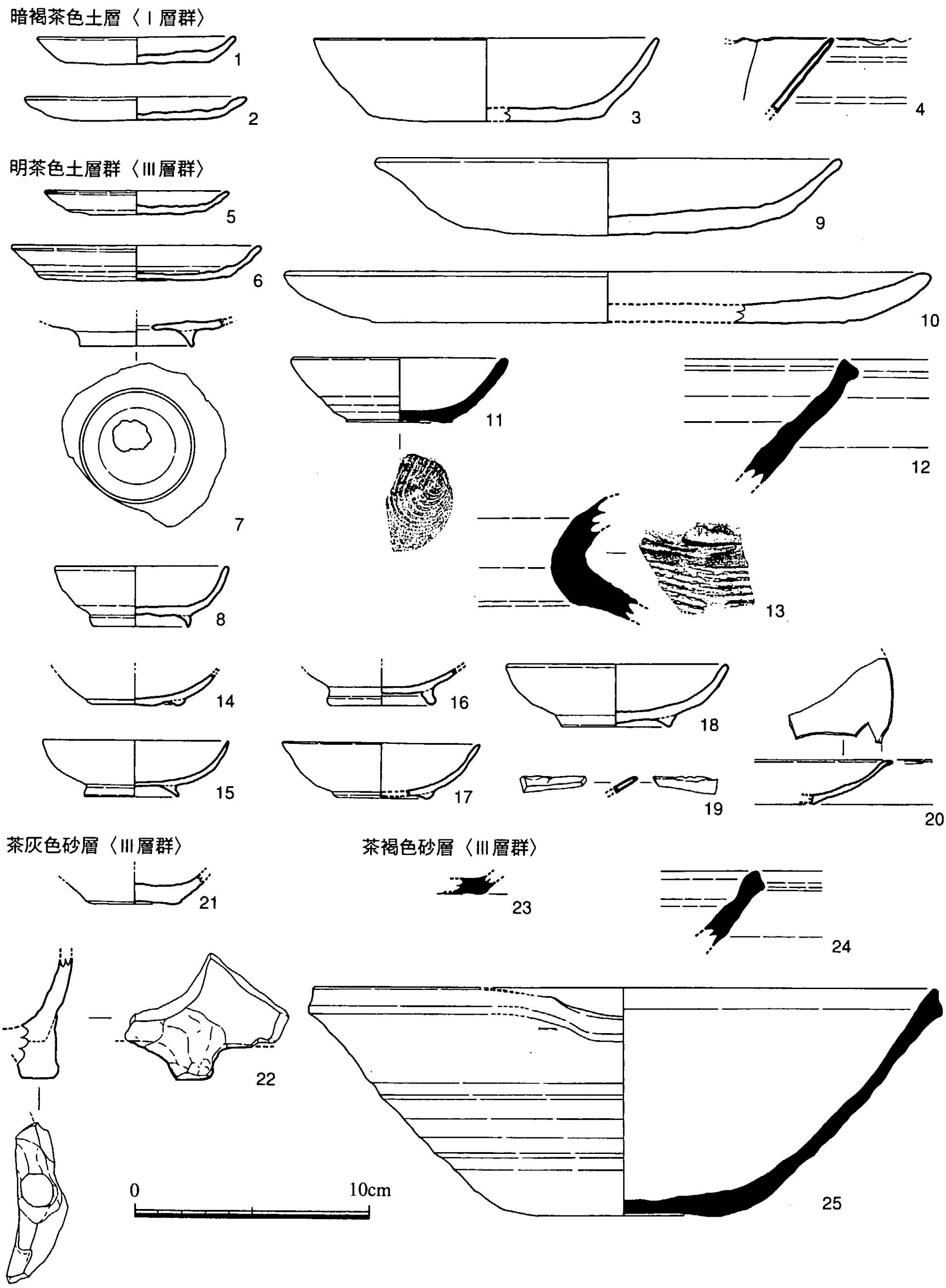


Fig.11-11　Ⅰ・Ⅲ層群出土遺物実測図（1/3）

あるが、精錬されており茶灰色を呈す。素地の上に白色の化粧土をかけ、その上に透明釉をかける。なお、内面の白堆線は化粧土を盛り上げてつくっている様子が観察される。磁州窯とみられる。

III層群出土遺物

明茶色土層出土遺物（Fig.11-11、Pl.39～41）

土師器

小皿（５～７）　当層から小皿は大量に出土している。小皿ａについては口径7.6～11.8cm、器高0.7～1.9cm、小皿ｃについては口径7.3～10.6cm、器高1.5cm～2.1cmである（遺物計測表参照）。その中から抽出したものの一部を図示している。

５・６は小皿ａである。５は口径8.0cm、器高1.05cm。６は口径10.8cm、器高1.6cm。いずれも切り離しはヘラ切りである。７は小皿ｃである。高台径4.95cm。底部には径1.0～1.5cm程度の穿孔がある。焼成後のもので内面から穿たれている。

坏（遺物計測表参照）　口径13.3～18.0cm、器高2.2～3.2cm。の坏ａと、口径17.0～24.0cm、器高2.8～3.4cmの大坏ａ、および口径19.0cm、器高3.6cm、底径10.2cmの大坏ｃがある。

丸坏ａ（遺物計測表参照）　口径15.5～16.2cm、器高3cm前後。

小椀ｃ（８）　口径7.5cm、器高2.75cm、高台径4.4cm。内外面とも風化しており調整不明。胎土は微細な砂粒を少量含むもののきめ細かい。内外面とも淡茶色を呈すが、外面の一部は淡灰色を呈す。焼成も良好である。なお、ここでは焼成や色調から土師器として報告したが、高台の付け方が特徴的であることや、後述のように同層中に同じタイプの瓦器小椀が出土していることから、本遺物も瓦器の可能性はある。

大坏ａ（９）　口径20.0cm、器高3.05cm、底径14.6cm。

皿ａ（10）　口径28.0cm、器高2.2cm、底径20.6cm。なおこのほかに口径25.0cm、底径18.8cmの皿ａも出土している。（遺物計測表参照）

須恵質土器

椀（11）　口径9.4cm、器高2.8cm、底径4.6cm。底部切り離しは糸切りで、内外面とも回転ナデを施す。胎土は1～2mm程の白砂を含むものの、きめ細かい。淡灰褐色を呈し、焼成は良好。

鉢（12）　口縁部の破片である。内外面ともヨコナデを施し、内面下部には斜め方向のヨコナデを施す。東播系。

甕（13）　破片資料である。外面はななめ方向の平行叩きを施した後に、頚部に軽くナデを施しているようである。内面はナデる。胎土は1mm以下の白砂を含むものの、きめ細かい。焼成は良好。器形および調整から東播系の須恵器甕の可能性が高い。

瓦器

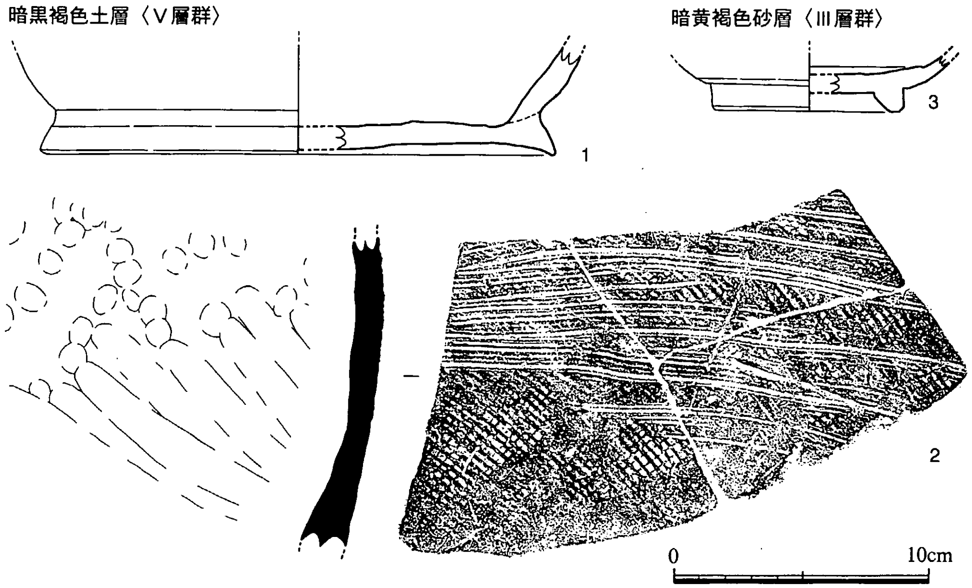


Fig.11-12　III層群出土遺物実測図（1/3）

小椀 c （14～18）　口径7.5～9.6cm、器高2.5～2.7cm、高台径4.3～5.7cm。いずれも風化のため調整不明だが、内面は平滑な印象を受ける。なお底部の押し出しは行われていないようである。

椀 c （遺物計測表参照）　口径16.4cm、残存高5.3cm、底径6.7cmのものが出土している。

白釉陶器

皿（19）　口縁部のみ残存する破片である。残存高0.8cm。体部は直線的に外方向に広がる。口縁部には輪花を有し、輪花の部分の内面には白堆線を有す。素地はやや砂味を帯びたものであるが、精錬されており茶灰色を呈す。素地の上に白色の化粧土をかけ、その上に透明釉をかける。なお、内面の白堆線は化粧土を盛り上げてつくっている様子が観察される。磁州窯とみられる。

青白磁

皿（20）　器高2.0cm。体部はやや内湾しつつ口縁部が水平方向に外反する。口縁部には輪花がみられる。釉は内外面全体にかけられ、底部外面のみ釉を掻きとる。素地は乳白色を呈し、精良。釉は水色味を帯びた発色をしている。

茶灰色砂層出土遺物（Fig.11-11、Pl.41）

土師器

小皿 a （遺物計測表参照）　口径8.8～9.5cm、器高0.8～1.5cm。

脚付鉢？（22）　底部から直立気味にたちあがる体部をもつ器形で、底部と体部の境に径約2cm程度の円形の脚を取り付けている。焼成があまいため、調整は不明。

丸坏 a （遺物計測表参照）　口径14.5cm、器高3.7cm。

山茶碗

椀？（21）　底部の破片で、残存高1.45cm、底径4.1cm。底部はヘラ切りで、体部外面はヨコナデを施す。内面にやや緑味を帯びた釉をごく薄く施している。胎土は細かい白砂を含む。焼成良好で灰色を呈す。

茶褐色砂層出土遺物（Fig.11-11、Pl.40）

土師器

小皿ａ（遺物計測表参照）　口径9.1cm、器高1.2cm。

丸坏ａ（遺物計測表参照）　口径14.5cm、器高3.7cm。

須恵質土器（Pl.40）

椀×皿（23）　残存高2.8cm。底部切り離しは糸切りで、内外面とも回転ナデを施す。胎土は1～2mm程の白砂を含むものの、きめ細かい。灰色を呈し、焼成は良好。

鉢（24～25）　24は、口縁部の破片である。残存高4.35cm。内外面ともヨコナデを施す。25は片口鉢で、器体の半分ほど残存する。口径27.4cm、器高9.8cm、底径10.4cm。内外面とも回転ナデを施しているようであるが、内面はかなり擦れており、調整は不明である。外面底部は器面調整され、切り離しは不明である。なお、底部の外周もよく擦れており、こね鉢として使用されていたことを窺える。いずれも東播系。

暗黒褐色土層出土遺物（Fig.11-12、Pl.40）

土師器

小皿ａ（遺物計測表参照）　口径7.9～11.0cm、器高0.8～2.1cm。

小皿ｃ（遺物計測表参照）　口径9.5～9.7cm、器高1.7～1.9cm、高台径5.4～5.7cm。

丸坏ａ（遺物計測表参照）　口径14.0～16.0cm、器高2.3～3.6cm。

丸坏ｃ（遺物計測表参照）　口径16.9～17.2cm。高台径7.9～8.3cm。

須恵器

甕（２）　胴部の破片である。外面は格子目の叩き具で叩いた後、水平方向に条痕を施す。内面は、斜め方向にナデており、指頭痕が多数残っている。

土師質土器

火鉢？（１）　底部の破片である。底径20.6cm。内外面とも風化により調整不明だが、体部と底部の境には内外面とも強くナデている。胎土は1～3mm程度の砂粒を多く含み、粗い。焼成は良好。淡茶白色を呈す。なお、底部は二次的に火を受けたようで、底部内面は淡茶灰色に変色しており、それを対応して底部外面は淡橙白色に変色している。

暗黄褐色砂層出土遺物（Fig.11-12）

土師器

小皿ａ（遺物計測表参照）　口径9.0～10.8cm、器高1.0～1.4cm。

小皿ｃ（遺物計測表参照）　口径10.4cm、器高1.8cm、底径5.3cm。
坏ａ（遺物計測表参照）　口径15.3～16.5cm、器高2.5～3.0cm。
小椀ｃ（遺物計測表参照）　口径9.5cm、器高2.3cm、底径4.6cm。
白磁
鉢（３）　底部の破片である。白磁椀VIII類と同タイプのものであるが、椀より大きく復原されるため、鉢として報告した。

IV-1層群出土遺物（Fig.11-13）
褐色土層出土遺物
土師器
小皿ａ（１～２）　口径8.8～10.1cm、器高1.4～1.7cm。
脚付鉢（４）　底部と体部の境に径約1.5cm程度の円形の脚を取り付けている。焼成があまいため、調整は不明。
須恵質土器
椀×皿（３）　底部のみ残存する。底径5.0cm。底部切り離しは糸切りで、内外面とも回転ナデを施す。胎土は1～2mm程の白砂を含むものの、きめ細かい。淡灰褐色を呈し、焼成は良好。
瓦類
平瓦（５～６）　５は格子目の平瓦片である。６は二重格子目の平瓦片である。

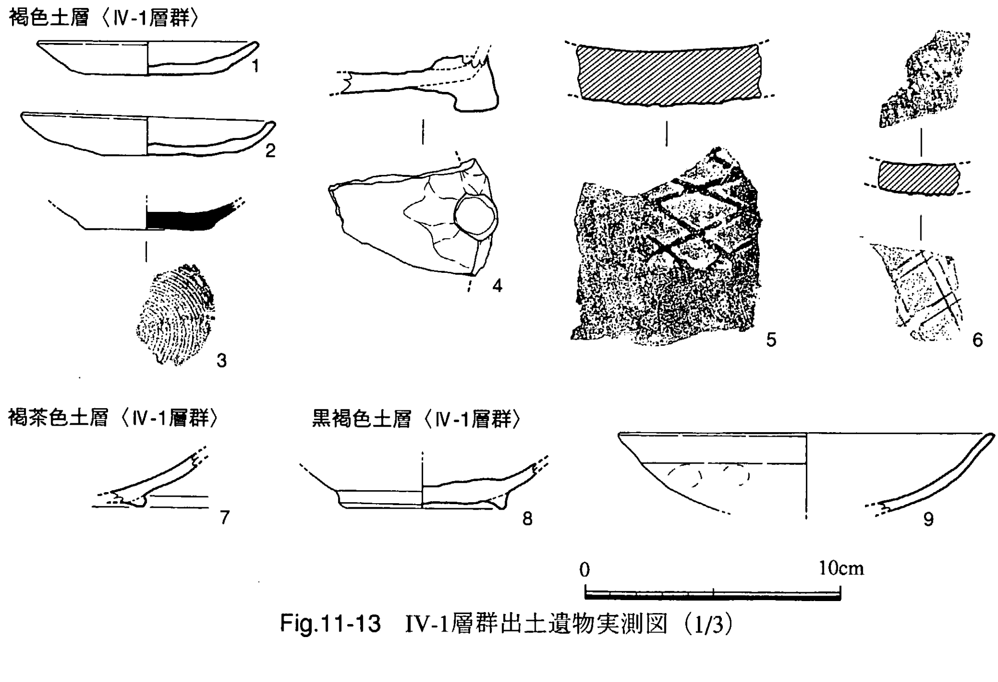


Fig.11-13　IV-1層群出土遺物実測図（1/3）

褐茶色土層出土遺物

瓦器

椀ｃ（７）　底部の破片である。内外面とも風化しており調整不明。

黒褐色土層出土遺物

土師器

皿ｃ（８）　底部の破片である。底径6.7cm。内外面とも風化しており調整不明。

丸坏ａ（９）　口径15.0cm、残存高3.1cm。内外面とも風化しており調整不明な部分が多いが、外面には指頭痕がみられる。

Ⅳ-2層群出土遺物（Fig.11-14、Pl.42）

暗褐色土層出土遺物

土師器

小皿ａ（１～14）　口径8.2～10.6cm、器高0.85～1.5cm、底径6.0～8.3cm。底部切り離しはヘラ切り、糸切り両者みとめられる。風化により調整不明のものが多いが、糸切りはわずかのようである。

坏ａ（15～18）　口径14.7～16.0cm、器高2.4～3.3cm。　いずれも風化により調整不明。

丸坏ａ（19～21）　口径14.65～15.3cm、器高3.3～3.6cm。内外とも風化しており調整不明な部分が多いが、外面には指頭痕がみられる。

甕（22）　口縁部の破片である。残存高8.1cm。口径はおよそ30cm前後に復原されるか。直立的にたちあがる胴部をもち、口縁部は丸く外方向に折り曲げたような形状である。内外面とも風化しており調整不明だが、整形は回転台等は使用していないようである。なお、外面には輪積み接合部が残存している。胎土は1mm程の砂粒をわずかに含み、焼成はややあまい。淡茶白色を呈す。

器台（23）　底部の破片である。中央の穿孔は径1cm程度である。胎土は微細な白砂粒をわずかに含む。焼成良好。

瓦器

椀ｃ（24）　底部の破片である。内外面とも風化により調整不明だが、体部外面には指頭痕が残存する。

須恵質土器

椀×皿（25）　残存高1.2cm。底部切り離しは糸切りで、内外面とも回転ナデを施す。胎土は1mm以下の白砂を含む。灰色を呈し、焼成は良好。

赤茶色土層出土遺物

土師器

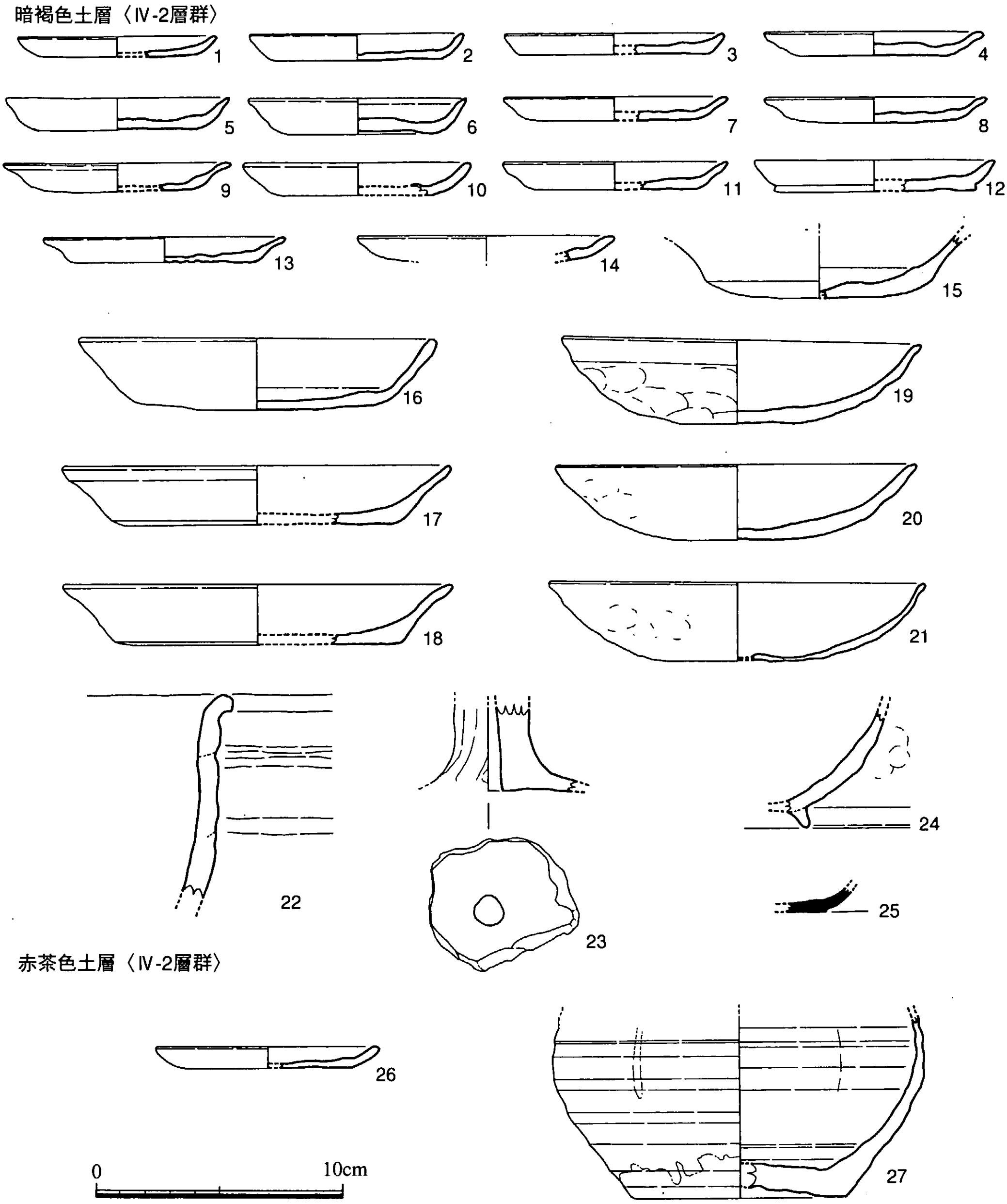


Fig.11-14　Ⅳ-2層群出土遺物実測図（1/3）

小皿ａ（26）　口径9.2cm、器高0.9cm、底径7.0cm。底部切り離しはヘラ切り。

褐釉陶器（Pl.42）

壺類（27）　胴部下半が残存する破片である。底径8.6cm、残存高7.45cm。胴部は縦方向の凹みがあり、３分割程度の瓜割り状を呈していたとみられる。胎土は緻密で紫色粒を含み、淡茶

灰色を呈す。この上を淡茶褐色に発色する釉が内外面とも薄くかかり、体部外面下位と底部は露胎している。なお、釉はまだら状に剥落している。

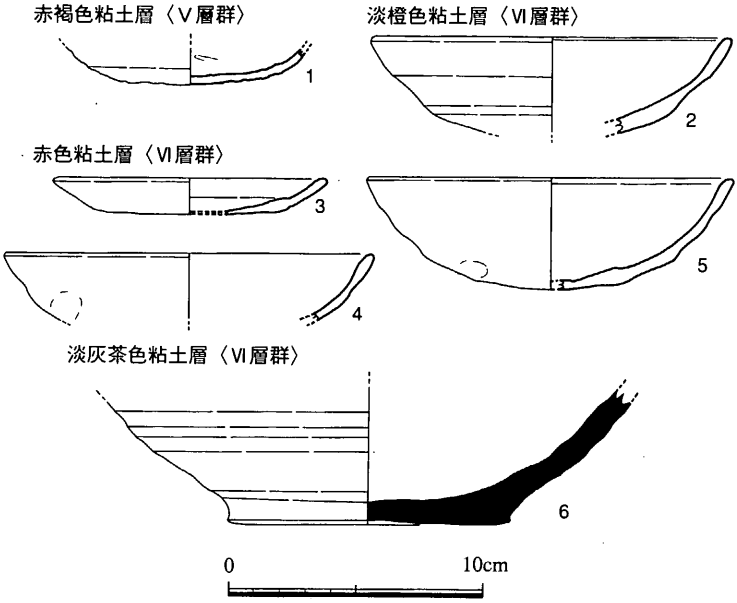


Fig.11-15　Ⅴ・Ⅵ層群出土遺物実測図（1/3）

Ⅴ層群出土遺物

赤褐色粘土層出土遺物

黒色土器Ｂ類

皿（１）　底部のみ残存する。全体的に風化が進んでいるが、内面にミガキｃがみえる。

Ⅵ層群出土遺物（Fig.11-15、Pl.42）

赤色粘土層出土遺物

土師器

小皿ａ（３）　口径11.0cm、器高1.45cm、底径7.8cm。全体的に風化が進み調整は不明であるが、底部切り離しはヘラ切りの可能性が高い。

丸坏（４～５）　口径14.6～14.8cm。風化が進んでいるが、いずれも内面にミガキｃの痕跡が観察され、外面に指頭痕がみられる。

淡橙色粘土層出土遺物

土師器

丸坏ａ（２）　口径14.4cm。風化により調整不明。

淡灰茶色粘土層出土遺物

須恵質土器

鉢（６）　底部が残存する破片である。底径11.3cm、残存高5.4cm。内面はよく摺っており調整不明。外面はヨコナデである。底部切り離しは糸切り。東播系。

その他の出土遺物（Fig.11-16、Pl.43）

鉄製品

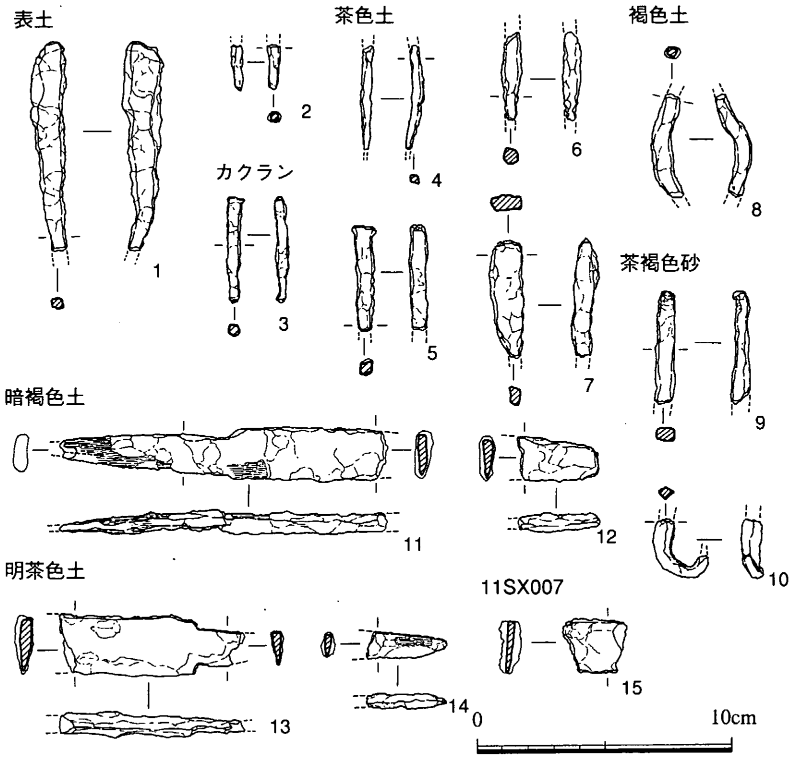


Fig.11-16　原遺跡第11次調査出土鉄製品実測図（1/3）

鉄釘（1～6、8～10）　1・2は表土出土。3は撹乱出土。4～6は茶色土層出土。8は褐色土層出土。9・10は茶褐色砂層出土。

刀子（11～15）　11・13は柄部と刃部が残存し、12・14は柄部が、15は刃部が残存している。11は、柄部刃部とも木質が残存しており、鞘に入っていたことを窺える。11・12は暗褐色土層出土。13・14は明茶色土層出土。15は11SX007出土。

不明製品（7）　一端が断面正方形を呈し、もう一端は断面長方形を呈す。刀子あるいは鏃等を想定するが、不明である。茶色土層出土。

5．小結

創建が9世紀代まで遡ると伝えられる原山寺院（原山無量寺）跡地における原遺跡の発掘調査で、これまで平安時代における寺院の様相についての成果は得られていなかった。原遺跡が『太宰府市史』考古資料編で紹介された時点では、検出されている遺構の大半は12世紀後半から13世紀代のもので、それ以前は、9～10世紀代は墓地が展開し、11～12世紀代に経塚が営まれていたということが紹介される程度であった。

今回の調査では、文書に残された原山の起源にまで遡る遺物は検出されなかったものの、これまで知られていなかった平安時代後期の実態について、一歩進んで解明できたことは大きな成果であった。調査で得られた成果をまとめてみる。

a．主要遺構について

調査区の東西にみられるテラス状の段状地形について、当調査区で検出した段および石垣（11SX050）が大宰府編年XII期頃（11世紀後～12世紀初頭）に造成されていることから、この段状地形も同時期に築かれたと推定される。段状地形は周辺で他にもみられ、今回の成果はこれらの造成開始時期を窺う資料となろう。

当調査区では、この段の前面に石垣が残存しているのを確認した。石垣の石積みは密に築いている印象は得られず、このため石がずれている部分も確認されている。この状況から、石垣は段を支えるアンカー的なものでなく、段に石を貼り付ける程度のものだったことが窺える。

また石垣残存部中央上面には石列（11SX001）があり、この下の石垣下部には巨石一個が大きく張り出して据えられている。11SX001は暗渠の下部構造と考えており、暗渠からの排水がこの巨石に流れ落ち、石垣前面を東流する溝（11SD020）に流れ込んでいたと想定している。なお11SX001を暗渠とみなすと、段上に築地等の施設が伴っていた可能性がある。今回は築地痕跡を確認できなかったため、この所見の実証は今後の調査に委ねたい。

石垣前面の平坦地では、地覆をもつ３×４間の礎石建物（11SB100）を検出した。

この建物の性格について未だ確定できないが、原山寺院に関係する坊の建物の一つであったことが想定されよう。なお12世紀代の建物は、本調査区の北東側の段上に位置する原遺跡第12次調査（未報告）でも検出されている。

原山無量寺古図（宮小路賀宏氏所蔵）によれば、本調査区は、原池の北にあり、本堂の北東側で、中堂の石垣の下付近に位置するようである。ここには小規模の堂が３棟描かれている。

この絵図がいつの頃の原八坊を描いているのかは不明であるが、絵図と遺構状況を併せて考えていく必要もある。

b．各遺構間の設計について

さて当調査区で検出したこれらの主要遺構は、設計を一にしていたことが窺える。

11SX001の位置、11SX050の巨石の位置、および11SB100の西端は位置をそろえている。また11SD020は、石垣と礎石建物の間を東流し、礎石建物の北東部で屈曲しており、そのまま礎石建物の東側に添って南流していたようである。つまり礎石建物、石垣（暗渠）および溝が同時に設計されたと考えるのである。

これらの遺構は、いずれもV・VI層群の上に展開しており、またIV層群に覆われた時点が、廃絶または廃絶開始を示している。このように存廃の期を一にしていることも、これらの遺構が同時に有機的に機能していたことの傍証となろう。

今回検出した遺構群は、原山寺院の11世紀後半～12世紀前半頃の一時期の状況をそのまま見ることができる貴重な事例といえよう。

c．廃絶後の状況

12世紀中頃になると、礎石建物は廃絶し、溝は埋まり、石垣前面は埋没がはじまる。ここで注目すべきは、礎石建物が廃絶に近い時期の層位に覆われている割に残存状況が悪いことである。おそらく建物廃絶からさほど経っていない時期（あるいは建物廃絶後すぐ）に、礎石・地覆石を抜き取るような行為があったと考えられる。なぜこのような行為があったかは不明だが、石材を別の建物等に転用したことも考慮する必要があろう。

なお、礎石建物等が廃絶したのち原遺跡の最盛期である13世紀代に至るまで土砂が堆積しており（III層群）、この上に構造物が置かれた痕跡はみられない。その後近世以降になって、III層群上面に畝溝とみられる浅い溝が掘られる。畑地となったのであろうか。この頃礎石建物の南列や石垣の最上面は一部露出していたようで、このころに動かされた石もあったようである。

その後おそらく近代になって、茶色土層中で検出された石垣（新石垣）が築かれている。これも露出していた11SX050（石垣）上面の石や付近に散らばっている石を利用して築かれたものである。なお、排水に関連するとみられる暗渠状の撹乱等が掘られたのもこの頃である。

d．出土遺物の考察

当調査区出土遺物の所見のみで原遺跡全体の様相を推すことはできないが、ここでは当調査区での印象を記し、今後の課題としたい。

当調査区から出土した遺物は、ほとんどが12～13世紀のもので占める。また土師器の供膳具が多量出土し、輸入陶磁器類も多いという市内の他遺跡と同様の傾向である。ただ注目する点もいくつかある。

まず土師器供膳具で高台を有するものが比較的多く散見されている。また大型の土師器皿の出土が多い反面、10cm前後という小口径の小椀ｃが散見され、器種が多様であるのも特徴的である。小椀ｃは焼成が土師質および瓦器質に仕上がるものがあるが、いずれも整形は同様の手順を踏んでいるようにみえる。

陶磁器はほとんど輸入陶磁器で占められる。供膳具が多いものの、甕などの大型品も多い。特殊品もあり、磁州窯系の白釉陶器椀（大宰府編年XIII期頃）も数点出土している。

また東播系のこね鉢も破片ではあるが比較的多く出土しているようである。内面はよく擦れており、使用されていたことが窺える。

このほか、整地層中から鉄釘の出土している。9～10世紀頃は、付近は墓地であったと推定されている。当調査区の整地層中で見つかったこれらの鉄釘も木棺の釘の可能性があり、同様に多くの墓を壊して造成工事が行われたことを想定しておく。

IV．原遺跡出土経筒について

a．発見の経緯

四王寺山麓は、全国でも有数の経筒出土地として知られ、位置と歴史でも述べたように、原遺跡周辺でも、これまで７例の経筒関連遺物の出土が知られている。

今回報告するのは、現在太宰府市の指定文化財となっている経筒１式である。これらは昭和57（1982）年5月21日、工事中偶然発見された（発見者：宮原旦元氏（湊工業代表取締役））。

b．市指定の経緯

発見された経筒一式は、昭和57年5月26日に発見者である宮原氏より太宰府市教育委員会に寄贈を受けた。翌27日付で当市教育委員会は、発見届（57太教社文第220号）を提出し、市教育委員会で保管することとなった（57太教社文第221号）。

昭和59（1984）年10月８日、太宰府市教育委員会告示第５号により、太宰府市指定文化財第３号として指定された。なお、指定内容については、以下の通りである（法量等は省略）。

指定種別	：	有形文化財（考古資料）
名　　称	：	銅製経筒　経巻共　附、陶製外容器
員　　数	：	一口
出土地	：	太宰府市大字太宰府字原1534番地の15
所在地	：	太宰府市教育委員会
所有者	：	太宰府市
指定理由	：	本資料は、歴史上価値が高く、本市における数少ない資料であり、これを保存するという基本方針に基づき指定する。

尚、現在太宰府市文化ふれあい館2階保存科学室で一括して管理している。

c．遺物の概要（図３、巻頭図版、Pl.44）

蓋（２）は、高さ3.7cm、外径7.9cm、口径6.5cmを測る。天井部には一条の細い突帯がめぐり、宝珠状のつまみの下部には一条の沈線がめぐる。

筒身（３）は、高さ26.6cm、口径6.4cm、底径7.9cmを測る。底まで一鋳で造られ、筒身底のみ別鋳である。筒部は細身で、その底部径は口径よりさらに3mmほど細い。外面には上中下段に三つの突帯をもつ。上下段の突帯は二段で構成され、中段は中央が幅広の三段で構成される。

なお、この経筒は四王寺型III類銅鋳製経筒に分類される。

経筒内には経巻１巻が収められていた。現在、現状のまま応急処置を施し保存している。

外容器（１）は高さ30.7cm、上部径12.5cm、下部径11.5cmを測る。瓦製の容器である。外面は格子目叩きを施した後、縦方向のナデ（ケズリ？）を施し、叩きを丁寧に消している。内面は布目痕がみられる。瓦製作の一本作り技法で形作られている。この容器は経筒用に造られた

専用品とみられるが、本経筒の蓋をした状態の器高が29.9cmであるのに対し、外容器の内法高は29.4cmしかないため、本経筒のために特注したというわけではないと推測する。

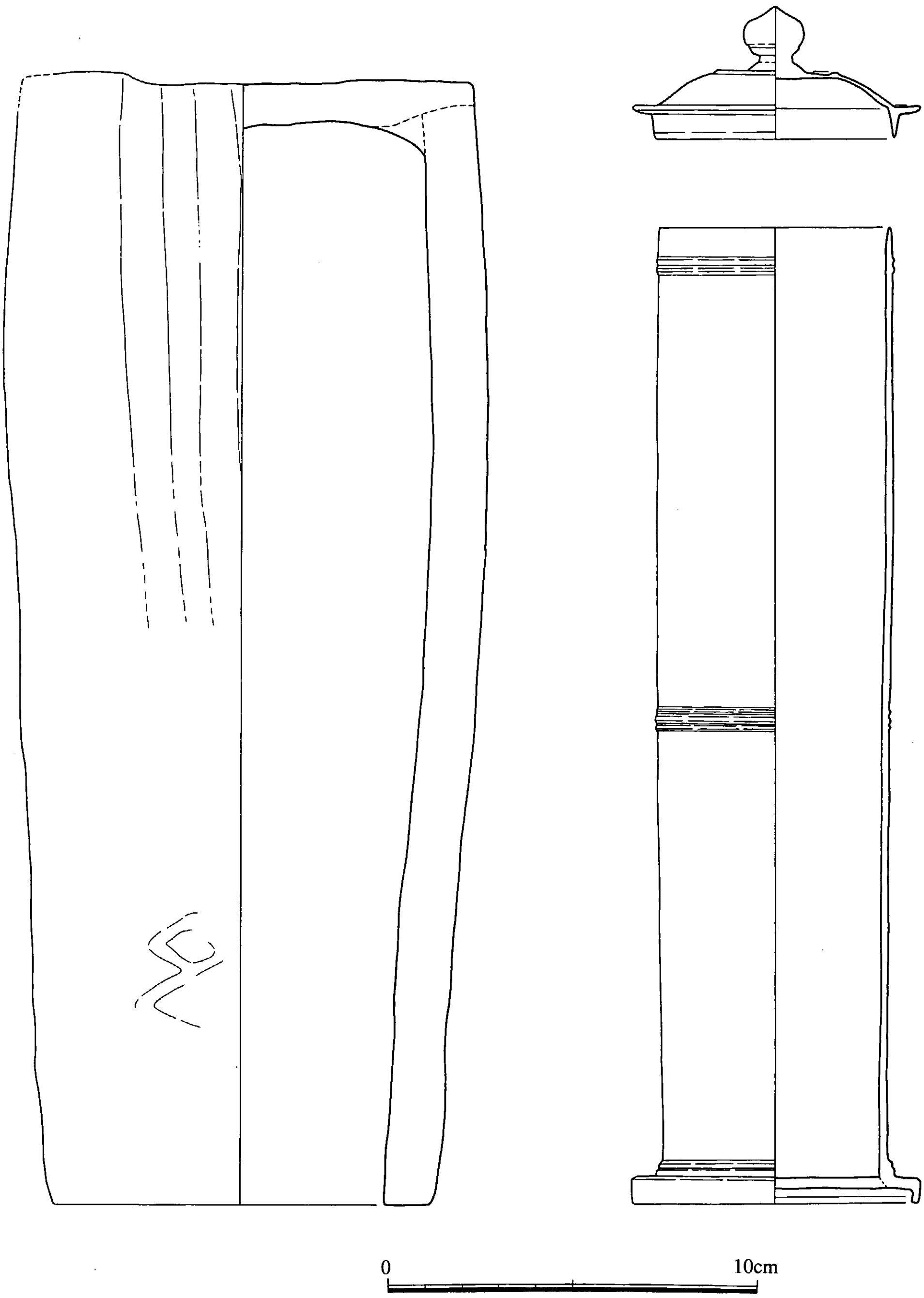


図３　原遺跡出土外容器（左）および経筒（右）（1/2）

V. 原山記念碑・原山本堂址碑・原山中堂址碑について

原11次調査の南西に、原山本堂跡と伝えられる場所があり、その南東隅に「原山本堂址」碑および「原山記念碑」が、現在道路側を向いて設置されている。また原８次調査で調査した北側の石垣列の一画にも「原山中堂址」碑が南向きに設置されている。以下、概要を記す。

「原山記念碑」は、高さ約170cm、幅90cm、厚さ36cm。層理が発達した石材を使用して、長方形に加工し、前面のみ平滑に仕上げている。両面に文字を陰刻している。この碑は、現在年号が欠損しているが、明治38年１月に設置されたことが知られている。記念碑は高さ約60cm、幅約140cm、奥行き約76cmの花崗岩の巨石の上に置かれており、この巨石の下は花崗岩の石積み基壇となっている。

「原山本堂址」碑は、露出部の高さ78cm、幅56cm、厚さ50cm。石材は花崗岩で、前面（文字側））は粗く平坦面をつくる。文字部分は天側が弧を描く細長い長方形に彫りさげ、その中に文字を陰刻している。

「原山中堂址」碑は、露出部の高さ106cm、幅69cm、厚さ21cm以上。石材は花崗岩で、前面（文字側）は粗く平坦面をつくる。文字部分は原山本堂址碑と同様、天側が弧を描く細長い長方形に彫りさげ、その中に文字を陰刻している。

「原山本堂址」碑と「原山中堂址」碑はいずれも規格が類似しており、同時に設置されたことが窺える。設置時期については不明である。

このほか、「原山宝塔院跡」碑も、伝本堂跡南の人家内に設置されているが、今回は割愛した。

原山記念碑　※（　）内は現在欠損している部分を補ったもの

【表面】

原山八坊天台宗也。弘仁九年傳教太師開基也。有八坊。華臺坊、六度寺
安祥寺、十境坊、真寂坊、寶壽坊、寂門坊、明星坊也。明星坊久以無住。明治
三年官命廢之。常修坊慶長年間一社再興之時加入、八坊奉仕。有傳教
太師遺物水瓶五箇。埋于岡見山。農家二名秘之。大旱之時掘出修法、必
降雨。延喜三年菅公薨于太宰府。八坊務葬儀云。天正年間岩屋城為敵
軍所攻落。此時菅廟及八坊其他全罹兵燹。舊記要書委塵灰、僧侶離散。
而古来之迹廢矣。慶長九年、黒田長政公領筑前。而如水公隠栖于太宰
府。當此時、菅廟再建已経年、奉仕執務之徒（漸）増。乃編成一社、而八坊亦
在其中。公所寄附于菅廟之禄貳千石也。而□内支給一社、各有采地。八
坊之新築也、有司董役、以公財成之。而命永住（焉）。爾来司菅廟歳時之祭
典與平常之法務也、久矣。明治元年大政維新。菅廟（廢仏）式而純為神祭。
於是、因　朝命一社還俗。即時廢寺號。改姓名務如元。明治五年四月太
宰府社為国幣社。而選神官七名。其他全廢。於是各為他社神官吏員教
師等之任務。各異其方向營生計。今歳舊八坊同席相謀云。恐至後世而
古来事亦消滅矣。乃建碑以記其概畧。系以銘辭。

常仰神德　永報國恩　八坊来歴　實不可諼
世態變革　耆老猶存　摘要刊石　以示後昆

（明治三十八）年一月　八十三翁桂樵大城谷良範謹撰併書　印印

【裏面】

華臺坊良歓　岡見良壽
安祥寺謙重　安東弘重
六度寺仙賀　宮小路康文
十境坊良謡　大城谷俊誠
常修坊快健　宮垣常廣
真寂坊良然　高杉義彦
寶壽坊良純　玉之井騰一郎
寂門坊良永　一宮世明
十境坊隠居良範　大城谷良範
六度寺継席浄賀　宮小路克三郎

石工土野庄助

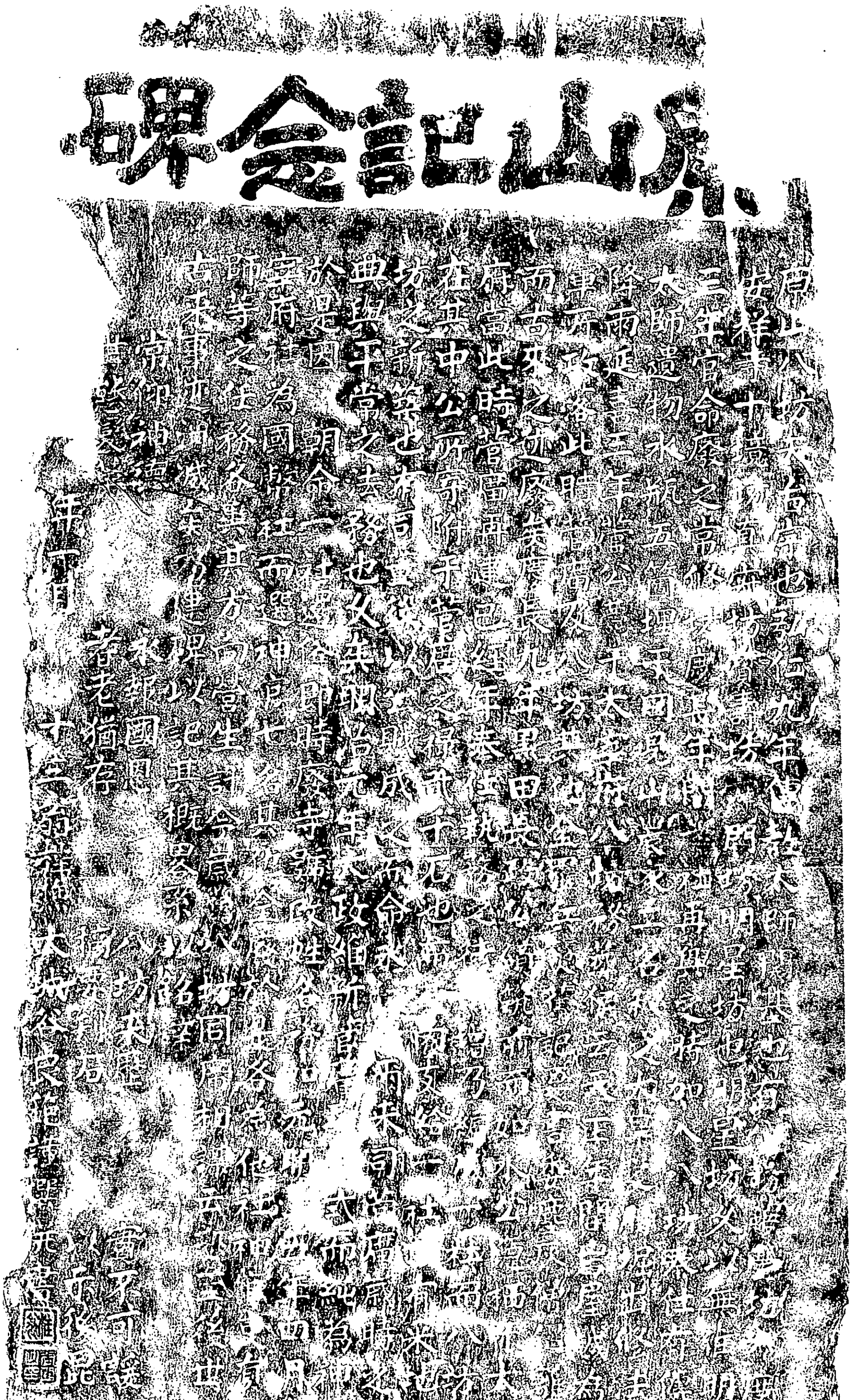


図５　原山記念碑拓影（表面、1/8）

図６　原山記念碑拓影（裏面、1/8）

図７　原山本堂址碑拓影（1/8）

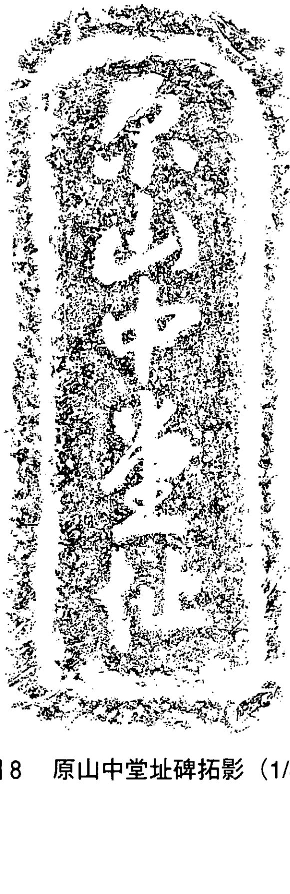
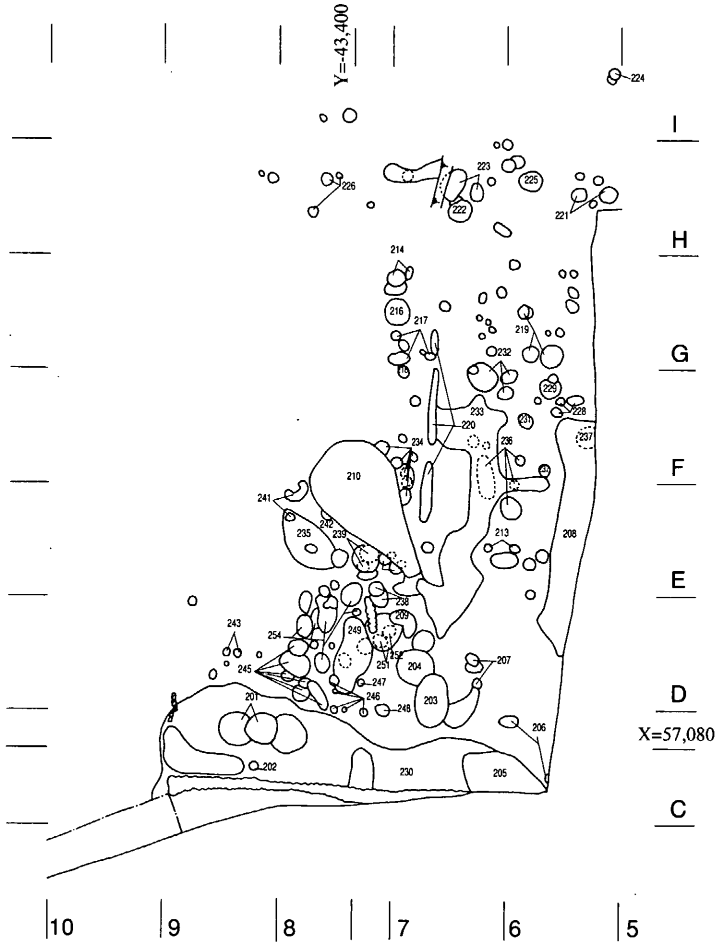


図８　原山中堂址碑拓影（1/8）

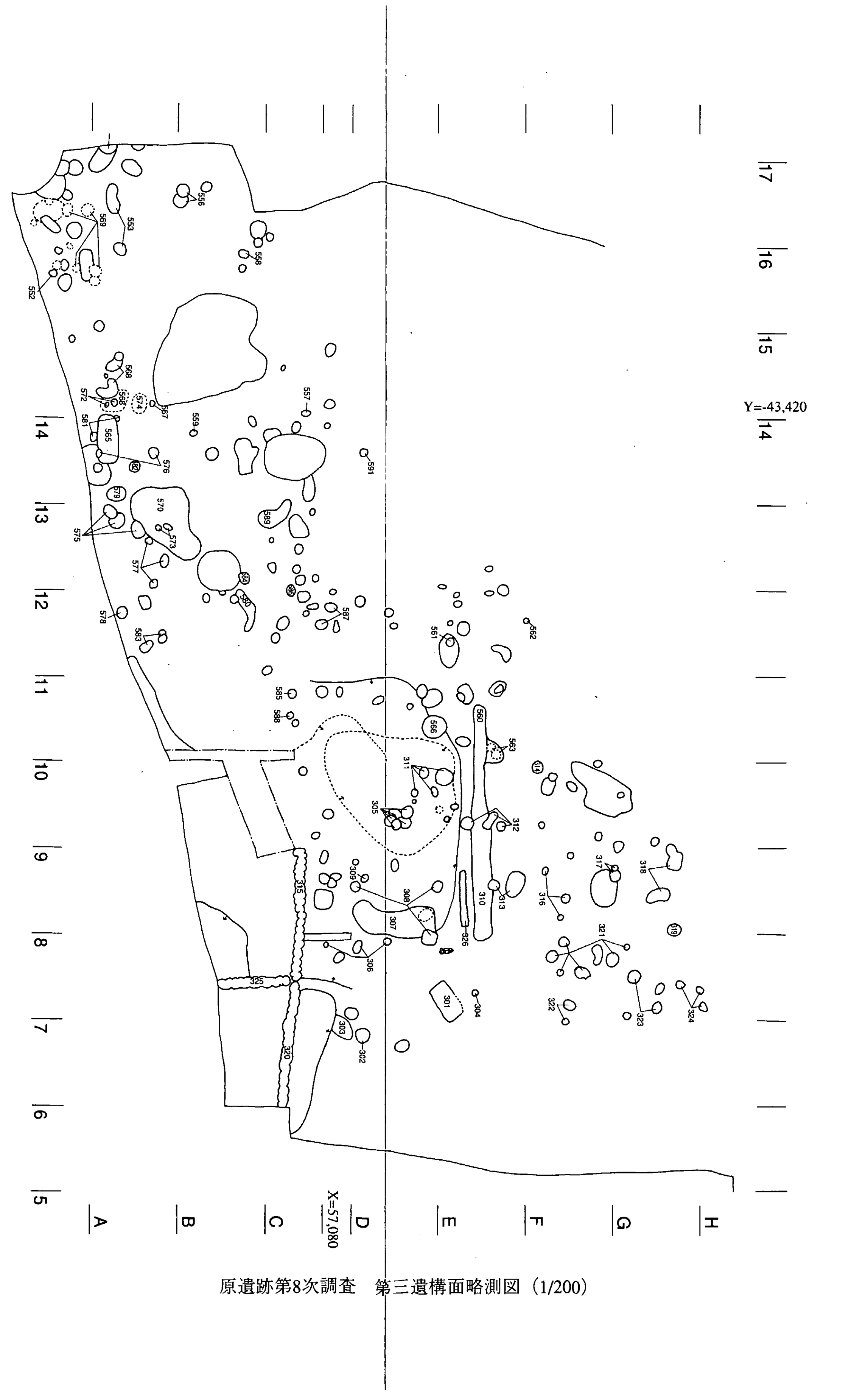
原山本堂址碑（左下）と原山記念碑（右）

原山中堂址碑

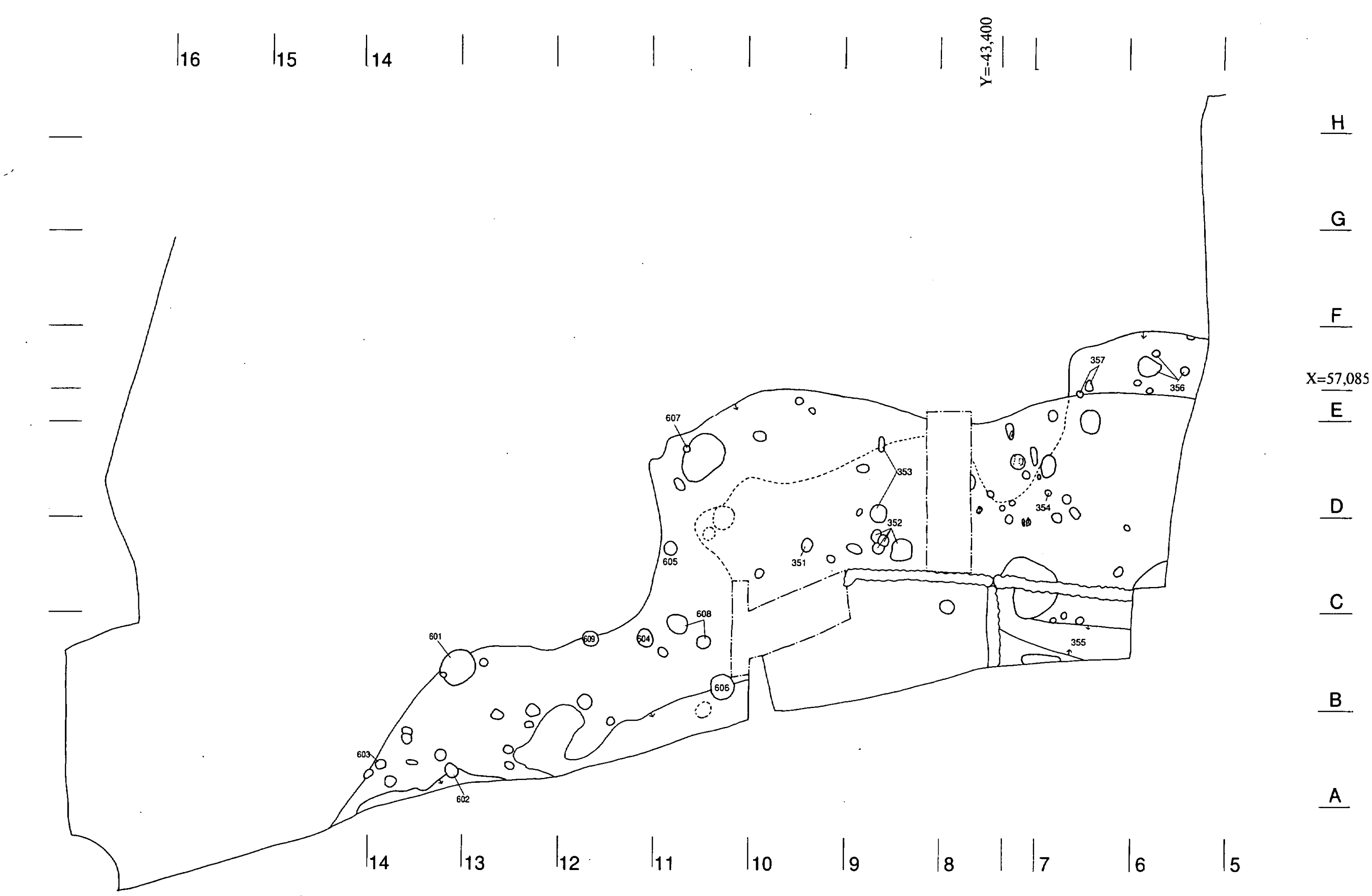
原遺跡第8次調査　第一遺構面遺構略測図



原遺跡第8次調査　第二遺構面略測図（1/200）



原遺跡第8次調査　第三遺構面略測図（1/200）



原遺跡第8次調査　第四遺構面遺構略測図

原遺跡第８次調査遺構番号台帳（1）

東・東端区第一遺構面

S-番号	遺構番号	種　別	備　考	時　期	地区番号
1	8SX001	落ち	西側へ落ちている。溝の可能性あり。	14c	C1
2	8SX002	溜まり		古代末～中世	B3
3		溝	明茶色土	古代末～中世	B2
4		ピット群		古代末～中世	B2
5	8ST005	墓	木棺墓。白磁、土師器小皿を供献	12c後半	E2
6		ピット		古代末～中世	B3
7		ピット群		古代末～中世	C3
8		ピット群		古代末～中世	C4
9	8SX009	ピット群	9→2	古代末～中世	B4
10	8SX010	溜まり		古代末～中世	D2
11		ピット		古代末～中世	B3
12	8SB050	ピット群		古代末～中世	C2
13	8SB050	ピット群		古代末～中世	C3
14	8SB050	ピット群		古代末～中世	C3
15	8SK015	ピット	陶磁器埋納。	D期	H5
16		ピット		古代末～中世	D4
17		ピット		古代末～中世	D3
18	8SB050	ピット群		古代末～中世	D3
19		ピット群		古代末～中世	D3
20		溜まり		古代末～中世	E3
21	8SB050	ピット群		古代末～中世	D2
22		ピット群		古代末～中世	E2
23		ピット群		古代末～中世	E2
24		ピット		古代末～中世	E2
25	8SX025	長方形溝	建物の基礎。栗石が入る。	古代末～中世	GH5
26		ピット		古代末～中世	E2
27		ピット		古代末～中世	D1
28		ピット		古代末～中世	G6
29		土坑か	黒茶色土	古代末～中世	G6
30	8SA030	土手	盛土を４層に分ける。隣地に入っていく。	13c後半	Kライン
31		ピット		古代末～中世	G6
32		ピット		古代末～中世	G55
33		ピット群		古代末～中世	G6
34		ピット		古代末～中世	G5
35	8SX035	土坑	石が入っている。円形	XV期	K6
36		ピット群		古代末～中世	F5
37		ピット群		古代末～中世	E6
38		ピット群		古代末～中世	F6
39		ピット群		古代末～中世	F6
40	8SX040	土坑	炭化物が詰まる。石が設置される。	古代末～中世	G8
41	8SX041	ピット群		古代末～中世	F6
42		ピット群		古代末～中世	G7
43		ピット		古代末～中世	E5
44		ピット群		古代末～中世	D5
45	8SX045	土坑	炭化物、焼土塊多い。	古代末～中世	G8
46		ピット群		古代末～中世	D6
47		ピット群		古代末～中世	D6
48	8SX048	ピット群	鉄塊出土	古代末～中世	D6
49		ピット群		古代末～中世	D5
50	8SB050	掘立柱建物	S-12・13・14・18・21で構成	古代末～中世	C2
51		ピット群		古代末～中世	C7
52		溜まり	整地層黒灰色土と同一と思われる。	古代末～中世	C7
53		ピット群		古代末～中世	C7
54		ピット群		古代末～中世	D7
55	8SX055	土坑	焼土塊・炭化物多い。	古代末～中世	G7

原遺跡第８次調査遺構番号台帳（２）

東区第一遺構面

S-番号	遺構番号	種　別	備　考	時　期	地区番号
56		ピット群		古代末～中世	E7
57		ピット群		古代末～中世	G7
58		ピット群		古代末～中世	G7
59		ピット群		古代末～中世	G7
60	8SD060	溝		14c	IJ34
61		ピット群		古代末～中世	G7
62		ピット群		古代末～中世	F7
63		ピット群		古代末～中世	F7
64		ピット群		古代末～中世	F7
65	8SA065	柵列	SX001に沿っている。S-172を含む。	古代末～中世	C1
66		溜まり		古代末～中世	E7
67		ピット群		古代末～中世	F7
68		ピット群		古代末～中世	E7
69	8SX069	土坑群		古代末～中世	E7
70	8SK070	土坑	礫群が環状に入る。	古代末～中世	I5
71		ピット群		古代末～中世	H4
72		ピット群		古代末～中世	I5
73		ピット群		古代末～中世	H6
74	8SX074	ピット群		古代末～中世	H6
75	8SX075	ピット	瓦器を埋納。	古代末～中世	E8
76		ピット	70→76	古代末～中世	I5
77		ピット群		古代末～中世	I6
78		ピット群		古代末～中世	E8
79		ピット		古代末～中世	E8
80		欠番			
81		ピット		古代末～中世	E8
82		ピット	75→82	古代末～中世	E8
83		ピット群		古代末～中世	E8
84		ピット		古代末～中世	E8
85		欠番			
86		ピット群		古代末～中世	F8
87		小土坑		古代末～中世	E8
88		ピット群		古代末～中世	F8
89		ピット群		古代末～中世	F8
90		欠番			
91		ピット群		古代末～中世	F8
92	8SX092	ピット		古代末～中世	F8
93		ピット群		古代末～中世	G8
94		ピット		古代末～中世	G8
95		欠番			
96		ピット群		古代末～中世	G8
97		ピット		古代末～中世	G8
98		ピット群		古代末～中世	G8
99		ピット		古代末～中世	G8
100		欠番			
101		ピット群		古代末～中世	G8
102		ピット		古代末～中世	G8
103		ピット		古代末～中世	F7
104		ピット群		古代末～中世	F7
105		欠番			
106	8SX106	ピット		古代末～中世	F7
107		ピット		古代末～中世	F7
108	8SX108	ピット群	SX120と同一個体あり。	古代末～中世	C8
109		ピット		古代末～中世	F7
110	8SX110	土坑		古代末～中世	E8

原遺跡第８次調査遺構番号台帳（３）

東区第一遺構面

S-番号	遺構番号	種　別	備　考	時　期	地区番号
111		ピット群		古代末～中世	E8
112		ピット群		古代末～中世	D8
113		ピット群		古代末～中世	D8
114		ピット群		古代末～中世	D8
115		ピット		古代末～中世	D8
116		ピット		古代末～中世	D8
117	8SX117	土坑	長円形	古代末～中世	D8
118		ピット群		古代末～中世	D8
119	8SX119	ピット		古代末～中世	D8
120	8SX120	土坑		古代末～中世	C8
121		土坑		古代末～中世	C8
122		ピット群		古代末～中世	C8
123		ピット群		古代末～中世	C9
124		土坑	浅い	古代末～中世	C9
125	8SK125	土坑		古代末～中世	C9
126	8SX126	土坑		古代末～中世	C9
127		土坑		古代末～中世	C9
128		ピット群		古代末～中世	C9
129		ピット群		古代末～中世	C9
130	8SX130	土坑	礫群入る。	古代末～中世	D9
131		ピット		古代末～中世	C9
132		ピット群		古代末～中世	J7
133		ピット		古代末～中世	J7
134		ピット群		古代末～中世	I7
135	8SX135	溝？	灰黒色土	古代末～中世	H7
136	8SX136	ピット		古代末～中世	I7
137		ピット群		古代末～中世	I7
138		ピット	135→138	古代末～中世	H7
139		ピット群		古代末～中世	H7
140	8SX140	溝	整地（黄色礫混土）の一部か。	古代末～中世	E5
141		ピット	暗茶色粘質土	古代末～中世	H7
142		ピット群		古代末～中世	I8
143		ピット		古代末～中世	I8
144		ピット群		古代末～中世	H8
145		溝		古代末～中世	CD9
146		ピット群	145→146	古代末～中世	D9
147		ピット		古代末～中世	D9
148		ピット		古代末～中世	D9
149		ピット群		D期	D9
150		欠番			
151		ピット群	焼土塊・炭化物入る。	古代末～中世	D9
152		ピット群		古代末～中世	D9
153		ピット群		古代末～中世	E9
154		ピット		古代末～中世	E9
155		ピット		古代末～中世	D9
156		ピット群		古代末～中世	E9
157		ピット群		古代末～中世	E9
158		ピット	111・140→158	古代末～中世	E8
159		ピット群		古代末～中世	F8
160	8SX160	落ち	60と一連か。	13c	E4
161		ピット		古代末～中世	F8
162	8SX162	ピット	炭化物・焼土入る。	古代末～中世	F8
163		ピット群		古代末～中世	I8
164		ピット		古代末～中世	I8
165	8SX165	落ち	165→160。160・60と一連か。	13c	E4

原遺跡第８次調査遺構番号台帳（４）

東区第一遺構面

S-番号	遺構番号	種　別	備　考	時　期	地区番号
166		ピット群		古代末～中世	I9
167		ピット群		古代末～中世	I9
168		ピット群		古代末～中世	G9
169		ピット群		古代末～中世	G9
170		欠番			
171		ピット群	171→110	古代末～中世	E8
172		ピット	172→1	古代末～中世	E0
173		ピット	173→1	古代末～中世	C1

東区第二遺構面

S-番号	遺構番号	種　別	備　考	時　期	地区番号
201		土坑群		古代末～中世	C8
202		ピット		古代末～中世	C8
203		土坑		古代末～中世	D6
204		土坑	204→203	古代末～中世	D6
205	8SX230	土坑		古代末～中世	C6
206		ピット群		古代末～中世	C5
207		ピット群		古代末～中世	D6
208		土坑		古代末～中世	EF5
209		ピット		古代末～中世	D6
210	8SE210	井戸	階段付。石を多量に含む。	D期	F7
211		土坑		古代末～中世	E6
212		ピット		古代末～中世	E6
213		ピット群		古代末～中世	E6
214		ピット群		古代末～中世	G6
215		欠番			
216		ピット		古代末～中世	G6
217		ピット群	217→25	古代末～中世	G6
218		ピット		古代末～中世	G6
219		ピット群		古代末～中世	G5
220		溝	25の残り。	古代末～中世	FG6
221		ピット群		古代末～中世	H5
222		ピット		古代末～中世	H6
223		ピット群		古代末～中世	H6
224		ピット		古代末～中世	I5
225	8SX225	ピット		古代末～中世	H5
226		ピット群		古代末～中世	H7
227		ピット	208→227	古代末～中世	F5
228		ピット群		古代末～中世	F5
229		ピット		古代末～中世	F5
230	8SX230	土坑	315の裏込め土。205と同一の可能性あり。黒茶色土	C～D期	C678
231		ピット		古代末～中世	F5
232		ピット群		古代末～中世	F6
233		土坑	211と同一の可能性あり。	古代末～中世	F6
234	8SX234	ピット群	234→210	古代末～中世	F6
235		土坑		古代末～中世	E7
236		ピット群	236→233	古代末～中世	F6
237	8SX237	ピット		古代末～中世	F5
238		ピット群		古代末～中世	E7
239		ピット群		古代末～中世	E7
240		欠番			
241		ピット群		古代末～中世	E7
242		ピット	210→242	古代末～中世	E7
243		ピット群	第一遺構面遺構の掘り残し。　鉄塊	古代末～中世	D8
244		ピット	第一遺構面遺構の掘り残し。	古代末～中世	D8
245	8SX245	ピット群		古代末～中世	D7

原遺跡第８次調査遺構番号台帳（５）

東区第二遺構面

S-番号	遺構番号	種　別	備　考	時　期	地区番号
246		ピット群		古代末～中世	D7
247	8SX247	ピット		古代末～中世	D7
248		ピット		古代末～中世	D7
249		ピット群		古代末～中世	D7
250		欠番			
251		ピット群		古代末～中世	D7
252		ピット		古代末～中世	D7
253		ピット群		古代末～中世	D7
254		ピット群		古代末～中世	D7

東区第三遺構面

301	8SK301	焼土坑	長方形。土壌サンプルあり。	古代末～中世	E7
302	8SX302	ピット		古代末～中世	D6
303		整地？	炭化物層	古代末～中世	C6
304		ピット		古代末～中世	E7
305	8SX305	土坑	不整形。　硬化面への掘り込み。	古代末～中世	D9
306		ピット群		古代末～中世	C7
307	8SX307	整地？	炭化物層	古代末～中世	D8
308	8SX308	ピット群		古代末～中世	D8
309	8SX309	ピット		古代末～中世	D8
310	8SD310	溝		C～D期	E89
311		ピット群		古代末～中世	D9
312		ピット群		古代末～中世	E9
313		ピット群		古代末～中世	E8
314		ピット		古代末～中世	F9
315	8SX315	石列		C～D期	C8
316		ピット群		古代末～中世	F8
317		ピット群		古代末～中世	G8
318		ピット群		古代末～中世	G8
319		ピット		古代末～中世	G8
320	8SX320	石列	315より小さい石を使用。315に平行。	C～D期	C6
321		ピット群		古代末～中世	F7
322		ピット群		古代末～中世	F7
323		ピット群		古代末～中世	G7
324		ピット群		古代末～中世	G7
325	8SX325	石列	315・320に直角に接する。	C～D期	B7
326	8SX326	石列	310に並行している。	古代末～中世	E8

東区第四遺構面

351	8SX351	ピット		古代末	C9
352		ピット群		古代末	C8
353		ピット群		古代末	D8
354		ピット		古代末	D6
355		溝？	通路の跡？	古代末	B6
356		ピット群		古代末	E5
357		ピット群		古代末	E6

西区第一遺構面

401	8SX401	溝		古代末～中世	A16
402		溝		古代末～中世	A16
403		ピット		古代末～中世	A17
404		ピット		古代末～中世	A16
405		土坑		古代末～中世	D16
406		ピット		古代末～中世	B17
407		ピット群		古代末～中世	D15
408		ピット群		古代末～中世	E15
409		ピット		古代末～中世	E15
410		土坑		古代末～中世	D16

原遺跡第８次調査遺構番号台帳（６）

西区第一遺構面

S-番号	遺構番号	種　別	備　考	時　期	地区番号
411		溜まり	赤土の残り。	古代末～中世	E16
412	8SX412	溜まり	白赤色粘土	古代末～中世	A15
413		土坑		古代末～中世	A16
414	8SX414	土坑		13c	A15
415	8SX415	土坑		13c	A15
416		ピット	炭化物を含む。	古代末～中世	A15
417		溜まり		古代末～中世	C16
418		ピット群	418→417	古代末～中世	C16
419	8SX419	ピット群	黒茶色土	古代末～中世	E14
420		土坑	炭化物を含む。	古代末～中世	D14
421		ピット	421→415	古代末～中世	A15
422		溝		古代末～中世	A14
423		ピット群		古代末～中世	A14
424		ピット		古代末～中世	A14
425		土坑	溜まりの可能性あり。	古代末～中世	D15
426		ピット		古代末～中世	A14
427		土坑		古代末～中世	D14
428	8SX428	土坑		D期	E14
429		ピット群		古代末～中世	A13
430	8SK430	土坑	ガラス、短刀出土。	13c	B14
431		ピット		古代末～中世	A13
432		ピット群		古代末～中世	A13
433		ピット		古代末～中世	A13
434		ピット群		古代末～中世	A13
435		土坑		古代末～中世	A12
436		ピット群		古代末～中世	D13
437		ピット		古代末～中世	D13
438		ピット		古代末～中世	D13
439		ピット群		古代末～中世	D13
440	8SX440	土坑		D期	B12
441		ピット群		古代末～中世	E13
442		ピット群		古代末～中世	E13
443		溝		古代末～中世	E13
444		ピット		古代末～中世	E13
445		土坑	445→430	古代末～中世	B14
446		ピット群	446→435	古代末～中世	A12
447		ピット		古代末～中世	B14
448		ピット		古代末～中世	D13
449		ピット群		古代末～中世	F13
450		溜まり		D期	AB10・11
451		ピット群		古代末～中世	F13
452		溝		古代末～中世	F13
453		ピット		古代末～中世	G13
454		ピット		古代末～中世	G13
455		土坑		古代末～中世	B13
456		ピット群		古代末～中世	B11
457		ピット群		古代末～中世	B11
458		ピット群		古代末～中世	B11
459		ピット群		古代末～中世	B11
460		土坑	460→443　暗茶色土	古代末～中世	E13
461		ピット群		古代末～中世	B13
462		ピット群		古代末～中世	E12
463		ピット群	土師器多い。	古代末～中世	E12
464	8SB500i	ピット群		古代末～中世	E12
465		土坑	砂っぽい茶色土	古代末～中世	A11

原遺跡第８次調査遺構番号台帳（７）

西区第一遺構面

S-番号	遺構番号	種　別	備　考	時　期	地区番号
466		ピット群		古代末～中世	F12
467		ピット群		古代末～中世	A11
468		ピット群		古代末～中世	B11
469		ピット群		古代末～中世	E11
470	8SX470	土坑		古代末～中世	C13
471		土坑		古代末～中世	E11
472	8SB500h	ピット		古代末～中世	E11
473	8SB500g	ピット	黒灰色土	古代末～中世	E11
474		ピット		古代末～中世	E11
475	8SX475	土坑	焼土塊多い。	古代末～中世	A12
476		ピット		13c	E11
477		溝		古代末～中世	E11
478		ピット群		古代末～中世	E11
479		ピット群		古代末～中世	E11
480	8SX480	土坑		12c後半	A11
481		ピット群		古代末～中世	E11
482	8SB500b	ピット		古代末～中世	E11
483		ピット群		古代末～中世	B11
484		ピット群		古代末～中世	A11
485	8SX485	土坑	黒灰色土、暗褐色土	13c	A11
486		ピット		古代末～中世	A12
487	8SB500a	ピット		古代末～中世	F12
488		ピット群		古代末～中世	F12
489		ピット		古代末～中世	G12
490	8SX490	土坑		12c後半	D13
491		ピット群		古代末～中世	G12
492	8SX492	ピット群		古代末～中世	F10
493	8SB500c	ピット	黒灰色土	古代末～中世	F10
494		ピット群		古代末～中世	F10
495		溝	475・480・485→495	古代末～中世	AB1011
496		ピット群		古代末～中世	G10
497	8SB500e	ピット群	498→497	古代末～中世	E10
498		ピット		古代末～中世	E10
499		ピット群		古代末～中世	E10
500	8SB500	掘立柱建物	S-466・472・473・482・487・492・493・497・501	12ｃ後半	
501	8SB500f	ピット群		古代末～中世	E10
502		ピット群		古代末～中世	D12
503		ピット		古代末～中世	D12
504		ピット		古代末～中世	B10
505		溝		古代末～中世	A10
506		ピット群		古代末～中世	B10
507		ピット群		古代末～中世	C12
508		ピット群		古代末～中世	D12
509		ピット群		古代末～中世	D11
510		土坑		古代末～中世	C11
511		ピット群		古代末～中世	B10
512		ピット群		古代末～中世	B10
513		ピット		古代末～中世	B10
514		ピット群		古代末～中世	C11
515		ピット		古代末～中世	E10
516		ピット		古代末～中世	F13
517		ピット		古代末～中世	C12
518		ピット群		古代末～中世	D10
519		ピット群		古代末～中世	D10
520		欠番			

原遺跡第８次調査遺構番号台帳（８）

西区第一遺構面

S-番号	遺構番号	種　別	備　考	時　期	地区番号
521		撹乱		古代末～中世	C10
522		ピット		古代末～中世	C10
523		土坑	砂っぽい埋土。浅い。	古代末～中世	C10
524		ピット群		古代末～中世	C10
525		土坑		古代末～中世	D11
526		ピット		古代末～中世	C10
527		ピット		古代末～中世	C10
528		ピット		古代末～中世	C10
529		ピット		古代末～中世	C11
530		溝		古代末～中世	D11
531		ピット		古代末～中世	D11
532		ピット群		古代末～中世	E13
533		土坑		古代末～中世	D14
534		ピット		古代末～中世	D14
535		欠番			
536		土坑		古代末～中世	C11
537		ピット	537→455	古代末～中世	D13
538		ピット		古代末～中世	B12
539		ピット	539→475	古代末～中世	A12
540		土坑		古代末～中世	C14
541	8SX541	土器溜まり	赤褐色砂質土除去中の土器集中地点。	XV期	A14
542		ピット群		古代末～中世	F11

西区第三遺構面

S-番号	遺構番号	種　別	備　考	時　期	地区番号
551		土坑		古代末～中世	A15
552		ピット		古代末～中世	A15
553		ピット群		古代末～中世	A16
554		ピット		古代末～中世	A17
555		欠番			
556	8SX556	ピット群		古代末～中世	B16
557		ピット		古代末～中世	C14
558		ピット		古代末～中世	B15
559		ピット		古代末～中世	B13
560	8SD310	溝	長土坑とも考えられる。	C～D期	E10
561		ピット	第一遺構面の掘り残し。	古代末～中世	E11
562		ピット	第一遺構面の掘り残し。	古代末～中世	F11
563		ピット群		古代末～中世	E10
564		ピット	鉄塊出土。	古代末～中世	E10
565		土坑	砂っぽい灰色土	古代末～中世	A13
566		ピット		古代末～中世	E10
567		ピット		古代末～中世	A14
568		ピット群	第一遺構面の掘り残し。	古代末～中世	A14
569		ピット群	砂っぽい埋土	古代末～中世	A15
570		溜まり？	炭化物を含む。570→573	古代末～中世	A12
571		ピット		古代末～中世	A16
572		ピット群		古代末～中世	A14
573		ピット群		古代末～中世	A12
574		ピット	埋土は砂。	古代末～中世	A14
575		ピット群		古代末～中世	A12
576		ピット群		古代末～中世	A13
577		ピット群		古代末～中世	A12
578		ピット		古代末～中世	A11
579		ピット	黄白色粘土。	古代末～中世	A13
580		溝	埋土は砂質。	古代末～中世	B11

原遺跡第８次調査遺構番号台帳（９）

西区第三遺構面

S-番号	遺構番号	種　別	備　考	時　期	地区番号
581	.	ピット群		古代末～中世	A13
582		ピット		古代末～中世	A13
583	8SX583	ピット群		古代末～中世	A11
584		ピット		古代末～中世	B12
585		ピット		古代末～中世	C10
586		ピット	埋土は砂。	古代末～中世	C12
587		ピット群		古代末～中世	C11
588		ピット		古代末～中世	C10
589		土坑		古代末～中世	C12
590		欠番			
591		ピット		古代末～中世	D13

西区第四遺構面

S-番号	遺構番号	種　別	備　考	時　期	地区番号
601	8SK601	焼土坑	円形	古代末	B13
602		ピット		古代末	B13
603		ピット		古代末	B13
604	8SX604	ピット		XII期	B11
605		ピット		古代末	C10
606		ピット	埋土は砂。	古代末	B10
607		ピット	炭化物含む。	古代末	D10
608		ピット群	炭化物含む。	古代末	B10
609		ピット		古代末	B11

各土層

土　色	報告土色名	遺構面	備　考	時　期	場　所
茶色土	茶色土	1	第一遺構面検出時	13～14ｃ	東区/東端区
茶色土下	茶色土	1	第一遺構面検出時	13～14ｃ	東区
赤土	茶色土	1	第一遺構面検出時	13～14ｃ	西区
赤茶砂土	赤茶色砂質土	1→2	東端区南側の整地。		東端区南半
黄色礫混土	黄色礫混土	1→2	第一遺構面。新鮮な花崗岩風化土。	XVIII期	東区南
暗灰土1	暗灰色土	1→2	黒灰土、茶灰色砂質土の上	XV～XVII期	東区
暗灰土2	暗灰色土	1→2	黒灰土、茶灰色砂質土の上、暗灰土1と同一か。	XV～XVII期	東区
茶粘土	茶色粘質土	1→2	北側整地の最上層、灰色砂土の上。	XV～XVI期	東区
灰色砂土	灰色砂質土	1→2	茶粘土の下	12ｃ	東区
淡茶土	淡茶色土	1→2	茶粘土の下	XIV～XV期	東区
明灰土	淡茶色土	1→2	淡茶土と同一層。	XIV～XV期	東区
茶灰砂土	茶灰色砂質土	1→2	黒灰土の下。東区東端。	XIV～XV期	東区
黒灰土	黒灰色土	1→2	黄色礫混土の下、暗茶土の上。	XVII～XVIII期	東区
拡張区黒灰土	黒灰色土	1→2	東区黒灰土と同一。	XVII～XVIII期	拡張区
黒灰灰土	黒灰色土	1→2	黒灰土と同一。	XVII～XVIII期	東区
暗茶土	黒灰色土	1→2	第二遺構面検出時。	XIV～XV期	東区
暗黄土	明黄色土	2	黒赤土の上、黒灰土の下。	XIV～XV期	東区南端
拡張区明黄土	明黄色土	2	黒灰土の下、炭焼土の上。	XIV～XV期	拡張区
黄粘土	明黄色土	2	トレンチ埋土、暗黄土を主体とする。		東区
黒赤土	黒赤色土	2→3	黒灰土より下層、黒茶土より上層にあたる。	XV期	東区南端
拡張区赤炭土	黒赤色土	2→3	黒赤土と同一。	XIV～XV期	拡張区西側
拡張区焼炭土	黒赤色土	2→3	赤炭土と同一。	XIV～XV期	
拡張区黒茶土	黒茶色土	2→3	明黄土の下。	XIV～XV期	拡張区
炭灰土	炭灰色土	2→3			東区
黄茶土	黄茶色土	2→3	第三遺構面検出時。	XV期	東区
黄茶土	黄茶色土	2→3	第三遺構面検出時。	XV期	西区南側
赤褐砂土	赤褐色砂質土	1→3	黄茶土の上。	XV期	西区南端
黄白粘	黄白色粘土	1→3	白青粘土の下。		西区南側

原遺跡第８次調査遺構番号台帳（10）

土　色	報告土色名	遺構面	備　考	時　期	場　所
灰褐砂	灰褐色砂	3	暗黄土の下。		西区
暗赤茶土	暗赤茶色土	3	焼面の下、赤茶土の上。	XV期	東区南側
黒茶土	明黒茶色土	3→4	S-230の埋土にあたる。		東区
赤茶土	赤茶色土	3→4	暗赤茶土の下。	XIV～XV期	東区
暗黄土	暗黄色土	3→4	東区4面の落ちに対応、褐炭土の上。	XV期	西区南東
褐炭土	暗褐色土	3→4	赤炭土の下。		拡張区西側
暗褐土	暗褐色土	3→4	暗黄土下層。	XV期	西区南東
褐炭土	暗褐色土	3→4	暗褐土の残りか。		西区
拡張区暗褐土	褐色土	3→4	砂混、黒茶土の下、B8明褐土と同一の可能性あり。	XIV～XV期	拡張区東側
拡張区明褐土	明褐色土	3→4	褐灰土の下。	XIV～XV期	拡張区西側
拡張区淡褐土	淡褐色土	3→4	8SX355の埋土にあたる。		拡張区
茶色砂土	明茶色砂質土	3→4	暗赤茶土の下、生産関連の湿抜きの可能性あり。	XIV～XV期	東区南側
茶灰褐土	茶灰褐色土	3→4	第三遺構面。黒灰色土の下。		東区東側
明灰褐土	明灰褐色土	3→4	茶灰褐色土と同一か。		東区東側
灰褐土	灰褐色土	3→4	明灰褐色土の下、地山の上。		東区東
赤褐土	赤褐色土	3→4	赤褐砂土の下、褐色砂の上。	XII～XIII期	西区
褐砂	褐色砂	3→4	赤褐土と同一か。	XIII期	西区

西区赤茶砂土	赤褐色砂質土	4	赤褐色砂土のラベル記載誤り。赤褐砂土と同一。		西区南
茶褐粘	茶褐色粘質土	4	石列北、茶色砂土の下。自然堆積か。	XII～XIII期	東区南側
黄褐土	黄褐色粘質土	4	自然堆積と考えられる。茶褐色粘質土と同一。	XII～XIII期	西区

トレンチ1	トレンチ		南北トレンチ、第三面上から地山まで、CD8区。		東区
トレンチ2	トレンチ2		東西トレンチ、東区と東端区を繋ぐ。		東区
上段石垣裏込	上段石垣裏込		近世以降の耕作地造成時の盛土。	近代	西区
下段石垣裏込	下段石垣裏込		近世以降の耕作地造成時の盛土。	近代	西区
東壁表土	表土				東区
拡張区内	表土				拡張区
拡張区表土	表土		表土+黄色礫混土にあたる。		拡張区
試掘トレンチ	表土		確認調査の際の出土遺物に付す。		
周辺表採	表土		調査地周辺での採取遺物に付す。		
Z	不明		出土地点不明遺物に付す。		

原遺跡第8次調査　出土遺物一覧表(1)

S-1

須恵器	甕片
土師器	坏a(イト)、小皿a(イト)、椀c、鉢×鍋、火鉢？ すり鉢
瓦器	椀片
龍泉窯系青磁	椀；I、I2？、IIa、IIb、IV？、上田E？、IIIa 小椀；I4 坏；III（内蓮弁） 皿；I？ ？I、？I？
同安窯系青磁	椀；I1、I1b、I1c、III1c、片 皿；I1b、皿？ 片（同安？）
高麗青磁	椀？（象嵌）、皿、？皿
瓦質土器	火鉢
国産陶器	常滑甕片
白磁	椀；II、IV、V1×VIII、V～VIII（外反） V（内クシ）、V4×VIII、V×VIII（内クシ） VIII、IV～VIII、II3×4bc 皿；II×III、V～VII、V×VI、IX、III、VIIa、II～IV 片（広東）
青白磁	片、青白？
中国陶器	B' a、Aab、A' a'、A' ab、B' ab、E、F 耳壺VI？
朝鮮系無釉陶器	片
青花	中国？
土製品	焼土塊、瓦玉
石製品	小丸石、滑石、and
瓦類	片

S-2

土師器	小皿a(イト)、坏a(イト)、鉢？片
同安窯系青磁	椀、椀I1b
須恵質土器	鉢
白磁	椀；V4b、VII？、VIII、IV～VII、IV×V×VII 皿；VI1b、V～VII
金属製品	不明銅製品
石製品	石鍋片

S-3

土師器	小皿片、片、鉢？
白磁	椀；IV～VII 椀×皿
石製品	石鍋

S-4

土師器	坏片、片

S-5

土師器	小皿a、坏a
同安窯系青磁	同安？
白磁	椀；V4b、V4c、IV
青白磁	片
染付（輸入）	片
金属製品	釘（鉄）

S-6

土師器	坏a(イト)、片
白磁	椀；片IV～VIII

S-7

土師器	坏a、高台
白磁	椀；片IV～VIII

S-8

土師器	片

S-9

土師器	鉢、高台、坏a
瓦器	椀
石製品	滑石片、白丸石

S-10

土師器	小皿a(ヘラ)、丸坏、鉢、椀c
瓦器	鉢？、椀
須恵質土器	鉢
白磁	椀；II1
青白磁	片
土製品	瓦玉
瓦類	丸瓦片

S-11

土師器	片

S-12

土師器	片
白磁	椀；V×VIII（内クシ）

S-13

土師器	坏a、片、小皿a

S-14

土師器	片
龍泉窯系青磁	片
中国陶器	中国陶器？A' ab

S-15

土師器	坏a(イト)、小皿a(イト)
同安窯系青磁	椀；I1b（墨書）
白磁	椀；VIIc（墨書）
青白磁	椀
中国陶器	鉢III×VI
石製品	砥石

S-16

土師器	小皿a(イト？)、坏a、高台
白磁	椀；IV

S-17

土師器	丸坏？、片
白磁	椀；II

S-18

土師器	小皿a、高台、片
瓦器	片

S-19

土師器	片

S-20

土師器	鉢、坏、片
土製品	瓦玉

S-21

土師器	坏、小皿片

S-22

土師器	片(イト)

S-23

土師器	椀c、小皿a、丸坏
中国陶器	鉢I1b、水注X
石製品	滑石片

S-24

土師器	片

S-25

土師器	小皿a(ヘラ、イト)、坏a(ヘラ、イト)、丸坏
瓦器	片
須恵質土器	鉢
白磁	椀；II1、IV、VI×VIII、V4×VIII、IV～VIII 皿；VI a、VIb、VI？、VI 椀×皿
朝鮮系無釉陶器	片
金属製品	釘（鉄）
石製品	石鍋、二次加工品、斧？

S-25下

須恵器	甕片
土師器	丸坏、椀c、小皿a(イト)
瓦器	椀片
青磁	青磁？
白磁	椀；V（内クシ+外ヘラ）、VII×VIII4 皿；VIa 椀×皿

S-26

土師器	片
白磁	椀；II1a

S-27

土師器	丸坏？片、片

S-28

土師器	小皿a(イト)、坏a、片

S-29

土師器	小皿a、坏a(イト)
瓦器	片
須恵質土器	東播鉢

S-30黄褐色土

須恵器	甕口縁（古代）
土師器	小皿a(イト)、丸坏、坏a(イト)、甕片、高台、鍋
瓦器	片
越州窯系青磁	壺類；III？
龍泉窯系青磁	椀；I3、I2 小椀；I、I4
同安窯系青磁	椀；I1b
白磁	椀；II、II1、V、V1×VIIIo（内クシ）、XII1a、IV VI×VIII、V4×VIII、IV～VIII、II3×4 V1×VIII？（直口+堆線） 皿；III1、VII、II×III、V～VII 壺類III？（外タテクシ）、壺類III？
中国陶器	E（小型、外褐釉）、鉢I、A' ab'
朝鮮系無釉陶器	片
陶器	東播、こね鉢
土製品	焼土塊
瓦類	平瓦(格子叩)

S-30茶褐色土

須恵器	片、甕片
土師器	丸坏、坏a(イト)、小皿a(イト)、皿
黒色土器A	片
瓦器	椀
龍泉窯系青磁	椀；III2、I1b
同安窯系青磁	椀；I1b、I1c
須恵質土器	東播、片
白磁	椀；IV、IV～VIII、V～VIII（外反） V（内クシ+外ヘラ） II（拡張区黒茶色土と接合） 皿；IX1、III1、VIII1、VIII？ 椀×皿・広東、椀×皿
中国陶器	盤I1b、I、Bab、B' a、鉢I2、壺類A' a
国産磁器	常滑
土製品	瓦玉
石製品	滑石片、石鍋片

S-30暗褐色土

須恵器	片
土師器	丸坏、火鉢（足部分）、小皿a(イト)、坏a(イト)
龍泉窯系青磁	椀；I2～4、I3
同安窯系青磁	椀；I1b、I1c、同安？椀
高麗青磁	椀×蓋II
白磁	椀；II1、IV～VIII、IV1a 鉢II
中国陶器	鉢I1b、F、耳壺A' ab
朝鮮系無釉陶器	片
土製品	瓦玉
石製品	摺り石？、砥石×硯

S-30明黄色土

土師器	坏a(イト)、小皿a(イト)
石製品	鍋

S-30明褐色土

金属製品	釘（鉄）

S-31

土師器	小皿a(イト)、片
青白磁	椀

S-32

土師器	片

S-33

土師器	小皿a(イト)、坏a(イト)

S-34

土師器	坏(イト)、片
須恵質土器	片

S-35

土師器	坏a(イト)、小皿a(イト)、盤、丸坏？
同安窯系青磁	椀；I1b、片
白磁	椀；V4c、V×VIIIo（内クシ）、片（広東以外）
	皿；IV2b
	椀×皿
中国陶器	壺類B' ab、盤Ib
金属製品	釘（鉄）

S-35淡褐色土

土師器	小皿a(イト)、坏a(イト)、皿(イト)

S-36

須恵器	甕片
土師器	小皿、坏、片
同安窯系青磁	椀

S-37

土師器	坏、小皿片
白磁	皿；V～VII
土製品	焼土塊

S-38

土師器	丸坏、坏a(イト)、小皿a(イト)
白磁	皿；V～VII
	椀×皿

S-39

土師器	坏a(イト)、小皿a(イト)、片
白磁	椀；V4～VIII
	皿；V～VII
青白磁	椀×皿

S-40

須恵器	片
土師器	坏a(イト)、小皿a、片
石製品	片

S-41

須恵器	片
土師器	坏a(イト)、小皿a(イト)
石製品	石鍋片（二次加工）

S-42

土師器	坏、小皿a(イト)、不明大型品片

S-43

土師器	坏(イト)、小皿(イト)、片
同安窯系青磁	椀？
白磁	椀；V4×VIII
	皿；V～VII

S-44

土師器	坏a(イト)、片
白磁	椀；II
瓦類	平瓦（斜格子）

S-45

須恵器	甕片
土師器	盤？、小皿、坏、片
土製品	焼土塊

S-46

土師器	坏a(イト)、小皿a(イト)
同安窯系青磁	椀；I1b、I
須恵質土器	片
白磁	椀；IV、V2a
	鉢III？
中国陶器	A' a' b

S-47

土師器	坏、小皿片、片
白磁	皿；V～VIIIo（内クシ）

S-48

土師器	坏a(イト)、小皿a(イト)
同安窯系青磁	椀；I1c
瓦質土器	甕片？
白磁	椀；IV
	皿；VIb？（白堆線+輪花）
金属製品	不明鉄製品

S-49

土師器	坏a(イト)、甕、小皿a、片
瓦器	椀片
白磁	椀；IV～VIII
瓦類	片

S-51

土師器	小皿a、坏a、片
同安窯系青磁	III×IV、同安？

S-52

土師器	小皿(イト)、坏a(イト)
白磁	椀；IV～VIII
	皿；III1
	鉢III
瓦類	平瓦（縄目叩）

S-53

土師器	坏a、小皿a(イト)、片
白磁	椀；V4×VIII、IV～VIII

S-54

土師器	坏a(イト)、小皿a、片
須恵質土器	東播
白磁	椀；V～VIII（内クシ）、V～VIII（外反） 皿；V2
中国陶器	E
土製品	瓦玉
石製品	滑石片

S-55

土師器	高台、小皿a(イト)、片
白磁	椀；IV1a 皿；VIa
中国陶器	鉢I1b
土製品	焼土塊

S-56

土師器	小皿a(イト)、坏a(イト)、片
白磁	椀；III、II、V3、V1×VIII 皿；VI1b、VIa
金属製品	釘（鉄）
土製品	焼土塊、瓦玉

S-57

土師器	小皿a(イト)、坏a(イト)、皿？、片
同安窯系青磁	椀；I1c
白磁	皿；V～VII

S-58

土師器	小皿a(イト)、坏a(イト)、片
須恵質土器	甕片？
中国陶器	水注X
石製品	滑石片

S-59

土師器	小皿a(イト)、丸坏、片
白磁	皿；VI1a

S-60

金属製品	釘（鉄）

S-60拡張区

土師器	小皿(イト)、坏(イト)、片
龍泉窯系青磁	椀；I3、IIb、I×IV 皿；I 大型III？
同安窯系青磁	椀；I1a、I1b、I1c 皿；Ib
須恵質土器	鉢（播磨）
瓦質土器	すり鉢
白磁	椀；II、IV、IV1a、V、V4b、V4×VIII V～VIII（内クシ）、VII？、VII？×VIII、IV～VIII IV～IX 皿；III1 ？
青花	片
中国陶器	鉢I1b、壺類A' a' b'、壺類A' ab、壺類Aab' E、C'、A' ab
石製品	石鍋、砥石
瓦類	平瓦

S-60

須恵器	甕（古代）
土師器	小皿a(イト)、小皿c、坏a(イト)、鍋、甕 椀c、火鉢の脚？
龍泉窯系青磁	椀；I、Iba、？I、I4
同安窯系青磁	椀；I1b
須恵質土器	東播
瓦質土器	片口
国産陶器	甕（常滑）
白磁	椀；IV1a、IV、II、V、V？、VIII？ 皿；V～VII 鉢？II
青白磁	椀×皿
中国陶器	鉢VI？、耳壺VI、水注？、Bab"
朝鮮系無釉陶器	片
土製品	焼土塊
石製品	石鍋、砥石、石材
瓦類	平瓦（縄目叩、格子叩、斜格子叩）

S-61

土師器	小皿a(イト)、坏a、片

S-62

土師器	小皿a(イト、ヘラ)、片
土製品	焼土塊

S-63

土師器	小皿a(イト)、小皿c、坏a
白磁	皿；V～VII

S-64

土師器	小皿a(イト)、坏a(イト)、片
同安窯系青磁	椀；I1b
白磁	椀；II、III 皿；IV1
土製品	瓦玉

S-66

土師器	小皿a(イト、ヘラ)、坏、片
白磁	椀；II、III
中国陶器	Aab

S-67

土師器	片(イト)

S-68

土師器	片
土製品	焼土塊

S-69

土師器	小皿a(イト)、坏(イト)、丸坏、片
石製品	チャート？、石鍋片
土製品	焼土塊

S-70

土師器	坏(イト)、小皿a(イト)、片
白磁	椀；IV

S-71

土師器	片(イト)

S-72

土師器	坏a、小皿a、片(イト)

S-74

土師器	坏a、小皿a、片
同安窯系青磁	I1b
高麗青磁	皿
青白磁	瓶？

S-75

土師器	小皿a(イト)、坏、片
瓦器	小坏c？

S-76

土師器	片

S-77

土師器	小皿a(イト)、片

S-78

土師器	小皿a(イト)、高台、片
同安窯系青磁	I1b
白磁	V1×VIII

S-79

土師器	片
土製品	焼土塊

S-81

土師器	小皿a(ヘラ)、坏a

S-82

土師器	小皿a(イト)、坏a(イト)、椀高台
龍泉窯系青磁	鉢
中国陶器	鉢I
陶器	こね鉢片

S-83

土師器	小皿a(イト、ヘラ)、坏a(イト、ヘラ)、丸坏、高台

S-84

土師器	小皿a、坏、片

S-86

土師器	小皿a(イト)、坏a(イト)、高台、片
白磁	皿；V～VII
その他	炭

S-87

土師器	小皿a(イト、ヘラ)、坏a(イト)、片
白磁	椀；V1×VIII、V4×VIII
土製品	焼土塊、瓦玉

S-88

土師器	小皿a、丸坏？、高台
須恵質土器	片

S-89

土師器	小皿a(イト、ヘラ)、坏、片
土製品	焼土塊

S-91

土師器	坏a(イト)、小皿、片
土製品	焼土塊

S-92

土師器	小皿a、片
土製品	焼土塊

S-93

土師器	小皿a、坏、椀c片
瓦器	片？
白磁	椀；V1×VIII2、IV～VIII 皿；VI1a

S-94

土師器	小皿a、坏片
白磁	VIII
土製品	焼土塊

S-97

土師器	小皿a(イト)、坏
白磁	椀；V1b、IV？、IV～VIII
国産陶器	片（常滑）
土製品	焼土塊

S-98

土師器	小皿a、丸坏、高台
土製品	焼土塊

S-99

土師器	小皿、片
中国陶器	鉢I1b

S-101

土師器	小皿a、坏、片
土製品	焼土塊

S-102

土師器	小皿a(イト)、片
白磁	椀；IV～VIII
金属製品	釘（鉄）

S-103

土師器	小皿a、片
瓦器	椀

S-104

土師器	小皿a、椀c、坏片
白磁	椀；V～VIII（内クシ） 椀×皿
土製品	焼土塊

S-106

須恵器	片（古代）
土師器	小皿a(イト)、坏a(イト)、片
白磁	椀；II3×4、IV～VIII 皿；V～VII、II×III 椀II×皿
石製品	黒石

S-107

土師器	小皿a、坏a

S-108

土師器	小皿a(イト)、坏a(イト)、片
白磁	椀；IV～VIII
朝鮮系無釉陶器	片
中国陶器	行平Bab'

S-109

土師器	小皿a(イト？)、坏a
白磁	椀；II5
土製品	焼土塊

S-110

須恵器	甕片
土師器	小皿a、坏a、片
瓦器	椀？×丸坏
龍泉窯系青磁	椀；I×II
白磁	椀×皿
中国陶器	C、鉢II

S-111

土師器	小皿片、坏片、鍋
瓦器	椀
龍泉窯系青磁	鉢I
白磁	椀；V1×VIII

S-112

土師器	小皿a(イト)、坏(イト)、丸坏、小さい高台
瓦器	片
白磁	椀×皿

S-115

土師器	小皿a(イト)、坏a(イト)、椀高台
白磁	椀；V～VIII（外反） 壺類II

S-116

土師器	小皿a(イト)、片
白磁	椀；IV1

S-117

土師器	小皿、坏、片
瓦器	椀
白磁	V1a
陶器	黒釉天目椀
土製品	焼土塊

S-114

土師器	坏片
白磁	椀；V～VIII（内クシ） 皿；IV2、V1b

S-118

土師器	坏、小皿片、片
黒色土器B	小皿？、片

S-119

土師器	小皿、坏、片
瓦器	片？
白磁	皿；V～VII 鉢III（鉄絵）
石製品	砥石

S-120

須恵器	片
土師器	小皿a、坏a(ヘラ)
瓦器	片
中国陶器	行平Bab'、水注X？
土製品	焼土塊

S-121

土師器	小皿a(イト、ヘラ)、坏a(イト、ヘラ)、片
白磁	椀；IV～VIII 皿；V～VII、V
中国陶器	耳壺A' a' b'

S-122

土師器	小皿、坏片
白磁	椀；IV、IV～VIII

S-123

土師器	小皿a(ヘラ、イト？)、坏a、片
白磁	椀；IV 皿；VIIa、VIa
土製品	焼土塊

S-124

土師器	小皿a(イト)、坏a(イト)、片
同安窯系青磁	椀；I1b
須恵質土器	甕片
土製品	瓦玉

S-125

土師器	小皿a(イト)、坏a(イト)、皿、鍋
瓦器	片
同安窯系青磁	椀；I1b 皿；Ib
白磁	椀；V1×VIII、V4×VIII、IV～VIII 皿；V～VII
石製品	鍋

S-126

土師器	片
瓦器	片
高麗青磁	皿？
白磁	椀；V（外ヘラ）、IV～VIII、VI？
金属製品	刀子（鉄）

S-127

土師器	小皿a、坏a、片
瓦質土器	片

S-128

土師器	小皿a(イト)、片

S-129

須恵器	片？
土師器	坏a、片
瓦器	片

S-130

土師器	丸坏、小皿、坏
龍泉窯系青磁	椀；I3
同安窯系青磁	椀；I1b
瓦質土器	火鉢の底？
中国陶器	盤IIb
金属製品	釘（鉄）
土製品	焼土塊

S-131

土師器	片
須恵質土器	甕？
金属製品	釘（鉄）

S-132

土師器	小皿a(イト)、片
瓦器	片

S-133

土師器	小皿、坏a、片
同安窯系青磁	I1b
土製品	焼土塊

S-134

須恵器	片
土師器	小皿片、坏片
瓦器	椀
白磁	椀；II3×4
土製品	瓦玉

S-135

土師器	小皿a(イト)、坏a(イト)
白磁	椀；V1×VIII 皿；III2

S-136

土師器	小皿a、小椀、片
白磁	片

S-137

土師器	小皿a、坏a、高台、片
白磁	椀；IV～VIII
石製品	鍋片

S-138

土師器	小皿a(イト)、坏a(イト)、丸坏、片

S-139

土師器	小皿a、坏a
瓦器	椀
白磁	皿；V～VII

S-140

土師器	小皿a(イト)、坏a(イト)、片
瓦器	片
高麗青磁	椀？
須恵質土器	片
白磁	皿；II×III
中国陶器	壺類ab

S-141

土師器	小皿、坏、片
中国陶器	ab'
土製品	焼土塊

S-142

土師器	小皿a、坏a
龍泉窯系青磁	片

S-143

土師器	小皿、片
瓦器	片
白磁	V～VII

S-144

土師器	小皿a、坏a

S-145

土師器	小皿a、坏a、片、鍋？

S-146

土師器	小皿a、坏、片
白磁	皿；V～VII
中国陶器	壺類E

S-147

土師器	小皿(イト)、坏(イト)、丸坏
金属製品	釘（鉄）

S-148

土師器	小皿a、坏a、片
龍泉窯系青磁	椀；I、IIb

S-149

土師器	小皿a(イト)、坏a(イト)、片
同安窯系青磁	I1b
中国陶器	黒釉天目椀

S-151

土師器	片

S-152

土師器	小皿、坏、片

S-153

土師器	片
朝鮮系無釉陶器	片
石製品	滑石（鍋）

S-154

土師器	片
白磁	皿；IV2
青白磁	瓶？

S-155

土師器	小皿a(イト)、片(イト)
白磁	椀；IV×V
土製品	瓦玉

S-156

土師器	小皿a(イト)、片

S-157

土師器	小皿、坏、丸坏
白磁	椀；IV
土製品	焼土塊

S-158

土師器	小皿a、坏a(イト)
瓦器	小皿？
白磁	椀；IV～VIII
青白磁	片

S-159

土師器	小皿、坏、片
同安窯系青磁	椀；I1b、I
土製品	焼土塊

S-160

須恵器	甕片
土師器	小皿a(イト、ヘラ)、坏a(イト、ヘラ)、小皿c、丸坏片
黒色土器B	小皿a
瓦器	椀
龍泉窯系青磁	椀；I？
同安窯系青磁	椀；I1b、I1c
白磁	椀；III、IV 皿；II×III、III a、V～VII 壺類；II
青白磁	香炉？
国産陶器	片（常滑）
土製品	焼土塊

S-160石ウラ

須恵器	片
土師器	小皿a(イト)、坏a(イト)、坏片
瓦器	片
同安窯系青磁	椀；III
高麗青磁	象嵌瓶？？
須恵質土器	片
国産陶器	甕（常滑）
白磁	椀；V4×VIII、IV～VIII、V 壺類III
中国陶器	E、鉢I1b、鉢I

S-161

土師器	小皿a、坏a、片

S-162

土製品	焼土塊

S-163

土師器	坏a(イト)、片
白磁	皿；VIb
瓦類	平瓦（斜格子）
その他	炭

S-162

土師器	片
石製品	滑石片

S-165

土師器	小皿a(イト)、坏a(イト)、高台
瓦器	椀
龍泉窯系青磁	椀；I2b、I2、I3
同安窯系青磁	椀；I1b
須恵質土器	片
国産陶器	常滑
中国陶器	鉢I1b
土製品	瓦玉

S-166

土師器	片
同安窯系青磁	皿？

S-167

土師器	坏a(イト)、片
同安窯系青磁	椀？

S-168

土師器	小皿、坏片
土製品	焼土塊

S-169

土師器	片
土製品	焼土塊

S-171

土師器	小皿a(イト)、坏
黒色土器B	小皿a？
白磁	椀；広東
石製品	鍋片

S-172

土師器	小皿a(イト)、片
瓦質土器	羽釜

S-173

土師器	片

S-201

須恵器	甕片
土師器	小皿a(イト)、坏a(イト)、丸坏、椀片
瓦器	椀片
白磁	椀；IV、？、V4×VIII
金属製品	釘（鉄）

S-202

土師器	片
瓦器	片

S-203

土師器	小皿a、坏a、丸坏
瓦器	椀片
白磁	椀；IV～VIII

S-204

土師器	片

S-205

土師器	鍋？、片
白磁	椀；IV～VIII
青白磁	青白？

S-206

土師器	片

S-208

土師器	小皿a(イト、ヘラ)、坏a(イト、ヘラ)、椀、片
瓦器	椀片
須恵質土器	片（底部）

S-209

土師器	小皿a(イトか？）、坏a

S-210

土師器	小皿a(イト)、坏a(イト)、皿？、椀

S-210下層

土師器	小皿a(ヘラ)
同安窯系青磁	I1b
白磁	椀；V～VII
中国陶器	Aa

S-211

須恵器	甕片
土師器	小皿a、片

S-212

土師器	小皿a(イト)、坏a、片
瓦器	片
白磁	椀；IV1
中国陶器	鉢I、水注X

S-213

土師器	片

S-214

須恵器	甕片
土師器	小皿a(イト)、坏、丸坏
国産陶器	常滑
白磁	皿；V～VII
中国陶器	水注X

S-216

土師器	片

S-217

土師器	小皿a(イト)、坏a
瓦器	片

S-218

土師器	小皿a(イト、ヘラ)、坏a(イト、ヘラ)、片
白磁	椀；IV×V
	皿；VIa
土製品	焼土塊

S-219

土師器	小皿a、坏a、丸坏
瓦器	片

S-220

土師器	小皿a(イト、ヘラ)、坏a(イト、ヘラ)、丸坏
白磁	椀；VII？、IV×V、II1

S-221

土師器	片
土製品	焼土塊

S-222

土師器	小皿a(イト)、片
同安窯系青磁	椀；I1b
白磁	皿；VII1a

S-223

土師器	坏a、椀c、片

S-224

土師器	小皿a(イト)

S-225

土師器	小皿a(イト)、片
同安窯系青磁	皿；I2b
白磁	椀；VIII（灰色砂土と接合）

S-226

土師器	片(ヘラ)
土製品	焼土塊

S-227

土師器	片
黒色土器B	片
白磁	椀；IV～VIII

S-228

土師器	片
土製品	焼土塊

S-229

土師器	小皿a(ヘラ)、鍋、片
土製品	焼土塊

S-230

土師器	小皿a(イト、ヘラ)、坏a(イト、ヘラ)、丸坏、椀c、鉢 鉢×火鉢
黒色土器A	椀
瓦器	椀片、片、小皿
白磁	椀；II1、II、II5、IV、V（タテヘラ）、V1×VIII IV～VIII、V3 皿；V～VII、VIb、VI 椀II×皿V～VII
青白磁	皿
金属製品	釘（鉄）
土製品	焼土塊、瓦玉
石製品	鍋
瓦類	平瓦

S-231

土師器	高台

S-232

土師器	坏a(イト)

S-233

土師器	小皿a(イト)、坏a(イト)、高台、片
土製品	焼土塊

S-234

土師器	小皿a(イト、ヘラ)、片
瓦器	片
石製品	砥石、滑石片

S-235

土師器	小皿a、坏a、甕×火鉢
瓦器	椀片
白磁	椀；II3×4
石製品	滑石

S-236

土師器	片
瓦器	片
土製品	焼土塊
石製品	滑石

S-237

土師器	片
石製品	砥石

S-238

土師器	片

S-239

土師器	小皿a(イト)
中国陶器	水注X
金属製品	釘（鉄）
土製品	焼土塊

S-241

土師器	片(イト)
土製品	焼土塊

S-242

土師器	小皿a(イト)、丸坏

S-243

土師器	片

S-244

土師器	片(イト)

S-245

須恵器	坏片
土師器	小皿a(イト)、坏a(イト)、片
白磁	椀；IV、II 皿；V～VII

S-246

土師器	片

S-247

土師器	片
白磁	小椀

S-248

土師器	小皿a(イト)、鍋、片

S-249

土師器	小皿a、片
土製品	焼土塊

S-251

土師器	小皿a(イト)、片
石製品	鍋

S-252

土師器	小皿a、片
白磁	椀；IV1a

S-252

土師器	片
白磁	椀；V4×VIII、IV～VIII
土製品	焼土塊（下層の焼土坑のかべか？）

S-254

土師器	小皿、高台
黒色土器B	片
石製品	滑石片

S-301

土師器	片
土製品	焼土塊

S-302

土師器	坏a、片、高台
中国陶器	水注X

S-303

土師器	片
土製品	焼土塊

S-304

白磁	椀；V3

S-305

土師器	小皿a、坏a、鍋、片
黒色土器B	片
土製品	焼土塊
石製品	軽石片
瓦類	平瓦

S-306

土師器	小皿a(イト、ヘラ)、坏a(ヘラ)、丸坏
白磁	椀；IV～VIII 皿；V～VII

S-307

土師器	小皿a、片
白磁	椀；IV～VIII
金属製品	釘（鉄）
土製品	焼土塊

S-308

土師器	小皿a(イト)、丸坏

S-309

土師器	小皿a(ヘラ)、坏
土製品	焼土塊

S-310

須恵器	甕片（古代）、片
土師器	小皿a、丸坏、片
黒色土器B	片
瓦類	平瓦（斜格子）

S-311

土師器	皿？(イト)、片
黒色土器B	片

S-312

土師器	小皿a、片
金属製品	工具×鏃（鉄）
土製品	瓦玉
瓦類	平瓦（斜格子）

S-313

土師器	小皿a、坏a、片
白磁	椀；IV～VIII
中国陶器	Aab

S-314

土師器	小皿a(イト)

S-315下

土師器	小皿a(ヘラ)、坏、片
瓦器	片
白磁	椀；II

S-316

土師器	片
土製品	焼土塊

S-317

土師器	片
白磁	椀；V1×VIII

S-318

土師器	小皿a(イト)

S-319

土師器	片
土製品	焼土塊

S-320下

土師器	小皿a、丸坏、片（ヘラが多い、イトは不明）
黒色土器B	片
瓦器	片
白磁	椀；IV、V1×VIII 皿；V～VII

S-321

土師器	片（イトあり）
土製品	焼土塊

S-322

土師器	小皿、片
白磁	椀；V？
土製品	焼土塊

S-323

土師器	片

S-324

土師器	小皿a、片

S-325下

土師器	小皿a(ヘラ)、丸坏、鍋
瓦器	椀片
須恵質土器	鉢
土製品	焼土塊

S-329

土師器	小皿a、坏a
中国陶器	鉢I

S-351

須恵器	蓋?

S-352

須恵器	片
土師器	丸坏、高台、片
土製品	焼土塊

S-353

土師器	小皿、皿?、坏、片

S-354

土師器	片

S-356

土師器	片
土製品	焼土塊

S-357

土師器	片

S-401

土師器	小皿a(イト)、坏a(イト)、片
龍泉窯系青磁	椀；上田B～E、I2、I3、I4
同安窯系青磁	椀；片 皿；I
須恵質土器	片
白磁	皿；V～VII 椀×皿
青白磁	?
中国陶器	盤Ib、E、B' ab'
金属製品	釘（鉄）
土製品	焼土塊

S-402

須恵器	片（古代か）
土師器	小皿a、火舎　、片
龍泉窯系青磁	椀；III2
白磁	椀；IV～VIII 皿；IX2
中国陶器	F

S-403

白磁	椀；IV～VIII
無釉陶器	片

S-404

土師器	坏(イト)、片

S-405

土師器	片
龍泉窯系青磁	椀；I
白磁	鉢II?（内クシ）

S-406

土師器	坏(イト)、片
同安窯系青磁	皿；I

S-407

土師器	小皿(ヘラ)、坏、片
同安窯系青磁	椀；IIc

S-408

土師器	片
須恵質土器	鉢片
白磁	壺類II
中国陶器	盤II?（鉄絵）、Bab

S-409

土師器	片
土製品	焼土塊

S-410

土師器	片
同安窯系青磁	皿；I
須恵質土器	片

S-411

土師器	小皿a、片(イト)
白磁	椀×皿

S-412

土師器	片
石製品	砥石

S-413

土師器	小皿a(イト)、坏a(イト)、片
須恵質土器	片
中国陶器	鉢IV2、盤I、水注X
石製品	鍋

S-414

土師器	小皿a(イト)、坏a(イト)、片(イト)
龍泉窯系青磁	椀；IIb

S-415

土師器	小皿a(イト)、坏a(イト)、片
龍泉窯系青磁	椀；III
同安窯系青磁	椀；IIb
白磁	皿；II×III
土製品	焼土塊

S-416

土師器	小皿a(イト)、片(イト、ヘラ)

S-417

土師器	片(イト)
龍泉窯系青磁	椀；I（内クシ）
白磁	壺類II

S-418

土師器	片(イト)
金属製品	釘（鉄）

S-419

土師器	片(イト)
白磁	皿；IX2
金属製品	紡錘車（鉄）

S-420

土師器	片(イト)、高台
龍泉窯系青磁	椀；I2
国産陶器	常滑
白磁	皿；IX
中国陶器	耳壺XIII？、E
土製品	焼土塊

S-421

土師器	片

S-422

土師器	片

S-423

土師器	片
瓦類	軒丸（瓦当は残ってない）

S-424

土師器	小皿a(イト)、片(イト)、丸坏
白磁	椀；II

S-425

土師器	小皿a(イト)、坏a(イト)、鍋
龍泉窯系青磁	椀；I、浅椀I4？
同安窯系青磁	椀 皿；I2b
国産陶器	常滑
白磁	皿；IX3？
中国陶器	A' ab

S-426

土師器	坏(イト)、片

S-428

土師器	小皿a(イト)、坏a(イト)、片
龍泉窯系青磁	椀；I1、I2×3、I4
白磁	壺類II
中国陶器	鉢I
土製品	焼土塊、瓦玉

S-430

土師器	小皿a、小皿b、小皿c、坏a
瓦器	小椀
龍泉窯系青磁	椀；IIa、IIb 坏；III4b
白磁	椀；V4×VIII
中国陶器	壺IV、盤III1b、皿、Bab、Ba、A' ab
瓦類	軒平瓦、平瓦（二重格子）
石製品	鍋、打具

S-430暗灰色土

土師器	小皿a、坏a
龍泉窯系青磁	椀；IIa、IIb
白磁	壺類II
中国陶器	鉢I、鉢I2
瓦類	平瓦（斜格子）
金属製品	小刀（鉄）

S-430黄色土

土師器	小皿a、坏a
同安窯系青磁	椀；IIIc？
須恵質土器	片
瓦類	平瓦（斜格子）
石製品	石英片

S-431

土師器	小皿a(イト)
龍泉窯系青磁	椀；I？、椀？ 皿；3b？ III
土製品	焼土塊

S-432

土師器	片
同安窯系青磁	椀；I1b
白磁	皿；V～VII

S-433

土師器	小皿a(イト)、坏a(イト)
龍泉窯系青磁	椀；I4
同安窯系青磁	椀；I1b

S-434

土師器	小皿a(イト)、坏a(イト)、片
龍泉窯系青磁	椀；I？
同安窯系青磁	椀；I
土製品	焼土塊

S-435

土師器	小皿(イト)、坏(イト)、片
龍泉窯系青磁	椀；IIb、I、Ib
白磁	椀×皿IX？
青白磁	小壺？
中国陶器	E、A' ab'
瓦類	平瓦

S-436

土師器	片(イト)

S-437

土師器	片
白磁	皿；III1
中国陶器	盤I2

S-438

龍泉窯系青磁	椀；IIb 小椀；III1Ab？ 坏；III1
白　磁	椀；IX 皿；VIII1
中国陶器	A'ab'
土製品	焼土塊

S-439

土師器	小皿a(イト)、坏a(イト)、片
龍泉窯系青磁	椀；IIb、II
同安窯系青磁	皿；I
高麗青磁	?
中国陶器	壺類A'ab

S-440

土師器	小皿a(イト)、坏a(イト)、皿、小皿c、竈？、火舎
瓦器	片（小坏×小椀）
龍泉窯系青磁	椀；I2？、I4？
同安窯系青磁	椀；IIb 皿；I
須恵質土器	鉢（播磨）
国産陶器	瀬戸？天目椀
白　磁	椀；V、V4×VIII、VIII 皿；II、V～VII
中国陶器	盤I（緑釉陶器）、耳壺III1、蓋？、A'ab
石製品	鍋、摺り石

S-441

土師器	坏(イト)、片、大型のものあり（鍋か？）

S-442

土師器	片

S-443

土師器	小皿a(イト)、坏(イト)、鍋×鉢、高台

S-444

土師器	小皿a(イト)、坏a(イト)
龍泉窯系青磁	椀；IIb

S-445

土師器	小皿a(イト)、坏a(イト)、片

S-446

須恵器	片？（無釉陶器の可能性もある）
土師器	片(イト)
土製品	焼土塊
石製品	鍋、小丸石

S-447

土師器	小皿(イト)、片

S-448

土師器	坏a(イト)、片

S-449

土師器	小皿a(イト)、片
白　磁	椀；IV～VIII

S-450

須恵器	片？（中世のものか？）
土師器	小皿a、坏a、皿？、片
龍泉窯系青磁	椀；I×II、I2×3
白　磁	椀；V4×VIII、IV～VIII 椀×皿
中国陶器	鉢I、A'b'、A'ab、壺類Aab、皿
金属製品	釘（鉄）
土製品	焼土塊

S-451

土師器	小皿a(イト)、坏a(イト)、片

S-452

土師器	小皿(イト)、片(イト)

S-453

土師器	片
石製品	滑石片

S-455

須恵器	片
土師器	小皿a、坏a、片、高台
黒色土器B	片
龍泉窯系青磁	椀；I2、IIb
中国陶器	鉢I
瓦　類	片

S-456

土師器	小皿a、高台、坏、片
須恵質土器	片
石製品	鍋片

S-457

土師器	小皿(イト)、坏(イト)、片
黒色土器B	片
国産陶器	甕片（無釉）

S-458

須恵器	片
土師器	小皿a(イト)、坏a(イト)、片
白　磁	椀；V4×VIII
土製品	焼土塊、瓦玉

S-459

須恵器	片
土師器	坏a、高台、片
灰釉陶器	片？
中国陶器	E
土製品	焼土塊

S-460

土師器	小皿a(イト)、小皿c、坏a(イト)、椀c
龍泉窯系青磁	椀；IIb 坏；III
白磁	皿；VIII1
青白磁	瓶？
中国陶器	A' b
土製品	焼土塊

S-461

土師器	小皿a(イト)、片
龍泉窯系青磁	椀；II
白磁	皿；V～VII
中国陶器	壺類E
土製品	焼土塊

S-462

土師器	小皿a(イト)、片
白磁	IV～VIII

S-463

土師器	小皿a(イト)、坏a(イト)、片
龍泉窯系青磁	椀；IIb
土製品	焼土塊

S-464

土師器	小皿a(イト)、坏a(イト)

S-465

須恵器	片？
土師器	小皿a(イト)、片
高麗青磁	椀；III2a
白磁	V～VII
土製品	焼土塊

S-466

土師器	小皿a(イト)、片
龍泉窯系青磁	椀；IIb
石製品	鍋

S-467

須恵器	片（新しい？）
土師器	小皿a、片
白磁	椀；V4×VIII
中国陶器	壺類Bab'
土製品	焼土塊

S-468

土師器	小皿a(イト)、坏a(イト)、椀c

S-469

土師器	小皿a(イト)、坏a、片
同安窯系青磁	皿；I
土製品	焼土塊

S-470

須恵器	片（古代）
土師器	小皿a(イト)、坏a(イト)、片
国産陶器	片
中国陶器	壺類？B' ab

S-471

土師器	片、椀c
中国陶器	盤Ib、A' a' b'
石製品	砥石？

S-472

土師器	小皿a(イト)、坏a、片

S-473

土師器	小皿a、坏a、高台、片
龍泉窯系青磁	椀；IIb
白磁	皿；IX
中国陶器	盤？E

S-474

土師器	片
中国陶器	盤I？、F

S-475

土師器	小皿a、坏a、片、高台、椀c、甕×鍋
龍泉窯系青磁	椀；I
同安窯系青磁	椀；IIb
白磁	皿；V～VII
中国陶器	盤IIb、蓋？A' a' b、E、E？、ab
金属製品	釘（鉄）、刀子（鉄）
土製品	焼土塊、瓦玉
石製品	鍋
瓦類	平瓦

S-476

土師器	小皿a、坏a、片、鍋
龍泉窯系青磁	椀；III2
陶器	鉢、I2a、壺類Aab、盤I、鉢I
石製品	滑石

S-477

土師器	片

S-478

土師器	小皿a、坏a
土製品	瓦玉
石製品	鍋、丸石

S-479

土師器	片(イト)

S-480

須恵器	片（新しい？）
土師器	小皿a、坏a、脚付坏a、片
同安窯系青磁	片
白磁	椀；IV～VIII、V4×VIII 皿；V～VII
中国陶器	盤II
土製品	焼土塊、瓦玉

S-481

土師器	小皿a(イト)、片
土製品	焼土塊、瓦玉

S-482

土師器	小皿a(イト)、坏a(イト)、片

S-483

土師器	片

S-484

土師器	片

S-485

須恵器	甕片？
土師器	小皿a、小皿b、坏a、高台、鉢
龍泉窯系青磁	椀；I2？、I4、II、IIb 盤？III、片
同安窯系青磁	椀；I1b、I1c 皿；？、I、Ib 皿（龍泉×同安）、高麗青磁？瓶？
国産陶器	常滑
白磁	椀；V4×VIII 皿；IX1、IX
青白磁	合子
須恵質土器	片
中国陶器	盤I2、盤II、耳壺E、耳壺III、壺類Aab、A' ab 壺類E？、B' ab、bab'、水注X
金属製品	釘（鉄）
土製品	焼土塊
石製品	鍋、砥石
瓦類	片

S-485黒灰色土

土師器	小皿a、坏a、片
石製品	砥石×硯片？

S-485暗褐色土

須恵器	片
土師器	小皿a、小皿c、坏a、鉢？
黒色土器B	椀片
龍泉窯系青磁	椀；II、IIb 皿；I
須恵質土器	鉢（東播）
白磁	椀；IV、IV～VIII 皿；IX（外反）、IX1a、VI、VII、VIII1b×c
青白磁	瓶？
中国陶器	皿、盤II、耳壺III1、壺類B' a、耳壺Aab
石製品	滑石製ミニチュア鍋？、鍋、扁平緑石
その他	炭化物

S-486

土師器	小皿a(イト)、片(イト)

S-487

土師器	小皿a、坏a、甕？、片
龍泉窯系青磁	椀；III1b
中国陶器	盤I2、壺類E、A' b"
石製品	鍋

S-488

土師器	小皿a、坏、片

S-489

土師器	小皿a(イト)、坏(イト)、片

S-490

須恵器	片
土師器	小皿a、小皿c、坏a、椀高台
瓦器	片
龍泉窯系青磁	椀；I4b？
同安窯系青磁	椀；片
白磁	椀；II1×2 壺類III、椀×皿IX？
青白磁	小壺
中国陶器	Aab'、Bab、鉢I1b
石製品	滑石片

S-491

土師器	小皿a、片
龍泉窯系青磁	椀；III2
同安窯系青磁	椀

S-492

土師器	小皿a(イト)、坏、高台
青白磁	？合子
中国陶器	耳壺VI？
土製品	焼土塊

S-493

土師器	小皿a(イト)、坏a(イト)、片
白磁	皿；IX
瓦質土器	鉢

S-494

土師器	片(イト)

S-495

土師器	小皿a、椀高台（大型）、坏、片
同安窯系青磁	椀；I
中国陶器	Aab

S-496

土師器	小皿(イト)

S-497

土師器	片
瓦器	片
中国陶器	黒釉・天目椀
土製品	焼土塊

S-498

土師器	小皿a(イト)、坏a、片

S-499

土師器	小皿c、坏a、鍋、片
瓦類	片

S-501

土師器	小皿a、坏、片
龍泉窯系青磁	椀；III（外反）
同安窯系青磁	椀
中国陶器	盤Ib、ab
土製品	焼土塊
石製品	小丸石（黒、白）

S-502

土師器	小皿a、坏、片
須恵質土器	甕片

S-504

土師器	坏、高台、片
瓦器	片
土製品	焼土塊

S-505

土師器	片
白磁	皿；IX1
中国陶器	盤I2

S-506

土師器	小皿a(イト)、坏a(イト)、片

S-507

土師器	小皿a(イト)、片
石製品	片

S-508

土師器	小皿a(イト)、坏(イト)、片
同安窯系青磁	椀；I、？
土製品	焼土塊

S-509

須恵器	甕片（古代）
土師庫	小皿a(イト)、坏a(イト)、片
同安窯系青磁	椀
中国陶器	壺A’ab
土製品	焼土塊

S-510

土師器	小皿a、坏a、片、高台
瓦器	椀片
龍泉窯系青磁	椀；I2×3
同安窯系青磁	椀、片（龍泉×同安）
須恵質土器	甕片
その他	炭

S-511

土師器	坏a、片
瓦器	片
高麗青磁	椀；III？
白磁	椀；IV1a、V3 椀×皿

S-512

土師器	小皿a、坏a
土製品	焼土塊

S-513

土師器	小皿a(イト)、坏a(イト)、片

S-514

土師器	小皿a(イト)、坏a(イト)、片

S-515

土師器	片

S-516

土師器	片

S-517

土師器	片

S-518

土師器	小皿a(イト)、坏a(イト)、片
瓦器	片
白磁	椀；V1×VIII

S-519

土師器	小皿a(イト)、坏a(イト)、片
須恵質土器	片？
国産陶器	常滑
石製品	鍋

S-521

土師器	片
須恵質土器	片

S-522

土師器	小皿a(イト)、坏、片

S-523

土師器	片

S-524

土師器	坏、小皿片

S-525

土師器	片
白磁	椀；VIII

S-526

土師器	片
青白磁	合子片

S-527

土師器	小皿a、坏a、片

S-528

土師器	片
龍泉窯系青磁	椀；IIb

S-529

土師器	坏a(イト)、片

S-530

土師器	片
黒色土器B	片？

S-531

土師器	片

S-532

土師器	坏a、片

S-533

土師器	坏a、片

S-534

土師器	小皿a、片

S-536

土師器	小皿c、片

S-537

土師器	小皿a、椀c、坏、片
同安窯系青磁	椀；I1b

S-538

土師器	片
土製品	焼土塊

S-539

土師器	片

S-540

土師器	片
白磁	椀；IV～VIII

S-541

土師器	小皿(イト、ヘラ)、坏(イト、ヘラ)、丸坏
白磁	椀；V1la
土製品	焼土塊

S-542

土師器	小皿a(イト)、坏(イト)、片
中国陶器	Ba

S-551

土師器	小皿a、坏、片
国産陶器	常滑
白磁	椀；V（外ヘラ）、片
中国陶器	E、水注X

S-552

土師器	片

S-553

土師器	片

S-554

土師器	坏a(イト)、片

S-556

土師器	片
須恵質土器	片
金属製品	釘（鉄）

S-557

土師器	小皿a(イト)、片

S-558

土師器	片

S-559

土師器	片
龍泉窯系青磁	椀；I

S-560

須恵器	坏c（8c）
土師器	甕×鍋、片

S-561

土師器	坏c(イト)、片

S-562

土師器	小皿a、片

S-563

土師器	片

S-564

土師器	片

S-565

土師器	小皿a(イト)、坏a(イト)、片
黒色土器B	椀片

S-566

土師器	片

S-567

土師器	片
白磁	椀；IV

S-568

土師器	小皿a(ヘラ)、坏(イト)、丸坏、片
瓦器	片

S-569

土師器	小皿a(イト)、片

S-570

土師器	小皿a(ヘラ？)、坏、片
須恵質土器	片
白磁	VIII？、V2

S-571

土師器	坏、小皿片

S-572

土師器	坏、片
白磁	椀；V1×VIII

S-573

土師器	丸坏、片

S-574

土師器	片
白磁	壺類II

S-575

土師器	小皿a、坏、片
須恵質土器	片
白磁	皿；II×III
朝鮮系無釉陶器	甕

S-576

土師器	片

S-577

土師器	片(イト)

S-578

土師器	片
白磁	椀；IV

S-579

土師器	片
須恵質土器	片
白磁	椀；II
	皿；V～VII

S-580

土師器	椀c
瓦器	片
須恵質土器	片
白磁	椀；V（外ヘラ）
	壺類II

S-581

土師器	小皿a、片
朝鮮系無釉陶器	甕

S-582

土師器	片

S-583

土師器	片
瓦器	片

S-584

土師器	皿、片
白磁	椀；IV～VIII

S-585

土師器	片
中国陶器	A' ab'

S-586

土師器	小皿a(イト)、坏(イト)、片

S-587

土師器	片
黒色土器B	片

S-588

土師器	片

S-589

土師器	片

S-591

土師器	片
土製品	焼土塊

S-602

土師器	小皿a(ヘラ)、坏a(イト)

S-602

土師器	片(イト)
須恵質土器	片

S-604

土師器	小皿a、丸坏、片
黒色土器B	片

S-605

須恵質土器	片

S-606

黒色土器B	片

S-607

瓦類	片

S-608

土師器	片、丸坏

S-609

土師器	片、丸坏

表土

土師器	小皿a、坏a、皿a、椀c、片
龍泉窯系青磁	椀；I1、I3、I3b、I4、I、IV？
	坏；III1
同安窯系青磁	椀；I1a、I1b
土師質土器	甕片
国産陶器	常滑甕？、常滑
白磁	椀；IV、V4×VIII、V1×VIII2、V～VIII（内クシ）
	皿；VIII2c
	四耳壺×水注III
中国陶器	鉢I2a、F、Ab
朝鮮系無釉陶器	甕
金属製品	不明銅製品
土製品	瓦玉
瓦類	平瓦片、片

明黄色土

須恵器	片
土師器	小皿a(イト、ヘラ)、小皿c(イト)、坏a、椀c、丸坏
黒色土器B	片
瓦器	椀
同安窯系青磁	椀；I1c
須恵質土器	鉢、椀、片
白磁	椀；II1、II1×3、V1×VIII、V4×VIII、IV～VIII
朝鮮系無釉陶器	片
土製品	焼土塊、瓦玉
石製品	砥石、滑石鍋、and
瓦類	丸瓦片

暗赤茶色土

須恵器	皿a×大坏a、甕、蓋？
土師器	小皿a(イト、ヘラ)、坏a、丸坏、高台、甕、鉢
黒色土器B	椀
瓦器	片
龍泉窯系青磁	皿；？
同安窯系青磁	椀；I1b
白磁	椀；IV、IV～VIII、II 皿；V～VII、VIII？ 壺類；II
朝鮮系無釉陶器	片
金属製品	鉱滓
土製品	焼土塊
石製品	滑石、軽石
瓦類	平瓦片

暗茶色土

土師器	小皿a(イト、ヘラ)、坏a(イト)、丸坏a、丸坏c、椀c 鍋×鉢
瓦器	椀
須恵質土器	片
白磁	椀；II、IV～VIII、IV VI×VIII、II4×5、V～VIII（外反） （CD6黒灰色土と接合） 皿；II×III、V2、V～VII、VI、VIa VIb（東区暗茶色土と接合） 椀×皿
青白磁	椀？
朝鮮系無釉陶器	片
中国陶器	B'a，水注X
土製品	焼土塊
石製品	滑石石鍋
瓦類	片

暗灰色土1

土師器	小皿a、坏a、丸坏a、鉢
瓦器	小椀？
同安窯系青磁	椀；I1c×III1c
須恵質土器	片
白磁	椀；IIb、IV2a、V2、V4b V1×VIII、VI×VIII2、VIII2×3、IV～VIII V4×VIII、IV（C7拡張区表土と接合） 皿；II×III、VI1a、V～VII
中国陶器	ab'
土製品	瓦玉
石製品	軽石

暗灰色土2

土師器	小皿a、坏a、丸坏a
瓦器	片
白磁	椀；IV1
中国陶器	盤；Ib、I

黄色礫混土

土師器	小皿a、坏a(イト)
龍泉窯系青磁	椀；I3
同安窯系青磁	椀；I、I1b
須恵質土器	片
高麗青磁	椀III？、椀？
白磁	椀；II、II1×3、IV、V（内クシ）、V1×VIII、VIII VIII4、IV～VIII、V （C7拡張区黒灰色土と接合） 皿；III×IV、IV2、V～VII、片、XI'3 VI1a（茶色土と接合） 椀×皿、鉢III（うち1点破片CD6黒灰色土と接合）
中国陶器	壺類Aab'、Aab'、黒釉天目椀 盤I1b、I1'b、I2
金属製品	釘（鉄）、不明鉄製品
土製品	瓦玉
石製品	滑石製品
瓦類	片

黄色粘土

土師器	小皿a、坏a(イト、ヘラ)、椀c、丸坏
瓦器	椀
龍泉窯系青磁	椀；I
同安窯系青磁	椀；？、片、I1b（1点は茶色土と接合）
須恵質土器	片
国産陶器	常滑？
白磁	椀；II、III、V1×VIII、V4×VIII、V～VIII IV1a（西区暗黄色土と接合）、IV 皿；V～VII 小椀4a？
中国陶器	A'a、E
青花	片
土製品	焼土塊、瓦玉
石製品	滑石石鍋、おはじき

黒赤色土

土師器	小皿a(イト、ヘラ)、坏a(イト、ヘラ)、丸坏a、椀c 甕
瓦器	椀c
白磁	椀；II1、II5、V1b 皿；VI1a、V～VII 椀×皿
青白磁	皿
中国陶器	A'ab、水注X
土製品	焼土塊
石製品	石鍋

黒茶色土

須恵器	甕
土師器	小皿a(イト、ヘラ)、坏a、椀c、高台
瓦器	小皿a
同安窯系青磁	椀？
白磁	椀；III、II、IV～VIII、IV（拡張区褐色炭土と接合） 皿；V～VII
中国陶器	水注X
金属製品	釘（鉄）
土製品	焼土塊、瓦玉
石製品	滑石石鍋、おはじき

黒灰色土

須恵器	片
土師器	小皿a、坏a、丸坏a、椀c、鍋×甕、甕、鉢、鉢×鍋
黒色土器A	片
黒色土器B	椀c
瓦器	椀、小椀、片
龍泉窯系青磁	椀；I3、II4c（東区黒灰色土と接合）
同安窯系青磁	椀；I1b？、I1c 皿；I
高麗青磁	I？、II1b
須恵質土器	鉢
白磁	椀；II、III、II3×4、II3b×4b、II4、IV、IV1a、IV1 V4、V4×VIII、V～VIII（外反）（うち1点は暗茶色土と接合）、V～VIII（内クシ）、V×VI（内クシ+外ヘラ）、VI、VIII、VIII2、V1×VIII、IV～VIII 皿；IV2、V2、VI1a（1点は茶色土と接合）、V～VII（1点は東区黒灰色土と接合）、III1（茶色土と接合） V（赤色炭土と接合） 小椀c、鉢II、鉢III（うち1点は黄色礫混土と接合） 鉢III？、椀×皿、壺類II
中国陶器	A’ab、A’？ab’、水注X、黒釉天目、盤II、鉢I1b
陶器	天目椀
土製品	焼土塊
瓦類	片
石製品	滑石石鍋、紡錘車？、おはじき

黒灰灰色土

須恵器	甕
土師器	小皿a、坏a、椀c、鉢、鍋×甕
黒色土器B	椀c
龍泉窯系青磁	椀；I2×3、I1、I2、I2b、I3、IIb 皿；I 浅椀？
同安窯系青磁	椀；I1c, I？、I1b 皿；I 同安？
須恵質土器	片
国産陶器	常滑、常滑？
白磁	椀；II？、IV、IV1a、V1×VIII、V4×VIII、V～VIII（内クシ）、IV～VIII 皿；VIII2c、IX2 壺類II
中国陶器	鉢I、水注V？、盤Ib？、Bab、a’b’、鉢I1c A’ab、F
朝鮮系無釉陶器	片
土製品	鞴羽口、瓦玉
石製品	滑石石鍋

焼炭土

白磁	椀；II、II3×4、V、IV～VIII、IX1a
中国陶器	E

赤茶土

須恵器	坏？、蓋3、甕
土師器	小皿a、坏a、椀c、鉢、鍋、丸坏、器台
黒色土器A	椀c
黒色土器B	椀c
瓦器	小皿a？、片
須恵質土器	片
白磁	椀；III、V1b、V（外ヘラ）、V2b、VIII、IV～VIII IV 皿；V～VII、VIa、V（C8黒灰色土と接合） 椀×皿、壺類II
中国陶器	水注X
金属製品	釘（鉄）、刀子（鉄）
土製品	焼土塊、瓦玉
石製品	石鍋、おはじき、ob
瓦類	平瓦（斜格子）

赤色土

須恵器	甕
土師器	小皿a、坏a、鍋×鉢、椀c×皿c、小皿c、器台 小皿b
黒色土器B	片
瓦器	椀
龍泉窯系青磁	椀；I2×3、I3、I×II、II、IIb、III、I×III、I、Iba III？ 小椀；？、III 坏；III、III1 皿；I 椀×坏、III？
同安窯系青磁	椀；I1b、I、I1c 皿；I 椀？ 片（龍泉×同安）
須恵質土器	甕、鉢
国産陶器	常滑甕？
白磁	椀；II、III、IV、IV×V、V1×VIII2、森田B V4×VIII、IV～VIII、X、V2b 皿；II×III、III1、IV、VIb、VIII、IX1、IX2 片、壺類II、鉢III
青白磁	底部、片、瓶？
中国陶器	壺類Aab、壺類E、壺IV、壺類B’ab’、盤I、盤III 鉢II、F、水注？、E、皿、盤II、Ib、I2、I、Aab A’ab、A’ab’、Bab、Bab’、E、Da”、水注X
金属製品	釘（鉄）、不明鉄製品
土製品	焼土塊、瓦玉
石製品	滑石石鍋、おはじき、砥石、滑石製品
瓦類	平瓦片（二重斜格子）、丸瓦片

炭焼土

須恵器	片
土師器	小皿a、坏a、丸坏、鍋
瓦器	椀
高麗青磁	椀
中国陶器	B' ab
土製品	焼土塊
石製品	滑石石鍋
瓦類	片

淡茶色土

土師器	小皿a(イト、ヘラ)、坏a(イト、ヘラ)、器台、丸坏a
瓦器	椀c
青磁	椀（龍泉×同安？）
高麗青磁	椀？II
須恵質土器	鉢
白磁	椀；IV、IV～VIII、V～VIII（内クシ）、V～VIII（外反）、V1×VIII 皿；VI1a、VIb 椀×皿
中国陶器	水注X、E
土製品	とりべ×るつぼ、瓦玉
石製品	滑石石鍋
瓦類	片

茶色砂土

須恵器	坏？、高坏
土師器	小皿a、丸坏、椀c、甕？
黒色土器A	椀c
黒色土器B	椀c
瓦器	椀
龍泉窯系青磁	椀；片
須恵質土器	片
白磁	椀；IV（うち1点は接合）、II、IV～VIII、V4×VIII V1×VIII（茶色土と接合）
土製品	焼土塊、瓦玉
瓦類	平瓦（斜格子）

茶色土

土師器	小皿a、坏a、丸坏、椀c、鍋×鉢、鍋、甕
黒色土器A	片
瓦器	椀、小椀
龍泉窯系青磁	椀；I、I？、I2（うち1点は西区下段石垣ウラゴメと接合）、I3、I4、I6a、IIb、III2 小椀；I2
同安窯系青磁	椀；片、I、IIc、IIb（1点は黄色粘土と接合）、IIa 皿；I2b、I 椀×皿
須恵質土器	鉢、小椀、甕
国産陶器	常滑、瀬戸山茶碗？
白磁	椀；II、III、IV（1点は東区黒灰色土と接合）、IVa V1×VIII（1点は茶色砂土と接合）、V4×VIII（うち1点は接合）、V2bc？、V3、V4b、V～VII（内クシ）、V～VIII（外反）、V、IV～IX、VIII、VIII4 VIII2？（東区黒灰色土と接合）

白磁	皿；II×III、III1（1点はCD6黒灰色土と接合）、VI？ VI1a（1点は黄色礫混土と接合、1点はE7黒灰色土と接合）、VIa、V～VII、VIII、片、II1a 椀×皿、鉢III？、鉢III（鉄絵）、壺類III
青白磁	椀（S-15と接合）
中国陶器	鉢VI1、壺類B？a' b、B？a' b'、Bab、Bab' A' a、A' ab、A' ab'、ab、ab'、E、壺類Aab（横耳）、耳壺VI1、E、壺類E、鉢I、水注X、鉢I1b、F
金属製品	釘（鉄）、不明銅製品
土製品	焼土塊、瓦玉
石製品	石鍋
瓦類	平瓦（斜格子）

茶色土下

白磁	椀；IV、V1×VIII、V4×VIII、V4b
中国陶器	A' a' b、盤Ib

茶色粘土

土師器	小皿a、坏a、椀c、丸坏a、鍋、甕
黒色土器B	片
瓦器	椀
同安窯系青磁	椀；I1b
白磁	椀；II、IV～VIII、V～VII、V1×VIII（うち1点は接合） V～VII（内クシ）
金属製品	釘（鉄）、不明鉄製品

茶灰色砂質土

土師器	小皿a、坏a、丸坏、器台、鉢×鍋、小椀c、椀c
黒色土器A	椀
瓦器	小椀c、椀
高麗青磁	椀×蓋II
須恵質土器	甕、鉢
白磁	椀；IV、V1×VIII、V4a、IV～VIII、V2b 皿；II×III、V～VII、VIa、VI1a、VI、VIII？、III1a 椀×皿、鉢III（鉄絵）
青白磁	青白？？
中国陶器	E、蓋、E、C'
土製品	焼土塊、瓦玉
石製品	砥石、滑石石鍋

灰色砂土

土師器	小皿a、坏a
同安窯系青磁	椀；IIc
須恵質土器	鉢
白磁	椀；VIII2（S-225と接合）、II、V1×VIII、V4×VIII VIII4、IV～VIII 皿；III1（うち1点はC7拡張区表土と接合）、V2
中国陶器	鉢I1b、水注X
石製品	軽石、滑石石鍋

明灰色土

須恵器	甕
土師器	坏a、椀c
瓦器	片
青白磁	椀

拡張区表土

須恵器	甕
土師器	小皿a、坏a、椀c、丸坏a、鉢、鍋？、甕
瓦器	椀、片
龍泉窯系青磁	椀；I、I2、I3、I4、IIb、 坏；III 皿；I2b
同安窯系青磁	椀；I1、I1b、I1a、III1b×c、同安？椀 皿；I
高麗青磁	椀；III2？、III2a、III2b、椀？？
須恵質土器	鉢
瓦質土器	鉢、鍋？
国産陶器	常滑
白磁	椀；II、II3×4、III、IV（1点は暗灰色土1と接合） IV1、IV～VII、IV～VIII（うち1点は東区黒灰色土と接合）、V、V1×VIII、V4×VIII、V2b、V3 V～VII、V～VIII（外反）、VIII、VIII2 皿；VII2、XI' 3、III1（灰色砂土と接合）、II×III V～VII、VIII、VIII1、IV、IX、IX1a、VIb VIII？（内クシ） 椀×皿、椀×皿IX、壺III、壺類II、鉢II
青白磁	水注？
染付（輸入）	片
中国陶器	壺類A' ab'、壺類B' ？ab'、壺類A' ？ab'、Ab A' ab'、A' ？ab'、耳壺XII、盤・・I2、鉢VI？ 鉢I、鉢IIb、鉢VI？、F、B' a' b、A' ？b、B' ab E、壺類？ab、壺類？ab'、Ba'、A' ab'、D' ab 燭台
金属製品	釘（鉄）、不明鉄製品
土製品	焼土塊、瓦玉、鞴羽口
石製品	滑石石鍋、砥石、碁石
瓦類	片（縄目叩）、片

拡張区暗褐色土

須恵器	甕
土師器	小皿a、小皿c、坏a、大椀c、鉢
瓦器	椀
白磁	椀；IV1a、IV、IV～VIII、III 皿；V1a（うち1点は接合）、V～VII
中国陶器	Bab
土製品	焼土塊
石製品	滑石石鍋

拡張区褐色炭土

土師器	小皿a、坏a、丸坏、椀c、鉢
瓦器	椀
白磁	椀；IV（1点は黒茶色土と接合）、V～VIII、V1×VIII 皿；V～VII（1点は拡張区淡茶色土と接合）、VII
土製品	焼土塊
石製品	滑石石鍋

拡張区黒茶色土

須恵器	坏c、甕
土師器	小皿a(イト、ヘラ)、坏a(イト、ヘラ)、丸坏、高台鉢？
黒色土器B	片
瓦器	椀
同安窯系青磁	椀；片
高麗青磁	椀；IIb、III
須恵質土器	鉢
白磁	椀；IV1a、II（うち1点はS-30茶褐色土と接合）、II5 IV（1点は接合）、V1×VIII、V2、V3、V2b V～VIII（内クシ）、IV～VII、IV～VIII、II4×5 IV1a、III（東区暗茶色土と接合） 皿；VIa、VIb、VIIa、VIII、V2 椀×皿
中国陶器	水注X、壺II？、E？
土製品	焼土塊、瓦玉
石製品	滑石製品、砥石

拡張区黒灰土

須恵器	椀c、甕
土師器	小皿a(イト)、小皿a、坏a、鍋×鉢、鉢？、椀c、丸坏 大型品
瓦器	椀、椀c、片
龍泉窯系青磁	椀；III2
同安窯系青磁	椀；I1b、I1c
高麗青磁	椀；III、高麗青磁？椀
須恵質土器	片
国産陶器	常滑？
白磁	椀；II、II？、II3×4、IV（1点は東区暗茶色土と接合） V（内クシ）、V（外ヘラ）、V（内クシ+外ヘラ） VI×VIII、V2b、V3、V4c、V×VIII、V4×VIII VIII、V～VIII（内クシ）、IV～VIII、VII？（黄色礫混土と接合）、IV、VIIb 皿；II？、II～IV、IV、V2？、V～VII、VIIb、VIIa VIII1b（東区黒灰色土と接合）、VI 鉢III（鉄絵）
青白磁	合子蓋、椀×皿？、皿？
中国陶器	耳壺III1、水注X、A' b、盤I、I1、Ib、Aab B'ab、黒釉天目椀
土製品	焼土塊、瓦玉
石製品	硯、おはじき、滑石石鍋、石鍋
瓦類	片
金属製品	釘（鉄）
その他	スラグ

拡張区焼炭土

土師器	小皿a、坏a、小皿c、丸坏、椀c、鉢
瓦器	椀
須恵質土器	鉢
白磁	椀；IV～VIII、V、II
青白磁	皿；IV2b、VIIa（拡張区赤色炭土と接合）
中国陶器	壺類？E
土製品	焼土塊、瓦玉
石製品	滑石石鍋、おはじき

拡張区赤色炭土

須恵器	甕
土師器	小皿a(イト、ヘラ)、小皿c、皿a、坏a(イト、ヘラ) 丸坏、椀c
瓦器	小皿a、小椀c
須恵質土器	鉢
白磁	椀；IIa、III（うち1点は接合）、IVa、VI、II～VIII IV～VIII、II3×4 皿；II×III、VIIa（1点は東区黒灰色土と接合）、片 V～VII（1点は拡張区焼炭土と接合） 椀II×皿V～VII、椀×皿
中国陶器	片；A' ab、Bab'、E
土製品	焼土塊、瓦玉
石製品	滑石製品、おはじき、砥石

拡張区淡茶色土

白磁	椀；II 皿；V～VII（拡張区褐色炭土と接合）
朝鮮系無釉陶器	片

拡張区淡灰色土

土師器	小皿a(イト、ヘラ)、坏a(ヘラ)、丸坏、椀c、鍋
黒色土器B	片
土製品	焼土塊、瓦玉

拡張区明黄色土

須恵器	甕
土師器	小皿a(イト、ヘラ)、坏a、丸坏、椀c、小皿c、皿c？
瓦器	椀c、坏？
須恵質土器	坏a(イト)、鉢
白磁	椀；IV、IVI、IV～VIII、V3、IVIa 皿；V～VII、VIa、VIIa 椀×皿
中国陶器	壺類E、盤Ib
土製品	焼土塊
石製品	おはじき、滑石石鍋

拡張区明褐色土

須恵器	甕、蓋c
土師器	小皿a、小皿c、坏a、丸坏、坏c（古代）、椀c、鍋
黒色土器B	椀
瓦器	椀
須恵質土器	鉢
国産陶器	唐津？（朝鮮陶器の可能性もあり）
白磁	椀；II、IV（うち1点は西区黄茶色土と接合）、 V～VIII、V2b、V3、III、IVIa、　IV～VIII 皿；V×VII、V 椀×皿、水注
中国陶器	E
朝鮮系無釉陶器	片
土製品	焼土塊
石製品	滑石石鍋、ob
瓦類	平瓦片

西区表土

土師器	小皿a、坏a、片
黒色土器B	片
高麗青磁	椀；III2
白磁	椀；VIII 皿；IX、IXIa
青白磁	椀×皿？
青花	皿
石製品	軽石
瓦類	平瓦

西区暗黄色土

須恵器	坏a
土師器	小皿a
高麗青磁	椀；II
須恵質土器	鉢
白磁	椀；IV（1点は暗茶色土と接合）、V～VIII、II？ IV～VIII 皿；VIII？、II2（西区黄茶色土と接合） 坏？
青白磁	瓶？
朝鮮系無釉陶器	片
金属製品	釘（鉄）
土製品	焼土塊
瓦類	片

西区暗褐色土

須恵器	甕
土師器	小皿a、坏a、丸坏？、椀c、鉢
黒色土器B	椀c、片
須恵質土器	鉢？
白磁	椀；II、V2b、V3、V（外ヘラ）、IV～VIII 皿；V～VII、VIIb、VII？、II×III
青白磁	瓶？
中国陶器	鉢I3、E
朝鮮系無釉陶器	片
土製品	焼土塊、瓦玉

西区黄褐色土

須恵器	坏c、甕、蓋3
土師器	坏a（混入イトキリ）、椀
白磁	椀；VI×VIII

西区黄茶色土

須恵器	片
土師器	小皿a、坏a、丸坏a、椀c、高坏？
黒色土器A	椀
黒色土器B	片
龍泉窯系青磁	椀；I×II
須恵質土器	片
白磁	椀；V2、II、IV（1点は拡張区明褐色土と接合する） V、V？、VI×VIII、VIII、IV～VIII、III 皿；V2、IV2、V～VII、II2（西区暗黄色土と接合）
朝鮮系無釉陶器	片
石製品	砥石、おはじき、ob

西区黄白色土

土師器	坏a、片

西区褐色砂質土

土師器	小皿a、坏a、丸坏a、椀c
須恵質土器	片
白磁	椀；V（外ヘラ）、II、IV（西区赤褐色砂質土と接合）
青白磁	？皿？
中国陶器	水注X

西区灰褐色砂

土師器	片

西区赤褐色砂質土

須恵器	片
土師器	小皿a(イト)、坏a、小皿b？、丸坏、椀c、鉢、鍋？
黒色土器B	高台
龍泉窯系青磁	椀；Ib
同安窯系青磁	椀；I1b
高麗青磁	片
白磁	椀；V（外ヘラ）、IV～VIII（段1）、IV1a、IV（うち1点は西区褐色砂と接合）、V、IV～VIII、V～VIII（外反）、V～VIII（内クシ）、V2×VIII（西区赤褐色土と接合） 皿；V～VII 椀×皿
青白磁	合子・身
中国陶器	F
朝鮮系無釉陶器	片
土製品	焼土塊、瓦玉
石製品	滑石石鍋、おはじき

西区赤褐色土

土師器	小皿a、坏a、椀c、丸坏a、盤？
瓦器	片？
須恵質土器	片
白磁	椀；IV～VIII、II1、V2×VIII（西区赤褐色砂質土と接合）IV（東区黒灰色土と接合）
中国陶器	水注X
土製品	焼土塊

西区赤茶色砂質土

須恵器	甕
土師器	小皿a、坏a、三脚付小皿
中国陶器	水注E

西区上段石垣ウラゴメ

土師器	坏a
龍泉窯系青磁	椀；I2、I4、IIb、IV？
同安窯系青磁	皿；I1b、I2b
須恵質土器	すり鉢、甕？
白磁	椀；II2×4、IV2a、V、V4c、VIII、IV～VIII、IV1a（下段石垣ウラゴメと接合） 皿；VI、VIII1b、IX 壺類III、？広東系、椀×皿
中国陶器	鉢I2b、鉢I、壺IV、B' ab'、E、A' ab、耳壺VI？ 盤III（内底印文）

朝鮮系無釉陶器	片
石製品	滑石石鍋
瓦類	平瓦（二重格子）

西区上段石垣上面表採

土師器	片
龍泉窯系青磁	椀；IIb
同安窯系青磁	皿；I
須恵質土器	鉢
白磁	椀；II2×4b
中国陶器	鉢I、A' ab'

西区下段石垣ウラゴメ

土師器	小皿a、坏a
龍泉窯系青磁	椀；I1、I4、IIa、IIb、IV？、I2（茶色土と接合） 坏；III3b
同安窯系青磁	皿；I2b
須恵質土器	鉢
瓦質土器	火鉢
国産陶器	常滑、常滑？
白磁	椀；II、IV、V、V1×VIII、IV～VIII、IV～IX、VIII IX、VIII4、IV1a（上段石垣ウラゴメと接合） 皿；V～VII、VI1a、VI 椀×皿IX、壺類III
青白磁	合子・蓋
中国陶器	鉢I2、鉢I？、E、壺類B' a、壺A' ab、壺類A' ab' 壺類B' ab、壺類B' ab'、F、黒釉小壺？、小盤I2 A' ab
石製品	滑石製品、石鍋
瓦類	丸瓦片、平瓦（斜格子）

西区Z

国産陶器	常滑？
白磁	椀；IV～VIII
中国陶器	A' ab

東区暗茶色土

土師器	小皿a、坏a、丸坏、椀c、皿c？
黒色土器B	椀
瓦器	片
須恵質土器	鉢
国産陶器	常滑
白磁	椀；II1（うち1点は拡張区黒茶色土と接合）、IV（1点は拡張区黒灰色土と接合）、IV～VIII、V1×VIII VI1b、VIII、V、VIII4、V～VIII（外反）、IV1a 皿；VI1a、V～VII、VIII1b×c、VIb（暗茶色土と接合）
中国陶器	ab'、黒釉天目、水注X
金属製品	釘（鉄）
土製品	焼土塊、瓦玉
石製品	滑石石鍋

東区黒灰色土

須恵器	甕、蓋c
土師器	小皿a、坏a、丸坏a、椀c、甕
黒色土器A	椀c
黒色土器B	片
瓦器	椀c、坏？
龍泉窯系青磁	椀；I、I2、II4c（CD6黒灰色土と接合）
同安窯系青磁	椀；I1b 皿；Ib
須恵質土器	鉢
白磁	椀；II、II1、II5、IV（うち1点は西区赤褐色土と接合、1点は茶色土と接合）、V、V（内クシ+外ヘラ）VIII、V1b×VIIIo、V4×VIII（うち2点は接合）V～VIII（外反）、V1×VIII、VIIb、IV～VIII（うち1点はC7拡張区表土と接合）、V4b、IV1a II3×4、V2b、VIII2？（茶色土と接合） 皿；II×III、II1a、III、V2、VI、VII、VIIa（1点は拡張区赤色炭土と接合）、VIIb、VI×VII、VIII2 V～VII（1点はCD6黒灰色土と接合）、VIII1b（C6拡張区黒灰色土と接合） 壺類III、椀×皿、椀×皿IX
青白磁	椀
陶器	天目片、こね鉢、褐釉壺
中国陶器	A'、A' ab、C'、 盤；I1、I1b、E 壺類E、水注X
朝鮮系無釉陶器	片
金属製品	釘（鉄）、銅製釣り手金具（釣り手付片口鍋）
土製品	焼土塊、瓦玉
石製品	滑石石鍋、おはじき、ob、砥石
瓦類	平瓦（斜格子）

東端区赤茶色砂質土

須恵器	甕
土師器	小皿a、坏a、椀c、鍋、器台
黒色土器A	椀c
瓦器	椀c
国産陶器	常滑
白磁	椀；IV、IV～VIII、V～VIII（外反）、XIIb？、V
青白磁	皿；VIIa（東端区茶色土と接合）
中国陶器	水注X
土製品	焼土塊、瓦玉
石製品	滑石石鍋

東端区茶色土

土師器	小皿a、坏a、丸坏、椀c
黒色土器B	片
瓦器	椀c
龍泉窯系青磁	椀；I2～4
同安窯系青磁	椀；I1b、片、同安？
白磁	椀；II、IV、V1×VIII、IV～VIII、III 皿；III1、IV？、V～VII、VIb、VIIa（東端区赤茶色砂土と接合） 椀×皿
中国陶器	耳甕III、A' ab'、A' ab 黒釉天目
朝鮮系無釉陶器	片

東端区茶褐色土

土師器	小皿a、坏a、甕
黒色土器B	片
龍泉窯系青磁	椀；I2b
白磁	椀；IV、IV～VIII
青白磁	皿；II×III、III1、IV2、VIIa
中国陶器	A' ab''
土製品	瓦玉
石製品	滑石製品

トレンチ1

土師器	小皿a、片、甕
越州窯系青磁	？II
須恵質土器	甕
白磁	椀；VIII 皿；IX、IX1a
青白磁	椀×皿？
土製品	焼土塊
石製品	鍋
瓦類	平瓦片

トレンチ2

土師器	小皿a、坏a、椀c、火舎片、片
瓦器	片
龍泉窯系青磁	椀；I×II？、I2、I1b、上田E？
同安窯系青磁	椀；I×III×IV、I1b
高麗青磁	椀III
須恵質土器	甕？片、鉢片
白磁	椀；VIII、IV～VIII、V～VIII（内クシ）、II、V～VII（内クシ・外反） 皿；II～IV 四耳壺×水注III1、鉢II
中国陶器	鉢III1、鉢I1b、盤I×II、A' ab、B' ab、Aa、b'
朝鮮系無釉陶器	片
青花	片
土製品	焼土塊
石製品	鍋片

試掘トレンチ

土師器	小皿a、片
その他	プラスチック？

C9セクションベルト東西

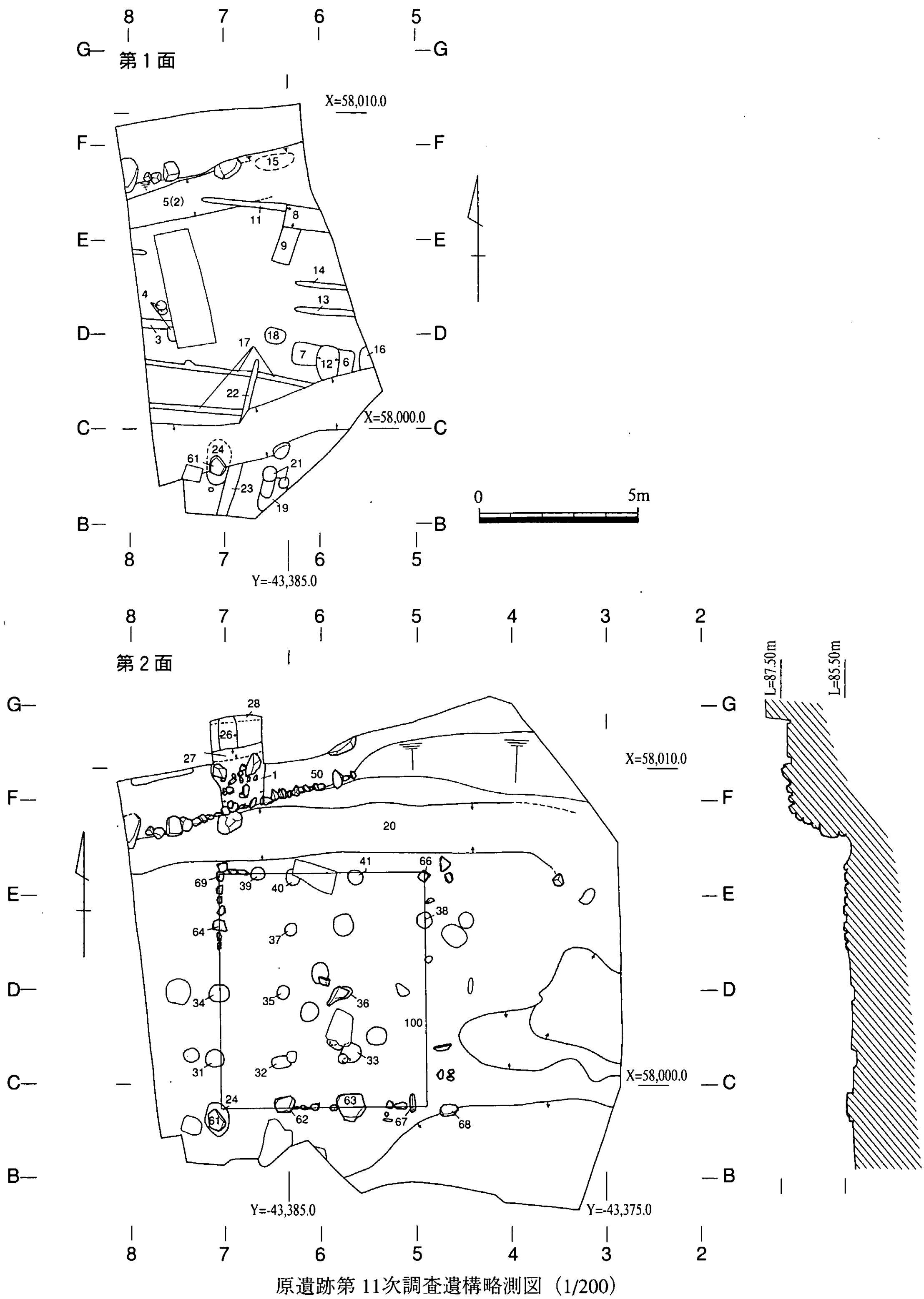
土師器	小皿a(イト)、坏a(イト)、丸坏（古い）、小皿c？、片
黒色土器B	椀
白磁	椀；II、IV 皿；II×III

表土東壁

土師器	小皿a
同安窯系青磁	椀；I1b 皿；I
須恵質土器	片
金属製品	刀子（鉄）
土製品	焼土塊
石製品	黒丸小石

周辺表採

須恵器	片
瓦器	片
須恵質土器	甕



原遺跡第 11次調査遺構略測図（1/200）

原遺跡第11次調査遺構番号台帳（1）

1面目

S-番号	遺構番号	種　別	備　考	埋土状況（古→新）	遺構間切合（古→新）	時　期	地区番号
1	11SX001	石垣上石積遺構	暗渠か	暗茶色土→茶褐色砂→茶色土		XII期～	F6拡張区
2		溝状堆積	S-5埋土最上層の堆積		5→2		Eライン
3		溝	畝溝とみられる				D7
4		小穴群					D7
5		溝状堆積	S-50前面の堆積				E6～7
6		土壙	S-6・7の埋土は同一色（明茶色土混灰色土）。同一遺構の可能性あり）		6・7→12		C5
7		土壙	S-6・7の埋土は同一色（明茶色土混灰色土。同一遺構の可能性あり）		6・7→12		C6
8		撹乱	暗渠か				E6
9		撹乱					D6
10		欠番					
11		撹乱溝	S-8につながる溝と考える				E6
12		撹乱			6・7→12		C5
13		溝	畝溝とみられる				D6
14		溝	畝溝とみられる				D6
16		土壙					C5
17		溝	畝溝とみられる				C6～7
18		小穴					C6
19		土壙			19→21		B6
21		小穴群					B6
22		溝	畝溝とみられる				G6
23		溝	畝溝とみられる				B6
24		小穴	S-61を抜き取るための穴か				B7

2面目

S-番号	遺構番号	種　別	備　考	埋土状況（古→新）	遺構間切合（古→新）	時　期	地区番号
15		土器溜	石垣前面に廃棄されたように土器が溜まっている。明茶色土層中で確認。			XIII期	E6
20	11SD020	溝	S-50とS-100の間を東に流れ、S-100の東側を南に下る。			XII～XIII期	Eライン
26		土壙か	浅い溝か。南北方向に走行。			平安後期	F6拡張区
27		堆積土				平安後期	F6拡張区
28		溝か	S-50に平行して走行。S-1の北限を区切る溝か			平安後期	F6拡張区
31		根石を入れる掘り方	S-100に関連			平安後期	C7
32		根石を入れる掘り方か	S-100に関連				C6
33		根石を入れる掘り方か	S-100に関連				C5
34		根石を入れる掘り方	S-100に関連				D7
35		根石を入れる掘り方か	S-100に関連				D6
36		根石を入れる掘り方	S-100に関連				D5
37		根石を入れる掘り方か	S-100に関連				D6
38		根石を入れる掘り方	S-100に関連				D4
39		小穴	S-100地覆石抜き取り穴の可能性あり				E6
40		根石を入れる掘り方	S-100に関連				E6
41		根石を入れる掘り方	S-100に関連				E5
42		根石か	S-100に関連				D4
50	11SX050	石垣				XII期～	EFライン
61		礎石	S-100に関連。S-24掘削時に動いている				B7
62		礎石	S-100に関連				B6
63		礎石	S-100に関連				B5
64		礎石	S-100に関連				D7
66		礎石	S-100に関連				E4
67		S-100南東隅の地覆石					B5
68		礎石か	礎石の可能性あるが、断定できず				B4
69		礎石			69→黄褐色粘土		E7
100	11SB100	礎石建物				XII～XIII期	BCDE5~7

原遺跡第11次調査遺構番号台帳（2）

各土層

S-番号	遺構番号	種　別	備　考	埋土状況（古→新）	遺構間切合（古→新）	時　期	地区番号
表土	表土	表土				近現代	
撹乱	撹乱					近代～	
茶色土	茶色土層	I層群	遺構検出時の人工層位				
石垣（新）埋め土	石垣（新）埋め土	I層群	S-50（石垣列）の南に築かれた近世以降の石垣を埋めた土	=茶色土（新石垣まわり）		近世～	
黒茶土	黒茶色土層	I層群	調査区東側のS-50の段上の層位				
暗褐茶粘	暗褐茶色粘土層	I層群	S-50（石垣部）上面部に堆積	=暗茶褐色土層			
淡黄褐土	淡黄褐色土層	II層群				13c前～	
黒灰土	黒灰色土層	II層群	調査区南東側に堆積する層				
茶灰砂土	茶灰色砂土層	III層群	明茶色土層と同層				D6
明茶土	明茶色土層	III層群	近世遺構面の基盤面となる層位			XIII期～	BCライン
茶灰砂	茶灰色砂層	III層群	茶褐色砂層の上面で部分的に堆積			XIII期～	BCライン
茶褐砂	茶褐色砂層	III層群	近世遺構面の基盤面となる層位			XIII期～	CDライン
暗黒褐土	暗黒褐色土層	III層群	S-50（石垣列）南面上部においてもたれかかるように堆積する層位。			XIII期～	F5～6
暗黄褐砂	暗黄褐色砂層	III層群	部分的に堆積				BCライン
褐色土	褐色土層	IV-1層群	調査区中央～南側に広く堆積している。赤褐色粘層の直上に堆積	=暗褐色土層（IV-2層群）		XIII期～	CDライン
褐茶土	褐茶色土層	IV-1層群	赤褐色粘層の直上に堆積				CD7付近
黒褐土	黒褐色土層	IV-1層群	黄褐色粘層を覆う堆積	=暗灰茶色土層		XII～XIII期	E6～7
黄褐粘	黄褐色粘土層	IV-1層群	S-100（礎石建物）の北西角の礎石を覆う堆積				E6
暗褐土	暗褐色土層	IV-2層群	S-20（溝）を覆う層位。	=褐色土層（IV-1層群）		XII<XIII	E4～7
赤茶土	赤茶色土層	IV-2層群	S-50（石垣列）南面下部においてもたれかかるように堆積する層位。遺物多い。		橙褐色土層→赤茶色土層	XII～XIII頃?	E6～7
橙褐土	橙褐色土層	IV-2層群	S-50（石垣列）南面で部分的に検出。一時期S-20の北岸を形成していた。		橙褐色土層→赤茶色土層		E6
赤褐粘	赤褐色粘土層	V層群	S-100（礎石建物）に伴う整地と考える	=暗赤色土層		XII期前後	BCD4～7
赤色粘	赤色粘土層	VI層群	S-50の石垣に最も近い部分の裏込め	=赤灰色粘土層		XII期～	E6～7
淡橙粘	淡橙色粘土層	VI層群	S-50（石垣列）中央より東側の裏込め			XII期頃か	F3～5
淡灰茶粘	淡灰茶色粘土層	VI層群	S-50（石垣列）中央より東側の裏込め			XII期頃か	F3～5
茶灰粘	茶灰色粘土層		II・III層群に帰属するとみられる			平安後期～	

原遺跡第11次調査　出土遺物一覧表(1)

※[　]内の数字は、破片の点数。

表土

須恵器	甕、壷、器台、片
土師器	坏片、坏a、坏a（イト）、坏b、丸坏a（ヘラ） 丸坏a、小皿a、小皿a（ヘラ）、小皿a（イト）、鉢？ 小皿c、坏a（灯明）、坏c（穿孔あり）、大坏a、鍋
黒色土器B	片
越州窯系青磁	椀；II[1] 褐釉；片[1]
龍泉窯系青磁	椀；III[1]、I-4c[1]、II-b[9]、I[1]、II-a[1]、片[5] 皿；I[1] 他器種；片[4]、小椀III-2c[1]
同安窯系青磁	椀；I-1b[2]、I-1[1]、片[3]、I-1a[1]、III-1[1]、I[2] II×III[1] 皿；I[2] 他器種；坏III-4[1]、鉢[1]
須恵質土器	鉢
肥前系陶磁器	片[8]
国産陶器	片[1]
国産磁器	椀（近世）[1]、椀（近代）[3]、壺？[1] 片（近世）[6]、片（近世？）[1]、片（現代）[5]
白磁	椀；II-1[1]、II-1a×3a[1]、II-4b[1]、II[2]、IV-1a[2] IV-2[2]、IV[8]、V-2b[1]、V-4b[1]、V-4c[1] V[2]、VIII-1×3[1]、VIII[1]、V-1×VIII-2[2] V×VIII[1]、IX[2]、IV～VIII[8]、片[3] 皿；III×II-1a[2]、VI-1b[1]、VI-1[1]、片[2] 森田D類[1] 壺他；小椀[1]、四耳壷III-2[1]、水注×壺II系[1]
青白磁	皿[2]、椀[1]
中国陶器	甕；I[1]、F[1] 他器種；B′-b（鉢・壺？）、F[1]
須恵質(輸入)	高麗？（甕？）
金属製品	鉄釘
瓦類	丸瓦格子目叩、丸瓦玉縁、平瓦二重格子目叩瓦 縄目瓦、片
石製品	不明製品（滑石）、不明製品（研磨）、石鍋（滑石）
その他	ガラス（近代か）

撹乱

須恵器	片
土師器	坏a、丸坏a？、片
龍泉窯系青磁	椀；II-a
肥前系陶磁器	片（近代～）[1]
白磁	椀；IV[2]、片
中国陶器甕	A？[1]、片[1]
金属製品	鉄釘

茶色土層<I層群>

須恵器	蓋3、甕
土師器	坏a、坏a（ヘラ）、坏a（イト）、坏a（灯明） 坏c、大坏a、大坏c、丸坏a（ヘラ）、丸坏a×c 小皿a（ヘラ）、小皿a（イト）、小皿a（ヘラ？） 小皿b、小皿c、皿a、甕、鍋
黒色土器A	片
黒色土器B	片
瓦器	椀c、皿
越州窯系青磁	椀；II 他器種；水注×壺？[1] 褐釉；壺[2]、中形壺（B-b）[1]
龍泉窯系青磁	椀；I[3]、I-2b[1]、I×II[1]、I-6a無文[2]、II-a[1] II-b[8]、II-3[1]、III[1]、片[2] 皿；I[1] 他器種；坏III[1]
同安窯系青磁	椀；I[1]、I-1b[10]、I-2b[3]、I-4a[1]、I-1b×2b[2] II[3]、片[2] 皿；I[1]、片[1]
高麗青磁	椀；III[1]、III-1a[1] 小椀；III-2？[1]
須恵質土器	鉢（東播）、鉢（篠）、甕（東播？） 椀×皿（東播）[1]、片
瓦質土器	片口鉢
国産陶器	甕（常滑）[2]、甕？[1]、壺類[1]、四耳壷[1] 擂鉢（中世後半）[2]、鉢（近世～）[1] 片（近世？）[2]、片？[1]
国産磁器	花瓶（近世）、片（近世）[12]
白磁	椀；II[4]、II-1[1]、IV[14]、IV-1[1]、IV-1a[2]、V[10] V-1a[2]、V-2[3]、V-2a[2]、V-4[2]、V-4b×c[2] IV～V[1]、VIII[5]、VIII-2[2]、II～VIII[3] V-2×VII-a[1]、V×VIII[7]、V-4×VIII[1] V-4×VIII-3[1]、IV～VIII[19]、椀？IV～VIII[1] IX？[2]、片（明）[1]、片[6] 皿；II×III[1]、VI-1a[2]、VI-1[2]、VI-1b[1] V×VI[1]、VIII[1]、VIII-2b（小型品）、IX[3] IX-1d[1]、IX-2[1] 他器種；椀II×皿VI？[1]、水注III[1]
青白磁	森田B類（内面凹凸あり）
中国陶器	壺；耳壺[2]、I[1]、B[1]、C？壺類[1] 四耳壷（B-a"b"）×博多分類大型短頚壺II[2] 壺？（D）[1]、壺？[1] 鉢；I[1]、I-1b[1]、I-2a[1] 甕；I[4]、IV[1]、F[1]、F-a[1] 他器種；A、A？、C、D、D-a、D'-a？ E（四耳壷？？）、片（磁州窯）[3]
輸入陶磁器（未分類）	朝鮮系無釉陶器、天目
金属製品	鉄釘、不明製品
土製品	ふいご（羽口）、不明製品
瓦類	平瓦二重格子目叩、平瓦格子目叩 平瓦二重格子目叩×文字、平瓦格子目叩（安楽寺） 丸瓦格子目叩、瓦玉、片
石製品	石鍋、砥石、碁石（長石）、滑石製品、滑石片 緑泥片岩（碁石使用に類似した平石）[6] 不明加工品（花崗岩）、不明製品片（研磨）

原遺跡第11次調査　出土遺物一覧表(2)

※[ ]内の数字は、破片の点数。

茶色土（新石垣まわり）＜I層群＞

土師器	坏c、坏片
国産磁器	片（近世～）
中国陶器	鉢；I[1] 甕；片I[1]
瓦類	片

石垣（新）埋め土＜I層群＞

須恵器	甕
土師器	坏、坏a
同安窯系青磁	椀；I-2[1]、I-1[1]
瓦質土器	片
国産陶器	蓋（宝珠のみ・近世～）[1]
瓦類	縄目叩瓦（玉縁・近世～か）、平瓦（安楽寺） 丸瓦、軒丸瓦、片
石製品	石鍋（滑石・2次加工あり）

暗茶褐色土（暗褐茶色粘と同一）

土師器	坏a、坏c、丸坏a、小皿a
黒色土器B	椀c、片
高麗青磁	初期高麗I～III？[1]
国産磁器	片[1]

暗褐茶色粘土

土師器	坏a、小皿a　小皿a（ヘラ？）、小皿a（ヘラ）
瓦器	小皿a
同安窯系青磁	片
白磁	椀；V-2[1]、片[1] 皿；V～VII[1]
中国陶器	白釉陶器（磁州窯）；椀[1]
土製品	焼土塊

茶灰色粘土層＜II・III層群に帰属するとみられる＞

須恵器	坏a、擂鉢（？）、片
石製品	滑石（石鍋か？）

淡黄褐色土層＜II層群＞

土師器	坏a、大坏c、坏、小皿a（イト）、小皿a、小皿、甕
黒色土器A	坏a？
龍泉窯系青磁	椀；I[1]、I-1c（「金玉満堂」）[1]、II-a[3]、片[1] 皿；I-1b[1]
同安窯系青磁	椀；I-1b[1]、片[1] 皿；I[1]
白磁	椀；IV[1]、V-1×VIII-2[2]、V-4×VIII[1]、IV～VIII[1]
青白磁	片

黒灰色土層＜II層群＞

須恵器	片
土師器	坏a、片
黒色土器B	片
須恵質土器	壺？（東播）
白磁	椀；IV[1]、V-2b[1]、V-2×VIII-1・3[1]

茶灰色砂土＜III層群＞

土師器	坏a、小皿a、小皿a（イト）、坏c、片
白磁	椀；IV-1a[1]
黒釉陶器	片[1]
輸入陶磁器（未分類）	天目茶碗？[1]

明茶色土層＜III層群＞

須恵器	坏、坏c、甕、壷×鉢
土師器	坏a、坏a（イト）、坏a（ヘラ）、坏c（底部に穿孔） 坏c、大坏c、大坏a（灯明）、大坏a（イト）、大坏a 大坏a（ヘラ）、丸坏a、丸坏（焼成前穿孔あり） 皿a、小皿a（ヘラ）、小皿a（イト） 小皿a（灯明）、小皿c、大皿a、大皿c、小椀c、甕
黒色土器A	椀c
黒色土器B	椀片、片
瓦器	坏a、椀c、椀、鉢、小椀c
越州窯系青磁	褐釉；中形壺（B-b）[1]
龍泉窯系青磁	椀；I-2[1]
同安窯系青磁	椀；I-1c[1]、I-1b[1]、I[1] 皿；I-2b[1] 他器種；片
須恵質土器	鉢（東播）、椀（篠窯産）
国産陶器	甕
国産磁器	片（近世～）
白磁	椀；II-3b×4b[1]、II-4b[1]、II[8]、IV[17]、V[2] V-4a[1]、V-4c[2]、V-a[1]、IV×V[1]、VII[1] IV～VII[1]、VIII[3]、VIII-2[2]、VIII-2×3[1] V-1×VIII-2[2]、V-1×VIII-2[1] VII×VIII-4[1]、IV～VIII[7]、片[1] 皿；II[2]、VI-1a[2]、VI[1]、VI-a？[1]、V～VII[1] 壺他；壺III[1]、小椀V-2？[1]、椀II×皿VI[1] 片（II類以外）[1]
青白磁	皿[1]
中国陶器	甕；F 他器種；片[1] 白釉陶器（磁州窯）；片[2]
輸入陶磁器（未分類）	朝鮮系無釉陶器
金属製品	刀子
土製品	不明製品
瓦類	瓦玉、平瓦、平瓦格子目叩、平瓦縄目叩
石製品	不明製品、石鍋（滑石）

※[　]内の数字は、破片の点数。

茶褐色砂層<III層群>

須恵器	甕、蓋（古墳～）、片
土師器	坏a、坏a（イト）、丸坏a、小皿a、小皿a（ヘラ） 小皿a（イト）、皿、小皿c×坏c、大坏c×大皿c 甕、鍋、風炉、片
黒色土器A	椀
黒色土器B	椀、片
瓦器	椀
越州窯系青磁	盤；I
龍泉窯系青磁	椀；I-1[2]、II-b[2] 皿；I[1] 他器種；片[1]
同安窯系青磁	椀；I-1b[4]、I×III[1] 皿；I-2b[1]
須恵質土器	鉢（東播）、片口鉢（東播）、皿×椀
肥前系陶磁器	片（混入か）
国産陶器	不明？片、甕（常滑）[1]
国産磁器	片（近世？）
白磁	椀；II[1]、IV-1[1]、IV[2]、V-4b[1]、V-2b×3b[1] VIII[1]、V-4×VIII-1・3[1]、IV～VIII[8] IV～IX[1] 皿；II[1]、II系？[1]、VI-1a[2]、IV-2[1] 壺他；椀II×皿VI？[1]、小椀V-2？[1]、片[1]
中国陶器	壷；I-2A群[1] 甕；片[1] 鉢；I-2a[1] 他器種；盤I[1]、F群[1]、A群？[1]
輸入陶磁器（未分類）	壷×水注[1]
鉄製品	鉄釘
土製品	焼土塊
瓦類	瓦玉、格子目瓦、片
石製品	滑石製品

茶灰色砂層<III層群>

須恵器	甕
土師器	坏a、丸坏a、小皿a（イト）、小皿a、椀c、脚付鉢 風炉、器台
黒色土器A	椀c
瓦器	椀c、片
龍泉窯系青磁	椀；II-b[1]
同安窯系青磁	椀；I-1b[1] 皿；I[1]
須恵質土器	鉢（東播）
国産陶器	不明？片、山茶椀[1]
白磁	椀；II-1[1]、II-3×4[1]、II[3]、IV-1a[2]、IV[6] V-2a[2]、VIII[1]、VIII-2[1]、IV～VIII[7] V-1×VIII-2[3]、XI-1？[1] 皿；VI-1a[2]、VI-1[1] 壺他；片（II類以外）[1]
青白磁	袋物？×象形壺？
中国陶器	甕；I[1] 他器種；耳壷×II[2]、壺×甕[1]、片（C-ab）[1]
輸入陶磁器（未分類）	無釉陶器（高麗）
土製品	土玉
瓦類	平瓦格子目叩、瓦玉
石製品	石鍋（滑石）、長石

暗黒褐色土層<III層群>

須恵器	甕、蓋、坏×蓋
土師器	坏a、坏c、丸坏a、丸坏c、小皿a（ヘラ） 小皿a（イト）、小皿a、小皿c、皿c、椀c 大椀c×皿c（焼成前穿孔あり）、甕、甕×盤、火鉢？
黒色土器A	椀、片
黒色土器B	椀
瓦器	椀c、椀
高麗青磁	椀；III[1]
須恵質土器	椀（山茶椀？）、鉢（東播）
白磁	椀；II-1×3[1]、II-1？[1]、IV[14]、V-1a[1]、IV-c[1] V-1b×2b[1]、VIII-2[1]、V-1×VIII-2[1] XI？？[1] 皿；VI×VII[3]、 壺他；II×III[1]、壷×水注[1]
土製品	焼土塊
瓦類	平瓦格子目叩、平瓦
石製品	石鍋

暗黄褐色砂層<III層群>

土師器	坏a（イト）、坏a、坏片、丸坏a、小皿a（ヘラ） 小皿a（イト）、小皿a、小皿c、皿a、椀c、小椀c
黒色土器B	片
国産陶器	片？
白磁	椀；II-4b[1]、II-3b×4b[3]、IV[1]、V[1]、V-3[1] V？[1]、VIII？[1] 皿；VII[1]、V×VI×VII[1]、V～VII[2] 壺他；鉢VIII[1]、片[1]、
瓦類	瓦玉

褐色土層<IV-1層群>

須恵器	甕
土師器	坏c、坏、小皿a（ヘラ）、小皿a（イト？） 小皿a、脚付鉢、風炉
黒色土器B	椀c
瓦器	椀c、椀
龍泉窯系青磁	椀；I-1a[3]
同安窯系青磁	椀；I-1b[1] 他器種；同安窯系青磁II×初期高麗青磁III[1]、片
須恵質土器	方口鉢（東播）、椀×皿（東播）
白磁	椀；II-3×4[1]、II[4]、IV[10]、V-1[2]、V-2[1] V[1]、V-2×VII[2]、VIII-1・3[1]、XII？[5] 皿；V～VII[1]
青白磁	椀[1]
中国陶器	他器種；D-a[1]、片？？[1] 白釉陶器（磁州窯）；片[1]
金属製品	鉄釘、不明製品
土製品	焼土塊
瓦類	平瓦二重格子目叩、平瓦格子目叩、瓦玉、片
石製品	滑石

褐茶色土層<IV-1層群>

土師器	丸坏、小皿a
瓦器	椀c

黒褐色土層<IV-1層群>

須恵器	坏a（8c前～中）
土師器	丸坏、丸坏a、小皿a、皿c　椀c
瓦器	椀c
須恵質土器	鉢（東播）
土製品	焼土塊

原遺跡第11次調査　出土遺物一覧表(4)

※[　]内の数字は、破片の点数。

暗褐色土層<IV-2層群>

須恵器	片
土師器	坏a、丸坏a（穿孔あり）、丸坏a、小皿、小皿a 小皿a（ヘラ）、小皿a（ヘラ？）、小皿a（イト） 小皿a（イト？）、小皿c、大椀c、器台、甕
黒色土器A	椀
黒色土器B	椀
瓦器	椀a
越州窯系青磁	褐釉；中型壺[2]
同安窯系青磁	椀；I-1b[1]
須恵質土器	鉢（東播）、方口鉢（東播）、椀×皿（東播）[2]
白磁	椀；II[2]、II-1・3[1]、IV-a[1]、IV[3]、IV-1×2[1] V[1] 皿；V-2a[1]、VI-1b[2]、VI×V-1b[1]
中国陶器	白釉陶器（磁州窯）；[1]
鉄製品	刀子
瓦類	平瓦格子目

赤茶色土層<IV-2層群>

土師器	坏、丸坏a、小皿a、小皿a（ヘラ）
瓦器	片
越州窯系青磁	褐釉陶器（未分類）；壺類（B-b）[1]

橙褐色土<IV-2層群>

須恵器	甕
土師器	坏
瓦器	椀

赤褐色粘土層<V層群>

土師器	坏、片
黒色土器B	椀a

暗赤色土<V層群>

須恵器	壺
土師器	坏、小皿a、甕
黒色土器B	椀
瓦器	椀、片
国産磁器	片（近世～・混入か）
白磁	椀；II-1[1]、IV-a[1]、IV[1]

赤色粘土層<VI層群>

土師器	坏a　丸坏a、小皿a（ヘラ）、小皿a（ヘラ？）
瓦類	片

赤灰色粘土層<VI層群>

土師器	坏c、坏、丸坏×椀a、小皿a
越州窯系青磁	他器種；壷III[1]
白磁	椀；II[1] 壺他；片[1]

淡橙色粘土層<VI層群>

土師器	丸坏a
白磁	皿；VI-1b [1]
瓦類	瓦玉

淡灰茶色粘土層<VI層群>

土師器	坏a、小皿（ヘラ）、小皿a、片
須恵質土器	鉢（東播）

S-1茶色土

土師器	坏c、丸坏a、小皿a、小皿a（ヘラ？）、小皿
金属製品	鉄釘

S-1西トレンチ（S-1茶色土）

土師器	坏c、坏、小皿c
白磁	椀；IV～VII[1]、片[1]
瓦類	瓦玉

S-1茶褐色砂

土師器	坏、丸坏a（ヘラ？）
白磁	椀；IV-1[1]

S-1暗茶色土

土師器	坏a、小皿a、片

S-2

土師器	丸坏、小皿
白磁	椀；IV～IX [1] 皿；V×VI[1]
青白磁	椀[1]

S-3

土師器	片

S-4

土師器	坏a、坏

S-5

土師器	坏c、坏、小皿a
黒色土器A	椀、片
瓦器	椀c、椀
白磁	椀；II[1]、IV[1]
土製品	焼土塊
石製品	石鍋？

S-6

土師器	片
瓦器	片（瓦器か？）
肥前系陶磁器	片[2]
瓦類	片

S-7

土師器	坏、小皿
瓦器	椀
同安窯系青磁	椀；II？[1]
国産磁器	片[1]
中国陶器	他器種；白釉陶器（磁州窯）[1]
金属製品	刀子

S-8

土師器	片
肥前系陶磁器	片[2]

S-9

土師器	坏
瓦類	片

原遺跡第11次調査　出土遺物一覧表(5)

※[　]内の数字は、破片の点数。

S-11

須恵器	甕
土師器	坏a、小皿a
黒色土器A	坏a
瓦器	片？
龍泉窯系青磁	椀；I-2[1]、III[1]
須恵質土器	鉢？
国産磁器	片[1]
白磁	椀；IV[1]、V-1×4[1]
瓦類	縄目叩瓦、平瓦
石製品	碁石

S-12

土師器	片

S-13

土師器	片
白磁	椀；IV～VIII[1] 壺他；片[1]

S-14

土師器	坏a、片

S-15

土師器	坏a（灯明坏）、坏a、小皿a（イト）、小皿a（ヘラ）

S-16

土師器	片
瓦類	片

S-17

須恵器	片（擦痕あり）
土師器	坏a、坏、小皿a、小皿、甕、片
黒色土器A	片
瓦器	片？
龍泉窯系青磁	椀；I[2]
高麗青磁	椀；III-1[1]
須恵質土器	鉢（東播）
肥前系陶磁器	小皿、片[1]
国産陶器	鉢？、甕？
国産磁器	蓋（近世近代）、小皿（近世近代）[2] 把手（近世近代）
白磁	椀；II[1]、IV～VIII[4]、V-4×VIII-1・3[1] 皿；III[1]、IV×VII[1]
青白磁	片[1]
輸入陶磁器（未分類）	天目茶碗[1]
金属製品	鉄釘
瓦類	平瓦格子目叩、片

S-17（礫入り）

土師器	坏
龍泉窯系青磁	椀；II-b[1]
国産陶器	片
国産磁器	花瓶（現代）[1]、片（現代）[3]
白磁	椀；V-2[1]、VIII-2[1] 皿；VI-1b[1]
中国陶器	甕；I[1]、F[1]
瓦類	丸瓦二重格子目叩

S-18

土師器	坏

S-19

土師器	坏、坏（ヘラ）、片
国産磁器	片（現代）
白磁	皿；III-1[1]

S-20

土師器	坏c、小皿a、小皿c×坏c、片
須恵質土器	鉢（東播）[1]
白磁	椀；V-3[1]

S-21

土師器	片
国産陶器	片[1]
中国陶器	鉢;III[1] 他器種；B′-ab[1]

S-22

土師器	坏
瓦類	瓦玉

S-23

白磁	椀；IV～VIII[1] 壺他；片

S-24

土師器	小皿a、片
瓦器	瓦器？

S-26

土師器	片

S-27

土師器	片

S-28

土師器	片

S-31

土師器	小皿a
金属製品	不明製品

S-50

土師器	丸坏、小皿a
瓦器	片

z 1

土師器	丸坏a、小皿a、片

z 2

土師器	丸坏a、坏、片

淡茶色砂（出土地不明）

土師器	片、小皿a
白磁	椀；IV-1b [1] 皿；VI-1[1]

写　真　図　版

※写真中の番号は、図版番号を示す。

例　8-10-10

調査次数　　Fig.番号　挿図番号

※遺構写真キャプションの末尾の６桁の数字は、
本市教委が所有するProPhotoCD検索用の番号である。

例　1234-56

CD番号　写真ファイル番号

原遺跡第８次調査　調査区全景（上が南）1258-11

原遺跡第８次調査　東・東端区第一遺構面全景（上が東）1258-13

原遺跡第 8 次調査　東端区第一遺構面全景（上が東）1258-16

原遺跡第 8 次調査　東区第三遺構面全景（上が東）1261-17

原遺跡第 8 次調査　東区第四遺構面全景（上が東）1262-20


原遺跡第 8 次調査　西区第一遺構面全景（上が南）1258-19


原遺跡第 8 次調査　西区第一遺構面全景（北から）1258-20

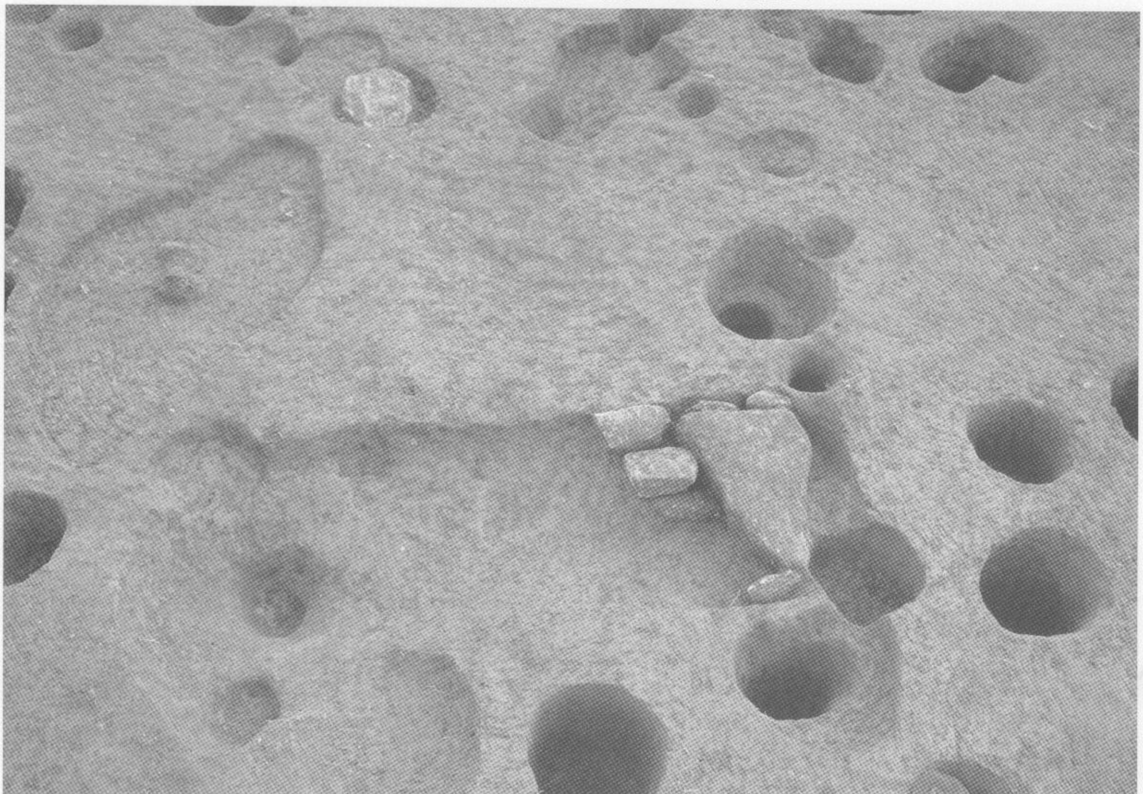
原遺跡第８次調査　西区第三遺構面全景（上が南）1263-11

原遺跡第８次調査　西区第四遺構面全景（上が南）1263-13

8ST005 遺物検出状況（西から）1259-3

8SX025 完掘状況（上が東）1258-15

8SA030土層堆積状況（南東から）1261-3



8SX040完掘状況（北から）1259-16

8SX070完掘状況（西から）1259-17

8SX075遺物検出状況（西から）1259-19

8SX130遺物検出状況（西から）1259-20

8SE210調査状況（北から）1258-2

8SK301完掘状況（南から）1260-2

8SX315・320・325検出状況（西から）1262-4

8SX315・320・325検出状況（東から）1262-5

8SX320検出状況（南から）1265-56

8SK430完掘状況（上が南）1258-25

8SX475焼土塊検出状況（西から）1265-98

8SK601完掘状況（南から）1260-21

原遺跡第 8 次調査下段石垣地山検出状況（北から）1263-24

原遺跡第８次調査下段石垣土層断面（西から）1263-25

原遺跡第８次調査下段石垣内「原山中堂址」碑（南から）1264-11

原遺跡第８次調査東区東壁土層断面（西から）1262-13

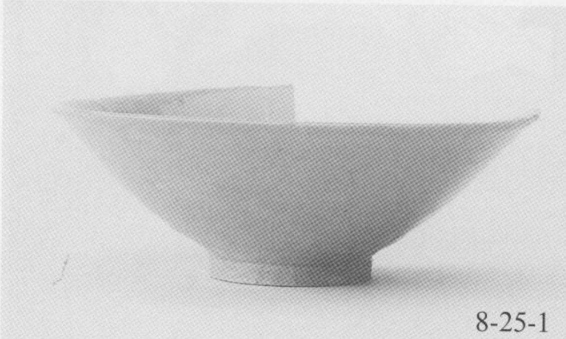
原遺跡第８次調査東区西壁土層断面（東から）1262-16

原遺跡第 8 次調査東区東・南壁土層断面（北西から）1262-11

原遺跡第 8 次調査西区南壁東側土層断面（北から）1263-15

原遺跡第 8 次調査西区南壁中央土層断面（北から）1263-16

原遺跡第 8 次調査西区南壁西側土層断面（北から）1263-17

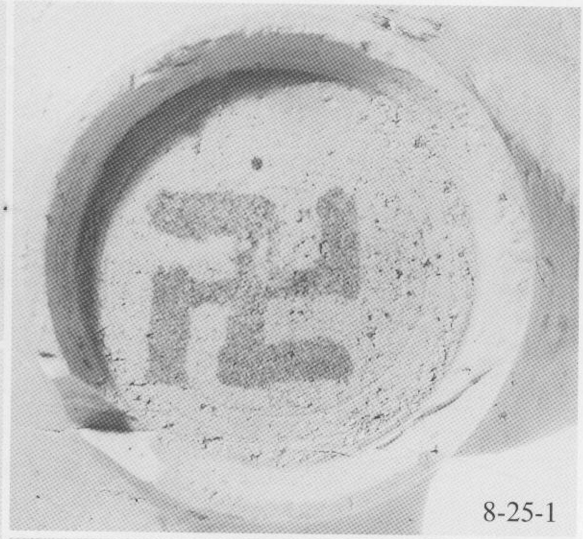

8-25-1


8-25-2


8-25-3


8-25-4


8-30-15


8-25-1


8-25-2


8-25-4


8-30-16


8-31-21


8-31-21

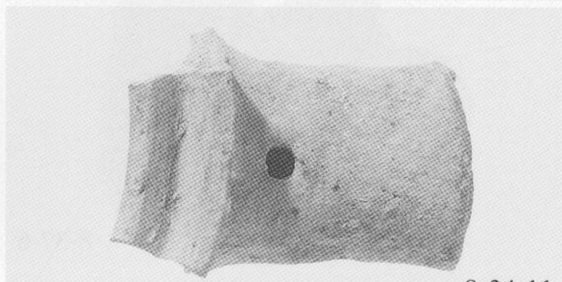

8-32-9


8-32-9


8-33-2

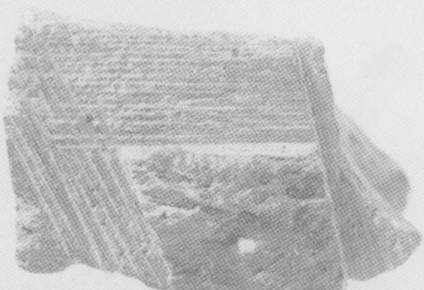

8-34-1

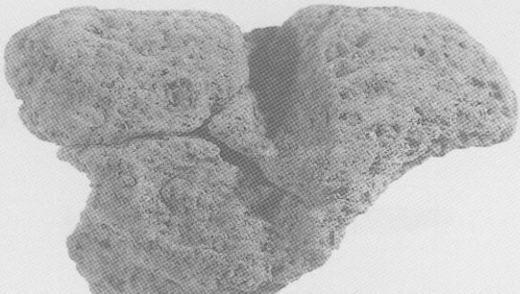

8-34-2


8-34-11


8-34-11


8-34-15

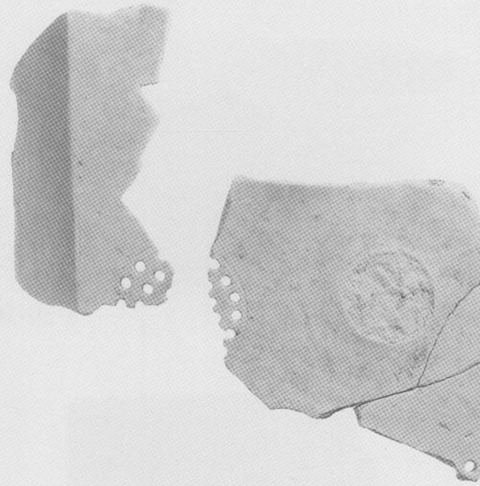

8-36-11

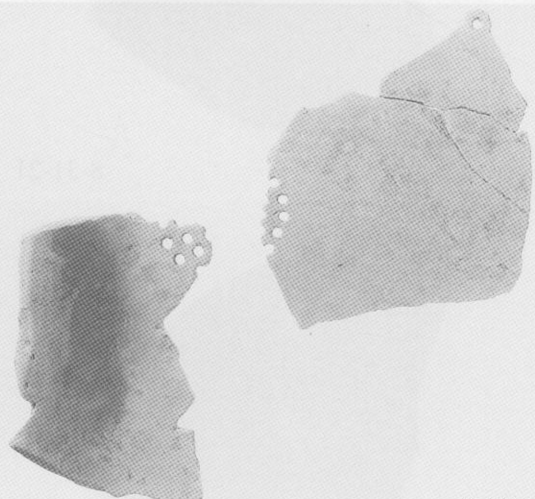

8-37-2


8-37-6


8-37-11

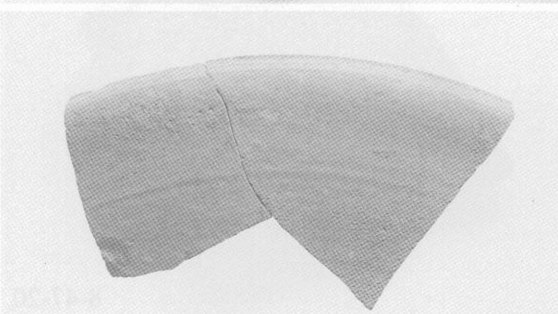

8-38-9


8-38-10

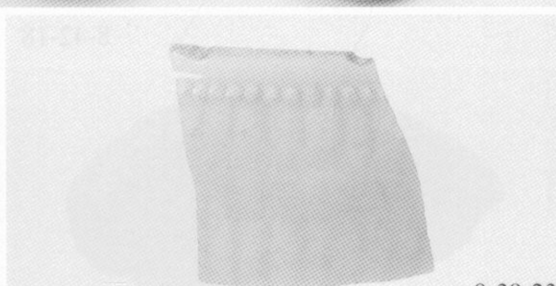

8-38-10


8-38-11

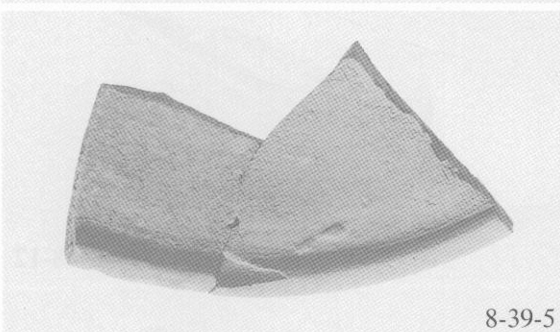
SK430



8-39-5



8-39-23



8-39-5

8-40-15

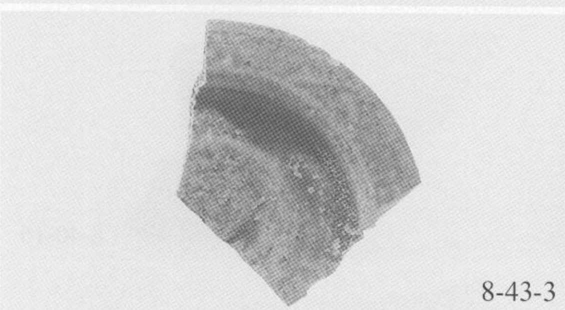
8-41-24

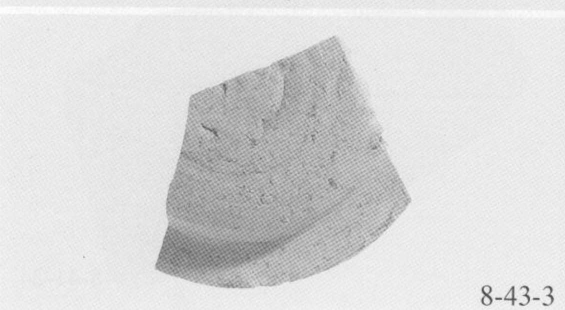

8-41-28

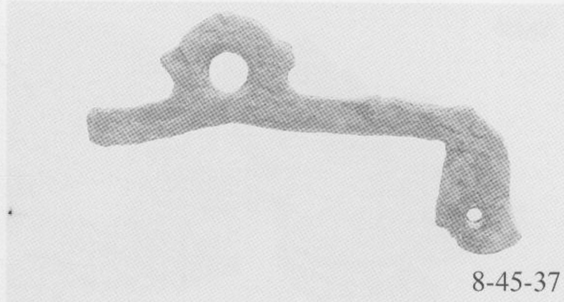

8-42-17

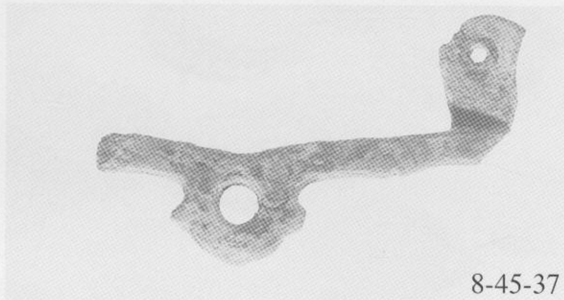

8-42-18


8-42-18


8-43-3

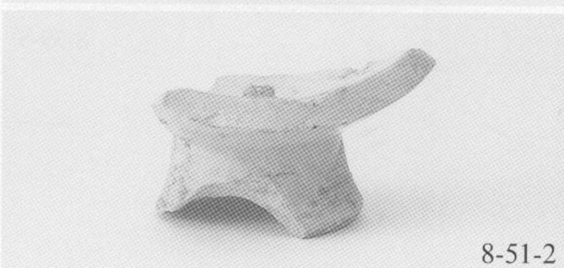

8-43-3


8-45-37


8-45-37


8-47-20


8-48-12


8-51-2

8-47-23

8-47-23

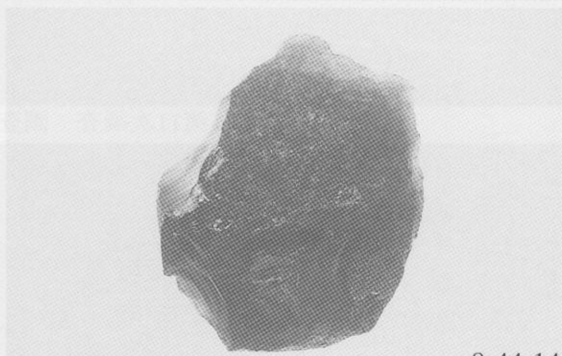
8-49-11

8-53-3

8-41-26

8-53-7

8-53-14



8-44-14

8-44-14

8-41-26

原遺跡第11次調査　調査区遠景（上が北）4125-9

原遺跡第11次調査　調査区遠景（北西から撮影）4125-8

原遺跡第11次調査　調査区全景（上が北）4125-10

原遺跡第11次調査　調査区西側状況（西から撮影）4127-37

原遺跡第11次調査　調査区西壁土層状況（石垣上）4127-69

原遺跡第11次調査　調査区西壁土層状況（石垣前面部）4127-68

原遺跡第11次調査　調査区西壁土層状況（平坦部北側）4127-67

原遺跡第11次調査　調査区西壁土層状況（平坦部中央）4127-66


原遺跡第11次調査　調査区西壁土層状況（平坦部南側）4127-65


原遺跡第11次調査　新石垣状況（南から撮影）4127-7

原遺跡第11次調査　新石垣状況（南西から撮影）4127-10

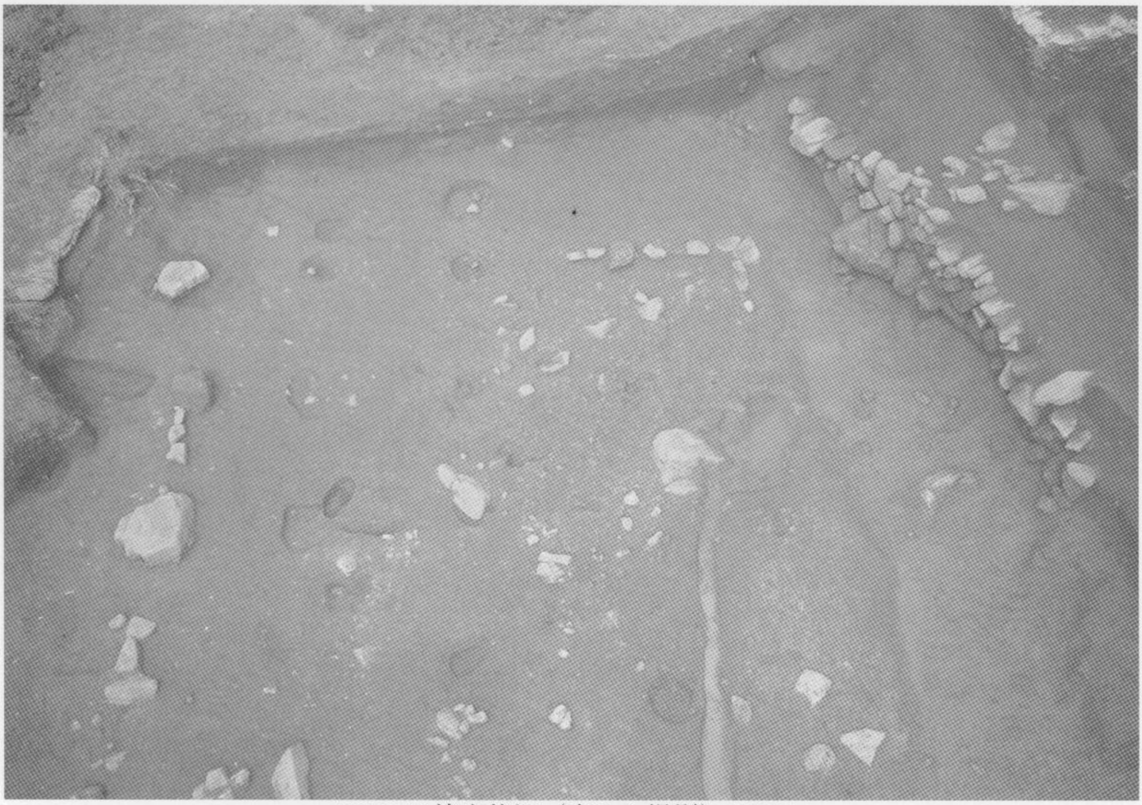
11SD020土層観察（北側、西から撮影）4127-22

11SD020土層観察（南側、西から撮影）4127-21

11SD020付近（南西から撮影）4125-14

11SB100検出状況（南から撮影）4125-12

11SB100検出状況（北から撮影）4125-4



11SB100検出状況（東から撮影）4125-13

11SB100検出状況（西から撮影）4125-3

11SB100南側地覆石および礎石（南東から撮影）4125-25

11SB100北西部および11SX050（南から撮影）4126-4

11SX050石垣部状況（南から撮影）4125-6

11SX050石垣部近景（南から撮影）4127-26

11SX050巨石下部状況（南から撮影）4127-27

11SX050石垣部と段状況（東から撮影）4127-29

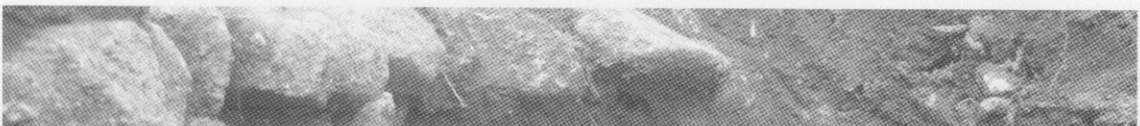
11SX050段部土層観察（西から撮影）4127-73

11SX050段前面土層観察（西から撮影）4127-74

11SX001（南から撮影）4127-14

11SX001（北から撮影）4127-39

11SX015検出状況（南から撮影）4127-5



11SX015検出状況（南西から撮影）4127-6

原遺跡第11次調査　明茶色土層（III層群）出土遺物

原遺跡第11次調査　SX015（III層群）出土遺物

茶灰色砂土層

青白磁　袋物（R-003）

茶褐色砂層

11-11-25

暗黒褐色土層

土師器丸坏a（a-001）

暗黄褐色砂層

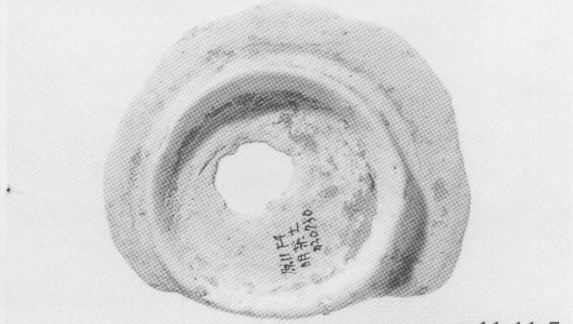
白磁椀Ⅱ-4b類（R-002）

明茶色土層

11-11-5

土師器小皿a（灯明皿、a-078）

明茶色土層



11-11-7

11-11-8

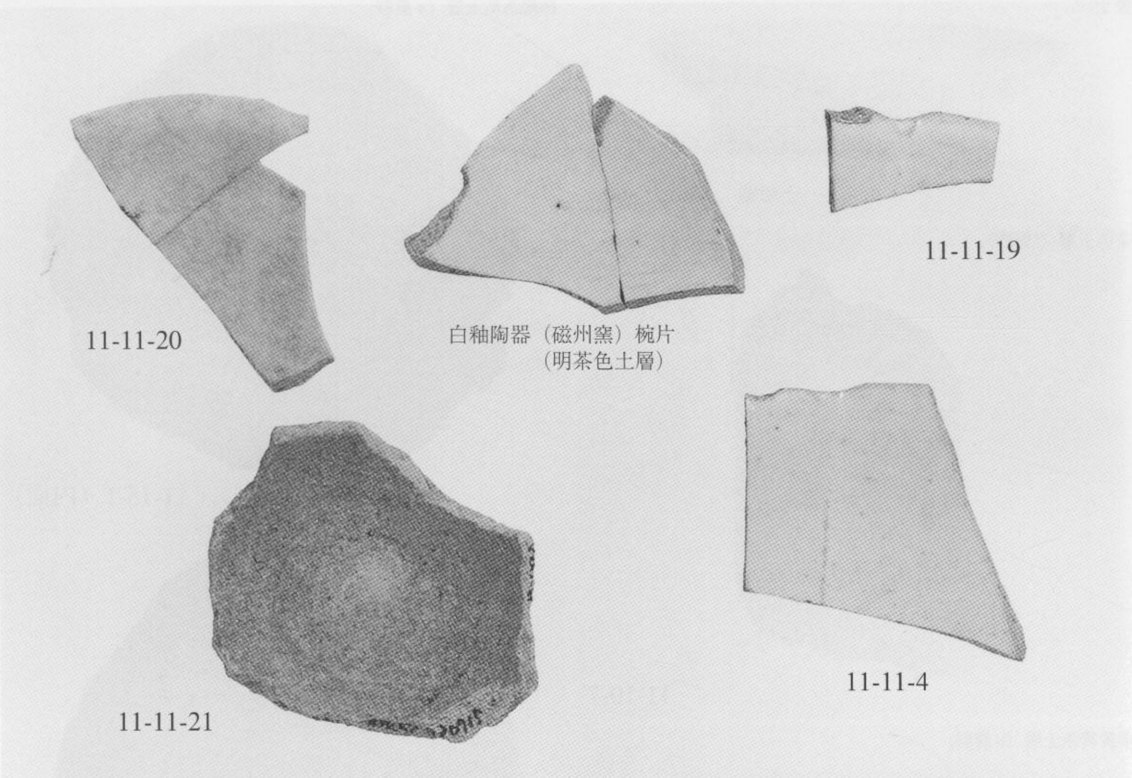
11-11-15

11-11-17

11-11-18

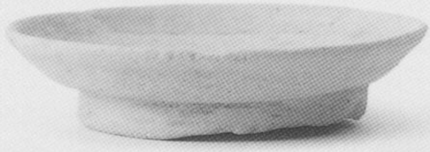
11-11-11

原遺跡第11次調査　Ⅲ層群出土遺物



原遺跡第11次調査　I・III層群出土遺物

表土



土師器　小皿c（a-010）

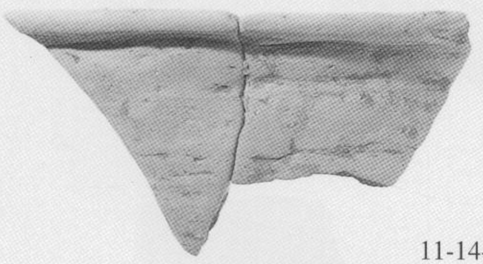
茶色土層（I層群）

11-10-7

淡黄褐色土層（II層群）

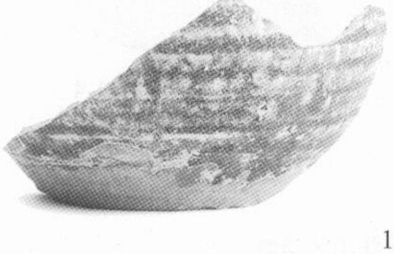
龍泉窯系青磁皿　Ⅲ-1b類

暗褐色土層（IV-2層群）



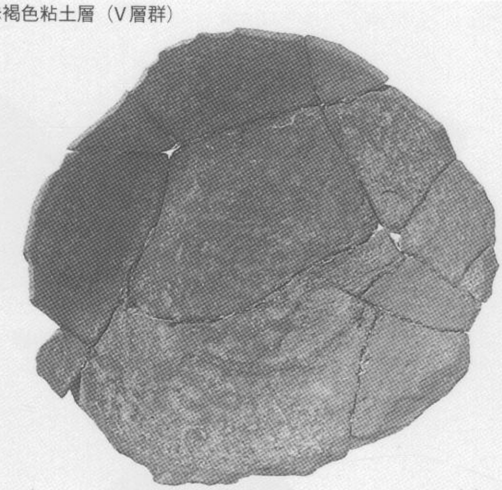
11-14-22

赤茶色土層（IV-2層群）



11-14-27

赤褐色粘土層（V層群）



11-15-1（内面）

11-15-1（外面）

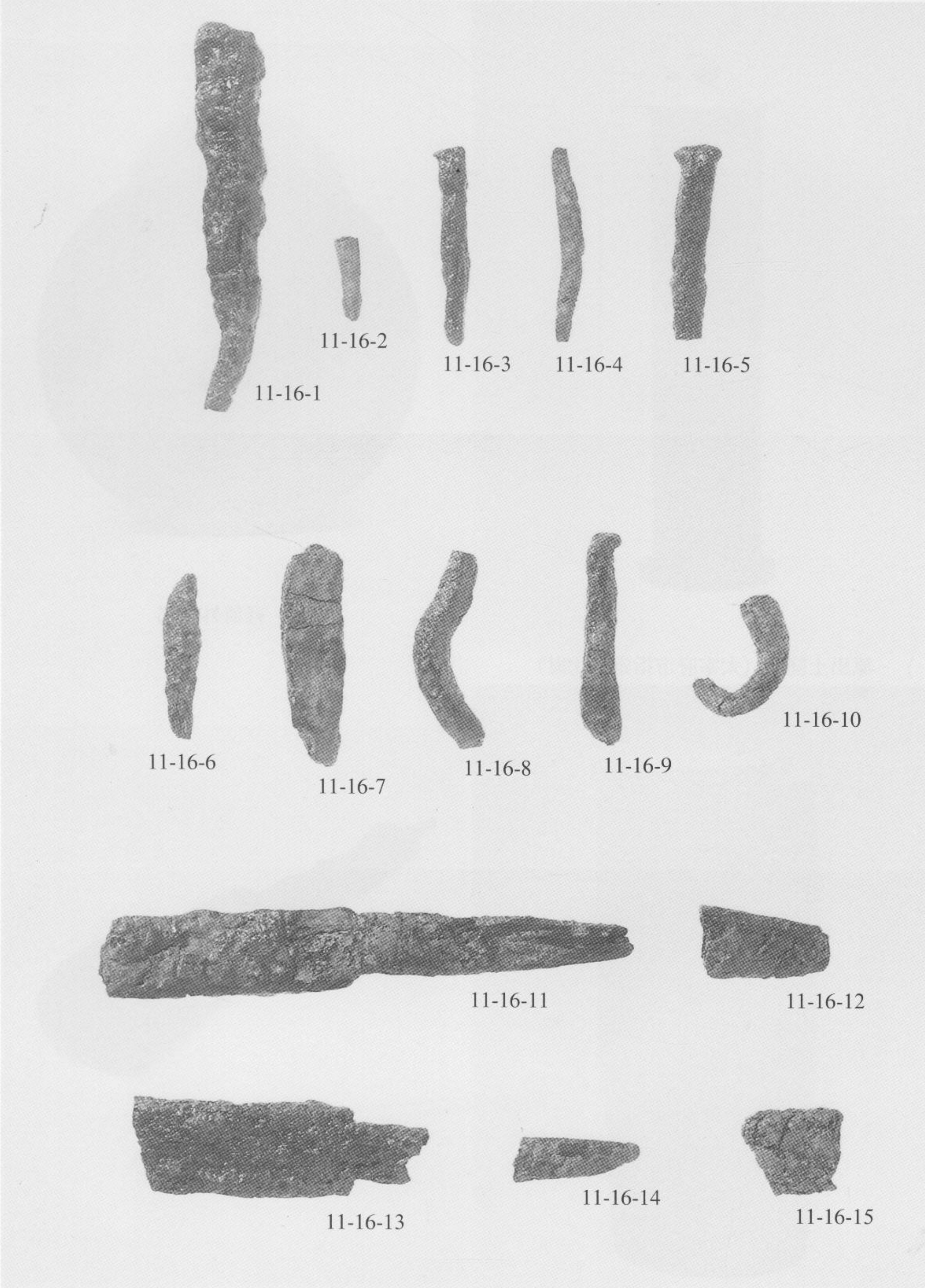
赤色粘土層（VI層群）

11-15-3

赤灰色粘土層（VI層群）

越州窯系青磁壺Ⅲ類

原遺跡第11次調査　各層出土遺物



原遺跡第11次調査　出土鉄製品

原出土経筒（太宰府市指定文化財）

同　経筒外底部

同　外容器（太宰府市指定文化財）

同　経巻（太宰府市指定文化財）

太宰府市の文化財　第54集

原遺跡

―第8・11次調査―

平成13年3月

編　集　太宰府市教育委員会
発　行　太宰府市観世音寺1-1-1
印　刷　株式会社　秀巧社
福岡営業所
福岡市博多区博多駅前3-10-24藤井ビル